

---

# 草原と平穏の国の物語

絹野帽子

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

草原と平穏の国の物語

### 【ZPDF】

Z03470

### 【作者名】

絹野幡子

### 【あらすじ】

「ある日、家に帰るとエルフ族のメイドさんがいた」……キャラクター達の会話形式で進む異世界ファンタジーものです。

これは別所で連載しているものを改めて投稿しています。

性的な台詞がたまにあるので「R15」としていますが、直接的な描写はないので、多分全年齢に近いです。

## キャラクターと設定

### キャラクター

第1話での登場人物のデータです。

#### 男主人

【種族】：人間族 【年齢】：24歳 【性別】：男性

【一人称】：僕

【設定】：

- ・本作品における主人公ポジション。
- ・自身で「草原と平穏の国」の王宮に勤めている。
- ・ややヘタレ。

#### 長ミミ

【種族】：エルフ族 【（外見）年齢】：22歳 【性別】：女性

【一人称】：私

【設定】：

- ・本作品におけるヒロインポジション。
- ・男主人の家にいきなり現れたメイドさん。
- ・淡々系クールの予定。

#### 美女妹

【種族】：人間族 【年齢】：23歳 【性別】：女性

【一人称】：不明

【設定】：

- ・男主人の妹で美女らしい。

## 各種設定

第1話を読むにあたって、ちょっとだけ覚えると便利な設定です。

### 大陸と国家

「草原と平穏の国」「森林と調和の国」「鉱山と武勇の国」「砂漠と神秘の国」に分かれる。

男主人は「草原と平穏の国」に住んでいる。

### 人間族

寿命は70年くらい。どの国にでもいる種族。

### エルフ族

寿命は200年くらい。「森林と調和の国」に多い種族。

大体20代で一時的に老化が止まり、平均的に150年は若い姿のままである。

### 共用語

大陸全土で使える言葉。方言もあります。

### 古代語

魔術学とかに使われる言葉。カタカナで英語チック。

## 第1話『家に帰つたら、長ミミさんがいた』

草原と平穏の国・男主人邸

【男主人】「…………」  
【長ミミ】「…………」  
【男主人】「えつと……もう一度、言ってくれる?」  
【長ミミ】「では、こほん……お初にお目にかかります。エルフ族の長ミミと申します、『ご主人様』」  
【男主人】「えつと、ご主人様? 誰が?」  
【長ミミ】「ユー(男を指差し)  
【男主人】「ミー? (自分を指差し)  
【長ミミ】「イエス(こくり)  
【男主人】「なんで、古代語?」  
【長ミミ】「ご主人様は、少々公用語が不自由なのかと思いまして」  
【男主人】「いや、古代語よりは得意だけど……」  
【長ミミ】「冗談です」  
【男主人】「そう……えと、公用語お上手ですね」  
【長ミミ】「恐れ入ります」  
【男主人】「……なんで、僕の家にいるの?」  
【長ミミ】「メイドですか?」  
【男主人】「僕は、長ミミさんを雇つた覚えはないんだけど」  
【長ミミ】「がーん、ひどい、あの時の言葉は嘘だったのですね」  
【男主人】「えええつ!?」  
【長ミミ】「私を抱きしめながら、『一緒に来る? 僕が面倒を見てあげるよ』と言つて下さつた優しい言葉」  
【男主人】「え、それは誰!?」  
【長ミミ】「お酒とは怖いものですね……」

【男主人】「いや、僕そんなに酔わないのに…？」嘘つ！」

【長ミミ】「嘘です」

【男主人】「なんで嘘をつくの…？」騙す必要がどこに…？」

【長ミミ】「ふふふ……」

【男主人】「いや、そんな無感動に笑われても、どうしていいか分からないし…！」

【長ミミ】「私の真の雇い主である美女妹様のご指示です」

【男主人】「あーあー、納得。美女妹に派遣されてきたのね（ぐつたり）」

【長ミミ】「末永くよろしく弄ばせて頂きます、ご主人様」

【男主人】「ああ、こちらこそよろしく……できるかあ！…！」

## 第2話『朝起きたら、長ミミさんがいた』

草原と平穏の国・男主人邸

【長ミミ】「朝です。起きてください、ご主人様」  
【男主人】「んーあー……（ごろん」  
【長ミミ】「朝です。起きてください、ご主人様」  
【男主人】「…………もうちょっと、寝かせて（ごろん」  
【長ミミ】「朝です。起きてください、ご主人様 スリー」  
【男主人】「…………」  
【長ミミ】「朝です。起きてください、ご主人様 ツー」  
【男主人】「…………」  
【長ミミ】「朝です。起きてください、ご主人様 ワー」  
【男主人】「…………待つたあー！ なんで“減数詠唱”カウントダウン”が混じってるのー？」  
【長ミミ】「ちつ…………ご主人様、これは魔術の詠唱などではなく、ただの『メイド式起床法』です」  
【男主人】「舌打ちされたつー？」  
【長ミミ】「朝です。起きてください、ご主人様」  
【男主人】「あー、もー、なんかどこからどうツツッコんでいいやら……とりあえず起きるよ」  
【長ミミ】「お召し物はこちらに」用意しましたので、着替えたら食堂にいらしてください」  
【男主人】（けどまあ……いいなあ、和むといつか……）  
【長ミミ】「本日の朝食は、とりえずパンとスープ、サラダを用意しました」  
【男主人】（なんていうか、そつ、生活に潤いがある……）  
【長ミミ】「卵の方は目玉焼きにしようと思いますが、焼き方はい

かがなさいますか？」

【男主人】「じゃあ、片面焼きの半熟で（もどもど）  
【長（シロ）】「かしこました……といりで」主人様、一言よろし  
いでしょうか？」

【男主人】「ん、なに？」

【長（シロ）】「妙齡のレディの前で服を脱ぐのはどうかと思します。  
意外と逞しいのですね」

【男主人】「！？！？」（赤面）

【長（シロ）】「おや、照れてらつしゃるのですか？」

【男主人】「突然妙なことを言われたから、驚いただけだ！…」

【長（シロ）】「では、そういうことにしておきましょう」

【男主人】「ううう……」

【長（シロ）】「ああ、申し訝れておりました。おはよりじゃござれ、  
ご主人様」

【男主人】「……うん、おはよ！」

### 第3話『触つていい? と、ヒツヒツせんに聞いた』

草原と平穏の国・男主人邸

- 【男主人】「（じい）…………」
- 【長ミミ】「～～～（ピロピロ）」
- 【男主人】「（じい）～～～」…………
- 【長ミミ】「…………」主人様、何か仰りたいことがあるのなら仰つてください」
- 【男主人】「え、いや、なんでもないよ」
- 【長ミミ】「ウザツ」
- 【男主人】「ぐはつ……（ぱつたり）」
- 【長ミミ】「その心に傷を負つた演技もウザイですから、で、私の耳がどうかしましたか？」
- 【男主人】「気付かれてたつ！？」
- 【長ミミ】「何を驚いてるんですか、ネットリした視線で見ていたくせに」
- 【男主人】「え、いや、ちょっと……ピロピロ動くのが可愛いなあつて」
- 【長ミミ】「！？…………えつと、恐れ入ります（ペコリ）」
- 【男主人】「その耳つてさ、自由に動かせるの？」
- 【長ミミ】「人間族の方にはよく聞かれるのですが……そうですね、足の小指くらいの感覚で動かせます」
- 【男主人】「へえ……（ウズウズ）」
- 【長ミミ】「質問は以上でしうか？」
- 【男主人】「あ、その、耳に触らせてもらつていい?（ウズウズ）」
- 【長ミミ】「耳ですか？」
- 【男主人】「ダメ?」

【長////】「ちなみにエルフ族の女性は、異性が耳に触ると子供ができるます」

【男主人】「えええっ！？」

【長////】「嘘です。ご主人様も子供がキャベツから生まれてくると信じる初心なネンネنجりあるまいし」

【男主人】「華麗に騙されたつ！！」

【長////】「そんなに触りたいのですか？」

【男主人】「え」と……」

【長////】「ちなみに、エルフ族は耳を弄られても安易に性的興奮は催しません」

【男主人】「そ、そうなの？」

【長////】「生まれつき耳の感覚が鋭敏なエルフもいますが、それ人間族の人も変わらない程度です」

【男主人】「うつ」

【長////】「エルフは耳を弄るだけで簡単に気持ちよくなるというのは幻想です。『エルフメイドさん桃色事変』をやろうと思つたら、普通に深い愛情と信頼と、継続的な経験が必要です」

【男主人】「ぐふつ……」

【長////】「ご主人様、成人向け小説の読みすぎです」

## 第4話『気付いたら、お弁当派になっていた』

草原と平穏の国・王宮（執務室）

【男主人】「ん～～（背伸び）。さて皆、そろそろ昼休みにしようか（「んそ～」）」

【副官女】「…………（じい）」

【部下男】「…………（じい）」

【男主人】「では、いただきます」

【副官女】「…………（じい）」

【部下男】「…………（じい）」

【男主人】「お、今日はサンドイッチにオムレツか……って、君たち何か用？」

【副官女】「ええつと、その…………」

【部下男】「ズバリ聞きますけど、男主人様」

【男主人】「ん、何？」

【部下男】「いつの間に奥さんもらつたんですか？」

【男主人】「はい？」

【部下男】「いや、ここ数日、昼に食堂の定食じゃなくて美味そ

なお弁当食べてるじゃないですか？」

【男主人】「そうだね」

【部下男】「で、オレらの知らない間に結婚でもしたのかと……ラ

ブラブな新婚ですか？ 新妻とイチャイチャですか？」

【副官女】「ら……らぶらぶ…………」

【男主人】「とりあえず、君たちが何を想像しているのか問い合わせたいが。なぜ恋人ができたとか、そういう発想にならない？」

【部下男】「いや、男主人様のことだから、王子様の命令で、いきなり結婚してもおかしくないかなとか」

【男主人】「色々否定できないのって、どうよ……（がっくり）」  
【部下男】「じゃあ、違うんですか？」  
【男主人】「あー、当たらずとも遠からずといつか」  
【副官女】「ええっ！！ 新妻とイチャイチャなのです！？」  
【男主人】「それは違つ！？」  
【副官女】「うう……良かつた（ポツリ）」  
【男主人】「妹の指示でね。家に使用人がやつてきたんだ」  
【部下男】「ああ、なるほど。というか今まであの家に使用人の一人もいない方が変でしたし」  
【男主人】「んでもって、毎朝お弁当を持たされていりと」  
【部下男】「それは、なかなか愛されていきますねえ」  
【男主人】「愛されているというか、からかわれているというか……なるほど、そういう意味か、これ」  
【部下男】「はあ？」  
【男主人】「いや、弁当を渡される時、『犬が縄張りを主張するのと同じ行為です』と言わされたからや」

#### 第4話『気付いたら、お弁当派になっていた』（後書き）

新規登場したキャラクターの簡単な設定です。

副官女

【種族】：人間族 【年齢】：17歳 【性別】：女性

【一人称】：私

【設定】：

- ・王国軍第十一師団の高等仕官。主に部隊の書類仕事を担っている。
- ・どうやら男主人を慕っているらしい？

部下男

【種族】：人間族 【年齢】：23歳 【性別】：男性

【一人称】：オレ

【設定】：

- ・男主人の弟分的なポジション。男主人との付き合い副官女より長い。
- ・王国軍第十一師団における唯一の一般兵。

## 第5話『長ミミちゃんが、ゼリーを作っていた』

草原と平穏の国・男主人邸

【男主人】「ん～ これ、美味しいね」

【長ミミ】「桃のゼリーです。ご主人様が甘いものがお好きと聞いたので用意してみました」

【男主人】「ゼリーか…… そういうえば、ゼラチンって、そこはかとなく卑猥な言葉な感じがしない?」

【長ミミ】「いえ、まったく」

【男主人】「いや、だつて、ゼラチンだよゼラチン! 是裸チンつて書くともう超絶卑猥じゃない!?」

【長ミミ】「あえて言わせてもらうなら、卑猥なのは『主人様の頭の中です』」

【男主人】「ふつ………… とにかくで、明日、僕は休日なんだけど、長ミミも休みでいいよ?」

【長ミミ】「逃げましたね」

【男主人】「戦略的転進と言つても良いたい」

【長ミミ】「まあ、それで休日の話ですが…… 私は特に必要ありません」

【男主人】「それだと体が休まる時間がないんじゃない?」

【長ミミ】「いいえ、こう見えてもそれなりに自由な時間がありますので」

【男主人】「そうなの?」

【長ミミ】「はい。ご主人様は、食事の好き嫌いもなく、掃除もほどほどで文句は仰いませんので」

【男主人】「実際、長ミミの出してくれる食事はどれも美味しいからね。一緒に食卓につってくれるともつと嬉しいけど」

【長//ミ】「その件につきましては、『私流メイド道』に及するので申し訳ありませんが……」

【男主人】「それについて無理強いをするつもりはないよ。」  
「話しあなつてくれれるだけでも十分だからね」

【長//ミ】「恐れ入ります」

【男主人】「でもさ、実家とかに顔を見せなくて良いの？」

【長//ミ】「それこそ必要ありません。私の生家は「森林と調和の国」にあります、両親は逝去しておりますので」

【男主人】「あー、ごめん、ちょっと考えなしだった」

【長//ミ】「大丈夫です。もう7年も前の話ですので……」

【男主人】「…………7年前？」

【長//ミ】「ええ」

【男主人】「それって」

【長//ミ】「はい、『想像のとおりかと』

【男主人】「そつか……」

【長//ミ】「ご主人様。お気になさらずに、ゼリーのお代わりはいかがですか？」

【男主人】「まだあるの？　じゃあ、もうちょっともりおつかな」

【長//ミ】「はい、しばしあ待ちください」

## 第6話『男主人、休日は訓練をしていた』

草原と平穏の国・男主人邸

【長ミミ】「ご主人様、お茶の準備が整いました。少しご休憩いたしませんか？」

【男主人】「トランスレイト オン イレイス アワー エネジー……『魔力沈静』」  
ロストアウト

【長ミミ】（何度見ても綺麗な光ですね……）

【男主人】「ふう、もうそんな時間が」

【長ミミ】「一人でゴソゴソなさっているところに声をかけて申し訳ありません」

【男主人】「ツツコまないからな、あれはあくまで魔術のトレーニングだからな」

【長ミミ】「ええ、一人で汗や色々なものを垂れ流してた所……お茶のお誘いは野暮でしたか？」

【男主人】「……ツツコんで欲しいの？」

【長ミミ】「そんな……私の口から何を言わせたいのですか、ご主人様？」

【男主人】「あああっ！……なんだろう、この敗北感っ！」

【長ミミ】「のた打ち回って楽しんでいるところ申し訳ないのですが、そろそろテーブルに付いてください」

【男主人】「いや、誰のせいだと……」

【長ミミ】「お茶を蒸らし間は少々暇ですので、お陰様で良い気分転換になりました（トポトボ……」

【男主人】「ん？ このクッキーは？（サクサク」

【長ミミ】「今朝方、私が焼きました」

【男主人】「へえ、昨日の桃のゼリーも美味しかったけど、これも

美味しいね

【長ミミ】「ありがとうございます」

【男主人】「料理もお菓子も上手だし、綺麗だし、長ミミだつたら、僕んとこじやなくて、もつと良い所で働けるんじゃない?」

【長ミミ】「ご主人様、そんなお世辞を言われましても、お茶のお代わりくらいしか出せませんが」

【男主人】「いやいやお世辞じやなくて、本心でさ」

【長ミミ】「……天然ですか(ボソ)

【男主人】「ん? 何か言つた?」

【長ミミ】「いえ、お給金については美女妹様に十分よくして頂いてますから」

【男主人】「そつか、それならいいんだけど……何か困つたことない?」

【長ミミ】「それでは1つお聞きしてよいでしょうか?」

【男主人】「ん、何が聞きたいの?」

【長ミミ】「ご主人様は、なんで私を追い出さないのですか?」

【男主人】「えーあー…………」

【長ミミ】「ご主人様ほどの地位と財産でしたら、使用人の1人や2人雇つているのが普通です。なら、逆に使用人を雇うのを嫌つていたと考えるのが正しい答えかと」

【男主人】「そうだね、まあ、誰かと一緒に住む覚悟がなかつた、つてことかな」

【長ミミ】「ということは、今はその覚悟ができた、と?」

【男主人】「分からない。けど、妹の方は大丈夫だと考えたから君を送つてきた……んじやないかな」

## 第7話『長ミミちゃんは、知っていた』

草原と平穏の国・男主人邸

【男主人】「はあ、疲れた……ただいま」

【長ミミ】「お帰りなさいませ、ご主人様。今日は、随分とお疲れですね」

【男主人】「ああ、仕事の方でちょっと問題があつてね……」

【長ミミ】「まったく王子様の女癖の悪さにも困つたものですね」

【男主人】「ツ！？ なんでそれをつ！？」

【長ミミ】「『メイドさんネットワーク』通称MSNの最新情報ですから」

【男主人】「何それ、なんか怖つ！？」

【長ミミ】「古参の『近所のおばちゃん井戸端会議』通称KOHと国を一分为する諜報組織です」

【男主人】「いや、もう……」

【長ミミ】「MSNの最新情報によれば、王子様の正式な愛人は5名。しかし、今回は王子様の愛人を自称する女性による騒動……裏では、王弟派の残存勢力が関与して“いた”……という噂ですね」

【男主人】「…………」

【長ミミ】「おや？ どうかされましたか？」

【男主人】（なんで過去形なの？ と訊けない僕）

【長ミミ】「無理はよろしくないですよ、ご主人様」

【男主人】「な、なんでもないよ？」

【長ミミ】「しうがありません。その悩みをスッキリ解消させま  
じょい」

【男主人】「いや、別に……」

【長ミミ】「そもそもMSNとKOHの抗争の歴史はあまり古くな

く、ここ10年の……」

【男主人】「え、そつちー?」

【長ミミ】「ご主人様、人が説明している間は静かにすると教わらなかつたのですか?」

【男主人】「知つてゐるけど。いや、別に謎の組織の抗争とか言われてもね」

【長ミミ】「……これは、失礼しました。勘違いしていたようです」

【男主人】「勘違いといふか、見当違ひだつたというか」

【長ミミ】「王子様の愛人のプロフィールが知りたかつたのですね?」

【男主人】「…………あ、それはちょっと知りたい」

【長ミミ】「では、夕食が終わりましたら詳しく……早くしないとシチューが冷めてしまします。ご主人様」

【男主人】（とりあえず、滅多なことはできない、ということは分かつた）

## 第8話『言われた瞬間、想像しちゃっていた』

草原と平穏の国・男主人邸

- 【男主人】「ふ～んふふん～」
- 【長三三】「随分とご機嫌ですね、ご主人様」
- 【男主人】「厄介な仕事が一段楽したからね。明日からは、ゆっく  
りできそうだ」
- 【長三三】「なるほど、それは良かつたですね」
- 【男主人】「それに美味しい食事と美味しいお酒、気分は上々だね」
- 【長三三】「恐れ入ります」
- 【男主人】「これで後は……」ほん～ほん。このソーテーは僕好みだ  
ね
- 【長三三】「良い川魚の切り身が手に入りましたので」
- 【男主人】「うん、この葡萄酒との取り合わせも完璧だ」
- 【長三三】「その葡萄酒は「森林と調和の国」で作られた5年物で  
す」
- 【男主人】「なるほど……鮮烈な葡萄の香りが良いね」
- 【長三三】「ところで、ご主人様。今宵は夜伽などを御所望なので  
しょうつか?」
- 【男主人】「そ、それは言つてない!」
- 【長三三】「でも言いかけましたよね。私は自称優秀なメイドです  
ので」
- 【男主人】「自称つて付けると、とつても怪しいよねつ!」
- 【長三三】「そうですね。私がお相手するならば、一晩50万イエ  
ンほどでいかがでしょうか?」
- 【男主人】「高っ!」
- 【長三三】「そうですか? 相場には疎いものでして」

【男主人】「一流と呼ばれる娼館でも3日は楽しめるよ」  
【長ミミ】「ふむ、ご主人様は市場価値が分かる田利きでいらっしゃる」

【男主人】「それって、遠回しに皮肉つてる?」

【長ミミ】「もう少し具体的に言つなれば、『随分とお詳しい』のですね」

【男主人】「ぐつ……しようがないんだ。あのバカ王子の部下をやつてる詳しきもなるんだ……ツケを払いにいくつちの身にもなつてみりつ……」

【長ミミ】「しかしながら、エルフ族の初物なれば、このくらいが相場かと思つのですが?」

【男主人】「ふふつつ!?

【長ミミ】「……想像しましたね? (ヒヒ)」

【男主人】「…… (汗)」

## 第9話『副官女の想像を、超えていた』

草原と平穏の国・王宮（執務室）

【男主人】「それじゃあ、10日ほど留守にするけど、その間はよろしく頼むね」

【副官女】「はい、任せてください！ 男主人様もお気をつけて！」

【部下男】「お土産楽しみにしてまーす」

【男主人】「了解、向こうの葡萄酒が何かを買つてくるね。では」

SE（扉の開閉音）：ガチャ、バタン……

【副官女】「…………はあ」

【部下男】「何も心配する必要はないと思いますけど……それとも、寂しいんですか？」

【副官女】「さ、寂しい！？ そ、そんなことない……あ、心配しないなんて、部下男は薄情者ね！！」

【部下男】「いやあ、男主人様にとつては、それほど心配しなくても……」

【副官女】「い、いくら、男主人様が優秀な魔術師だとしても、もし戦いになつたら……」

【部下男】「いやいや、いつそ戦いになつた方が楽ですよ。相手の戦意を喪失するまで叩き潰せば良いだけなんですから……」

【副官女】「多勢に無勢という言葉があつて、男主人様は1人しかいなければ……ああ、やっぱり私も今から追いかけて……」

【部下男】「むしろ、オレらがいる方が邪魔になりますから……つて、そうか、副官女さん、もしかして、男主人様の実力を知らないとか？」

【副官女】「実力は知っています！！！ この国で一番強い魔術師！  
！ それなのに、まったくそんな素振りを見せず、優しくて素敵な  
方！！」

【部下男】「本人に言つてやれば良いのに……それで、その強さが  
どのくらいかつてことですよ？」

【副官女】「…………どういうこと？」

【部下男】「それに、今の言葉は正しくないです。現時点では大  
陸一の魔術師と呼ばれていますよ」

【副官女】「大陸一？」

【部下男】「そもそも、オレらの所属部隊は何処だか知っています  
？」

【副官女】「私をバカにしているの！？ 栄えある王国軍第十一師  
団よ！」

【部下男】「バカになんてしてません。その構成人数は？」

【副官女】「男主人様と私と貴方の3人でしょ！」

【部下男】「…………で、違和感に気づきません？」

【副官女】「今の話のどこが変だというのよ？」

【部下男】「王国軍の部隊編成規則に従うなら、師団を名乗るのは  
1万以上の兵士の所属が必要なんです。それに、王国軍は数年前ま  
で第十師団までしかなかった。いくら王位継承第一位の王子様直属  
の部隊だからといって、それだけで師団つて言つるのは醉狂が過ぎま  
す」

【副官女】「それがどうかした？」

【部下男】「簡単に言えば、匹敵するんですよ。男主人様1人を戦  
力へ換算した場合、兵士2万人以上にね」

## 第10話『扉を開けたら、王様がいた』

草原と平穏の国・男主人邸

【姫】（………… 5日目、もうなが、まだなが）  
【姫】（早くても10日といふことは、それ以上かかる可能性もある）

【姫】（この家に来て、ここまで長く独りになるのは、初めて……ですね）

SE（ノックカーの音）・コンコンコン

【姫】（「来客へ」「主人様のいない時にタイミングの悪い」）

SE（扉を開く音）・ガチャ、ギイ

【姫】「…………」

SE（扉を閉じる音）・ギイ、バタン

SE（ノックカーの音）・コンコンコンコンコン

SE（扉を開く音）・ガチャ、ギイ

【王子様】「この家のメイドはどう教育を受けているのかな？」

普通、お客様を無言で締め出す?」

【姫】「夢か幻か妖精さんのイタズラなら良かったのに」

【王子様】「はははは、相変わらずだね」

【姫】「ええ、王子様も相変わらずのよひで、では、お帰りく

ださー」

【王子様】「ちょっと、待つて……なんで、そう人を締め出そうとするかな！」

【長ミミ】「誠に残念ながら、ご主人様は不在のため、怪しげな人間を屋敷に入れることはできません」

【王子様】「怪しくないでしょ……？ ボクほど身元のはつきりしている人間はない……！」

【長ミミ】「とりあえず、十割中十一割くらい怪しいです。もう、体から溢れんばかりに」

【王子様】「まさかの全否定！？」

【長ミミ】「まったく、無言で締め出すなどいうから、一言付けて締め出そうとしたのに、ワガママな」

【王子様】「え、何かボクが悪い流れになつてない……？」

【長ミミ】「ご主人様が不在なことは、ご承知でしょう？ 何をしにいらしたのですか？」

【王子様】「いやー、男主人がいなくてキミが寂しがつているんじゃないかなと」

【長ミミ】「寂しがつている女性ならば、王宮にもこりりしゃるのでは？ あまり奥様を放置するものじゃないですよ？」

【王子様】「そんな健気な子じゃないけどねえ。それにキミとボクとの関係じゃないか」

【長ミミ】「別に、私と王子様の間に特殊な関係があるとは記憶していませんが」

【王子様】「そこまでいくと、いつも清々しいね！」

【長ミミ】「その点については、ご主人様にも高く評価されておりますので」

【王子様】「一応関係あると思うんだけど……ねえ、婚約者殿？」

## 第10話『扉を開けたら、王子様がいた』（後書き）

新キャラクターの紹介です。

王子様

【種族】：人間族 【年齢】：24歳 【性別】：男性

【一人称】：ボク

【設定】：

- ・「草原と平穏の国」の第一王子。王位継承権の第一位。
- ・女性大好き。
- ・既婚者らしい。でも貴族の一夫多妻は違法ではないようです。

## 第1-1話『その頃、男主人が活躍していた』

### 草原と平穏の国・悪領主邸

【男主人】「（「ゴクゴク）ほうほう、この葡萄酒は美味しいですね」

【悪領主】「そ、そりでしょ。領内でも特に厳選された葡萄酒ですかね」

【男主人】「ところで、もう一杯頂いてもいいですか？」

【悪領主】「どうぞどうぞ！」

【男主人】「グラスに注がなくて結構。そうですね、そちらのグラスのをもらえません？」

【悪領主】「は、いや、こちらはワタシの飲み掛けで？」

【男主人】「いえ、なに……僕は混じり物がない方が良いので、特に“毒味”はあまり好きじゃないです」

【悪領主】「なつ！？」

【男主人】「入っていたのは、黒鈴蘭の根あたりが妥当かな、お手軽で無味無臭の神経毒」

【悪領主】「な、何を仰つてるのでしよう？（汗）

【男主人】「そんなに緊張してちゃ、奇襲は成功しませんね。大方、僕のグラスにだけ塗つていたんでしよう？」

【悪領主】「……ですから、男主人殿は一体何を？（汗）

【男主人】「結論から言えば、僕に普通の毒は効きません、魔術によって中和できますから。いつまで待つても無駄ですよ」

【悪領主】「魔術！？詠唱は何時の間に行なつた！？」

【男主人】「さあ、僕がその質問に答える必要はあります？」

【悪領主】「ぐつ……」

【男主人】「今回の筋書きとしては、『監査担当の者は、領地に入る直前に不幸にも盗賊の餌食になつた』とか？」

【悪領主】「…………」

【男主人】「罪状については、とりあえず、殺人未遂で良しと。後は余罪で何回分の極刑になるやう」

【悪領主】「…………」

【男主人】「大人しくなつたな？ 大体こいつは命乞いをされるか…………つと」

SE（金属音）・キュッイン

【悪領主】「くそつ…………」

【男主人】「実力行使に出てこられると。まあ、こっちの方が手っ取り早いけど」

【悪領主】「いまだ、かかれつ！…………」 じうした、早く出来い！」

【男主人】「まったく、どいつもこいつも典型的な悪役の言動過ぎて、少し飽きてくるな」

【悪領主】「何が起こってるつー？」

【男主人】「僕がすでに制圧しているからだよ。ああ、そうだ……命乞いや実力行使はあつたけど、僕を抱き込もうとする人はいなかつたつけ、試してみます？」

## 第1-1話『その頃、男主人が活躍していた』（後書き）

一応のキャラ紹介。

悪領主

【種族】：人間族 【年齢】：32歳 【性別】：男性

【一人称】：ワタシ

【設定】：

- ・王国西側の一地方の領主に任じられている貴族。
- ・何かしらの不正を行っていたらしい。

## 第1-2話『釣つた魚のエサについて、話していた』

草原と平穏の国・男主人邸

【長//ミ】「婚約者候補になるかもしれない、です。言葉は正しく使って頂きたいと具申いたします」

【王子様】「まあ、ボクとしてはどうちでもいいけど」

【長//ミ】「ええ、私としてはこっちでないと困りますので」

【王子様】「ほんと、つれないね」

【長//ミ】「釣つた魚にエサを与えそつにない人には、魚も釣られたくないだけでは？」

【王子様】「ほほう、男主人は魚のエサやりが上手なのかい？」

【長//ミ】「いえいえ、ご主人様は、与えたつもりもなく与えるタイプですので」

【王子様】「あつはつはつは、随分と好かれたものだ」

【長//ミ】「先に言つておきますが、この感情は好いた惚れたなどではございませんから」

【王子様】「それじゃ あ何だと言うんだ？」

【長//ミ】「さあ、私がその質問に答える必要はあります？」

【王子様】「くつくつく、微妙に男主人が言いそうな台詞だな、それ」

【長//ミ】「???" ご主人様が言つような、ですか？」

【王子様】「ああ、結構皮肉屋な所があるからな」

【長//ミ】「それは、本当にご主人様ですか？」

【王子様】「ん? どういうことだ?」

【長//ミ】「ですから、その、ご主人様が皮肉屋という部分です。少しご主人様には似合わない言葉でしたので」

【王子様】「ほ~」

【長//ミ】「……何が仰りたいのですか？」

【王子様】「いや、なかなかに相性が良いのかも知れない、と思つてな」

【長//ミ】「何の相性でしよう？」

【王子様】「キミと男主人さ」

【長//ミ】「私どご主人様がですか？」

【王子様】「うん、キミと男主人の相性は良いのさ、きっと。キミには、だいぶ心を許しているようだからね」

【長//ミ】「……」

【王子様】「ふふん、初めてだな、そんな顔を見るのは。男主人にはやっぱ勿体無いか（微笑」

## 第13話『帰つてきたら、余計疲れていた』

草原と平穏の国・男主人邸

- 【男主人】「ただいまー」
- 【長ミミ】「…………」
- 【男主人】「ん？ どうしたの？」
- 【長ミミ】「申し訳ありません、どちら様でしそうか？」
- 【男主人】「えええつ！？ いやいや、僕だよ！」
- 【長ミミ】「なるほど、僕様でいらっしゃいますか」
- 【男主人】「僕様つて！？ 名前は男主人だけ！…」
- 【長ミミ】「それは申し訳ありません、オトコシユ・ジンダケード様」
- 【男主人】「微妙に名前っぽいけどねー 違つからね！ 何これ、新しいイジメつ！？」
- 【長ミミ】「はい。10日かけて練りに練つてみました」
- 【男主人】「認めたしつ！」
- 【長ミミ】「さて、感動の再会も済ませましたし、お帰りなさいませ、ご主人様」
- 【男主人】「いやもう、疲れたよ……」
- 【長ミミ】「出張お疲れ様です。せつと中に入つて休まれたらいががでしう？」
- 【男主人】「さりげなく出張のせいにしてるけど、止めは長ミミだからね？」
- 【長ミミ】「私の半分は愛で出来ております。人生に疲れたご主人様に止めを刺すのも愛ゆえに」
- 【男主人】「そんな痛い愛はいらないし！… まだ人生を悲観するほど生きてもないから！…」

【長///ミ】「ああ、ご主人様が帰つてきたんだな…………と、悦びに浸る私」

【男主人】「ああ、帰つてきたんだな、と心が打ちひしがれいるよ、僕は……」

【長///ミ】「出張はとても大変だつたのですね。心が落ち着く香りのお茶を淹れましょう」

【男主人】「もおいいけど。ところで、留守中に何かあつた?」

【長///ミ】「変わつたことですね。特には……」

【男主人】「そ、ならいいんだけど」

【長///ミ】「あつ」

【男主人】「何かあつた?」

【長///ミ】「そういうえば、盛りのついた犬が迷い込んできましたが……」

【男主人】「……それで?」

【長///ミ】「そのまま追い払いました」

【男主人】「それだけ?」

【長///ミ】「それだけです」

## 第14話『問題はないけど、書類が溜まっていた』

草原と平穏の国・王宮（執務室）

- 【男主人】「久しぶり、一人とも、僕の留守中に問題なかつた？」
- 【副官女】「はい、何ら問題はありません！」
- 【部下男】「オレの方も、急ぎ報告するようなことないです」
- 【副官女】「あ、ただ、目を通していただきたい書類が結構溜まっています（書類の山を示す）」
- 【男主人】「あれ……全部……？」
- 【副官女】「これでもできるだけ減らそうとはしたんですが……その……」
- 【部下男】「文官の連中が堅物でして、『この書類には、師団長の署名が必要です。ない場合は受け取れません』と」
- 【男主人】「役人根性の石頭揃いだからなあ……」
- 【副官女】「申し訳ありません……」
- 【男主人】「あ、いやいや、そんな硬くならないで。……そもそも、君が謝ることじゃないから」
- 【部下男】「そうそう。まったくカタイのは街壁とアレくらいで十分だつてのに」
- 【副官女】「何か言いました？（キツ」
- 【部下男】「えーと……あつ、その手に抱えてるブツは？」
- 【男主人】「これ？ 賴まれてた土産物。向こうでご馳走になつてね、美味しかつたから土産にしてみた。はい」
- 【部下男】「お、西の所領の高級葡萄酒じゃないですか！ ありがとうございます！」
- 【副官女】「え？ あ、あの、私にもですか！？」
- 【男主人】「うん。片方だけつてのも悪いしね。一人にはいつも頑

張つてもらつてるから、そのお礼

【副官女】「ありがとうございます！ 今日の記念に一生大事にします！」

【男主人】「その葡萄酒は、今が飲み頃だから、早めに飲んだ方が美味しいと思うけど……」

【副官女】「じゃあ、早めに大事にして飲みます！」

【部下男】（うーん……指輪をもらつたわけでもあるまいに……）

【男主人】「まあ、喜んでくれて嬉しいよ」

【部下男】「またお願ひしまーす」

【男主人】「はいはい。ところで、これから王子様のところに今回の報告に行くけど？」

【部下男】「あ、じゃあ、オレも一緒に行きます。事前に頼まれていた件と合わせて報告したいんで」

【男主人】「そうだね。向こうで一緒に聞いた方が早いが、そうしよう」

## 第15話『王子様の前で、報告していた』

草原と平穏の国・王宮（王子執務室）

【王子様】「で、ボクの分の高級葡萄酒は？」

【男主人】「ありません。そもそも貴方の立場なら、高級葡萄酒なんて好きなだけ入手できるでしょう！！」

【部下男】「男主人様、いつものことです。気になら負けです」

【男主人】「ふ、君には苦労をかけるね」

【部下男】「そいつあ、言わない約束ですよ、男主人様」

【王子様】「小芝居はその辺にして、とりあえず報告してくれ」

【男主人】「はい、まず西の所領の悪領主は殺人未遂と不正収賄と脱税の罪状で更迭しました」

【部下男】「不正金の見積もりについては、こちらです」

【王子様】「は～、まったく、これだけの金のために人生を終わらせなくともねえ」

【男主人】「金という毒はヒトを簡単に狂わせますから。ただ王子様は、その立場から“これだけの金のために”とは言つてはいけません」

【王子様】「ん、ボクの失言だった、許せ。それで裏は？」

【男主人】「残念ながら、確たる証拠は掴めませんでした」

【王子様】「個人的な見解でいい。オマエが考えていることを聞きたい」

【男主人】「悪領主が王弟派であつたのは間違いないのですが……（視線を部下男に向ける）

【部下男】「近年、他の王弟派との連絡を取り合つた形跡はありますでした」

【王子様】「つまり、今回の件は完全なる単独行動と？」

【男主人】「いえ、国外の貴族と……連絡を取り合っていた可能性が残っています」

【王子様】「西の所領だったか。…… さらにその西とすれば「鉱山と武勇の国」だな、わが国とは因縁浅からぬ」

【男主人】「あくまで可能性の話です」

【部下男】「残念ながら、こちらの方でも証拠となりえる情報は掴めていません」

【王子様】「その辺りについては諜報部も動くように手配しつく。引き続き一人ともこの件は頼むよ」

【男主人】「了解です」

【部下男】「御意」

【王子様】「…………といひで、キミのといひのメイドさんは元気かい？」

【男主人】「王子様も長ミミを知っているのですか？」

【王子様】「うん、キミの出張中に顔を見に行つて少しお喋りをしたんだけどね」

【男主人】「そんなこと一言も……ああ！ 盛りのついた犬！」

【王子様】「ぶつ！？」

【部下男】「は？？？」

## 第16話『長ミミさんから、試されていた』

草原と平穏の国・男主人邸

【長ミミ】「ご主人様、私の目を見て正直に仰ってください」  
【男主人】「うん、何かな？」  
【長ミミ】「お嫌いなのですね？」  
【男主人】「ええーと……」  
【長ミミ】「目を逸らさない！」  
【男主人】「はいっ！」  
【長ミミ】「お嫌いなのですね？」  
【男主人】「…………そんなことはないですよ（棒読み）」  
【長ミミ】「ご主人様、私は怒っているわけではありません。ただ、少し悲しいだけです」  
【男主人】「うう……」  
【長ミミ】「もう一度言わせていただきます。私は少しだけ悲しいのです」  
【男主人】「わ、分かつてる」  
【長ミミ】「では……」  
【男主人】「…………（じくり）」  
【長ミミ】「どうすれば、良いか分かつていますね？」  
【男主人】「いや、その……」  
【長ミミ】「ご主人様、男らしくないです」  
【男主人】「ううう」  
【長ミミ】「これは……言わば、私に対する『ご主人様の信頼を図る試金石のような物』」  
【男主人】「な、なんか大げさじやない？」  
【長ミミ】「決して大げさなことではありません。『ご主人様は、私

が仕えるに値する傑物だと思っております

【男主人】「け、傑物つ……」

【長ミミ】「そして、ご主人様と私の間には、様々な試練を経て築かれた絆があると信じております」

【男主人】「なんかもう、その試練の大半が君の自作自演だった気がするけど……」

【長ミミ】「誤魔化さないでください。さあ、ご主人様、決断を!」

【男主人】「わ、わかつた……食べる」

【長ミミ】「素晴らしい御決断です。例えご主人様が二ンジンを嫌いであつても、私の料理を残すのは許しません、ええ」

## 第17話『あつむりと、騙されていた』

草原と平穏の国・男主人邸

【男主人】「あー、久しぶりに食べたあ……」  
【長ミミ】「お疲れ様です。口直しにブティングをどうぞ」  
【男主人】「なんか、今とっても子ども扱いされてない?」  
【長ミミ】「気のせいではないでしょつか」  
【男主人】「長ミミはさ、嫌いなものはないの?」  
【長ミミ】「嫌いなものですか?」  
【男主人】「うん、食べれないものとか」  
【長ミミ】「ほとんど、ないと思いますね」  
【男主人】「ほとんどって言つと、いくつかはあるんだ?」  
【長ミミ】「ご主人様、そんなに私のことを知りたいのですか?」  
【男主人】「い、いや単純に好奇心というか……?」  
【長ミミ】「私はメイドですから、嫌いなものはないので」  
【男主人】「メイドだからって……クモとかヘビとかは平気?」  
【長ミミ】「ヘビは少し硬いのが難点ですね。クモはまだ食べたことあります」  
【男主人】「いや、食べる話じゃなくて……ってか、ヘビは食べたんだ」  
【長ミミ】「見た目で嫌う女性はいますが、きちんと下揃えすれば  
れつきとした食材ですし」  
【男主人】「その、見た目で嫌う女性ってのは少なくないんだけど  
ね」  
【長ミミ】「ちなみに、ヨキブリも冷静に対処できます。毒蜂と違つ  
て危険性は少ないですから」  
【男主人】「怖いもの知らずだね」

【長//ミ】「まあ、ご主人様、私にも怖いものはあります」  
【男主人】「そうなの？」  
【長//ミ】「あえて言うのでしたら、ですけれど……」  
【男主人】「うんうん？」  
【長//ミ】「えっと甘いチョコレータルトが怖いです」  
【男主人】「へえ、甘いのが苦手なのか」  
【長//ミ】「それから、渋い紅茶があればもつと怖いです」  
【男主人】「…………お見逸れしました。今度、土産に買って参ります」  
【長//ミ】「あらあら、今からとっても怖いです」

第1-8話『長//』さんが、腕の中で震えていた』

草原と平穏の国・男主人邸

SE (落雷) …… ハロハロ……

【長//】 「（ビクッ）…！」

【男主人】 「ん？ もしかして、雷が苦手？」

【長//】 「い、いえ、そんなことはありません。私はメイドですから……今はちょっと、急に大きな音がしたので驚いただけです」

【男主人】 「別に隠さなくてもいいと思うけど」

SE (雷鳴) ……ピカッ……

【長//】 「……（ぐり）」

SE (落雷) ……ドーナン… ハロハロ……

【長//】 「ほ、ほら、全然、大丈夫です」

【男主人】 「いや、あからさまに気張っていたよね？ 大きな音が苦手なの？」

【長//】 「あ、そういえば地下室の掃除がありました。失礼しま……」

【男主人】 「…………」

【長//】 「 # × # ! ! ? ? ! ? （へたん

【男主人】 「やつぱ、ダメなんだ？」

【長//】 「…………」

【男主人】 「最近、君のことがちょっと分かつってきたよ。変なとこ

ろで見得つぱりだよね?」

【三月三】 えさうじ(さうじ)

【男主人】「つづ！？」

【男主角】 一え、えええっ、なななっ、なんで！？」

【四】 いふをこねて、一ノ帳りた、一ノ帳りた

„落雷“ (雷電) 云々

【男主人】「わ、わわわ…………大丈夫、落ち着いて！－（ぎゅつ」

## 「III/III類」の「III/III類」

【男主人】「ね、大丈夫だから……」うすれば聞こえないでしょ？」

## 第19話『お弁当が、赤く染まつていた』

草原と平穏の国・男主人邸

【男主人】「…………ふつ」

【部下男】「うわー、見事に真っ赤なお弁当ですね」

【男主人】「ニンジンのサラダ、ニンジンのグラッセ、ニンジンジャムのサンドイッチ……」

【部下男】「それ、イチゴジャムじゃなくてニンジンのジャムなんですか？ オレ初めて見ましたけど」

【男主人】「彼女のお手製っぽいから」

【副官女】「彼女つて、その、例の使用者ですか？」

【男主人】「うん」

【副官女】（ええっ！？）だって、使用者さんよね？ ただの使用者さんじゃなかつたということ？ 何あの愛情たっぷりなお弁当は……は、もしかして、いわゆる行儀見習いだつたけど、お手つき済みの未来は団長婦人様つ！？ 私も明日から……いや、相手の得意な戦場で交戦するのは下策、なら、どうしよう…？）

【男主人】「（小声）……彼女、どうかした？」

【部下男】「（小声）いや、気にしないでください」

【副官女】「とりあえず、私も負けませんから！ 頑張りますから！」

【男主人】「おおう、頑張つて！」

【副官女】「はいっ！！」

【部下男】（あー、なんだらう、この微妙な居たたまれなさは……）

【男主人】「ところで、二人とも、これ食べない？」

【部下男】「あー、オレらが食べちゃまづいのでは？」

【男主人】「そんなことはないさ」

【部下男】「だつてそれ、男主人様への“罰”でしょ？」

【男主人】「うえつ！？」

【副官女】「罰？ なんのことか説明して」

【部下男】「いやー、そのー、使用人の娘さんを辱めた罰で、苦手な二ンジン尽くしのメニューを食べさせられてるという話で……」

【副官女】「お手つき済み確定！？ ああっ……（ふらふら）」

【男主人】「おおい！ なんでそんな僕の個人的な情報が駄々漏れなんだつ！？」

【部下男】「いや、オレ、MSNのメンバーですんで」

【男主人】「マジで存在するのか、『メイドさんネットワーク』……」

…

# 草原と平穏の国：男主人邸

【長】「お帰りなさいませ」  
【猫】「おかえりなさい」

【男主人】「ただいま！」

「異常な行動を示す者、異邦人の如きは、

【猫】「ねーねー、早くコパンにしよー」

今田は海産の干物が安かつたので魚介スープにしてみました

## 【男主人】

【猫】「わーい、おっさかなおっさかなー」

【長三三】 「ふふふ……私たちは、ご主人様の食事が終わつてからですよ」

【男主角】「誰？」（指差し）

# 【第三回】　　話題（批評）

【猫】 「ん？」 あたし？

## 【男主人】「うん」

【猫】 「あたしは獣人族の猫だ。」

あたしは兽ノ旅の猿三三た。

【男主人】「へえ、あ、僕は男主人ね…………だから誰つー？」

「…………」

からメドセん観察ー！

が並ぶ「さく見音」

【男主角】「そうなことがあつたの？」ナヌカたつた  
【長ミミ】「助けただなんて……ちょっと虫の居所が悪かつたから  
への当たつついでです（うざいわざ）」

ハニタリニシテテヌ（モシモシ）

# 【男主人】

【長三】 「ご主人様、念願のハーレム生活への第一歩ですね。が

んばつ

【男主人】「誰もそんなもの目指してないよっ！」しかも全然応援

する気もないくせに…！」

【長ミミ】「もちろんですとも、エッチなのはいけません（キッパ  
リ」

【男主人】「ううう……で、本当のところは？」  
【長ミミ】「いえ、どうも孤児の上、ほとんど人攫いに近い形で街  
に連れて来られたようです」

【男主人】「あ……頭が痛い問題だね」

【長ミミ】「ご主人様がダメと仰るのでしたら、即行即座に着の身  
着のまま屋敷から追い出しますが……」

【猫ミミ】「えええつ！？ 追い出すの……？（涙目）

【男主人】「どんだけ冷血な男なんだよ、僕はつ！ とりあえず、  
全て長ミミに任せるとよ」

【長ミミ】「かしこまつました。立派なファイターに育ててみせま  
す」

【男主人】「メイドじゃないのつ！？」

## 第20話『家に帰つたら、猫ミミ／＼ひめんがいた』（後書き）

新キャラクターの紹介です。

猫ミミ

【種族】：獣人族 【（自称）年齢】：15歳 【性別】：女性

【一人称】：あたし

【設定】：

- ・孤児だつたため自分の正確な年齢は分からぬ。
- ・なかなか魅力的なボディの持ち主らしい。
- ・訳あって男主人邸の見習いメイドさん。

## 第21話『朝起きたら、猫ミミちゃんがいた』

草原と平穏の国・男主人邸

【男主人】「…………ん~（「」セイ）」  
【猫ミミ】「うにゅ~……」  
【男主人】「んん~……（ぎゅ」  
【猫ミミ】「みゅ~……」  
【男主人】（……あれ？ なんだる、こう……）

SE（扉を強く開いた音）：バシ——ン——！

【男主人】「うおおおおー！」  
【長ミミ】「…………おはよう」ぞこります、「主人様」  
【男主人】「あ、ああ、おはよ……う~（汗」  
【猫ミミ】「う~ん、まだ眠い……（もぞもぞ」  
【長ミミ】「…………」  
【男主人】「…………」  
【長ミミ】「…………」主人様、辞世の準備は整つておりますか？」  
【男主人】「待つた！ 誤解だ！」  
【長ミミ】「いえ、ここは二階ですが？」  
【男主人】「古典的なボケだね！ 間違えという意味でつ……」  
【長ミミ】「過ちを認めましたね、その潔さは認めましょ」  
【男主人】「そうじやなくてー！ 僕は手を出してないー！」  
【長ミミ】「ふふふ、分かつてあります」  
【男主人】「そう、それなら……」  
【長ミミ】「男の方はみんなそう仰るのですよね？（微笑」  
【男主人】「分かり過ぎてるーー？ できれば、もつと僕のことを

分かつて…！」

【長//ミ】「もちろん、ご主人様のことを分かつて、からかつてあります。ほり、起きなさい（ゆさゆさ）」

【猫//ミ】「うー……あれ？ あたし、なんで？」

【長//ミ】「ご主人様を起こしに行って何時までも戻つてこないので、心配しましたよ……“色々”と」

【猫//ミ】「あう、ごめんなさいー」

【男主人】「色々……便利な言葉だなあ」

【長//ミ】「大丈夫です。私はご主人様を信じておりますから」

【男主人】「なんか、その信じられ方もイヤだ！」

【長//ミ】「まったく、ご主人様はワガママですね」

## 第22話『長ミミがんば、気付いていた』

草原と平穏の国・男主人邸

【長ミミ】「ご主人様、少しお時間を預いてよろしくでしょうか?」

【男主人】「ん? どうしたの、改まって」

【長ミミ】「お聞きしたいことがあります……その魔術の話なのですが」

【男主人】「僕が答えるても問題がない範囲ならいいけど、……魔術技法は国の機密に触れることがあるから」

【長ミミ】「申し訳ありません」

【男主人】「いや、謝ることじゃないけど。で、何が聞きたいの?」

【長ミミ】「婉曲的に言えば、『汚れを取る魔術』を知りたいのですが……」

【男主人】「ふ〜む」

【長ミミ】「…………分かりませんか?」

【男主人】「“洗濯に使う”ってわけじゃないよね?」

【長ミミ】「それはそれで便利そうなのですが…………」

【男主人】「『魔力除去』ディスペル系と呼ばれる魔術があるよ。術者の力量にも関係してくるけど、基本的に等級の低い単純な魔術しか打ち消すことができない」

【長ミミ】「…………」

【男主人】「理論上は、全ての魔術が魔力によつて起こされる現象である以上、魔力で打ち消すことは可能だけど、何事も『起こしたこと』を元通りに無かつた事にする』のは大変なんだ」

【長ミミ】「ご主人様でも、ですか?」

【男主人】「うん。多分、長ミミが期待しているレベルは無理」

【長ミミ】「そうですか…………」

【男主人】「猫ミミのことが、そんなに気になる?」

【長ミミ】「……やはり、分かりますか?」

【男主人】「まあね。むしろ、長ミミがよく氣づいなあと思つよ」

【長ミミ】「ふふふ、私は完璧なメイドですか?」

【男主人】「エルフ族なら先天的に魔術師の素質があるからね。どこまで分かつてる?」

【長ミミ】「いえ、『何かがおかしい』といつのを感じただけです」

【男主人】「そこまで分かれば十分。後は僕に任せといて、昔に同じようなことがあつたから、多分大丈夫」

【長ミミ】「かしこまりました。お任せいたします」

【男主人】「ずいぶん、あつさりとしてるね」

【長ミミ】「ご主人様は、怒られないとニンジンを食べれないようなお子様で、少しエロくて、その割には女性に弱いややへタレですが……私は信じますので」

【男主人】「なんだかなあ。ま、その期待には、応えれるように頑張らせてもらひつよ」

## 第23話『王子様に、欺かれていた』

草原と平穏の国・王宮（王子執務室）

【王子様】「それで？ 上手くいったの？」  
【男主人】「8年前と基本は同じでしたから、魔術による“騙し”と“移し”で何とか」  
【王子様】「『クリンケスイッチ』条件殺戮だっけ？」  
【男主人】「よく覚えてますね」  
【王子様】「まあ、あの時はボクも当事者だったし」  
【男主人】「あの時から、貴方は貴方でした……」はあ  
【王子様】「はっはっは、溜息を吐くと幸せが逃げちゃうよ」  
【男主人】「誰のせいですか誰の……！」  
【王子様】「そっと自分の心に手を当てて考えてみればいい……」  
…  
【男主人】「何かカツコイイことを言つても誤魔化されませんから！」  
【王子様】「で、やつぱり、今回はお前狙いか？」  
【男主人】「そうですね。僕が猫ミミに淫らな行為に及んだら、さつくりあの世行きでした」  
【王子様】「よくもまあ搦め手が好きな連中だ」  
【男主人】「もう危険性はないと思われるの、猫ミミは我が家で引き取ります」  
【王子様】「ん？ 背後組織は？」  
【男主人】「潰しましたけど、あ、許可が必要でしたか？」  
【王子様】「いや、それなら構わないさ」  
【男主人】「雇用主に関しては、改めて何らかの対処します。どうも先日の悪領主の件とも絡んできそうです」

【王子様】「ふむ、協力が必要そなうなら言つてくれ、頼んだよ」

【男主人】「……了解です」

【王子様】「何か浮かない顔があるが、まだ何があるのか？」

【男主人】「いえ、なんで僕にこんな罠を仕掛けられたのかだけが不可解で」

【王子様】「そりや、異種族の娘相手に、夜な夜なハッスルしてい る変態だと思われてるからだろ」

【男主人】「僕つてそんな風に思われてるんですか？」

【王子様】「ボクが指示して情報操作したからな！」

【男主人】「何をいい笑顔で認めてるんですか！ え、その話は初耳ですけど！？」

【王子様】「『敵を欺くには味方から』といつじやないか」

【男主人】「僕にとつては、貴方も敵だあ！！」

## 第24話『猫//ひひきさんと、寝ていた』

草原と平穏の国・男主人邸

【長//】「はい、それじゃあ横になつて……」  
【猫//】「……長//さんから、なんだかイイ匂いがする」  
【長//】「ハーブの香り袋です。気に入つたなら、今度あげますよ。じゃあ、私に身を任せて」  
【猫//】「うう（もじもじ）」  
【長//】「ほら、照れなくていいから」  
【猫//】「あ、長//さん柔らかい……」  
【長//】「ふふふ、猫//ひひきさんだつて柔らかいですよ」  
【猫//】「うこや～」  
【長//】「それに綺麗な色、薄いピンク色ですね」  
【猫//】「あ、や、せつぱ止め……！？」  
【長//】「逃がしません。初めてなら、少し怖いかもしれませんけど、大事なことですから私がしつかりやらせてもらいます」  
【猫//】「うう（びくびく）」  
【長//】「ほら、大人しくしなさい。大丈夫、優しくしてあげるから」  
【猫//】「大丈夫？」  
【長//】「任せてください。手先は器用な方ですから、獣人族の方のは初めてですが……少し形が違うだけで大体同じです」  
【猫//】「信じる……」  
【長//】「では、穴の周りからゅうへりとこきます」  
【猫//】「んつ、んんつ……」  
【長//】「そんなに硬くならないで、体を楽にして……少しずつ中に入りますよ。痛かったら言つてください」

【猫///】「ふつ、ふつ……んあつ」

【長///】「痛かったですか？一度抜きますね」

【猫///】「痛くなかったけど、こう、むずむずして……」

【長///】「少しスッキリしました？」

【猫///】「うーん、ちょっと変な感じ。まだ何かが中に入ってるよーな」

【男主人】「とりあえず、君たちの言葉だけを聞いてるとすつゞくモヤモヤあるんだけど」

【長///】「どうやら、主人様も耳掃除が必要なようですね」

# 草原と平穏の国：男主人邸

【男主角】「ねえ、やつぱ、やめない？」

【長三三】　「ご主人様　潔く猫三三の相手をなさう　でくたさい」

【男主人】「じゃあ、お願ひするけど……」

【長三三】「もう少し嬉しそうな顔をしてはいかかですか？」  
の初めての相手なのですから

【男主人】「いや、だから、少し困るというか」

【野井久】「じゃあ、先づつけておいてね。

【猫】「うんっ！ 頑張る！」

【鼎三】  
猶三三其ノテリケニトな語分でテから  
十分は優

【腰】「そりゃう、どうですか、『ご主人様?』

【男主角】 うん、悪くないかも…… あ、そこ、少しだけ強めにこ

【猫】「へいへい？」

【男主人】「そうそう、いい感じ、上手上手……」

「猫…… もか……」

【猫////】「うんー。」

【男主人】「あー、気持ちいいかも……」

【油断すると……】「あ、油断すると……」

【男主人】「いつつ……」  
【長】「ほら、猫ちゃん、気をつけないと」  
【猫】「ごめんなさい！ 痛かった？」  
【男主人】「だ、大丈夫だから、気にしないで。ありがとう、随分  
スッキリしたよ」  
【猫】「うん……」  
【長】「最後に穴の周りを拭つて終わりです。お一人ともお疲れ様」  
【猫】「ふう、緊張したあ。次もあたしが耳掃除してあげるね、  
ご主人さまー」

## 第26話『噂は、羽が生えて飛んでいた』

草原と平穏の国・有名娼館

【妖艶女】「あら、男主人様じやないの。今夜こそは、アタイたちを買いに来てくれたのかい？」

【男主人】「残念ながら、今回もただの使い走りでね」

【妖艶女】「やだやだ、まったく残念だなんて欠片にも思つてないクセに、そんなどから変な噂が立つんだよ」

【男主人】「変な噂？」

【妖艶女】「なんでも異種族の娘を地下牢に閉じ込めて、毎晩あんな事やそんな事をしてるんだって？」

【男主人】「はつはつは」

【妖艶女】「そういう趣向がオッケーな娘もいるけど？」

【男主人】「変な気を回すなつ！！」

【妖艶女】「十分間に合つてる……と？ 隨分な入れ込みようじゃないの、熱い熱い」

【男主人】「あのさ、妖艶女、分かつてて言つてるよね？」

【妖艶女】「はて、なんのことだろね？」

【男主人】「その噂は、すでに尾鰭おひれどころか翼が生えて空を飛んでるし……」

【妖艶女】「いざれ炎を吹く立派なドラゴンになりそつだ（ケラケラ）」

【男主人】「はあ……とりあえず、ほい、今月分の“ツケ”ね。（ジヤラリ）足りてる？」

【妖艶女】「ひのふの……んつと、これだけで十分。残りは持つて帰つとくれ」

【男主人】「はいはい。で、今回は一つ僕の方から頼みたいことが

あるんだけど」

【妖艶女】「改まつてなんかい？ あんたはお偉いさんなんだから、  
ただ命令すればいいじゃないか」

【男主人】「少しばかり危ない話だからね。こればっかりはお願ひ  
するしかないしむ」

【妖艶女】「あー、ほんとイヤな男だよ。そう言われた方が断りに  
くいってのに」

【男主人】「妖艶女は、ほんといい女だと思うね」

【妖艶女】「そう思うなら一晩くらいアタイを買ってみるってんだ」

【男主人】「あいにくと、娼館のナンバーワンを買えるほどの甲斐  
性はないわ」

【妖艶女】「で、頼みたいことって？」

【男主人】「西の客と少し長めに“お喋り”して欲しい」

【妖艶女】「“お喋り”するだけでいいのかい？ “闇に入つたり  
”、“伽の相手”はしなくても？」

【男主人】「うん」

【妖艶女】「近いうちに何があるのかい？」

【男主人】「何も無ければ良いけどね……ほんと、そう願うよ」

## 第26話『噂は、羽が生えて飛んでいた』（後書き）

新規キャラクターの紹介です。

妖艶女

【種族】：人間族 【年齢】：27歳 【性別】：女性

【一人称】：アタイ

【設定】：

- ・有名娼館のナンバーワン。
- ・なんか色々と裏の仕事を請け負っているっぽい。

## 第27話『家に帰つたら、娘がいた』

草原と平穏の国・男主人邸

【長//】 「（「）によ（「）によ（「）」」  
【猫//】 「（「）によ（「）によ（「）」」  
【男主人】 「ただいま……？」  
【長//】 「……お帰りなさいませ、（「）主人様」  
【猫//】 「……（ふるふる）」  
【男主人】 「んつ、どうかしたの？」  
【猫//】 「……『お父さん！ 今日会つてた女の人は誰つ……』」  
【男主人】 「え、何つ？ 何が起こつてるの……？」  
【猫//】 「『あたしが何も知らない子供だと思つてるの？ お父さんフケツよつ！ 大つ嫌い！』」  
【男主人】 「ぐふつ……意味不明だけど、そのセリフは、すつ（「）精神的に刺さる……！」  
【長//】 「ふふふ、お仕事で疲れて帰つてきた（「）主人様へのささやかな気分転換です」  
【男主人】 「いやもう、気分転換を通り越して、心が痛いよつ！ 僕は未婚者なのに……！」  
【猫//】 「『お父さんが、あの女人の人と別れるまで親子の縁を切るから……』」  
【男主人】 「まだ続いてた！？」  
【猫//】 「……ねねつ！ 何点くらいだった？ あたしのハクションの演技！」  
【男主人】 「えー……、そんな満面の笑顔で質問されても……」  
【長//】 「猫//ちゃん、どうやら、今日の演技では（「）主人様に合格点をもらえなかつたようです。満点を目指して、明日も挑戦し

ましょ「

【猫ミミ】「おーー！」

【男主人】「本人を目の前で、奇襲の計画を堂々と……」

【長ミミ】「ご主人様、隠し子バージョンと愛人バージョンのどちらが好みでしようか？」

【男主人】「そんな二択しかないの！？」

【長ミミ】「明日こそ満点を目指して頑張りますから（キリッ）

【猫ミミ】「あたしも頑張る！（グツ）

【男主人】「ごめんなさい、もづ、満点あげるから、普通に家に帰らして」

## 第28話『嬉しいから、泣いていた』

草原と平穏の国・男主人邸

- 【男主人】「あ、猫ミミミ、ちよつといつち来て」
- 【猫ミミミ】「はーい？」
- 【男主人】「いつもお仕事ご苦労様です。はい、これ」
- 【猫ミミミ】「銀貨……？」
- 【男主人】「少ないけど、今月分の給金」
- 【猫ミミミ】「え？ これがあたしに？」
- 【男主人】「うん、猫ミミミの分だよ。長ミミミと違つて僕が雇つてることになつてるから」
- 【猫ミミミ】「……」
- 【男主人】「金額については長ミミミと相談して決めたからね」
- 【長ミミミ】「はい、衣食住の面倒を見ている分を差し引いた金額になつてます」
- 【猫ミミミ】「ありがとうございます……（ほほ）」
- 【男主人】「えつー？」
- 【猫ミミミ】「あ、あれ？ あははは、へ、変だな（こじこじ）」
- 【男主人】「何か悲しいことが？」
- 【猫ミミミ】「ううんつ、逆、嬉しいのに……（えぐ）」
- 【男主人】「（小声）長ミミミ、猫ミミミはどうしたのー？」
- 【長ミミミ】「はあ、（こ）主人様……そんなどから、女心が分からぬと言われるのです」
- 【男主人】「うつ……」
- 【長ミミミ】「ここ数日の間、ずっと張り詰めていた緊張が解けたのでしょう」
- 【男主人】「緊張？」

【長月】「見知らぬ街に連れて来られ、あげく訳の分からぬ陰謀に巻き込まれていたのです」

【男主人】「ああ……なるほど」

二、用法

【男主角】「…………え？ と、猫？ ？ ？ ？ もう大丈夫だから、ね？」（ぎ

「」

【獨/ハ/ハ】 「…………」 (ハセー・タモー・ハセー)

（男主人）  
まんじん

## 第29話『長//ミ』、元気でいた

草原と平穏の国・男主人邸

【長//ミ】「猫//ミちゃんをベッドに寝かし付けてきました」

【男主人】「ご苦労様。僕が運んでも良かつたのに」

【長//ミ】「猫//ミちゃんは身軽ですから……それにそもそも女性の部屋に本人の許可なく入ってはいけません」

【男主人】「あ、いや、猫//ミの場合、女性っていうか。まだ女の子といつか」

【長//ミ】「女性は生まれた時から女性なのです。これは一般常識です」

【男主人】「はい」

【長//ミ】「ご理解していただけて良かつたです。さて、ご主人様、お茶はいかがですか?」

【男主人】「あ、淹れてくれる?」

【長//ミ】「かしこまりました。少々お待ちください」

【長//ミ】「……お待たせしました(ト)ボトボ」

【男主人】「(ズズツ)ん? お茶の葉を変えた?」

【長//ミ】「いえ、今日は少し濃い目に淹れただけです」

【男主人】「ふーん、ところだ……」

【長//ミ】「なんでしょうか?」

【男主人】「猫//ミのことなんだけど、様子がおかしいことに何時から気づいてた?」

【長//ミ】「ほぼ最初から、でしょうか」

【男主人】「なんで僕に言ってくれなかつたの?」

【長ミミ】「なんとなく、としか言えません」

【男主人】「なんとなく？」

【長ミミ】「ええ、以前も申し上げましたが、私はご主人様のことを感じているのです」

【男主人】「…………？」

【長ミミ】「ですから、いつか今日のような日が来ても、ご主人様なら受け止めてくれると」

【男主人】「でも、それはさ、結果論に過ぎないよ？」

【長ミミ】「差し出がましい意見かもしませんが……私もご主人様に助けられたので」

【男主人】「ん？ ああ、かみな……」

【長ミミ】「ご主人様、それ以上思い出されると、明日のスープとサラダが真っ赤に染まりますよ？」（ニコニ）

【男主人】「あの罰料理は止めてーーー！」

### 第30話『お歸匠様が、やつて来ていた』

草原と平穏の国・男主人邸

【白髪女】「ふう、まつたく年は取りたくないもんだねえ。王都に来るだけで魔劫おっくうでしようがない」

【男主人】「い、いえ、師匠はいつもお若くてお元氣です（カチ）」

【白髪女】「おやねや？ いつまじの世辞が言えるよつになつたもんだ」

【長なが】「（トボトボ……）」

【白髪女】「修行が辛くて涙流してた小僧が、師団長ながとは……時の流れは早過ぎるねえ（しみじみ）」

【長なが】「どうやら、ミルクと砂糖はそれがりの壺から好みでおいれぐだぞ」

【白髪女】「ありがと、いたぐよ。……（ヘルヘル）……美味い。お前さん、いい腕してるねえ」

【長なが】「お褒めいただきありがと、それこまか」

【男主人】「それで、師匠は本日はどんな用があつて？」

【白髪女】「用がないなら、弟子の顔を見に来ぢやいけないつてのかい？」

【男主人】「そんなことはあつません！ 師匠でしたらこつでも歓迎します！」

【白髪女】「そつかいそつかい、じゃあ、しばらぐの聞この家で厄介させてもらおうか」

【男主人】「うえいつ……？」

【白髪女】「ひそしふりに王都まで出て来ただ、しばらぐひとつに居よいかと思つてねえ」

【男主人】「師匠のためでしたら、一流宿の部屋を押さえますけど  
つ！？」

【白髪女】「宿代がもつたないじゃないかい、その分は夕食の酒  
代にしてとくれ」

【男主人】「そ、そうですか……？」（汗）

【白髪女】「何を怯えてるんだい。そりゃあ昔は勇よいと厳しく修  
行をつけてたけどねえ」

【男主人】（あ、あれが“ちょいこと”……生死の境をさまよつ  
たのが何回かも覚えてないのに……）

【白髪女】「今は自主鍛錬してるんだろ？ だつたら、アタシがと  
やかく言つつもりはないよ」

【男主人】「そ、そりですか……」

【白髪女】「まあ、どうじてもつて言つなら老体に鞭を打つて、指  
導するのも考えるけどねえ」

【男主人】「あは、あははは……」

【白髪女】「それでアタシは泊まらせてもらつていいのかい？」

【男主人】「はい！ 師匠でしたら、我が家だと想つて、何日でも

ご宿泊ください！」

【白髪女】「それじゃあ、10日ばかりお世話にならうかねえ。お  
嬢ちゃん達もよろしく頼むよ」

### 第30話『お師匠様が、やつて来ていた』（後書き）

新キャラ紹介。おばあちゃんキャラも結構好きです。

白髪女

【種族】：人間族 【年齢】：58歳 【性別】：女性

【一人称】：アタシ

【設定】：

- ・男主人の魔術の師匠。
- ・のんびりした口調とは裏腹に修行は厳しいらしい。

### 第31話『女三人で、語っていた』

草原と平穏の国・男主人邸

【長//ミ】「白髪女様、本日のお昼はいかがでありますか?」

【白髪女】「アンタに任せてもいいかねえ?」

【長//ミ】「かしこまりました。では、その様にいたします」

【白髪女】「うーん、なんか堅苦しいねえ。お客様扱いなのは分か  
るけどね」

【長//ミ】「ご主人様から、ご主人様と同じように扱つて欲しいと  
言い付かっておりますので」

【白髪女】「もう少し碎けた口調で、呼び方も「白髪女さん」く  
らいにならないかい?」

【長//ミ】「……その方がよろしいのでしょうか?」

【白髪女】「うんうん、お客様かもしれないけど、もう少し親近感  
が欲しいねえ」

【長//ミ】「……」

【白髪女】「それとも、若い子は、こんなおばーちゃんの相手はイ  
ヤかい?」

【長//ミ】「そのようなことはありません、けども……」

【白髪女】「じゃあ決まりだ。おーい、そっちの、えつと猫//ミ//ち  
ゃんだつけ?」

【猫//ミ】「は、はい! なんでしょう!」

【白髪女】「男主人は良くしてくれてるかい?」

【猫//ミ】「うんっ! あたしは孤児なんで、本当の家族はいない  
んだけど、お兄ちゃんみたいで嬉しいの!」

【白髪女】「まあ、性格は良い男だからね。じゃあ、今日からアタ  
シが猫//ミ//ちやんのおばーちゃんだ」

【猫//】「おばーちゃん?」

【白髪女】「うんうん、男主人の妹ならアタシにひと口では孫みたい  
なものや」

【猫//】「え、え?」

【白髪女】「男主人がお兄ちゃんなら、アタシはおばーちゃん、ほ  
ら、呼んでみな」

【猫//】「お、おばーちゃん…………あう(トト)」

【黒//】「あの……」

【白髪女】「アンタもおばーちゃんって呼んでくれても構わないん  
だよ~」

【黒//】「いえ、その、白髪女様……」

【白髪女】「白髪女さん、もしくは、おばー様なら許すけどねえ?」

【黒//】「……白髪女さん、ピリツとサンデイッチのどちらがお  
好きですか?」

【白髪女】「よしよし、じゃあサンデイッチにしてくれるかい?  
庭で一緒に食べようじゃないか」

### 第32話『長//／＼さん』が、言い負けていた

草原と平穏の国・男主人邸（裏庭）

【猫//／＼】「はむはむ、おいしいー」

【白髪女】「ふむ、生ハムを刻んでフレッシュコチーズと混ぜ合わせてるんだねえ。これは美味しい」

【長//／＼】「白髪女さん、その、なんで私たちまで一緒に食事をしてこるのでしようか？」

【白髪女】「そりや、アタシが命令したからだらうねえ？」

【長//／＼】「なんでそんな命令をされたのでしょうか？」

【白髪女】「そりや、一緒に食事をするためじゃないかい？」

【長//／＼】「…………」

【白髪女】「ほら、アンタも食べなよ。この何の実か分からぬジャムのサンドイッチも美味いよ」

【長//／＼】「それは二ンジンのジャムです」

【白髪女】「なるほど、言われてみれば確かに二ンジンの風味がするねえ」

【猫//／＼】「ご主人さまは二ンジンが嫌いなんだつて、だから長//／＼さんが色々頑張ってるんだ！」

【白髪女】「ああ、ヤツの食わざ嫌いを直すためかい。アタシも一時期頑張つたんだけど、全力で抵抗されたねえ」

【長//／＼】「ええまつたく嫌いだからといって、いつそり残すだなんて手供っぽい」

【白髪女】「もつともアタシも無理やり食べさせよつとしたから、お互い様かねえ」

【猫//／＼】「あたしは何でも残さず食べるよー」

【白髪女】「猫耳ちゃんは偉い偉い。アタシは長//／＼せじせじ間を掛

けたりせしなかつたけど」

【白髪女】「……その、悔しくありますか？ センカく作った料理が残されると」

【白髪女】「なるほどねえ。ただ料理を仕事と割り切つていれば、そんな気持ちにはならないもんだよ」

【白髪女】「私はあくまでメイドの仕事として料理をしていますが」

【白髪女】「うん、確かに料理はメイドとしてのの仕事なん

だらうねえ」

【白髪女】「それは、先ほどの薬と盾をしませんか？」

【白髪女】「もう少し詳しく説明が必要かい？」

【白髪女】「よろしければ、是非

【白髪女】「じゃあ、交換条件だ。ほり、一緒に飯食を楽しんで、デザートが終わったら話してあげよつ

【白髪女】「…………いためます」

### 第33話『白髪女さんが、冗談を言っていた』

草原と平穏の国・男主人邸（裏庭）

【白髪女】「ふう、じちわづれも。ああ、そつだ。猫//ちやん、お使いを頼んでいいかい？」

【猫//】「おばーちゃん、何をすればいいの？」

【白髪女】「お小遣いをあげるから、猫//ちやんの好きなオヤツを3人分買ってくれないかい？」

【猫//】「えつ？ あたしの好きなオヤツでいいのつ！？」

【白髪女】「ああ、猫//ちやんのお奨めのヤツをお願いするよ。とつあえず、これだけ渡しておくれからね」

【猫//】「わかった！ ジャあ、行つてくるね！（しゅたつ）」「ここでじょりつか？」

【白髪女】「簡単なお言葉遊びでねえ。アンタの料理には、仕事以外の気持ちが混ざつていて言つことを」

【長//】「私は別に主人様に惚れていたりはしませんが」

【白髪女】「気持ちと云つのは、何も男と女の愛情ばかりじゃないだろつ？」

【長//】「それは…… そうですが」

【白髪女】「ああ、アンタには男主人に對して話せない、いや話すつもりがないことがあるみたいだしねえ」

【長//】「！？ 白髪女さん、貴方は私の何を知つてているのでしょうか？」

【白髪女】「例えば…… アンタの父親だけど、なくなつていないみたいだねえ」

【長//】「……」

【白髪女】「……とまあ、軽い冗談や」

【長】「じょ、う、だん？」

【白髪女】「ああ、軽く“カマを掛けたみた”だけで、本当は何も知らなーのや」

【長】「そんなことはありません、実際に私のお父さんが死んでござることを知っています」

【白髪女】「アタシはさ、ただちょっと人として長く生きているだけだよ。誰だつて人に話せないことの一つや二つ抱えてるものさ。それに父親の件だつて“なくなつていなー”と言つたんだ……“死んでござる”とも“生きてござる”とも受け取れるだらう?」

【長】「…………そうですね」

【白髪女】「しかし、今みたいな会話でもいくつか汲み取れてしまうモノもあるとこつわけでねえ」

【長】「…………」

【白髪女】「そんなに顔を強張らせる」とはなーさ、すくなくともアタシはアンタのことが気に入ったからねえ。何か困つたことがあれば、力を貸してもいい気になつていいくらーにはさ」

【長】「ありがとうございます」

【白髪女】「何か話したいことがあれば話してみな。多分、花壇に話しかけるよりは有意義だからねえ」

### 第34話『白髪女との、噂をしていた』

草原と平穏の国・王宮（執務室）

【男主人】「よし、次の仕事は……？」

【副官女】「ええと、今ので来用に必要な分の書類までほとんど終わちゃいましたけど」

【男主人】「ぐつ、しょうがない。訓練場にでも行こうかな……」

【部下男】「男主人様。三日前からオレらを先に帰して、ずっと残業してますけど、何かあつたんですか？」

【男主人】「今日は、おうちに帰りたくないの……」

【部下男】「うーわー、気になる女の子に言われたい文句ですが、それ。本当にどうしたんです？」

【男主人】「……師匠がうちに来てるんだけど、聞いてないのか？」

【部下男】「げつ、鬼婆がつ！？ うわ、本気で申し訳ありません！」

【男主人】「知ってると思ってたんだけど、もしかして初耳か？」

【部下男】「そりやあ、もちろんじやないですか！ もし、それを知つたら即日に男主人様のお屋敷へ挨拶に行きますよ！ 逆になんで教えてくれなかつたんですつー？」

【男主人】「こいつちだつて、知ってるから何も言つてこないのかと思つてたんだよ」

【部下男】「ううわー、じゃあ今日はこれから酒場で土産を買つて、男主人様のお屋敷に……」

【白髪女】「ああ、酒を持つてくるなら明日の方が嬉しいねえ」

【男主人】「！？？」

【部下男】「出たあつー！ え、なんで王宮内に堂々と入つているんですか、お祖母様！？」

【白髪女】「ふふふ、権力を持つた知り合ひってのはいいもんだねえ。紙っぺら一枚で入場自由さ」

【男主人】（……そんなんでいいのか王宮の警備つー？）

【白髪女】「若い頃のアタシは、夜会の華と呼ばれるほどモテたんだから、当時の口ネつてやつかねえ」

【部下男】「そ、それで、お祖母様はどんな御用で王宮までいらしたのでしょうか？」

【白髪女】「いやなに、久しぶりに王都の酒場で一杯とこきたくてねえ。可愛い孫と弟子をつき合わせよつと思つたんだけど……ところで、鬼婆つてのは……」

【男主人】「（言葉を遮つて）もちろん、つき合わせて頂きます、師匠！」

【部下男】「お祖母様！ オレの行きつけの店ですが、お祖母様好みの葡萄酒を置いてまして！」

【白髪女】「そうかいそうかい。お嬢さん、悪いけどこの二人を先に帰りせてもうつけど、いいかい？」

【副官女】「は、は……、いついらつしゃいま……せ？」

### 第35話『男主人が、問い合わせられていた』

草原と平穏の国・酒場

- 【白髪女】「それじゃあ、かんぱーい（ゴクゴク）」
- 【男主人】「乾杯……（ちびり）」
- 【部下男】「乾杯……（ごくり）」
- 【白髪女】「あー、この一杯のために長生きしてるねえ。（ひょいパク）ん、この揚げ物も美味いねえ」
- 【男主人】「それで師匠、僕たちは何のために呼ばれたのでしょうか？」
- 【白髪女】「久しぶりに愛しい弟子とのじうじう場所での語らいを楽しみにだねえ」
- 【男主人】「でしたら、わざわざ王宮まで来る必要はなかつたと思うのですが……」
- 【白髪女】「抜き打ち視察つてのは、事前に知らせるもんじやないんだよ」
- 【部下男】「何を視察するつもりだつたんですか！？」
- 【白髪女】「まあまあ、とりあえずアンタに聞きたいことがあるんだけどいいかい？」
- 【男主人】「ええ、なんでしょう？」
- 【白髪女】「誰を嫁さんにする気なんだい？」
- 【男主人】「……はい？」
- 【白髪女】「きちんと責任は取りなよ。避妊してねばいいってもんじゃないからねえ」
- 【男主人】「ちょ、ちょっと待つてくださいーー何の話ですかっ！」
- 【白髪女】「恋バナ？」

【男主人】「可愛く言つても似合いませんから、師匠…… 大体誰を嫁するんですか！」

【白髪女】「長//ミは夫を立てるいい奥方になりそうだねえ。猫ミミは元気な子を生みそうだ。もちろん異種族婚は難しいかもしけないけど、そこは愛で乗り切れ。あと、さつき王宮で見た娘も満更じやなさそうじゃないかい？ 不誠実なのは、アタシが許さないよ」

【部下男】（そういえば、お祖母様はこうこうの方だった…… 恋愛至上主義で、妙な所で勘が鋭いし）

【男主人】「まず断つておきますけど、長//ミたちはあくまで使用者で、恋人でも愛人でもありません！ それに王宮のつて副官女のことですか？ あくまで大事な副官ですよ、彼女は！」

【部下男】（副官女がこの場にいなくて良かった…… 絶対ややこしいことになつてた）

【白髪女】「それでもアタシの弟子なんかねえ。アンタほどの家禄なら、いつそ「3人とも幸せにしてみせる」位は言つもんだよ？」

【男主人】「言いませんっ…… それに、今は恋愛とかしているしている時じゃないですから…」

【白髪女】「まだまだ青いねえ。恋愛は“する”もんじゃない、“している”もんさ」

【男主人】「…………本当に何のために呼ばれたんですか？」

【白髪女】「アンタの将来を心配してかねえ？」

### 第36話『男主人が、心配されていた』

草原と平穏の国・酒場

【白髪女】「さてと……ステージ オン フェイク サウンド……  
『虚像世界』」

【部下男】「これは『結界作成』系の魔術ですか？」

【男主人】「うん、このテーブルに座っている僕たち以外には、僕たちの姿が認識できなくなっているはず」

【白髪女】「あ、しまった。アンタたちに任せればよかつたねえ。無駄に疲れなくてすんだ」

【部下男】「いやいや、オレは、そんな高等魔術は使えませんから」  
【白髪女】「そうなのかい？ 情けない。アタシの孫ならこのくらい“代用詠唱”で使いな

【男主人】「それ、結構無茶言つてますけど。で、結界を張つたといつことは本題に入るのですね？」

【白髪女】「そうだねえ。正直に答えてくれると嬉しいんだけどねえ」

【男主人】「何をですか？」

【白髪女】「アタシの力は必要かい？」

【男主人】「…………何のために？」

【白髪女】「遅くとも半年、早ければ来月には、戦争が始まるんだろ？」

【部下男】「なつ！ 何を言つてるんですかお祖母様！！！」

【男主人】「はあ……部下男、語るに落ちてる」

【白髪女】「もつちよと部下には心理戦の基礎を教え込んでおくんだねえ」

【男主人】「といつか、勘弁してください師匠……どにに自分の弟

子と孫に心理戦を仕掛ける人がいるって言つんですか」

【白髪女】「何事も経験じやないかい」

【男主人】「まあ、いいです。師匠もある程度の情報は、既に掴んでいるんでしょう?」

【白髪女】「そうだねえ。いつ見ても西の情勢には気を配つていたからねえ」

【男主人】「こつちは、武具と兵糧、それと傭兵の流れを追つていましたが、ほぼ確定ですね」

【白髪女】「7年前の戦争で消えずに燻つていた火種がまた煙を上げだしたって所かねえ」

【男主人】「付き合つぼつは溜まつたものじゃありませんけど……」  
【白髪女】「アンタは、また“心”を削つて削つて削り減らすつもりかい?」

【男主人】「削るも何も、喪つた物は減らしそうがありませんから」

【部下男】「男主人様……」

【白髪女】「はあ、やれやれ……難儀だねえ」

### 第37話『部下男は、決意していた』

草原と平穏の国・酒場

【男主人】「えつと、師匠……すみませんけど、そろそろお開きにしませんか？」

【白髪女】「ふむ、アタシはちょいと孫と会話がしたいんで、先に帰つてくれるかい？」

【男主人】「（小声）部下男……健闘を祈る」

【部下男】「（小声）男主人様……明日からは病欠でよろしくお願ひします」

【男主人】「（ちゃらり）師匠、酒場の払いはこれで払つてください。では、お先に失礼します」

【白髪女】「さて、ありがたく」馳走に預からせてもらおうかねえ」

【部下男】「で、お祖母様、わざわざオレを残した理由つてのは？」

【白髪女】「アンタが男主人について何を知つてて、どんな考え方を確認しどこうかと思つてねえ」

【部下男】「お祖母様以上のことは知らないと思いますけど」

【白髪女】「アンタと男主人が出会つたのは、男主人がアタシの弟子になつた翌年だから……12年も前かい」

【部下男】「一応、男主人様はオレの兄弟子つてことになりますね」

【白髪女】「そう言つなら、そうなるねえ」

【部下男】「7年前の『焦森戦争』では、男主人様が小隊長、オレがその部下で……」

【白髪女】「男主人が味方側には“救森の魔術師”、敵国にとつては“不死の魔人”と呼ばれる活躍を見せた」

【部下男】「それだけだったら良かつたんですが……」

【白髪女】「宮内で王子派と主権を争つっていた王弟派には面白くな

い話だつた

【部下男】「王子様と幼馴染で右腕と呼ばれる男主人が“荣誉”と“権力”を手に入れてしまう可能性」

【白髪女】「そして、忌まわしい男主人邸虐殺事件……生き残ったのは男主人と義理の妹だけ」

【部下男】「実行犯は男主人様によつて殲滅されましたか……」

【白髪女】「主犯と思わしき貴族が次々と謎の死を遂げ、事実は闇の中に……」

【部下男】「やつたのは男主人様でしょうか？」

【白髪女】「さてねえ。アタシたち以外にも、そう考えた人は少なくはないだろうねえ」

【部下男】「あの時、オレは男主人様の力になれなかつたこと、止めなかつたことを悔やみます」

【白髪女】「しうがなき、男主人が持つ膨大な魔力は、人が持つ能力としては異常過ぎる」

【部下男】「だけど！ 男主人様はオレらと同じ普通の人間です！」

【白髪女】「ああ、普通だからこそ、戦争で起こした自らの大量殺人について、心を痛めていたねえ」

【部下男】「…………少なくともオレは男主人様について行きます」

【白髪女】「やれやれ、アタシもしばらくは寿命を迎えるわけにもいかないようだねえ」

### 第38話『長ミミさん』が、起きて待っていた

草原と平穏の国・男主人邸

【長ミミ】「お帰りなさいませ、ご主人様」

【男主人】「あ、まだ起きてたんだ……先に休んでいてよかつたのに」

【長ミミ】「『べ、別に男主人君のために起きていたんじゃないんだからね!』」

【男主人】「うえい?」

【長ミミ】「『勘違いしないでよね。私は男主人君のことなんて、好きじやないもん!』」

【男主人】「……」

【長ミミ】「ふう、ご主人様も思わず魅入ってしまう迫真の演技だつたようですね。イチコロですか?」

【男主人】「……思わず呆気に取られたんだよ!」

【長ミミ】「ちつ、ガセネタを掴まされましたか」

【男主人】「態度悪つ!? というか、どんなネタだつたんだか」

【長ミミ】「ご主人様は『表面的につれない態度で迫ればイチコロだねえ』と、演技指導も頂きました」

【男主人】「演技指導した人は分かつたけど……長ミミは何がやりたかつたの?」

【長ミミ】「ご主人様をイチコロにして手玉に取る悪女になるためのステップ1?」

【男主人】「なんで疑問系なのがは置いといて、ステップ2は実践しないよ!に!」

【長ミミ】「ええ、ステップ2の担当は猫ミミちゃんらしいので」

【男主人】「猫ミミに何を仕込んだつ!?」

【長ミミ】「ご主人様、私はご主人様の自制心を信じております」  
【男主人】「え、なにそれ、自制心が必要なの！？」あ、酔いが急に醒めてきた

【長ミミ】「ヒントは『お風呂場でドッキドキ大作戦』とだけ、具体的な内容については秘密です」

【男主人】「いや、もう、なんか、グレイゾーンどこのじやなくなりー!?」

【長ミミ】「ええ、エッチなのはいけません」

【男主人】「だつたら止めようよーーー！」

【長ミミ】「私に白髪女さんと猫ミミちゃんのタッグを止めるだろうか？」いや、無理だ

【男主人】「反語法で言わなくとも、いや、僕も無理っぽいなあ」

【長ミミ】「でしょーう？」

【男主人】「なんか君がそんなに満足げな顔をしているのか、どうでも問い合わせたい気分だよ」

### 第31話『男主人は、少し酔っていた』

草原と平穏の国・男主人邸

【長ミミ】「ご主人様、どうぞ水です」  
【男主人】「ありがと……（ごぐぐ）……ふはつ」  
【長ミミ】「お代わりはいかがですか？」  
【男主人】「ん、もう十分」  
【長ミミ】「かしこまりました」  
【男主人】「……あのさ、一つ聞いてもいいかな？」  
【長ミミ】「なんでしょうか？」  
【男主人】「君は何者なのかな？」  
【長ミミ】「……ご主人様、酔つていらつしゃるのですか？ それとも若年性痴呆ですか？」  
【男主人】「別にボケてない……けど、まだ少し酔つてるかもね」  
【長ミミ】「ふむ、私は私ですが、何を持つて私と証明するのか……とても難しい命題ですね」  
【男主人】「別に哲学的な質問をしているわけじゃなくてね」  
【長ミミ】「私は、エルフ族のメイドの長ミミです……では、いけませんか？」  
【男主人】「いけない、って訳じゃないんだけどさ。僕のこと知らないわけじゃないんでしょ？」  
【長ミミ】「ええ、ご主人様のことならホクロの数まで……」  
【男主人】「それは嘘だよね？ いや、嘘だと言ってくれる！？」  
【長ミミ】「では、嘘ということで」  
【男主人】「長ミミは、微妙に僕の不安を煽る天才だね！」  
【長ミミ】「と、このくらいには」ご主人様のことを知つていると自負します」

【男主人】「じゃあ、僕が大量殺人者であることも知っているんだよね？」

【長ミミ】「ええ、一昼夜で敵軍の兵士1万とんで88人を殺した“救森の魔術師”様」

【男主人】「怖くないのか？」

【長ミミ】「何が怖いのでしょうか？」

【男主人】「僕は簡単に人を殺すことができるんだよ？」

【長ミミ】「ご主人様、嘘は私の担当ではありませんでしたか？」

【男主人】「嘘……？ 別に嘘なんか言ってない」

【長ミミ】「殺せるのは本当でも、“簡単に”だなんて、そんな悲しい嘘を『主人様の口から聞きたくありません』

## 第40話『長ミミセミと、約束を交わしていた』

草原と平穏の国・男主人邸

- 【男主人】「…………」
- 【長ミミ】「…………」
- 【男主人】「ありがとうございます、と言つべきなのかな?」
- 【長ミミ】「どういたしまして、と答えるべきでしょうか?」
- 【男主人】「長ミミは、偶然うちに雇われた、つてわけじゃないよね」
- 【長ミミ】「ご主人様……セリフが疑問系ではなく、断定系になつております」
- 【男主人】「うん、確信しちゃつたから」
- 【長ミミ】「確信しちゃわれましたか」
- 【男主人】「妹か君か、どつちかは分からぬいけど……長ミミは、僕を救いに来てくれたんだね?」
- 【長ミミ】「あら、そこで疑問系なのですか?」
- 【男主人】「外れてたら、ちょっと恥ずかしいし」
- 【長ミミ】「では、思う存分恥ずかしがつてください、"外れ"です」
- 【男主人】「え、ほんと? うわ、何か僕つて自意識過剰つ!?」
- 【長ミミ】「美女妹様の意図は別として、私はわざわざ外国までご主人様を救いに来たのではありません」
- 【男主人】「うわー、恥ずつ! なに訳知り顔で語っちゃつたの、数瞬前の僕つ! !」
- 【長ミミ】「私は、ご主人様と交わした約束を果たしてもらいに来たのです」
- 【男主人】「……約束?」

【長//ミ】「はい、ご主人様は綺麗すっぱり根っこぎに忘れられて  
いるようですが」

【男主角】「ええっと、ごめん、僕と長//ミつて、以前に会ったこ  
とがあるの?」

【長//ミ】「あるのです。もしかしたら忘れられてるかも、と予想  
していたので凹んだりはしていません」

【男主角】「うつうつ……(悩み)

【長//ミ】「この設問に時間切れはありません、明日でも明後日で  
も一年後でも回答をお待ちしています」

【男主角】「……ヒントは?」

【長//ミ】「もちろんノーヒントです」

【男主角】「すつじく気になるんだけど!」

【長//ミ】「ご主人様、どうぞ頑張って思い出してくださいませ」

## 第41話『副官女は、色々悩んでいた』

草原と平穏の国・王宮（執務室）

【副官女】「きょ、きょつは部下男が遅いですね。寝坊でしょうか」

【男主人】「あ、今日は病欠で休むつていう連絡を事前に受けているよ」

【副官女】「男主人様、事前につて、それはズル休みといつうのでは……」

【男主人】「ほら、昨日突然来たお婆さんがいたでしょ？ 僕の師匠で、部下男の実祖母なんだけど」

【副官女】「あ、そうだったのですか」

【男主人】「でまあ、なかなかの女傑でね。その人との付き合いで、少し」

【副官女】「事情があるのでしたら、単純に責めるわけにはいきませんね」

【男主人】「だから、部下男はしばらく休むことになつたから」

【副官女】「そ、それは、数日間は部屋で一人つきりなのですね……」

「一人つきり、あつう」

【男主人】「そうなつちゃうね、仕事が大変になるかもなんで、ごめんね」

【副官女】「い、いえ、色々とがんばります……」

【男主人】「色々……？ まあ、やる気があるのは助かるけど、ふあ（欠伸）

【副官女】「色々とは気にしないでください……といひで、先ほどから眠そつですね！？」（汗）

【男主人】「うん、ちょっと昨晩は寝れなくてね」

【副官女】「何かあつたのですか？」

【男主人】「いや、ちょっと長〜〜、あ、うちの使用人なんだけど、  
その長〜〜のせいで眠れなくてね」

【副官女】「……？」

【男主人】「まったく、こつちが降参してゐるに許してくれないん  
だから……」

【副官女】（【長〜〜】「うふ〜ん、ご主人様、まだまだ許しませ  
んわ」）

【男主人】「明田も明後田も一年後でも、って言われてもなあ……  
まったく参っちゃうよ」

【副官女】（【長〜〜】「今日はここまでにしますけど、明日も明  
後日も楽しみましようね」）「ダメです！」

【男主人】「ん？」

【副官女】「男主人様……今晚、お屋敷にお邪魔してもよろしいで  
しょうかっ！」

【男主人】「い、いいけど、どうしたの？」

【副官女】「私……がんばりますから……！」

【男主人】「????」

## 第42話『三人が揃つて、見合つていた』

草原と平穏の国・男主人邸

【長////】 「…………」  
【副官女】 「…………」  
【妖艶女】 「…………」  
【男主人】（女三人寄れば、姦しいと、昔の方は言いました……く、  
空気が重いつ）  
【長////】 「…………」  
【副官女】 「…………」  
【妖艶女】 「…………」  
【男主人】 「えーと……」  
【長////】 「ご主人様」  
【男主人】 「は、はいっ！」

【長////】 「玄関で立つて話すのもなんですので、皆様と晩餐をご  
一緒するということでおよろしいでしょうか？」

【男主人】「よろしくお願ひいたします」

【副官女】「え、あ、そんな悪いです！」

【妖艶女】「そりやちょうど良いね、アタイは遠慮なくご馳走にな  
るよ。お酒はつくか？」

【長////】「そちらの王国軍の方、『ご遠慮なさりす』に、『ご主人様の  
許可も頂きましたので歓待させていただきます。そちらの胸元がは  
だけた服装のお方、葡萄酒でよろしいでしょつか？ ハールなども  
用意できますが」

【副官女】「……じゃ、じゃあ、ご馳走になりますー」

【妖艶女】「あんまり歓待されるつて感じの口調じゃないね」

【長////】「そのように聞こえましたら申し訳ありません。この口

調は生まれつきと職業柄ですので」

【妖艶女】「ふふん、葡萄酒を頂こうかね。ショウガ入りの水割りで頼むよ」

【長】「水割りですか……なんでしたら、氷割りも用意できますが？」

【妖艶女】「ほお、なら、そっちで。ショウガはなしでお願いするよ」

【長】「かしこまりました。そちらの方も飲み物はいががなさいますか？」

【副官女】「えーと、じゃあ同じもので……」

【長】「はい。それでは、皆様、まず食堂でお待ち下さい。ご主人様？」

【男主人】「は、はい！」

【長】「皆様の分の食事を用意してまいりますので、お一人と二人一緒に仲良く楽しくご歓談下さい」

## 第43話『女の戦いが、始まっていた』

草原と平穏の国・男主人邸

【妖艶女】「それじゃあ、まあ、男主人の健康とかを適当に願つて、乾杯（カラ）ン」

【副官女】「か、乾杯……（カラ）ン」

【男主人】「一応、ありがと……（カラ）ン」

【妖艶女】「綺麗な氷だね。これは男主人が作つてゐるかい？」

【男主人】「いや……多分、長ミミが自分で作つたんじゃないかな」

【妖艶女】「エルフ族なら魔術を使つてもおかしくはないけど……それでメイドとは、随分と醉狂な話だね」

【副官女】「え？ なんですか？」

【妖艶女】「……あんた、王国軍での男主人の部下なんだろう？（呆れ）

【副官女】「そ、そうですが……」

【妖艶女】「魔術を使つてゐる人は少くはない。ただ、製氷を行なえるるほど精密な魔術を使つてゐる人、となると話は別だ。それほど腕の立つ魔術師なら、王国軍に王立研究所、大商会のお抱え魔術師と引く手は数多さ」

【副官女】「そのくらいの魔術なら、私も使えますけど……？」

【妖艶女】「……男主人、この子はどこの箱入り娘だい？ 自分が庶民と違つて自覚がないだろ？」

【男主人】「生糸の王国貴族の家柄でね。本来なら僕の部下に納まつてゐるような子じやないんだけど」

【副官女】「男主人様、家は関係ありません！ 私は自分の意志で男主人……じゃなくて、第十一師団への配属を希望したんです！ そりやあ、配属の際にちょっとお父様にお願いしましたけど……（も

じもじ」

【妖艶女】「いいとこの嬢ちゃんってのは、間違つてないんだね」

【副官女】「……さつきから、黙つて聞いていれば、そういう貴女はどちら様ですか？」

【妖艶女】「おや、アタイは妖艶女っていうんだ。男主人は、うちの娼館のお得意さまですね」

【副官女】「娼館……ということは、男主人様と………？」

【男主人】「誤解されてるかもしれないから言つておくけど、僕は客として行つているわけじゃないからね」

【副官女】「失礼しました。男主人様の言葉を信じます」

【妖艶女】「はんつ、あんたも娼婦を見下すような人種なのかい」

【副官女】「貴女がどこで何をしようとして、別に……そういう職業が必要である」とは習つていますし」

【妖艶女】「その口調が見下してるとんだよ」

【副官女】「見下しているつもりも、見下しているとも言つていませんが？　“私が貴女を見下している”と感じている貴女こそ、自分自身のことを見下しているんぢやありません？」

【妖艶女】「ほー、結構言つねえ、お嬢ちゃん。ふふふ、気に入つたよ」

【副官女】「あら嬉しいです。うふふ、私も貴女とは上手く付き合えそうです」

## 第44話『男主人は、気が休まらないでいた』

草原と平穏の国・男主人邸

ＳＥ（食事の音）・カチヤカチヤ…………

【猫//】「ねえ、長//ちゃん、どうちがホンサイで、どうちがオメカケさん?」

【長//】「あらあら……」

【男主人】「ぶはつ……げほげほつ」

【副官女】「ななななつ！？」

【妖艶女】「ふつ……ふふつ、ねえ男主人様、アタイがホンサイでお嬢ちゃんがオメカケさんでどうだい？」

【男主人】「いいつ！？」

【妖艶女】「そうかい、”イイ”かい」

【副官女】「冗談じゃありません！ ど、どうしても、つていうなら私がホンサイなのが筋でしうう！？」

【妖艶女】「おやおや、アタイは男主人様に質問しているんだよ？ そもそも何が筋なんだか」

【副官女】「少なくとも貴女がホンサイって言つのは許せません！」

【長//】「猫//ちゃん、お一方ともホンサイではありません。あえて言つならアインジンさんつてところですね」

【猫//】「なるほど！ ジャあ、あたしたちと一緒だね！…」

【長//】「そうなりますね」

【副官女】「えええええつ！…」

【妖艶女】「おやおや……どおりでアタイがいくら誘つても効かないわけだ」

【男主人】「いや、訳知り顔で納得しないで欲しいんだけど……」

【副官女】「男主人様っ！！ やつぱり「うふ～ん、ご主人様、まだ許しませんわ」ですか！？ 違いますよね！ 違うと言つてください！！」

【男主人】「副官女、落ち着けっ！！ 何がどう違つがが分からない！」

【長】「猫ちゃん、ご主人様は大好き？」

【猫】「うん、大好き！ だつて、あたしのこと痛くしたりしないし、優しくしてくれるから！」

【副官女】「痛くしないで…… や、優しくつー？」

【男主人】「あああっ！！ 長も人に誤解されるような話題をつ！！」

【長】「ご主人様は猫ちゃんがお嫌いなのですか？」

【猫】「えつ…… ご主人さま、あたしのこと嫌いなの？（泣きそう）」

【男主人】「いや好きだよ！ うん、猫ちゃんと屋敷の仕事をしてくれるイイ子だからね！」

【長】「『ご主人様、私のこと嫌いなの？』（嘆泣）」

【男主人】「とりあえず、今限定で大つ嫌いだ！！」

## 第45話『男主人は、報告を受けている』

草原と平穏の国・男主人邸

【妖艶女】「あつはつは、まったく面白いもんを見せてもらつたよ」  
【男主人】「別に見せもんじゃないんだけどね……はあ」  
【妖艶女】「“お喋り”の報告だけに来たつもりだったんだけどね。ご馳走さん」

【男主人】「いえいえ、お粗末さま」

【妖艶女】「とりあえず、西は傭兵の募集について目処がついたみたいだね。早ければ15日後、遅くとも20日後には進軍を始めそうだよ」

【男主人】「開戦は回避できない……か」

【妖艶女】「王子様は最近とんとん無沙汰みたいだけさ?」

【男主人】「王宮の議会では『戦争が起こるはずがない』と頑なに主張する方が何人かいてね」

【妖艶女】「……7年前の過ちをまた繰り返す気か。そんな主張をするヤツが本当にいるのかい?」

【男主人】「コレが嘘や冗談だつたら、どれだけ良かつたか」

【妖艶女】「どうするんだい?」

【男主人】「さてね。僕は王子様直属の師団長だからこそ、独断で動くことはできない立場だからね」

【妖艶女】「王子様の声が掛かつたら動けるように準備万端で待機つてか?」

【男主人】「いや、王子様一人の独断でも動かせないのが軍隊つてヤツなんだよ」

【妖艶女】「はつ、面倒なことだ……ケンカは最初の一発が肝心だろ?」

【男主角】  
「ふつ  
…………  
分かりやすくていいね」

【妖艶女】「この世で分かりにくいのは、酒飲みの説教と男女の恋

【男主人】「……ところで、なんでにじり寄つて来るのかな？」

【妖艶女】……ふふふ、分かりやすく態度で示してるので、

【男主人】「嘘つけっ！－！ 飲み勝負を挑んできた騎士を3人連続

で潰したって話を知ってるからなー！」

【妖艶女】あらま、古い話を持ち出して、酔っ

の窮屈變せいやう……万々一は恥をかかせんよ」

千イエン?  
一万イエン?  
』

5

## 第46話『副官女は、落ち着かないでいた』

草原と平穏の国・男主人邸

【猫ミミ】「ねえねえ、副官女さん、少し落ち着いたら？」

【副官女】「……男主人様とあの妖艶女さんが一人つきりで……落ち着けるわけが」

【猫ミミ】「大丈夫だよー、長ミミさんが大丈夫って言つてたんだから」

【副官女】「それのどこが大丈夫の根拠なんですか！」

【猫ミミ】「んー、副官女さんもご主人さまが大好きなんだねー！」

【副官女】「あわつ！？ な、なにを、仰いますか！？」

【猫ミミ】「副官女さんどご主人さまって、いつからの知り合いなの？」

【副官女】「そ、そうですね……私が生意氣な貴族の娘だった頃、夜会でお会いして……」

【副官女】「この無礼者っ！！ 名を名乗りなさい！」

【男主人】『いやあ、東公爵の娘様に名乗るほどの名前はないな』

【副官女】『私の父を知つていて、その態度を取るとは、よほどの

覚悟があるのでしきうね！』

【男主人】『皮肉も通じないか……君は東公爵の娘じやない自分を考えたことがあるか？』

【副官女】『は？』

【男主人】『若い貴族の子息から持て囃され、美辞麗句と共に謠われる君が、本当の君か？』

【副官女】『何を仰りたいの？』

【男主人】『彼らは君なんか見ていないぞ？ 名前も必要ない“東

公爵の娘”を見てるんだ』

【副官女】『…………』

【男主人】『なんてな、僕も似たようなものだけど……名前を知られてない』ことがこんなに嬉しいとはね。おっと、王子様も一段楽したみたいだな。それでは良い夢を、可愛らしいお嬢さん』

【副官女】「……と、それから色々あつて、男主人様の名前と立場を知つてね」

【猫ミミ】「本当に」主人さまとの話？ なんか……ちょっと違つ感じがする」

【副官女】「もう4年前の話です。それに猫ミミちゃんは、きっと最初から身内だつたから」

【猫ミミ】「？？？」

【副官女】「ふふふ、今度一緒にお茶しましょ~、その時にゆつくり聞かせてあげるわ」

## 第47話『妖艶女と、乾杯していた』

草原と平穏の国・男主人邸

【長//ミ】「『』主人様から言付けを伺いました。私をお呼びでしょ  
うか？」

【妖艶女】「ああ、呼び立てて悪かつたな。とりあえず一杯付き合  
つてくれないかい」

【長//ミ】「……では、一杯だけ」

【妖艶女】「何について乾杯しようかねえ」

【長//ミ】「ご主人様の女難祓いを願つて、ではいかがでしょう？」

【妖艶女】「ふつ、それじゃあ、アタイたちの出会いと男主人の鈍  
感さに乾杯（グイッ）」

【長//ミ】「乾杯（コクコク）」

【妖艶女】「ふはー、お、あんたも行ける口だね。もう一杯……」

【長//ミ】「ありがとうございます。それで、本題は何でしょうか  
？」

【妖艶女】「そう急かすなよ。あんたに確認したいことがあってね  
……『棘の氏族』って知ってるかい？」

【長//ミ】「……『森林と調和の国』における有力六氏族の1つで  
すね。集落が国の南、隣国との境に位置するため、国では最も好戦  
的な氏族と記憶しております」

【妖艶女】「ほお、眉一つ動かさないとは見事なもんだ」

【長//ミ】「質問はそれだけでしょうか？」

【妖艶女】「おいおい、アタイがカマを掛けてるんだから、少しく  
らいは反応してくれよ」

【長//ミ】「はて？ カマを掛けられるような覚えはありませんの  
で」

【妖艶女】「主人が主人なら、使用人も使用人だ……ふてぶてしいつたらない」

【長ミミ】「お褒めいただき有難うございます」

【妖艶女】「誰も褒めてないって……その様子じゃ、喋るつもりはないんだろうね」

【長ミミ】「私が“棘の氏族”に所属している、と言つことですか？」

【妖艶女】「つて、喋るのかい！」

【長ミミ】「妖艶女様が聞きたそうでしたので、特別に隠しているつもりはありませんし」

【妖艶女】「この時期に、わざわざ王都まで……あんたほどの力がある魔術師が来たのは偶然か？」

【長ミミ】「さて、これから起ることとは全て偶然で、起つたことが必然ではありませんか？」

【妖艶女】「やれやれ……確かにこれじゃあ、男主人様の手に余るわけだ」

【長ミミ】「あえて言うとしたら、私はご主人様を裏切ることだけはありません」

【妖艶女】「ふんつ、嘘つきは“自分が嘘つきだ”っては言えないんだよな」

第48話『副官女は、良い様に弄ばれていた』

草原と平穏の国・男主人邸

- 【長//ミ】「……」
- 【副官女】「……」
- 【長//ミ】「副官女様、何か私に訊きたいことがあるのではないですか？」
- 【副官女】「え、ええ、そうね……」
- 【長//ミ】「例えば、私どこの主人様との関係、とか？」
- 【副官女】「！？」
- 【長//ミ】「分かりやすい反応は、女性としては可愛らしさのですが、軍人としては如何なものでしょう」
- 【副官女】「ばつ」
- 【長//ミ】「馬鹿にしてはおりませんし、副官女様の名誉を傷つけらつもりはありません」
- 【副官女】「う」
- 【長//ミ】「誤魔化そうといつ意図ではありません。副官女様とは良い関係を気付きたいと思います」
- 【副官女】「あ」
- 【長//ミ】「愛しています、と言われましても、ちょっと困りますが……」
- 【副官女】「……そんなこと言つはずないでしょ……」
- 【長//ミ】「はい、気持ちをほぐすための冗談です」
- 【副官女】「なんかすご~い疲れたんだけど」
- 【長//ミ】「それで、私どこの主人様の関係なのですが、擬音で表現するならば“ぬちゅぬちゅ”とか？」
- 【副官女】「ぬ、ぬちゅぬちゅ……？」

【長】「そりゃ、ひょくひょくの“ぐつぐつ”みたいに？」

「な？」

【副官女】「う、ううう……」

【長】「いけません、副官女様！ 戦いは諦めたら終わりですよ。」

【副官女】「え、え……」

【長】「私どこの主人様が直接言葉にしこくよつた関係だと仮定して、それが何だと言うのです？」

【副官女】「でも……」

【長】「副官女様のこの主人様に対する気持ちは、その程度のものなのですか？ 違いますよね？」

【副官女】「もちろんよー。そうよね、簡単に諦めちゃダメよねー。」

【長】「その意気です。頑張って男主人様を追い詰めてくださいませ」

## 第49話『王子様に、からかわれていた』

草原と平穏の国・王宮（王子執務室）

【王子様】「さくやは おたのしみ でしたね」

【男主人】「腹心の部下の家に諜報部員を差し向けるのは止めていただけませんか!? 他国の諜報部員と気配が混じって、ものすごく困るんですが!!」

【王子様】「貴方の事は、何でも知りたくって、あ、言っちゃった!  
！ きやはつ」

【男主人】「わーい、一回殺したーい」

【王子様】「王族に対する反逆罪は極刑だから氣をつけろよ。そんなつまらん事で腹心の部下を失いたくない」

【男主人】「ええ、ご心配なく。殺害現場には魔力<sup>じょりょく</sup>反応のシール<sup>シール</sup>残したりしません」

【王子様】「いやあ、ボクは優秀な部下を持って幸せだな」

【男主人】「私も心優しい上司を持って、嬉しく泣きしそうですよ」

【王子様】「でだ、誰を嫁さんにする気なんだ? きちんと責任は取れよ」

【男主人】「……あれ? なんか、その質問って2度目ですか?」

【王子様】「いや、初めてだろ? まあ、冗談だけどや」

【男主人】「そろそろ仕事に戻りたいのですが……」

【王子様】「待て待て、わざわざ呼びだしたのに雑談だけして帰るな」

【男主人】「雑談、雑談ねえ……それで本題は?」

【王子様】「悪領主が行方をくらませた」

【男主人】「誰ですか、それ?」

【王子様】「おい!」

【男主人】「いえ、ただの冗談です」

【王子様】「嫌味なヤツだな」

【男主人】「きっと上司に似たんでしょうね。というか、王都の監獄に収容されていたのでは？ 詳しい話を聞かせてもらえないかな？」

【王子様】「議会に王弟派から悪領主の赦免願いが出され、極刑は無し。北の監獄送りとなるはずだつた」

【男主人】「はずだつた、ですか」

【王子様】「ああ、護送の馬車が王都を出る直前に賊に襲われてな……まさか、王都で襲つてくると考えておらず、護衛の気も緩んでいたらしい。嘆かわしいが、単純に責めるわけにはいかないな」

【男主人】「それで？」

【王子様】「衛視が駆けつけた時、悪領主の死体は見つからなかつた。賊に連れ去られたか、どさくさに紛れて逃亡したか。悪領主はアレで武門の出だからな。7年前の『焦森戦争』でも、それなりの武功を上げている」

【男主人】「どっちにしろ面倒なことにならなければいいのですが」

【王子様】「とりあえず、覚えておいてくれ」

## 第50話『男主人は、溜まっていた』

草原と平穏の国・男主人邸

【男主人】「長//ミ――――――！」

【長//ミ】「お帰りなさいませ、ご主人様。」帰宅早々、溜まつて  
いらっしゃるのですか？」

【男主人】「ああ、ストレスで堪忍袋が表面張力ぎりぎりの満杯つ  
て感じかな！？」

【長//ミ】「ストレス発散のために私を……」

【男主人】「……」

【長//ミ】「……」

【男主人】「で？」

【長//ミ】「いえ、結構、本気でお疲れていらっしゃるようなので  
少々自粛を」

【男主人】「いつもそうしてくれると助かるんだけど」

【長//ミ】「無理です。これは、気になる女の子にイジワルしちゃ  
う男の子みたいなものなので」

【男主人】「それだと、僕が気になる女の子、長//ミがイジワル  
しちゃう男の子？ 普通逆じやない！？」

【長//ミ】「ご主人様が私にイジワルされるのですか？ えっと、  
その、心の準備が……もじもじ（棒読み」

【男主人】「自粛はっ！」

【長//ミ】「短い任期でした」

【男主人】「あああっ、すごく久しぶりに弄ばれてるよね、僕っ！」

？」

【長//ミ】「それで、本日は何かあつたのでしょうか？」

【男主人】「そうだ！ 副官女に何を吹き込んだっ！？ いや、大

体分かつてゐるけど！？」

【長ミミ】「私どご主人様との男と女の関係を仄めかす冗談を少々」

【男主人】「やつぱりい！？ おかげで、仕事中はすつゞく微妙な雰囲気で、今日なんてつ！」

【長ミミ】「誘惑に負けて、押し倒しそうにでもなりましたか？ エッチなのはいけません」

【男主人】「むしろ逆だよ！ なんであんなに積極的なのかな！」

【長ミミ】「……いい加減、ご主人様は副官女様の好意を認めてはいかがでしよう？ ご主人様は、自分自身で考えるよりも、ずっと魅力的で、価値の有る男性であることを理解してください」

【男主人】「それは……」

【長ミミ】「ご主人様、メイドの長ミミとして言わせていただきます。副官女様は……お嫌いですか？」

【男主人】「…………悪い、夕食はいらない。」そのまま寝る

【長ミミ】「かしこまりました」

～幕間～『主従1』

鉱山と武勇の国・皇宮（鉄皇女執務室）

【鉄皇女】「愚かな戦争が始まるわね」

【黒騎士】「ええ、仰るとおり」

【鉄皇女】「結局の所、愚かな兄たちによる愚かな兄弟喧嘩じゃない」

【黒騎士】「この国は……闘争の連続によって統一された歴史があります」

【鉄皇女】「今更、建国史を学び直す気はないわよ。25年前にお父様が初代皇帝になりましたで終わる話」

【黒騎士】「結局、この国は、侵略と制圧によって成長してきた……と言つ」」とです

【鉄皇女】「7年前の戦争は、初めての国外への侵略戦争とはいえ、勝てる戦争だつた」

【黒騎士】「ええ、たつた1人の魔術師に戦況を覆されるまでは」

【鉄皇女】「ワタクシは、惨敗兵を見て氣付いたわ。この国は根本的に破滅に向かっている、と」

【黒騎士】「鉄皇女様……」

【鉄皇女】「ワタクシは、この戦争は良い機会だと思つていいわ。付いて来てくれるわね」

【黒騎士】「貴女様の御心にまことに」

【鉄皇女】「ところで……訊いてもいいかしら」

【黒騎士】「はい？」

【鉄皇女】「何時になつたら、ワタクシはアナタの物になるのかしら？」

【黒騎士】「俺は鉄皇女様に終生の忠誠を誓つておりますが」

【鉄皇女】「アナタがワタクシの物じゃなくて、逆よ……なんで襲い掛かつてくれないの？」

【黒騎士】「お戯れを、鉄皇女様と俺では年の差があります。それに俺は、鉄皇女様が乳飲み子である頃から知っているんですよ。良くて妹としてしか見れません」

【鉄皇女】「8つなんて問題ないじゃない。お父様の新しい側室は、私よりも2つも年下らしいわよ」

【黒騎士】「皇帝様には、その血筋を残す使命がありますから」

【鉄皇女】「そうね。ワタクシの血を残すために、アナタの血が欲しいって言つてるのよ」

【黒騎士】「…………」

【鉄皇女】「アナタの初恋は、ワタクシのお母様だつて、ほんと？ なら、ワタクシがアナタの好みから外れていつてわけじゃないでしょ？」

【黒騎士】「つ！？ あまり、メイドたちの噂話を信じさせようと/or/」

【鉄皇女】「あら、時として女の噂話もバカにならなくてよ」

## ～幕間～『主従1』（後書き）

いきなりの登場ですが、「草原と平穏の国」以外の視点を書くために必要なキャラクターです。

後々に「草原と平穏の国」サイドのキャラクターと出会う予定。

鉄皇女

【種族】：人間族 【年齢】：16歳 【性別】：女性

【一人称】：ワタクシ

【設定】：

- ・「鉱山と武勇の国」の第一皇女。兄が一人いる。
- ・黒騎士を慕つているらしい。

黒騎士

【種族】：人間族 【年齢】：24歳 【性別】：男性

【一人称】：俺

【設定】：

- ・鉄皇女を補佐する立場にいる。

## 第51話『猫ミミがりゅさんは、知らないでいた』

草原と平穏の国・男主人邸

【猫ミミ】「おはよ〜」でこますーー。『主人さまーー。』  
【男主人】「……ん、あ、もうちょっと寝かせて……」  
【猫ミミ】「えっと、『あんまりダダをこねると寝込みをいただいちやこまか』よーー。」  
【男主人】「頂くなつーー。お願い、長ミミで言われた台詞をそのまま言つんじやありません……」  
【猫ミミ】「お寝坊さんな」主人さまがいけないんだよ？  
【男主人】「くつ……そんな純粹な目で見ないで、僕の負けだからつーー。」  
【猫ミミ】「あたしの勝ちー。でも、ダダをこねると、なんでシチユーを食べるのかな？」  
【男主人】「うん、まあ、煮込みじゃなくて寝込みね。詳しい意味は長ミミに教えてもらつて」  
【猫ミミ】「ご主人さまは教えてくれないの？」  
【男主人】「長ミミのほうが色々と教えやすいと思つから……着替えは、それ？」  
【猫ミミ】「うん。とにかく主人さま、その、長ミミをとケンカしたの？」  
【男主人】「なんでそつ思つた？」  
【猫ミミ】「んつと、長ミミさんがね。『主人さまのこと』と呼ぶ時に少し変だつた」  
【男主人】「喧嘩つていつか、うーん、なんだろ？」  
【猫ミミ】「? ? ?」  
【男主人】「猫ミミは、僕のこと好きつて言つてくれるけど、僕と

結婚したい？」

【猫ミミ】「結婚……うーん、『主人さまとな、結婚してもいいよ？ アイジンだし！…』

【男主人】「あー、アイジンの正しい意味も今度、長ミミに教えてもらおうね……」

【猫ミミ】「う、うん？」

【男主人】「僕はね。“誰かと結婚したい”って思えないんだ。いや、小さい頃は違ったはずだから、思えなくなつた、かな？ 今僕は誰かと一緒になるのが怖い」

【猫ミミ】「なんで？ 『主人様はあたしたちと一緒にいるよ？ それに……あたしに、この家に居る時は安心していって言って、くれた……よ？』（うる）」

【男主人】「あー、『めん、ちょっと言い方が悪かった！ その、泣かないでっ！』（ぎゅ）」

【猫ミミ】「うくつ……（ぎゅ～～）」

【男主人】「結婚するつてことはさ、その、家族を……子供を作るつてことなんだ。それでね、ぼくは、その事から逃げ出したいんだ。だから、ちょっと長ミミに怒られちゃってね」

【猫ミミ】「長ミミさんに怒られたの？」

【男主人】「多分ね」

【猫ミミ】「だったら、『主人さま……『めんなさい、しないとダメだよ？』』

【男主人】「ふつ……そうだね、怒られたら、『めんなさいしないと、だね』

## 第52話『男主人は、反省していた』

草原と平穏の国・男主人邸

【長//ミ】「おはよう」わいります、『ご主人様』

【男主人】「おはよう」

【長//ミ】「最近はお疲れのようでしたので、本日の朝食は軽めのスープにいたしました」

【男主人】「昨晩は……」

【長//ミ】「昨晩は……」

【男主人】「え、あ、どうぞ、そっちから……」

【長//ミ】「いえ、ぜひとも『ご主人様から』……」

【男主人】「それじゃあ、僕からでいい?」

【長//ミ】「はい」

【男主人】「まず、昨晩は感情的になつて『ごめん。猫//ミ』にもさつき言つたんだけど、僕は自分の血を残すのが怖いんだ。だから、女性の、そういう好意を素直に受け止めきれない」

【長//ミ】「申し訳ありません。そのことについては……」

【男主人】「事前に聞いてた、かな? さつき、少し冷静になつて考えたら気付いてね」

【長//ミ】「…………」

【男主人】「長//ミが悪いわけじゃないんだ。全ては僕の問題。それに今は、仕事で少し厄介な問題を抱えてて、恋とか愛とか言つている余裕もなくてね」

【長//ミ】「美女様と白髪女様から、聞きました」

【男主人】「んつ? 妹と師匠から?」

【長//ミ】「ご主人様の事情などについて、美女様と白髪女様から色々と聞きました」

【男主人】「色々、か。変なことまで聞いてなければいいけどなあ  
(苦笑)

【長ミミ】「白髪女様からは、『戦争』が起ころるかもしれない、と  
も」

【男主人】「師匠……そんな軍事機密、ギリギリのことをあつさりと  
……」

【長ミミ】「『あの馬鹿弟子は、自分が何時死んでもいいと考えて  
るねえ。だからさ、アタシは願つてることがあるんだよ。いつか、  
アイツが生きたいと思う何かがあればねえ』とも」

【男主人】「師匠が?」

【長ミミ】「恋人ができれば、生きていたいと思つ原動力になるか  
など……」

【男主人】「それで、僕と副官女をくつつけようとした?」

【長ミミ】「浅はかな考えでした」

【男主人】「その……、長ミミは僕のことが男として嫌いなのかな  
? 普通、自分が、つてならない?」

【長ミミ】「ご主人様、その話は……ござれゆづくじとお話します。  
お仕事に遅れますよ?」

## 第53話『男主人は、自分を恐れていた』

草原と平穏の国・王宮（執務室）

- 【男主人】「おはよう」
- 【副官女】「…………おはよう…………」ざいます（視線逸らし）
- 【男主人】「…………うん、副官女、ちょっと話をしようか」
- 【副官女】「あ、あの、申し訳ありません。昨日はちょっと、やりすぎたといいますか？！」
- 【男主人】「そのことで謝りうと思つてね」
- 【副官女】「えっと、それはつまり……断れたという事です、よね？」
- 【男主人】「んー、結果としては断ることになるかも知れない、けど。あのさ、少し話をしようか？」
- 【副官女】「は、はい」
- 【男主人】「僕が“救森の魔術師”と呼ばれる原因となつた『焦森戦争』について、簡単に言える？」
- 【副官女】「発端は7年前『鉱山と武勇の国』による『森林と調和の国』へ侵略目的の進軍、我が国から当時の第五師団が『森林と調和の国』への援軍として派遣されました。
- その時の第五師団の師団長が王子様で、男主人様は小隊長の一人たつた」
- 【男主人】「それの結果は？」
- 【副官女】「第五師団が用いた大規模な火計により、『鉱山と武勇の国』の軍が壊滅的な損害を受けて撤退。その火計の発案者が男主人様だった……えと、どこか間違えてましたか？」
- 【男主人】「いや、一般的にはそれで正解。けど、そこに一部の人しか知らない事実があつてね」

【副官女】「じじつ？」

【男主人】「僕は発案者というだけでなく、火計の実行者であつたこと……それも1人だけのこと……」

【副官女】「えつ……？」

【男主人】「詳しい説明は端折るけど、僕が敵軍に潜り込み、敵の指揮官の一部を暗殺し、命令系統を乱す。その後、僕の魔術により、敵の駐屯地の三方から火を起こして……森一つを焼き尽くした」

【副官女】「！！？」

【男主人】「戦時中に僕が直接手に掛けた人数は20人もいってないと思う。けど、その時の火計による死者は1万88人と公表されている。もちろん、それ以上の負傷者がいただろうね。副官女は、僕が怖い？」

【副官女】「…………怖く、ないです」

【男主人】「僕は怖かつたよ。大量に人を殺せてしまう、自分の力が……実際、人からバケモノと呼ばれたことも少なくない。

敵軍が僕のことを“不死の魔人”と呼ぶのも理解はできる。殺そうと思つても殺せない、それどころか一方的に殺される側にとつては、まさに不死身のバケモノという呼称はぴったりだ」

【副官女】「私は、男主人様が怖くもないし、バケモノでもあります！」

【男主人】「…………」

【副官女】「人が人である以上、人を殺すのはいけないと思います。けど、人が人を殺すのを許容してしまう戦争は、実際にあつて……、だから……、すみません、上手く言葉にできなくて、でも絶対何かが違うんです」

## 第54話『男主人は、人を嫌いになれないでいた』

草原と平穏の国・王宮（執務室）

【男主人】「副官女は随分と優しくなったよね……いや、僕も丸くなつたから、お互い様かな？」

【副官女】「む、昔のことは言わないで下さい！」

【男主人】「僕の両親は共に魔術師だつたけど、決して優秀と言えるほどの力があつたわけじゃない。僕が持つ膨大な魔力は、血統からすれば突然変異みたいなものでね」

【副官女】「その……男主人様のお父様はお母様を疑つたりはしなかつたのですか？」

【男主人】「むしろ両親は、子供の僕が恥ずかしくなるくらい愛し合つてた。父は、僕の異常さを気付いてすぐに封印を施し、王宮に僕の力を隠したんだ。今だからこそ、父の正しさが分かるし、その判断に尊敬すらしてる」

【副官女】「素敵なご両親だつたんですね……」

【男主人】「東公爵夫妻も素敵な方々だと思うけど」

【副官女】「まあ、自慢の両親とは言いにくいですが、……優しい両親ではあります」

【男主人】「僕のこの力が、子どもに継がれるかどうかは分からない。けど、僅かでもその確率があるなら、子供なんかは欲しくない。むしろ、子供が作ることが想像できない。僕は一人で生きて死のうと思つてた」

【副官女】「…………」

【男主人】「僕はあの戦争で、一度“心”を失くしたんだ。いや、失くしたんだと思い込んでいただけだったかな」

【副官女】「…………」

【男主人】「ダメだよねえ。僕は、人が嫌いじゃないんだ。長三三  
や猫三三が来て、家に一人じゃなくなつて、余計に感じちゃつてさ」

【副官女】「私じゃ、ダメだつたんですか？」

【男主人】「ううん、副官女や部下男、妹や師匠、一応、王子様が  
いてくれたから、僕は人を嫌いになりきれなかつたんだと思う。そ  
の僕の歪みを長三三に指摘されちゃつてね」

【副官女】「長三三さんですか……」

【男主人】「容赦ないよ。人が必死に目を背けていた事実をいきな  
り突きつけるんだ」

【副官女】「なんて言われたんですか？」

【男主人】「『副官女様は……お嫌いですか？』だつてさ、咄嗟に  
言い返せなかつた」

【副官女】「私の……」とを？」

【男主人】「嫌いじやないよ。好きか嫌いかのどつちかなら、多分  
好き。けど、それが男女の愛かと問われれば、分からん……単純  
に自分が親になる自信がないだけなのかな」

【副官女】「分かりました。じゃあ……」

【男主人】「ただね、あんまり挑発されると……僕も我慢が効かな  
くなるというか、そういう欲がなくなつたわけじやないから……魔  
術で純粋に行行為だけをすることができるから、『氣をつけてね？』（に  
つこり）」

【副官女】「き、氣を付けますっ！（真っ赤」

## 第55話『猫ちゃんが、孤児院に通っていた』

# 草原と平穏の国：孤兒院

【猫三三】「こんにちわー」

おめでたすかー

【教院長】 一九三九年  
いにへんに進むじやない、ホヤツは洪井

からね

【子供達】「わかった!」「クッキーかな?」「オレ、あのフワフ  
ワシナーキがーーな

【猫\\\\\\\\】「と、『』めん、あたしはちょっと老院長さんとお話があ

るから、  
後でね！

卷之三

【年長娘】「どうぞ、お茶です」

【猫】 あらかと  
年長娘はしお嫁さんになるね!」

（四）對外貿易政策：對外貿易政策的制定，應當考慮到我國的經濟發展水平、國際貿易環境、我國的資源條件、我國的技術水平、我國的社會主義制度等因素。

【老院長】 一 やうこい難ひじき!!! おまんせ、 いこお嫁よめせんにならひ悪あくい

かの

【猫】「えー、そうかな？ そうだと嬉しいかな？」

【老院長】「猿三三ちゃんには感謝しますよ」と子供達が嬉しそうじゃ」「猿三三ちゃんが来る

【猫ミミ】「ううん、あたしこそ老院長さんには感謝してるよ。本当に優しく、あたしが育つた孤児院の院長さんに感謝するべきなんだけど……あそこにはもう戻れないから」

【老院長】「“情けは人の為ならず”といつて言葉知ってるかの？」

【猫ミミ】「え？……人に優しくしちゃいけないってこと？」

【老院長】「うんにゃ、どちらかと言えば逆じやな。人に優しくすれば、優しくされた人は別の人にも優しくすることができる。そうやつしていくと、全員が優しくなれて、自分も優しくされる……と僕は解釈しとる」

【猫ミミ】「とっても素敵なことだね」

【老院長】「猫ミミちゃんが優しいから、周りのみんなも猫ミミちゃんに優しくなるといつことじやな。それで猫ミミちゃんの話と言るのは、やはり昨日の人のことかの？」

【猫ミミ】「うん、どうなつた？」

【老院長】「明け方に一度目を覚ましたが、すぐに気を失つての。

じゃが、命の心配はなさそうじや

【猫ミミ】「そっか、良かつた

## 第55話『猫//ちやんが、孤児院に通つていた』（後書き）

孤児院には3歳から12歳くらいまで、20人くらいの子供がいる設定です。

主要なキャラクターは次の通り。

老院長

【種族】：人間族 【年齢】：62歳 【性別】：男性

【一人称】：儂

【設定】：

- ・「草原と平穏の国」の王都の下町にある孤児院の院長。
- ・孤児院の運営自体は比較的マシな方だが、決して余裕があるわけではない。

年長娘

【種族】：人間族 【年齢】：12歳 【性別】：女性

【一人称】：わたし

【設定】：

- ・現在、孤児院で世話になつてている子供の中で一番の年長者。
- ・普段から老院長の手伝いをしたり、年下の子供達の面倒を見ているしつかりモノ。

## 第56話『一人で、猫ミミがやんの話をしていた』

草原と平穏の国・男主人邸

【男主人】「あれ？ 猫ミミは？」

【長ミミ】「猫ミミちゃんでしたら、本日は休日です。しつかりと自分の分の仕事も覚えてくれましたし、元々、この家の家事は私人でも十分でしたから、今は数日」とに休日を取らせていました

【男主人】「ん、その辺りは長ミミに任せてるからね。猫ミミはどこかに出かけてたの？」

【長ミミ】「最初の頃は街の観光をしていたみたいですが、最近は通える場所ができたみたいですね」

【男主人】「いいことだね」

【長ミミ】「ええ、今日も手作りのクッキーを持って、嬉しそうに出てかけました」

【男主人】「…………え？」

【長ミミ】「いかがなされましたか、ご主人様？」

【男主人】「それって、もしかして、デート……とか？ あ、相手は、どこのどいつだつ！？」

【長ミミ】「ご主人様落ち着いてください。年頃の娘を持つ父親みたいなことを言っています」

【男主人】「いや、だつて、嬉しそうに手作りのクッキーを持って、だなんて……」

【長ミミ】「手作りのクッキーが恋人の証なら、私ども主人様は新婚夫婦になってしまいます」

【男主人】「いや、それは……」

【長ミミ】「『ご飯にする？ お風呂にする？ それとも、わ・た・しへ』とか、言われたいのですか？」

【男主人】「うう……」

【長ミミ】「言いませんけど」

【男主人】「なら、訊くなーーー！」

【長ミミ】「猫ミミちゃんの行き先は下町の孤児院です。どうも、以前に世話をなつていた孤児院を思い出すそうで、最近はオヤツの差し入れなどをしているようです。クッキーの材料費も自分の給金から出していました」

【男主人】「知つてるなら、最初からそう教えてくれればいいのに……」

【長ミミ】「とこりでご主人様、私からもご主人様にお訊きしたいことがあります」

【男主人】「なに？」

【長ミミ】「猫ミミちゃんから“寝込みのいただき方”を教えて欲しいと言わたのですが？」

【男主人】「…………」

【長ミミ】「ご主人様が、私から教わるようになされたようですが？」

【男主人】「…………」

【長ミミ】「ご主人様、私も“子供の作り方”なんかを実践を交えず、具体的に口頭でご主人様から教えていただきたいな、とか思いますが？」

【男主人】「…………何の嫌がらせだーーーーー！」

【長ミミ】「愛の嫌がらせです」

# 草原と平穏の国：孤兒院

【赤髪男】「うう……………」は？」

【猫】 「あ、起きた？ 水飲む？」

【赤露男】「はい、どうぞ」  
【猫三】「んん……ああ、もはえるたぬか？」

【猪】 〔ハ〕 〔ハ〕 〔ハ〕 〔ハ〕 〔ハ〕 〔ハ〕

【猫】 「大丈夫つ？」一氣に飲むからだよ（肾中を）

【赤髪男】「ありがとう、うん、大丈夫だ……ところで、ここは何

「处でキミは誰だろ？ うか？」

【猫】 「リリヤ町の孤児院で、あたしは猫だよ。おじや

んは？

【赤髭男】「ワタシは、あ……赤髭男と言つ。そうだ、氣を失う前

にギミを見た覚えがある……命を救つてもらったようだな。礼を言

「おちのせう」  
「おおこね」  
「おおこね」

【猪三】　　眼前にたのは　おたしたけいなく　老院長さんと猪  
院の子供達もだよ。みんなで到れてたあなたを運んだの

「赤髭男」「いや、それで先せみが人を呼んでくれたのだろう?」

だから、キミがワタシの命を救つてくれたのは、間違いない事実

だ

【猫//】「どういたしまして、かな」

【赤髭男】「何か礼をしたいと思うが……今は、何も持つてなくて

な

【猫】「一別で何もいらぬ」

【赤髪男】「しかし……」

【赤髭男】「しかし……」

赤髭男さんが助かればいいんだよ」

【赤髭男】「それは、ワガママじゃないだろ？」

【猫//】「自分が助けたいから助けた、だから、ワガママなんだ  
つて。この間、あたしもある人に助けてもらつたの。その時にその  
人に言つてたんだ、カツ「良かつた？」

【赤髭男】「その人の真似だつて事はバラさなかつたら、キミが力  
ツ「良かつたかもな」

【猫//】「あ、そつか、そうだね！ あはははつ」

【赤髭男】「くつくつく……」

【猫//】「そうだ、お腹は空いてない？ 何かもらつてこようか  
？」

【赤髭男】「……いただいてもいいだろ？ 何も礼をできない  
が」

【猫//】「うん、待つてて！」

【赤髭男】（ワタシは……何をしているんだろうな）

【赤髭男】（いや、むしろ、これから……一体何をすればいいんだ  
ろ？）

## 第57話『猫ミミちゃんは、人を助けていた』（後書き）

キャラクターの紹介。赤髭男も、重要なキーパーソンになつてくれるかな。

### 赤髭男

【種族】：人間族 【年齢】：32歳 【性別】：男性

【一人称】：ワタシ

【設定】：

- ・ボサボサ髪の無精髭を生やした男。
- ・道で倒れていた所を、猫ミミに拾われ、孤児院に運ばれた。

第58話『猫////ひきゃさんは、聞かないでいた』

草原と平穏の国・孤児院

【猫////】「おまたせー。はー、エーフル」

【赤髭男】「ん、ありがと、（もぐ）むわ……」

【猫////】「（じこ）……」

【赤髭男】（食えない味じやないが……こや、こじの部屋の様子からすれば、こじの味も妥当か）

【猫////】「味……どうかな？」

【赤髭男】「う、ん……少し味が薄いかもしねないが、今のワタシにはむかひない。（もぐもぐ）」

【猫////】「つまり、美味しくないこじ」とへ。」

【赤髭男】「いや、美味いよ、ほら（がつがつ）……ひつ（胸をドンズン）」

【猫////】「わわわ、急いで食べるからーー。」

【赤髭男】「げほげほ、は、はあ……」

【猫////】「別に正直に言ひてよかつたのに、赤髭男をもつて、今はボサボサしてて浮浪者さんみたいだけじ、本当はお金持ちとか貴族さんじやない？」

【赤髭男】「なんでそう思つた？」

【猫////】「生まれた時から、美味しそうな物だけを食べて育つてきましたよ、みたいなことか？ 後、少し雰囲気が『主人さまと似てるともかな？』

【赤髭男】「戦場では、もつとひどい食事で過ごした」とだつてある」

【猫////】「……やつぱ、美味しくないと思つたんだ？」

【赤髭男】「こほん」ほん……、ん、こじは孤児院だ

と聞こしたが、キミは誰かに仕えているのか？」

【猫//】「うん、あたしはね。この街の生まれじゃなくて、色々あつてこの街に連れてこられた所を、『主人さまと長//さん』に助けてもらつたの。だから、いつもお屋敷の方でメイドさんをしてるから、孤児院にはお休みの日にしか来れないんだよ」

【赤髭男】「そうか……」

【猫//】「で、赤髭男さんは何者なの？」

【赤髭男】「死に掛けていたワタシを助けてくれたことは感謝している。しかし……」

【猫//】「やっぱ、今の質問はナシ……」

【赤髭男】「な、なし？」

【猫//】「うん、だって、あたしのワガママだもんね。赤髭男さんは、赤髭男さんでいいよ」

【赤髭男】「……なんで、それまでワタシのことを信じられる？」

【猫//】「ん~、倒れていた赤髭男さんがね。あたしに言つてたんだ」「

【赤髭男】「何を？ すまないが、記憶がおぼろげで……ワタシはキミに何と言つたんだ？」

【猫//】「“生きたい”って……」

【赤髭男】「生きたい……」

【猫//】「うん、“生きたい。このまま死ぬものか”って、そう

悲しそうに言つてたよ」

第59話『静かな日々は続いていた』

草原と平穏の国・男主人邸

【長//ミ】「…………（トポトポ」

【男主人】「ありがとう」（ズズツ」

【長//ミ】「…………（ペココ」

SE（扉の開閉音）・ガチャヤ、ギイ、バタン

【男主人】「…………（ズズツ」

【男主人】「…………（カキカキ……」

【男主人】「…………（ズズツ」

【男主人】「…………（カキカキ……」

【男主人】「…………（サクサク」

【男主人】「…………（ズズツ」

【男主人】「…………（カキカキカキカキ」

SE（扉を叩く音）・コンコンツ

SE（扉の開閉音）・ガチャヤ、ギイ、バタン

【猫//ミ】「失礼します。お茶のお代わりを持つてまいりました！」

【男主人】「ん…………お疲れさま（カップを前に」

【猫//ミ】「…………（トポトポ」

【男主人】「ありがとう」（ズズツ」

【猫//ミ】「…………（ペココ」

SE（扉の開閉音）・ガチャヤ、ギイ、バタン

【男主人】 「カキカキカキカキ」  
【男主人】 「んんんん」  
【男主人】 「カキカキカキカキカキ」  
【男主人】 「サクサクサクサク」  
【男主人】 「ズズツズズツズズツ」  
【男主人】 「ふう、こんなとこか」  
【男主人】 「書類をまとめてトントン」

## 第60話『戦争が、始まつていた』

草原と平穏の国・王宮（王子執務室）

【王子様】「（報告書を黙読し）……戦争が始まつたぞ」

【男主人】「……事前の情報より若干遅かつたですね」

【王子様】「軍の総大将は弟皇子らしい、7年前の総大将だった兄皇子とは異母弟で、母親同士が随分と仲が悪く、それをそのまま引き継いだような兄弟関係らしいな」

【男主人】「そうですか」

【王子様】「進軍の開始が遅れたのは、兄皇子側からの妨害工作が原因みたいだ」

【男主人】「どこも似たような物ですね……ウチとどっちがマシでしょ？」

【王子様】「“隣の芝生は青く見える”と言つが、他所（よそ）の“一国”に迷惑かけてない分、ウチのほうがマシじゃないか？」

【男主人】「もっとも、うちの方がマシと感じるのは、勝者としての余裕もありそうですが」

【王子様】「否定はしないぞ」

【男主人】「それで？ 戦争に関して、議会の決定は、どうなりましたか？」

【王子様】「ああ、やつと軍の派遣を決定したよ。北の第三、第四、西の第六の3軍だ」

【男主人】「それって……」

【王子様】「あからさまに王国軍の王弟派ばかり、とこより、直接叔父上の息が掛かっている団だな」

【男主人】「いよいよ進退きわまりですかね」

【王子様】「叔父上には、そろそろ早めの隠居と洒落込んで貰わな

いとな

【男主人】「まだまだ若いでしょう、確かに今年で42歳位ではありますんでしたか?」

【王子様】「ボクらより1世代違うじゃないか、そろそろ世代交代の時期だと思うのさ」

【男主人】「否定はしませんけど」

【王子様】「くっくっく……おぬしも悪よのお」

【男主人】「いえいえ、王子様ほどではないと返せばいいんでしたつけ?」

【王子様】「よし……」

【男主人】「はあ……それじゃあ、僕の方は引き続き、これと並つ時の根回しをしておきます」

【王子様】「ああ、頼りにしている」

【男主人】「もしもの時の……覚悟は決めましたので」

【王子様】「覚悟な……よく聞け。あの時のように1人では行くなよ、絶対にだ」

【男主人】「それは……」

【王子様】「何、ボクが一緒に行くとまでは言わない、が、お前1人に全てを背負わせるつもりもない」

鉱山と武勇の国・皇宮（鉄皇女執務室）

【黒騎士】「……以上が、弟皇子様の軍の報告になります」

【鉄皇女】「そう、出立こそ遅れたのに進軍自体は順調みたいね」

【黒騎士】「すいぶんと他人事のように仰いますな」

【鉄皇女】「あら？ 出立が遅れたのは兄皇子派による妨害工作のせいでしょう？」

【黒騎士】「ええ、そういうことになつておりますが」

【鉄皇女】「なら、そういう態度をとつていればいいじゃない。弟皇子つて、プライドばかり高いバカで好きじゃないのよね。根暗で陰険な兄皇子に比べれば、愛嬌がある分、まだマシかもしれないけど」

【黒騎士】「まあ……どうでもどうかと」

【鉄皇女】「「草原と平穏の国」も援軍を出したと言つてたわね。それで戦況はどうなるかしら？」

【黒騎士】「はい、草原軍2万5千ですね。総大将は弟大公だと……森林軍3万5千とあわせて6万、対する俺らが鉱山軍は7年前の3倍近く8万5千です」

【鉄皇女】「今日は小競り合いでは済まなさそうね。ところで、例の“不死の魔人”は？」

【黒騎士】「報告によれば、今回の援軍には従軍をしてないようです」

【鉄皇女】「なんで？ 鉱山軍にとつては恐怖の象徴でしょう。いるだけで、士気を下げるはずよ」

【黒騎士】「あちらも派閥争いがあるようとして、簡単に言えば第一王子派と弟大公派に分かれているようです。“不死の魔人”は第

「王子の懐刀的な立場だとかで」

【鉄皇女】「ふうん、ワタクシにとつてのアナタみたいなものかしら?」

【黒騎士】「まあ、そうかもしません」

【鉄皇女】「となると、少し計画を練り直す必要があるかもしだいわね」

【黒騎士】「それと気になる情報が一つ……」

【鉄皇女】「なにかしら?」

【黒騎士】「その“不死の魔人”の関係者が、我が国に入っているらしいのです」

【鉄皇女】「……信憑性は?」

【黒騎士】「調査を継続させていますが、この情報を持ってきたのは俺の手下の中で最近頭角を現してきた有望なヤツとして、信じてよいから」

【鉄皇女】「……」

【黒騎士】「いかがされました?」

【鉄皇女】「アナタが直接出向いて調べてもらえないかしら?」

【黒騎士】「貴女様の御心にまことに」

【鉄皇女】「ふふふ、面白くなりそうね」

## 第61話『赤髭男は、迷っていた』

草原と平穏の国・孤児院

【赤髭男】「老院長殿、薪割りは終わった」

【老院長】「おお、ご苦労様」

【赤髭男】「他に何か仕事はあるか?」

【老院長】「いやいや、お客に雑用ばかりさせるのもなんじゃしの」

【赤髭男】「ワタシは客人ではない。命を救つてもらい、その上、何も聞かず置いてもらつてはいる。正直な所、ただ何もしないでいると居心地が悪い。やれることがあれば、やらせて欲しい」

【老院長】「……しかしの」

【赤髭男】「何か問題が?」

【老院長】「いや、儂らには問題はないが、子供達の遊びにも付き合ってくれとるし……生まれてこの方、子守りなぞ、したことなかつたじやろ?」

【赤髭男】「確かに子守りの経験はないが……」

【老院長】「それには。お主は、あまり目立たない方が良いんじやないかの?」

【赤髭男】「!?」

【老院長】「儂もまだまだ耄碌もつろぐしとらんでな。」(う)言つては悪いが、儂はお主が子供好きの善人だとは思つとらん。自身のためには、簡単に他人を利用する……そんな性分じやろ?」

【赤髭男】「……」

【老院長】「そう怖い顔するな。老人の戯言じや、ただ、伊達に年を食つてないでな……お主は、まるで若い頃の自分を見ているようじや。何の因果か、この年になつて孤児院のジジイなぞやつとるが」

【赤髭男】「……ワタシと老院長殿が似てゐる、といふのか?」

【老院長】「若い頃の、と書つたじゅうぶん。今の儂は子供達から好かれる素敵院長様じや」

【赤髭男】「ワタシは……」

【老院長】「無理に話さんでもええぞ。逆に話したいならこへりでも聞いてやるがの」

【赤髭男】「そこまで……ワタシの危つさを分かつていて、ここに置いてくれる?」

【老院長】「猫ミミチャちゃんの頼んできたからじや」

【赤髭男】「猫ミミチャちゃんが?」

【老院長】「あの子は面白じいの。儂が出会つた孤児の多くは、もつと独特な目付きをしておつた。何かを諦観したような死んだような目か、憎悪から生まれたような暗く、ギラついた目……だけど、猫ミミちゃんは全てを許して、受け入れるような、そんな目をしておる」

【赤髭男】「分からなくもない……」

【老院長】「その猫ミミチャちゃんがな、お主を助けて欲しいと、この孤児院に来て一度目のお願ひをしたんじや。一度目は“また来てもいいですか?”じゅつたしな。実質初めてのお願いと言えよつが」

【赤髭男】「何故、ワタシにそこまでしてくれる?」

【老院長】「さあ、それは儂にも分からん。ただ、少なくとも……ここ数日、お主の事を見ておつたらな。善人ではないが、根っからの悪党と言つわけでもないことが分かるしの」

それに、居心地が悪いのはタダで飯を食らつことじやなく、そんな自分の変化に戸惑つとるからじや。今のお主は人を害するほどの気概を持ちお会わせてないじゅうぶん

【赤髭男】「ああ……その通りかもしれない。ワタシは、自分を見失つてしる……」

## 第62話『赤髭男は、自身を振り返っていた』

草原と平穏の国・孤児院

【赤髭男】「ワタシは……これでも、幼い頃は神童と言われててな。親の欲田やそんな親に取り入ろうとしていた大人の世辞もあつたんだろう」

【老院長】「子供が可愛い親はそういうもんじゃ」

【赤髭男】「実際の所、ワタシの才能は常人よりちょっとマシな程度だつたろうな。ただ、生まれた家が貴族だつたんで、高い教育と訓練、質の良い武具にだつて恵まれた」

【老院長】「それは、何も悪いことじやあるまい」

【赤髭男】「ああ、ワタシの運が良かつただけだ。それでも7年前の『焦森戦争』には、中隊長の一人として参戦し、高い戦功だつて収めた。最も、最後の火計によつてもたらされた戦果に比べれば、些細な物だがな」

【老院長】「順風満帆の人生のようじやが」

【赤髭男】「戦争から帰つてしまらくし、両親が事故で亡くなつてな……急遽家を継ぐことになつた。父が金のためにやつていた悪事、それによつて繋がつっていた人脈などを含めてな」

【老院長】「悪事?」

【赤髭男】「税を誤魔化したり、領内の一定の有力者を優遇することに対する見返りなど。ワタシの血肉は他人の犠牲の上に成り立つていた」

【老院長】「それを悔いておるのか?」

【赤髭男】「後悔……とは違うな。それが当たり前だと思つてた。……が、欲で繋がつた関係は、欲の前には簡単にほどけてしまう。ワタシを追つているのは、そういう悪事の共犯だ」

【老院長】「……つまり、裏切られたと？」

【赤髭男】「端的に言えば、そうだな。口封じとばかりに命を狙われ……逃げ出したはいいが、ワタシは死んでおくべきだったんじやないだろ？ と思つたわけだ。そもそも、命欲しさに逃げ延びたはいいが、何をしたかつたわけでもない。」

ワタシは終わりを迎えてもいい、と思つてた。しかし、どうやらワタシはまだ死にたくなかつたようだ。猫//ミちゃんに言われたよ、ワタシは生きたがつてはいるよ、

【老院長】「獸と人の違いはな、獸は子を生すために生きるが、人はそれだけじゃ生きられぬ。人はの、何かを成そうとせずには生きられぬのじや」

【赤髭男】「何かを成す……」

【老院長】「ああ、そして、何かを成そうとする人は、しぶとく生き汚くなる」

【赤髭男】「……ワタシは何かを成せるのだろ？ 」

【老院長】「さあ、ただお主は、既にこの孤児院にとつて必要な者になつておるところじやな」

【赤髭男】「……感謝する。老院長殿」

## 第63話『男主人は、迫られていた』

草原と平穏の国・男主人邸

【男主人】「……少し張り切りすぎたか（ふあ」

SE（扉を叩く音）・「ンンンン

【男主人】「ん？」

【長//ミ】「長//ミです。お邪魔してよろしいでしょうか？」

【男主人】「……どうぞー？」

SE（扉の開閉音）・ガチャ、ギイ、バタン

【長//ミ】「失礼します」

【男主人】「どうしたの？ 何かあつた？」

【長//ミ】「……お疲れの所、申し訳ありません」

【男主人】「いや、いいよ。こんな夜更けに寝室に押し掛けてくるほど用件なんでしょう？」

【長//ミ】「…………（するり）

【男主人】「なつ！？」

【長//ミ】「ご主人様のお情けを頂きたく……」

【男主人】「…………」

【長//ミ】「私の体では……満足いただけないでしょうか……」

【男主人】「…………はあ（溜息）

【長//ミ】「うーじ主人様？」

【男主人】「君は何処の誰なのかな？」

【長】「……え、“棘の氏族”の長ですけど」

【男主人】「《幻影崩壊》」イメージブレイク

【黒】「はっ！？」

【男主人】「いやあ、焦つた……《誤認幻影》は、使用魔力が微弱すぎて感知しないことがメリットだな。対象を演じ切れるなら《偽装幻影》よりも、ずっと有効だ。しかし、ダークエルフの暗殺者に狙われるとはね。心当たりはないんだけど」フェイクイメージ

【黒】「なぜ見破れた……」

【男主人】「んー、真似できるくらい。長を観察していたんだろ？ 気付かないもんかな」

【黒】「……」

【男主人】「まあ、いいや……背後関係はきちんと白状してもいいつもりだよ」

## 第63話『男主人は、迫られていた』（後書き）

というわけで、新キャラですー。

黒///

【種族】：エルフ族 【（外見）年齢】：25歳 【性別】：女性

【一人称】：アタシ

【設定】：

- ・男主人の寝室に現れた刺客？
- ・エルフ族の中でもダークエルフと呼ばれる褐色色の肌をした血脈。

## 第64話『男主人は、噂されていた』

草原と平穏の国・男主人邸

【男主人】「…………」

【黒ミミ】「…………」

【男主人】（さて、どうしたものかな……逃げ出す様子もないし、仕掛けてくる様子もない）

【黒ミミ】「……一つ聞きたい」

【男主人】「こつちは、色々と聞きたいけどね。それで？」

【黒ミミ】「今、長ミミは幸せか？」

【男主人】「はっ？ いや、ちょっと待つて、君は長ミミの関係者なのか？」

【黒ミミ】「答える、そうしたら、そっちの聞きたい」とは一通り答えてやる

【男主人】「いや……まいつたな、想定外の質問だ。長ミミが幸せどうかなんて、本人以外には分からんんじゃないかな？ 少なくとも不幸そうには見えないけどね」

【黒ミミ】「ふんつ、使えない」

【男主人】「ふつ、そのえぐるような言葉のナイフ。君が長ミミの関係者で間違いがなさそうだよな」

【黒ミミ】「それで、何が聞きたい？」

【男主人】「あー、まず、名前と所属。それと僕の寝室に長ミミの振りをして潜り込んできた理由？」

【黒ミミ】「黒ミミ、『棘の氏族』、長ミミの主が色ボケという噂の真偽を確かめるため」

【男主人】「ふむ……つまり、長ミミとは同郷つてことか。というか、どんな噂を聞いてきたんだか」

【黒】「やせり響とせ近にならん」

【男主人】「ま、 そうだな」

【黒】 「……色狂いの恋

【黒三三】…………色狂いの変態という噂だったが、ただのヘタレが【男主人】「いたたたつ！ 僕のデリケートな部分がとつても傷ついた！？」

【黒川】「ふん」

【男主人】 - 緒局

【黒川】「心の根柢からね。ドタドタの恋愛で、欲

「だから構わない」

【男主人】「分かつた。雇おう」  
【黒三三】「はつ！？ アタシが言うのもなんだが、オマエは底抜けのお人良しか馬鹿なのか？」

【男主角】 一長三三のことは信じている。仮に長三三が何らかの魔術で操られたり、脅されていれば、すぐに分かるしな。そもそも、そんな方法で身元証明をしろ、と言っている時点で疑いはないさ

【黒川】一  
.....屁理屈もいい所だな

【男主角】「とりあえず、また明日来てくれないか。」  
い、詳しい話は今度だ」

## 第65話『男主人は、思い出しあつて困つていた』

草原と平穏の国・男主人邸

【長ミミ】「おはよう」ぞいます、「ご主人様」

【男主人】「ん、おはよう」

【長ミミ】「本日の朝食はロールパン、サラダ、ポーチドエッグ、オニオングーストです」

【男主人】「あー、そうだ、長ミミはダークエルフの黒ミミって人、知つてゐる?」

【長ミミ】「……知つておりますけど、黒ミミさんが何か?」

【男主人】「いや、大したことじやないんだけど。昨晩、寝込みを

襲われそつになつてね」

【長ミミ】「……それは、普通は大したことと言いませんか?」

【男主人】「そうかな? まあ、それで結局、雇つて欲しいつて言つていたから、今日から雇うことになると思つんだ。細かい所は任せていいかな?」

【長ミミ】「ご主人様……寝ぼけているしやいますか? 私には

前後の話がまったく繋がつていないうに聞こえるのですが?」

【男主人】「うつ、そこはそれ、話の間を汲み取つてくれ」

【長ミミ】「…………(じい~~)」

【男主人】「長ミミ、その視線は何か?」

【長ミミ】「そういうご主人様こそ、先ほどから、先ほどから視線の向きがいつもと違つた動きを見せているような気がいたします。私と目を合わせないようにしていると言いますか……私を見ないようにしていませんか?」

【男主人】「…………そんなこと、ないですよ? (棒読み)」

【長ミミ】「はつ、もしかして、ご主人様。煩惱を抑えきれず、あ

んな小つ恥ずかしい過去を語つておきながら、田の前にある豊かな肉体に思わず飛び掛つてしまつたのですね。まさに、ミツバチトラップ！」

【男主人】「いやいや、飛び掛つてないし！ 養は回避したし！ といつか、ハーネトラップつて言いたかつたのかな！？」

【長ミミ】「……」「ほん

【男主人】「飛び掛つていませんよ？」

【長ミミ】「むしろ、そこで飛び掛つていたら、『主人様じゃありませんし、ニセモノを疑います』

【男主人】「ぐつ……」

【長ミミ】「ん？」

【男主人】「……（視線を逸らす」

【長ミミ】「『主人様、素直に話すか、誤魔化そうとして失敗するか、お選び下さい』

【男主人】「それ、どつちもNGだよねつ！」<sup>～グッズ</sup>

【長ミミ】「私的には、VGつて感じですが、ワガママな『主人様に第三の選択肢、誤魔化そうとして失敗して素直に話す、というのはいかがでしょう？ 2つの答えを合わせた欲張りな選択肢です』

【男主人】「うん、最悪だつ！ そこは聞かずにしておいて欲しいつ……」

## 第66話『長ミミミと黒ミミミ、少し警戒していた』

草原と平穏の国・男主人邸

【黒ミミミ】「さて、久しぶりだな、長ミミミ」

【長ミミミ】「……お久しぶりです。ここに来たのはお義父様の命令ですか？」

【黒ミミミ】「ああ、偉ミミミ様からの任務だ」

【長ミミミ】「私の様子を見に来た……と/orことでしたら、黒ミミミさんでなくとも良いはずですし、そもそもこの家に雇われる必要はありませんね」

【黒ミミミ】「一応、長ミミミの様子見つてのも指令にはあるけどな。この家にいるのは想定外だった。オマエは、王子付きの侍女をやつてこらんじゃなかつたのか？」

【長ミミミ】「となると、狙いは『主人様』でしょうか？」

【黒ミミミ】「アッサリと無視するなよ。しかし、『ご主人様』という呼び方が堂に入ってるじゃないか」

【長ミミミ】「ええ、今の私はメイドですから、『ご主人様のこと』はご主人様と呼んでいます。それで、ご主人様へ害を与えるつもりはないのですが？」

【黒ミミミ】「大雑把に言つなら、アタシは“救森の魔術師”的動向を探つてくるように言われているだけだ」

【長ミミミ】「それはつまり、ご主人様を今回の戦争において、自軍の持ち駒として扱おうという魂胆ですか？」

【黒ミミミ】「さてな、細かい点ではいくつか指令は受けているが、そこまでは言われていない。あと、いくら身内とはいえ、これ以上は話さないぜ。もつとも、ほとんどがアタシの独断での裁量に任せているんだが」

【長//】「…………」

【黒//】「睨むなよ。ああ、昔の長//せせむ可愛かつたのになあ。

“お姉一ちゃん”とアタシのことを呼んでくれた頃が懐かしい」

【長//】「確かに、長//せせむからは“お姉一ちゃん”と呼ぶように言わっていましたが、実際には“黒//姉さん”と呼んでいたと記憶しています」

【黒//】「年下のクセに相変わらず、可愛くない性格してるな」

【長//】「年下と言われても、黒//さんから見れば、人間族は例外を除いて全員が年下でしきつ」

【黒//】「人の歳についてアレコレ言つなよ」

【長//】「先に歳の話をしたのは黒//さんでしきつ。私が少しばかり生意気な性格だとしても、それと年齢は関係ないと私は」

【黒//】「まあ、いいや、この家でしばらく世話になるんだ。よろしく頼むぜ」

【長//】「はー。それでは、まずは、この服に着替えてください」

【黒//】「……は？」

【長//】「この主人様から伺つておつませんか？メイドとして雇われたのですよ？」

第67話『男主人は、難題から逃避していた』

草原と平穏の国・男主人邸

- 【男主人】「…………」
- 【長ミミ】「…………」
- 【猫ミミ】「うわあ…………」
- 【男主人】「…………黒ミミがこの料理を？」
- 【長ミミ】「ええ、ご主人様が、黒ミミさんの家事の腕前を見たいと語つので……」
- 【黒ミミ】「アタシが腕を振るつたんだ。ほら、たんと食え」
- 【男主人】「なかなか、野趣溢れる料理だよね」
- 【長ミミ】「ご主人様、とりあえず……毒物は使われていませんので、」安心を
- 【黒ミミ】「毒物つて何だよ！ 毒物つて！！ そんな高価なもん使つかつ……！」
- 【男主人】「み、見た目はちょっと悪いかもしないけど……そこまでは僕も考えてなかつたよ？ うん、毒を食べても魔術で解毒できるし？」と言うが、安かつたら使うの？（汗）
- 【猫ミミ】「なんか、変な匂いもするよー？」
- 【男主人】「……酸っぱい匂いというか香ばしい匂いといつか……人がせつかく考えないようにしてたのに……」
- 【黒ミミ】「オマエも黙つて食えや」
- 【男主人】「よし…………（ぱくり）
- 【猫ミミ】「わっ！ 食べたつ！」
- 【男主人】「（もぐもぐ）…………あれ？」
- 【猫ミミ】「だ、大丈夫つ！？ ご主人さまー！？（あわあわ）
- 【長ミミ】「猫ミミちゃん、安心して……見た目と匂いはアレだけ

ど……」

【男主人】「……少し甘酸っぱくて苦味もあって、不思議な味だけど、不味いか美味しいかで言われれば、やや美味しい……」

【黒ミミ】「ふんつ、料理くらいできるんだよ」

【男主人】「いや、これを料理つて言つには、コックさんに申し訳ないといふか……（もぐもぐ）」

【猫ミミ】「ご主人さま、美味しいの？」

【男主人】「不思議と食べれる味になつてゐる……」

【長ミミ】「それがご主人様、慣れてくるとたまに食べたくなる味になります」

【男主人】「あー、確かにこの味は変にクセになるかもしねない」

【長ミミ】「問題は、黒ミミさんが料理をすると、大体この味になつてしまつのです」

【男主人】「……なんでだよ……」

## 第68話『黒///わんが、訓練していた』

草原と平穏の国・男主人邸

【猫///】「黒///わん……何やつての?」

【黒///】「ん? 猫ちゃんか。いつやつて(しゃぱり)」

【猫///】「わ、すゞー 鉄の棒が板に刺さったー 黒///わん、大道芸人みたいー!」

【黒///】「だ、大道芸……一応、“手裏剣術”ってこの武芸の一種なんだけどな」

【猫///】「しゃりゅけんじゅちゅ?」

【黒///】「手裏剣術だ」

【猫///】「しゃりけんじゅちゅ、しゃりけんじゅちゅ……(しゃりけんじゅちゅ)」

【黒///】「しゅ、り、けん、じゅ、つ」

【猫///】「しゅ、り、けん、じゅ、つ……(しゃりけんじゅちゅ)」

【黒///】「おー、偉い偉い」

【猫///】「ねね、あたしもそれ投げてみていい?」

【黒///】「まあいいけど、難しいぞ?」

【猫///】「やつてみたいー!」

【黒///】「じゃあ、ほらこれ、(しゃりけんじゅちゅ)」

「(しゃりけんじゅちゅ)」

【猫///】「ふむふむ」

【黒///】「まあ、試しに投げてみる。最初は前に向かって水平に飛ばせよ」

【猫///】「(しゃりけんじゅちゅ)」

【黒///】「あつ……」

【男主角】『（遠くから） いてえええ！！ なんで空から棒鉄が！』

？』

【黒】「力の入れすぎだ、見事にすっぽ抜けて飛んでいったな

【猫】「あわわつ、い、今の声、ご主人さまだよね？」

【黒】「問題ない。油断していた」アイツが悪いんだ

【猫】「も、問題ないのかな？ 謝つてこないと」

【黒】「それより、ほら、これをやるから、暇な時にでも練習  
しな」

【猫】「わーい、ありがとー！ じゃあ、ちょっと謝つてくる  
ね！」

【黒】「…………やれやれ、この国は、まだ平和なんだな」

## 第69話『部下男も、頑張っていた』

### 鉱山と武勇の国・宿屋

【部下男】「ただいま戻りました。お祖母様」

【白髪女】「ん、街の様子はどうだったかい？」

【部下男】「どうもこうも街全体の空気がピリピリしますね。戦場は、此処より遠いというのに」

【白髪女】「国自体の情勢が不安定なんだろうねえ」

【部下男】「それと、面白い話をいくつか……どうも、この数ヶ月の間、皇帝が公に姿を見せていないようです」

【白髪女】「ああ、その話ならアタシの方でも聞いてきたよ」

【部下男】「そこへ今回の戦争……」

【白髪女】「明らかに要因の一つだらうねえ」

【部下男】「次期皇帝の座を狙つた、弟皇子によるモンストレーシヨンのようなものと？」

【白髪女】「うちの国も似たような物じゃないかい」

【部下男】「ええ、今回の援軍は、全て王弟派の息が掛かつた軍で決まつたそうです」

【白髪女】「ふんつ、まったく、7年前に王子の率いた軍が戦場で大活躍したのが、そんな簡単なことに見えたのかねえ」

【部下男】「元はと言えば、王弟派の……少数の援軍しか派遣しないことで、「森林と調和の国」に対する王子の印象を悪くし、あわよくば戦死をすれば、という画策でしたのに」

【白髪女】「農に仕掛けた工サを取られた猟師つてのは、間抜けだねえ」

【部下男】「もっとも、男主人様という牙を隠し持つた猛獸だった、と言つことですが」

【白髪女】「さて、つこつこ昔のことを話しこじまつね。今、これから話をしてよいか」

【部下男】「そうですね。もし、皇帝が病氣などで、先が長くないとなると……」

【白髪女】「確實に、この国は分裂を起こすねえ。ただし、兄皇子が弟皇子に現皇帝に継ぐだけの力量があれば別だけどさ」

【部下男】「もしくは、今回の戦争で、弟皇子の軍が多大な戦果を上げた場合ですね」

【白髪女】「ただし、戦争ってのは、国力に多大な消耗を起こさせる。普通は一の足を踏むもんだけ……この戦争の発端には、少し裏がありそうだねえ」

【部下男】「オレの方は、もう少し皇帝の様子について、情報を集めてみます」

【白髪女】「あんまり無理をするんじゃないよ」

【部下男】「もちろんです」

【白髪女】「とにかく……あの娘はどうするつもりだい？」

【部下男】「うう……」

【白髪女】「オマエに懷いているようだし、せりんと面倒を見るんだよ」

【部下男】「……はあ、なんか男主人様の気持ちが少しだけ分かつた気がします」

## 第70話『部下男が、好かれていた』

### 鉱山と武勇の国・宿屋

【黒服女】「部下男様、お食事を持つてまいりました」

【部下男】「あ、ありがとうございます。黒服女さん」

【黒服女】「そんな、『黒服女さん』だなんて、他人行儀なつ！わたしのことは、『黒服女』と呼び捨てて下さい！」

【部下男】「いや、その……」

【黒服女】「部下男様は、わたしの運命の人なのです。峠で行き倒れていたわたしに、そつと差し出してくれたサンドイッチの味、一生忘れません！！」

【部下男】「だから……そんな大したことじゃないし……」

【黒服女】「それとも、アレですか！わたしは、呼び捨てにする価値がない女だと、そう仰るのですか？？確かにちょっとばかり方向音痴かもしだせませんが、こう見えても職務には忠実、思い込んだら一直線、わき目を振らずにあなた様の忠実な下僕でありたいと、はちきれんばかり思いで胸がいっぱいです！！」

【部下男】（なんか今サラリとどんなもない事を言ったよな！？）

【黒服女】「呼び捨てがダメならば、『黒たん』と呼んでもらつてもいいのですが！！むしろ推奨！？……『そんな白髪女さんが見ていますっ』『いいじやないか、黒たん、オレとキミの仲じやないか』『ああ、部下男様っ』……コレが正解でいいですか？？」

【部下男】「…………ごめん」

【黒服女】「謝られた――――。わたしが精一杯振り絞った勇気を返してつ――いや、自分でも分かっているんですよ。ちょっとばかり夢を見ちゃったかなつて、でも、少しくらいロマンを追いかけてたくなるのが人間じゃないですか？！」

【部下男】「ロマンを求めるのが人間、って言葉には少しだけ共感できるけどな」

【黒服女】「ですよね！？ ああ、部下男様とわたしの気持ちが、今ひとつに…。 たあ、男のロマンである、漆黒のメイドさんルックの権化たるわたしに飛び掛つてきてください、部下男様っ！ いたき いつでも、どこまでも、わたしは部下男様の熱く滾つた思いを受け止めてみせますっ！」

【部下男】「もう、何をどう突つ込んでいいんだよ…！」

【黒服女】「もちろん、わたしに！ 部下男様のパッションを！ 真正面から！」

【部下男】「違うーーー！」

【黒服女】「すみません、何か粗相をしてしまったのでしょうか？ それとも、これからそういうプレイをする前置き？ 部下男様つたら、案外マニアックな……」

【部下男】「落ち着け！ オレも落ち着くから、まず、オマエが落ち着けっ…！」

【黒服女】「はい、落ち着きます…！」

【部下男】「ほら、深呼吸（ゼエはあ」

【黒服女】「しんこきゅー（すうはあ」

【白髪女】「いつもながら楽しい娘だねえ。あ、食事は先に頂いていいよ（ぱくぱく」

【部下男】「お祖母様… 人事だと思って…」

【白髪女】「残念ながら、他人事つちや他人事だろ？」

【部下男】「仰るとおりですけど…！」

## 第70話『部下男が、好かれていた』（後書き）

ソリソリ、支離滅裂系の妄想娘は結構好きなんです。

黒服女

【種族】：人間族 【年齢】：20歳 【性別】：女性

【一人称】：わたし

【設定】：

- ・空腹で倒れている所を部下男に助けられたらしい。
- ・部下男のことを、部下男様と呼んで慕っている？

森林と調和の国・侵略された村

【師団長】「襲撃を受けたばかりか……生存者の確認を」

【魔術師】「…………アクティブ リヴィン ディスカバリー ラン…  
…『サーチライフ 生命発見』」

【師団長】（とは言つても、数日は経つてゐる。生きていたら、村からは逃げ出しているか）

【魔術師】「ん？ すみません、微弱な反応が……」

【師団長】「家畜とかじやないのか？」

【魔術師】「その可能性もなくはないのですが、方角的にどこかの家の地下に……」  
「こつちです」

【魔術師】「この部屋の真下ですね。この絨毯をはがします。手伝つてください」

【師団長】「つて、ボクもかい？」

【魔術師】「手伝わずに、何のために付いて来たんですか？ いいから、そっちを持つて」

【師団長】「はいはい……よつと」

【魔術師】「隠し部屋ですね。少し薄暗い……、あつ！？」

【師団長】「どうした？」

【魔術師】「子供が倒れています。さつきの生体反応は、多分あの子ですね、連れてきます」

【幼ミニ】「…………（ぐつたり」

【師団長】「衰弱がひどいな」

【魔術師】「さつきの部屋に隠されたまま、飲まず食わずに隠れて

いたのでしょうか？

【師団長】「早く、救護兵の所へ連れて行こう」

【魔術師】「いや、魔術で……ルート・リヴィン・フヨロー……」

アロット・ライフ

生命分与

【幼ミニ】「んつ……？」

【魔術師】「良かった、気が付いたか」

【幼ミニ】「や――――!?」（ぎゅつ、ぶるぶる）

【魔術師】（今、師団長様たちの方を見て悲鳴を上げた？ そして、僕に抱きついてきた……）

【師団長】「おい、どうした？」

【魔術師】「師団長様と護衛の皆さん、すみませんが、部屋から出て行つてくれませんか？ この子は、多分、鎧を着た兵に恐怖心を抱いているようですね……安心して、君を傷つける人はいないから（ぽんぽん）

【師団長】「そうか、落ち着いたら合流してくれ」

【魔術師】「了解です」

## ～幕間～『草原軍1』（後書き）

一気に三人増えた。新キャラクターの紹介です。

### 魔術師

【種族】：人間族 【年齢】：17歳 【性別】：男性

【一人称】：僕

【設定】：

- ・「森林と調和の国」に援軍として派遣された草原軍に所属している。

- ・魔術の腕は良く、師団長からは頼りにされている。

### 幼ミミ

【種族】：エルフ族 【年齢】：9歳 【性別】：女性

【一人称】：私

【設定】：

- ・侵略された村の生き残り。
- ・言葉が少なに喋っているが、徐々に慣れてきて……

### 師団長

【種族】：人間族 【年齢】：17歳 【性別】：男性

【一人称】：ボク

【設定】：

- ・「森林と調和の国」に援軍として派遣された草原軍の師団長。
- ・気さくな性格で魔術師とは仲がいい。

森林と調和の国・草原軍野営地

【幼ミミ】 「…………？」（ほんやら）

【魔術師】 「ん、気付いたか……どうへ、どこか痛かつたりしない？」

【幼ミミ】 「つー？（びく）」

【魔術師】 「おつと、驚かしちやつたか。もう大丈夫、安心して……と言つても、すぐには安心できないかな」

【幼ミミ】 「…………」

【魔術師】 「まず、お互に元紹介をしよう。僕の名前は魔術師、君は？」

【幼ミミ】 「…………幼…………ミミ」

【魔術師】 「幼ミミちゃんか、可愛い名前じゃないか」

【幼ミミ】 「…………お父さんとお母さんは？」

【魔術師】 「ごめん、僕には分からない」

【幼ミミ】 「どうして…………？」

【魔術師】 「僕たちが集落に着いた時には、幼ミミちゃん以外は、誰もいなかつたんだ」

【幼ミミ】 「…………そつか」

【魔術師】 「幼ミミちゃんさえ良ければ、僕たちと一緒に「棘の大集落」まで行かないか？ そこまで行けば、幼ミミちゃんの知り合いの人も見つかるかもしねないし」

【幼ミミ】 「一緒に…………？」

【魔術師】 「ああ、もしかすると、君のお父さんとお母さんは、その集落まで逃げていてるかもしれない」

【幼ミミ】 「…………ほんと？」

【魔術師】「……」

【幼ミ】「…………（じい）」

【魔術師】「…………」  
父さんとお母さんは、君を助けるために死んじゃつてこると想つ

【幼ミ】「…………うん、分かつた」

【魔術師】「ごめん」

【幼ミ】「いいの。魔術師さんはわたしを助けてくれたんだよね  
？わたし、魔術師さんと一緒に行くよ。イヤつて言つたら、魔術  
師さんが困っちゃうもんね」

【魔術師】（聴い子だ……両親を「くして辛いのに、僕のことを氣  
遣つてこむ）

SE（空腹音）・クウ～

【幼ミ】「…………あつ（照れ）」

【魔術師】「ははっ、お腹が空いてるみたいだね。ちょっと待つて  
て、何かもらつてくるから」

森林と調和の国・草原軍野営地

【師団長】「やあ、調子はどうだ？」？

【幼ミニ】「（びくつ）…………（さつ）と魔術師の背後に隠れる」

【魔術師】「いきなり入つてこないでくれますか？ この子が怖がるでしょ（づ）？」

【師団長】「ふふつ、ずいぶんと懐かれたようだね……『この子が怖がるでしょ（づ）』だつて」

【魔術師】「何か言いたい」とがあるなら言つたらどうですか？」

【師団長】「まあまあ、とにかくで、その子の名前は？」

【魔術師】「幼ミニ」と言つらじこですよ」

【師団長】「ふむ、ボクの名前は師団長とこつ、よひじくね小さなお嬢さん（べこつ）？」

【幼ミニ】「…………ね、幼ミニ…………です（こわいわ）」

【師団長】「少し、魔術師と話したいことがあるんだ。ああ、このオヤツを上げるから、一人で待つてくれるかな？」

【幼ミニ】「あらがとう…………わたし、一人であるすばん、できる

【魔術師】「偉いな（なでなで）？」

【幼ミニ】「えへへ……」

【師団長】「（ニヤニヤ）それじゃあ、まあ、少し歩こうか？」

【師団長】「しかし、キミは子供ができたら親バカになりそうだな」「僕をからかうためにわざわざ来たのですか？」

【魔術師】「いやいや、あの子と村のことを聞きたてに来たんだ。何か

分かつたか？」

【魔術師】「言つまでもないのですが。襲撃跡から鉱山軍であることが確定しました。それと、あの子についての推測ですが、あの子のいた屋敷は村で一番大きな屋敷でした。この集落の長か、それの準じる立場にあつた者の娘だと思われます」

【師団長】「ふむ……」

【魔術師】「この国の住民であるエルフ族は、血縁を非常に大事にします。それなりの大きな集落に行けば、あの子の縁者を見つけることも可能でしょう」

【師団長】「それじゃあ、しばらくの間は、このままキミが預かってくれ、いいか？」

【魔術師】「ええ、それは構いませんが……何か心配事が？」

【師団長】「いや……最近、キミお前に面白い噂が流れていってね？」

【魔術師】「？？」

【師団長】「なんでも、幼い少女を自分好みの女性に育て上げて、ゆくゆくは奥さんにするらしいね？」

【魔術師】「貴方と一緒にしないで下さい…… それと、変な噂を流すなつ……」

【師団長】「おいおい、ボクは、もうちょっと育つ所が育つている方が好みだよ。自分色に染めたいって所は否定しないけどさ」

第7-1話『男主人は、意外な特技を持っていた』

草原と平穏の国・男主人邸

【猫//】 「あれ？ これ、なんだろ？」

【黒//】 「猫ちゃん、どうした？」

【猫//】 「あ、黒//さん、この黒い変な形の……棚かな？」

【黒//】 「ああ、これは……ピアノだな」

【猫//】 「ぴあの？」

【黒//】 「ああ、鍵盤を叩いて音を出す楽器なんだが、カギが掛かってるな。……あ、主、ちょうどいとこに、このピアノは開かないのか？」

【男主人】 「ん？ ああ、カギはあるけど、黒//が弾くの？」

【黒//】 「自慢じゃないが、こういった芸術的なもんは全然分からん。猫ちゃんが気になつていてるから、音を出してやりたいだけだ」

【男主人】 「確かに自慢じゃないね……カギは、確かにここに……あつた」

SE (ピアノの音) : パーン、ローン

【男主人】 「久しぶりに聞くから、音が狂つてそうだけど」

SE (ピアノの音) : パーン、ローン

【猫//】 「わあ……あたしも触つていい？」

【男主人】 「どうれ。叩く時は、弱すぎず強すぎずね」

SE (ピアノの音) : パーン、ローン、ポローン

【黒////】 「このピアノは、家族の忘れ形見ではないのか？」

【男主角】 「そんな大したモノじゃないよ。家族の中でピアノが弾けたのは僕だけだしね」

【黒////】 「は？ すまんが、主はピアノが弾けるのか？」

【男主角】 「何かな？ その幻のカーバンクルを見るような眼は……」

【黒////】 「ちやん、ちょっとどぞ……」

SE (ピアノの音) … ポロン、ポボボロボロオン……

【猫////】 「わあ……す””い、キレイな曲だね」

【黒////】 「い、意外な特技だな……」

## 第72話『男主人は、迷っていた』

草原と平穏の国・男主人邸

【男主人】「…………はあ（溜息）

SE（扉を叩く音）・コンコンツ

SE（扉の開閉音）・ガチャ、ギィ、バタン

【長ミミ】「ご主人様、お呼びでしょうか？」

【男主人】「うん、まあ、ちょっと訊きたいことがあってね……」

【長ミミ】「何でしょう？ 昨晩のハンバーグの隠し味は、“ニン”で始まる赤い野菜ですが」

【男主人】「な、なんだって、トマトソースで騙したなっ！？」

【長ミミ】「ふつ……」

【男主人】「ぐ、そんなに勝ち誇った顔をされると……うわ、かなり悔しい」

【長ミミ】「ご主人様の胃袋の支配権及び統治権は、今や私のものです。“ジン”で終わる赤い野菜を食べないと禁断症状を起こすようになってしまふのも、もはや時間の問題……」

【男主人】「いやいや！ それはなんか別の問題だよ！……」

【長ミミ】「ご主人様、近代において食事は基本的に1日3食です。1年は365日、ご主人様が後50年生きられるとして、残りの食事の回数は約5万4千回。食わず嫌いと言うのは、その約5万4千回の行為に対するデメリットでしかありません」

【男主人】「かなり壮大な問題になつた！？」

【長ミミ】「…………それで、私に訊きたいこととは何でしょうか？」

【男主人】「長ミミのそういう切り替えの早さについていけないので

は、僕が悪いのかな？」

【長ミミ】「では、私が悪いと言つことにして、せつぞと話していく  
ださい」

【男主人】「すつしぐ理不貞なことを言われてこる気がする……」

【長ミミ】「で？」

【男主人】「あー、うん、この手紙を読んでもらえる？」

【長ミミ】「手紙？ どうやら夜会の招待状のようだ見えますが……」

【男主人】「うん、まあ、そんなようなものかな……」

【長ミミ】「夜会の主催は、弟大公様？ ご主人様にとつて、明らかに敵派閥のトップのようですが？」

【男主人】「しかし、家紋が押印された正式な招待状だ。これを断るのは難しい」

【長ミミ】「そういうものなのでしょうか……」

【男主人】「それで……長ミミって、ワルツは踊れる、かな？」

第73話『長ミミセバ、考えていた』

草原と平穏の国・馬車の中

【長ミミ】「……」

【男主人】「……」

SE(馬車の音)・ガタゴト……

【長ミミ】「……」

【男主人】(うおお、なんだ、この沈黙はつ! 新手の精神攻撃か  
つー?)

【長ミミ】「……」主人様

【男主人】「は、はいっ!」

【長ミミ】「いくつか、お訊きしたいことがあるのですが、よろし  
いでしょうか?」

【男主人】「どうぞ、僕が答えることでしたらいくつでもっ!」

【長ミミ】「ありがとうございます。では、まず、今回の夜会で気  
をつけるべきことはありますか?」

【男主人】「ええと、悪いけど、できるだけ僕の傍から離れないよ  
うにして……人目のある場所で襲撃をしてくるとは思わないけど、  
嫌がらせ位なら仕掛けてくる可能性はあるから」

【長ミミ】「多少の嫌がらせ程度、私がご主人様にしていることこ  
比べれば些細なことだと……」

【男主人】「いや、同意したくないけどね!」

【長ミミ】「今回のパートナーに、何故副官女様を選ばなかつたの  
でしょうか?」

【男主人】「あー、夜会には東公爵も呼ばれているみたいだから、

多分、そのパートナーになると思うんだ。東公爵の奥様が、夜会のためにわざわざ領地から出でてくるのも大変だからね」

【長ミミ】「それを聞いて安心しました」

【男主人】「…………他には？」

【長ミミ】「私の身分ですが、どのようになっていますか？ まさか、使用人の娘です。と紹介するわけにはいかないでしょう。……ご主人様、どうして“やばつ、忘れてた”といつ顔をなさつてるのでしょうか？」

【男主人】「えーあー、そこは、あれで…………」

【長ミミ】「では、私は“棘の氏族”的族長の末の妹で男主人様に国家交流の一環でお世話になつてている、と言つことにしてください」

【男主人】「え、それって身分の詐称になるんじや…………」

【長ミミ】「大丈夫です。氏族長の末の妹とは、親しい仲ですので、後で知らせておきます」

【男主人】「まあ、長ミミの言つことだから、信頼するけど」

【長ミミ】「それと、最後に……ご主人様、まだ私に言つべき」とを言つていないとと思うのですが？」

【男主人】「えーと……そのドレス、とっても似合つている…………よ？」

【長ミミ】「まあ、及第点、といつことですね」

## 第74話『副官女が、話を合わせてくれていた』

草原と平穏の国・夜会（広間）

【副官女】「あつ……」

【男主人】「こんばんわ」

【長三】「…………（ペシツ」

【副官女】（ええ～～～！？）ど、隣にいるのは、確か長三ちゃんで  
したつけ？ あつあつ、そんな腕を組んで入場するような仲に（）進  
展をお！？）

【男主人】「副官女は、流石にドレスが似合っているね。そういう  
格好も可愛いよ」

【副官女】「か、かわかわ…………（真っ赤」

【長三】（ご主人様……鈍いと言つか、天然と言つか……馬鹿で  
はないのですが……）

【男主人】「ところで、副官女、東公爵様は？」

【副官女】「お父様は……入場して、しばらくの間は挨拶回りで一  
緒だったのですが、少し込み入った話があるとかで個室の方へいか  
れました」

【男主人】「そうか、挨拶をしたかったんだけど……大切な娘さん  
を預かっているわけだし」

【副官女】「そんな大事な人だなんて……（もじもじ」

【長三】「…………少し」コアンスが違うようですが……」

【副官女】「はつー、ところで、男主人様、その、そちらの女性は

……」

【男主人】「（少しおざとらじく）ああ、やつだった、紹介が遅れ  
た。今、我が家に逗留なさつて（）長三をさだ。隣国の氏族長の  
血筋に連なる方でね」

SE（周りの人々がざよめく音）・ザワツザワツ……

【長ミミ】「（少しづわざとらしく）“初めまして”、護りを伺うし“棘の氏族”に、其の名を連ねます森の子、長ミミと申します。この出会いを嬉しく思います」

【副官女】「……東公爵が第一子、副官女です。“初めまして”、私もお会いできて嬉しいですわ」

【長ミミ】「東の所領は、広き“海”というモノに面しているとか？恥ずかしながら、私はまだ“海”と呼ばれるモノを見たことがありません。聞くところによれば、国にある最も大きな湖を何十倍も大きくしたモノだとか？」

【副官女】「ふふつ、“海”は湖と比べることもできないほど、広く、また深いモノですわ」

【長ミミ】「まあ、一度見てみたいものです」

【副官女】「東の所領にいらっしゃる際には、是非私の実家をお訪ね下さい。たさやかながら、両国の友好の証に歓待させていただきますわ」

【長ミミ】「それは素敵なお誘いですね。それに、副官女様のお話をもつと聞かせていただけないでしょつか？」

【副官女】「こちらこそ、長ミミ様の色々なお話をお聞きしたいですわ。男主人様、宜しければ主宰の挨拶が始まる前に少しノドを潤しませんか？」

## 第75話『副官女は、少し不満でいた』

草原と平穏の国・夜会（広間）

【副官女】「…………それで、どうこうわけなのですか？」

【男主人】「お、おお？ 副官女、な、なんか怒つてないか？」

【副官女】「怒つていません！ ただ、何で、あの長ミミさんが、男主人様のパートナーとして、ここにいるのか理由を教えてください！」

【男主人】「えっと…。今日は～～～といふわけで、招待を断るわけにはいかなくてね。長ミミにパートナーに扮してもらつたんだ」

【副官女】「それでしたら、私に言つてもらつても良かつたのに、その…部下として！ そう、男主人様は師団長で、私が副団長なんですよ？ もっと頼つて下さい！」

【男主人】「ありがとうございます。気持ちは嬉しいけど、副官女は東公爵のパートナーの奥様の代理と言つ役目があつたんだろう？」

【副官女】「そ、それはそうでしたけど…」

【長ミミ】「副官女様、先ほどはご無礼をいたしました（ペニン）

【副官女】「べ、別に謝るようなことじやないわ！」

【長ミミ】「では、ありがとうございます。とつさにこちらと話を合わせて頂いたおかげで、周りにいた方々にも、私の演技がばれずになりました」

【副官女】「感謝なれば、受け取つておきます。けど、海を見せたいと思ったのは本当よ。いつか猫ミミちゃんも連れて、私の実家に遊びにいらして…。その、良ければ男主人様も一緒に」

【男主人】「そうだね。厄介ごとが一段落したら、それもいいかもしないね」

【東公爵】「おお、副官女、……」んな所にいたのか…

【副官女】「あ、お父様……」

【東公爵】「おや?」

【男主人】「東公爵様、ご無沙汰をしております」

【東公爵】「おお、男主人殿か。いやいや、お互い忙しいからな。会つのは2ヶ月前の会議振だな、俺の娘の仕事振りはどうだ?」

【男主人】「お蔭様で、お嬢様がいなくては、僕の仕事は始まらず終わりを迎えられません」

【東公爵】「はっはっは、そうかそうか、副官女は少し色気は足りないかもしけんが、その分、俺よりもずっと眞面目で賢いからな」

【男主人】「そんなご謙遜を、お嬢様はまさに才色兼備、我が軍の麗しい花ですよ。と言つても3人だけの小さな軍ですけどね」

【東公爵】「ところで、何故こんな所にいるんだ?」

【男主人】「さて、僕も招待主に直接問いたい気分です」

【東公爵】「気を抜くなよ。それと、この夜会が終わつたら近く俺の屋敷に来い……」

【男主人】「ええと……」

【東公爵】「王子様からな、事情は伝えてもらつた。水臭いじゃないが、俺にも協力させろや」

## 第76話『弟大公が、演説をしていた』

草原と平穏の国・夜会（広間）

【弟大公】「本日は、我が屋敷に多くの方々が集まってくれたことを、私は心から嬉しく思う。

今回の夜会は、皆の田<sup>た</sup>の疲れを癒すため、そして、私から皆に伝えたい思いがあり、設けさせてもらつた。

皆はもう既に知つているだろう。現在、我等の兄弟たる隣国が粗暴な西の国に攻めている。

そして、我等が優秀な王国軍が、友を助けるべく馳せ参じているのだ。

西の国の規模は7年前とは違い、戦いは熾烈を極めるだろう。しかし、我等は兄弟を見捨てたりはしない。我等が見捨てれば、隣国は西の国に<sup>じゅうりん</sup>蹂躪し尽くされてしまうからだ。

いや、それだけではない。貪欲な西の国は、平和なる我等が国に、その手を伸ばし、騒乱をもたらすだろう。

私はこの場を持つて、皆に誓つ。西の国の愚かなる行為を決して許さないと！！

そのために、私は微力ながら力を尽くす。私の力は、本当にささやかな力でしかない。しかし、ここにいる皆は、私と思いを等しくする方々だと信じている。

私一人でなしえなくとも、ここにいる皆の力を得られれば、それこそ、万軍の力を得るだろう。私は、信じている。

以上が、私が皆に伝えたいことだ……（一礼）

SE（拍手）：パチパチパチ！！！

【東公爵】「なあ、茶番もいいところだと思わないか」

【男主人】「ええ、これなら、近所の子供達のお飯事まめじごを見ていた方が楽しめますね」

【東公爵】「とりあえず、退屈な挨拶も終わつたし、俺はしばらく適当に楽しむつもりだ……ああ、副官女は、ついてこなくてもいい。男主人殿、うちのもよろしく頼むぜ」

【男主人】「は？ え？」

【副官女】「お、お父様つ？」

【東公爵】「何、父親と踊つても面白くも何ともないだろうからな。そつちのお嬢さんには悪いがな……」

【長ミミ】「いえ、私は別にご主人様がどなたと踊るうとも構いませんが」

【男主人】「長ミミ？」

【長ミミ】「……多分、東公爵様は、全部ご存知ですよ。私に対する視線が、そう物語っています。ですから、ご主人様が、『恋人に』対して、特殊な性癖を押し付けて『とか心配する必要はありません』

【東公爵】「はつはつは、それじゃあな、帰るときにはまた声を掛けさせてもらひづば」

## 第76話『弟大公が、演説をしていた』（後書き）

舞踏会編の新キャラクター2名の紹介です。

東公爵

【種族】：人間族 【年齢】：48歳 【性別】：男性

【一人称】：俺

【設定】：

- ・「草原と平穏の国」の東の領地を治める公爵。
- ・副官女の父親。
- ・体の弱い妻を大事にする愛妻家。

弟大公

【種族】：人間族 【年齢】：42歳 【性別】：男性

【一人称】：私

【設定】：

- ・「草原と平穏の国」の現国王の弟。
- ・王位継承権の第一位として、王子様派に対する派閥のトップ。

## 第77話『男主人は、踊り疲れていた』

草原と平穏の国・夜会（中庭）

【長//ミ】「お疲れ様でした。」主人様

【男主人】「ねえ、君たちは、僕をどうしたいの？ 交互に10曲連続休みなしで躍らせるつて、ひどくない？」

【長//ミ】「どうがひどいのでしょうか？ 教えていただけますか？」

【男主人】「……うう、ごめんなさい」

【長//ミ】「分かればよろしいのです。それに、途中からこつそり自身に魔術を掛けて、肉体の性能を強化されてましたよね」

【男主人】「うわ、よく気付いたね。軽く強化したけど、この手の魔術つて、反動で疲労がすごいんだよ……その疲労を魔術で癒すと、次は精神的な疲労がくるわけで……」

【長//ミ】「そもそも、ご主人様がハッキリしないのがいけないのです。最初にどちらと一緒に踊るかで迷い、曲の長さを考えずに長々と踊り、拳句の果てにワルツのステップを踏み間違えたフリをして副官女さんに……」

【男主人】「そ、それはフリじゃなくて、本当に間違えたんだって！ 何度も説明しただろ！ 副官女だって謝つたら分かってくれたし……」

【長//ミ】「フッ……」

【男主人】「鼻で笑われたつ！？」

【長//ミ】「まあ、そういうことにしておきますが……とにかく、この後はどうなさりますか？」

【男主人】「そうだね。少し涼んだら、東公爵に挨拶をして帰ろう。猫ミミちゃんも待つているだろうしね」

【長///】 「かしこまりました」

【給仕娘】 「お客様、お飲み物はいかがでしょうか？ 本日は、葡萄酒がお勧めですが」

【男主人】 「ありがとうございます、僕はその葡萄酒を、長///は？」

【長///】 「では、同じものを……」

【給仕娘】 「どうれ。それでは、お楽しみ下さい」

【男主人】 「それじゃあ、夜会が無事に終わりそういうことを記念して、乾杯（チン）

【長///】 「乾杯（チン）」

【男主人】 「（コク）ん、さすがは弟大公様の夜会だね。出てくる葡萄酒もランクが違う。これ一杯で、僕が普段飲んでいる葡萄酒が数瓶、下手したら樽ごと買えるんだろうなあ……こつそり一本持つて帰るうかな」

【長///】 「ご主人様……（冷たい眼差し）

【男主人】 「じょ、冗談に決まってるよ……？」

【長///】 「それにしては、ずいぶんと眼が本気のようでしたが？」

【男主人】 「くつ、男には避けて通れない戦いと言つものがあるのを」

【長///】 「カツコイイことを仰っていますが、葡萄酒一本分とは、ずいぶん安い戦いですね」

第78話『長ミミさん』が、苦しみだしていた

草原と平穏の国・馬車の中

【長ミミ】「……」

【男主人】「やれやれ、やつと開放された……」

SE(馬車の音)・ガタガト……

【長ミミ】「……（肩に寄り掛かり）」

【男主人】「ん？ 疲れて寝ちゃったのか？」

【長ミミ】「……はあはあ……」

【男主人】「……？」

【長ミミ】「くつ、うつ……」

【男主人】「お、おい、長ミミ！？ デウしたつー？」

【長ミミ】「……」、主人、様……申し……ません……（離れ）

【男主人】「離れなくていい、辛いなら僕に寄り掛かつてろ！……（ぐつと抱き寄せ）」

【長ミミ】「あつ……くあつ……」

【男主人】（身体が異常な熱い。高熱病の症状に似ているが、発症してすぐにここまでの熱になることはない……となると……）

【男主人】「これは、『火蠍の毒』か？」

【男主人】「……レジスト リヴィン リカバリイ……『毒素対抗

』！……レジスト ディクリース センス……『苦痛対抗』！！

【長ミミ】「……はあはあ……」

【男主人】（いつからだ？ いつから様子がおかしかった！？ な

んで僕は気付かなかつたんだ……マズイぞ、これが本当に“火蟻の毒”だとしたら、僕の魔術では解毒できない……医療魔術の専門家じゃないと……しかし、この状態だと長くは危険だ……）

【長】「「」、しゅ……」

【男主人】「無理に喋らないでいい！ 今は、体力を温存させて……」

【長】「わ、かり……」

【男主人】（僕が毒を受けたなら問題はなかつたのに……いや、向こうも僕に毒が効かないことは知つてゐる……だから、長を狙つたのか！？）

【男主人】「くそつ、何か、何か方法はないか！！ 考えろつ……」

## 第79話『男主人は、勝負を賭けていた』

草原と平穏の国・馬車の中

【長ミミ】「……はあはあ……」

【男主人】（だいぶ熱が上がってる、それに保有魔力の乱れ……間違いなく“火蠍の毒”による中毒症状だ。）

“火蠍の毒”が体内に入ると、対象が持つ魔力の流れを阻害する。その結果、保有魔力が乱れ、体温の異常な上昇などの症状を起こす……はず。

長ミミがエルフ族であることも最悪だ……人間族よりも保有魔力が多いために、症状の進行が早い。

下手な魔術は効果がない。むしろ長ミミに、これ以上の魔術を掛けるのは危険だし……。

……くうつ、もつと簡単な毒だつたら、僕でも解毒できるのに……自分が毒や病気に侵されないからと、治療系の魔術を積極的に習得しなかつたツケかつ！

今は、悔やむなっ！ 悔やむのは後でもできる！  
まず長ミミを助ける手段を……ん？ 今、何か思い浮かんだぞ。

僕は毒が効かない……これは生まれ持つた体质で、原因は過剰な保有魔力による恒常性維持の副作用。保有魔力は、ヒトの体液の流れに沿つて体内で循環している。

……エルフ族と人間族の間に、肉体的な相違はほぼなく……ということは……。

まずは、血液の種類を確認しないと……

SE（短剣を抜く音）・チャキ

【男主人】「……んっ（自分の左の掌を切る）。長///、少し痛いけど我慢して……（長///の右の掌を切る）」

【長///】「こつっ！」

【男主人】「……凝固作用が起らない、僕と長///の血液は同種……よつし……」

長///、僕の声が分かるかっ！？ 今から、お互いの傷口と流れの血液を仲介して魔力の同調させ、一人で一つの魔力の循環を作る。呼吸を整えて、力を抜いて、僕に全部魔力を委ねてくれるか？」

【長///】「わ、かりまし、た……ご、主人様を、信じ……ています……」

【男主人】（くつ……仲介箇所が一つだけだと、循環が上手くいかない……僕からの魔力の流れと長///からの流れが衝突しあう……ああ、これは非常事態つてことで！…）

【長】「んんっ！？」

【男主人】（ぐつ、この流れを保て、ばつ………）

## 第80話『黒///』と、殴られていた

草原と平穏の国・男主人邸

SE（打撃音）・バキイツ！！

【男主人】「つ～つ……氣は済んだかな？」

【黒///】「ふん、一発で氣が済むわけないだろ」

【男主人】「悪いけど、これ以上は止してくれないかな」

【黒///】「アタシは、言つたよな？ 長///は幸せか、つて？」

長///は、幸せになる権利があると思つてるんだ」

【男主人】「ああ……すまなかつた」

【黒///】「ふんつ、その殊勝な態度に免じて、今回は許してやる」  
【男主人】「助かるよ。あんな一撃を何発も食らつたら、これから

の行動に支障が出る」

【黒///】「で、どうするつもりなんだ？」

【男主人】「黒幕は、分かつて……今回のこととは、向こうにとつて、あくまで嫌がらせに過ぎないんだろ。嫌いな相手の人形をボロボロにして、喜んでいるようなものだ」

【黒///】「氣分が悪くなる話だ。アタシらがオマエの物のような扱いをされていることも含めてな」

【男主人】「君だつて、僕の噂を聞いてたんだろ？ 君もきっと僕の愛人扱いされているさ」

【黒///】「長///の報復をするんだろ？ アタシも協力してやつてもいい」

【男主人】「悪いけど、君の力を借りるつもりはないよ」

【黒///】「そりやそうか、得体の知れない暗殺師は信じられないだろつや。でもね……」

【男主人】「待つた。それは違う」

【黒ミミ】「何が違うんだい？」

【男主人】「君の腕も人柄も信じているよ。今の状況は、相手一人を暗殺して終わるようなもんじゃないんだ。それで済むなら、僕がとっくに手を下している」

【黒ミミ】「つまり、それほどの相手ってことかい？」

【男主人】「ああ……暗殺して気が済むのは一瞬だけだ。統率を失つた、相手の勢力がどんな手段に出てくるか分かつたものじゃない。やるべきは勢力ごと、まとめて力をそぐ必要がある」

【黒ミミ】「慎重だな。まあ、闘士はいつでも冷静であるべきだ。

その姿勢は認めてやる」

【男主人】「僕は臆病なだけさ。普通の人より丈夫で、バケモノと呼ばれるくらい魔術が使えると言つても、決して万能なんかじゃない」

【黒ミミ】「自然の中で最後まで生き残れるのは、強いヤツでも偉いヤツでもなく、自分が弱いことを知つていてるヤツだ。

強いヤツは何も考えないし、偉いヤツは何もしようとしてない。自分が弱いと知つていてるヤツは、生き残る方法を考えるし、何をするにも躊躇はない」

【男主人】「それは？」

【黒ミミ】「エルフ族の闘士に教えられる訓戒みたいなもんだ。オマエに相応しいだろ？」

森林と調和の国・草原軍野営地

- 【幼ミリ】「…………えいっ（ボスッ）」
- 【魔術師】「ぐほっ。な、なんだっ！？」
- 【幼ミリ】「わわわっ！？」（口ロン）
- 【魔術師】「…………何やつてるの？」と問いか、寝ている僕の上に飛び乗つてこなつた？
- 【幼ミリ】「…………おはよひびこます！」
- 【魔術師】「いやいや、何事もなかつたよつて起き上がって、朝の挨拶をしてもね！」
- 【幼ミリ】「あ、まだちょっと暗いから、こんばんわ？（きょとん）」
- 【魔術師】「…………幼ミリ、いい子だから、教えて欲しいんだけど、僕に飛び乗つた？」
- 【幼ミリ】「うんっ！」
- 【魔術師】「なんで？」
- 【幼ミリ】「寝てたから！」
- 【魔術師】「寝てる人に飛び乗るのが、エルフ族の習慣だつたりするのかな？」
- 【幼ミリ】「しゅうかん？」
- 【魔術師】「あー、えつと、約束のこと？ 家でもそつそつてたの？」
- 【幼ミリ】「うううう、違つよ？ えつと、このしゅうかん？」
- 【魔術師】「軍にもそんな習慣はありません！？」
- 【幼ミリ】「でも、師団長さんが、魔術師さんがなかなか起きないつて言つたら、布団に向かつて飛び乗ればいいって……魔術師さんは、やうやく起つたと喜ぶつて、その……ダメだったの？」

【魔術師】「ふつ……ああ、もつ、分かつてたとも……」

【幼二三】「お、怒つてる?」

【魔術師】「ああ、じめん!じめん、うん、幼二三は全然悪くないからね。むしろ、僕を起こしてくれたことは褒めないとね。でも、もう少し寝かせてくれた方が嬉しかったかな。せめて日の出が完全に終わるまで(なでなで)

【幼二三】「うん。明日からはもうちょっと遅くする」

【魔術師】「あと! 飛び乗るのはダメ! 僕も危ないナゾ、幼二三も危険だから!」

【幼二三】「わかった。じゃあ、揺すって起こすね?」

【魔術師】「できれば、最初からそういうして欲しかったかな……」

目を瞑つて、何してるので?」

【幼二三】「えっと、それで……、起こしてもうりつたら、チューするんでしょ?」

【魔術師】「はい! はい! なんでも!」

【幼二三】「え、だつて、男の人と何度も一緒に部屋で寝てたら、朝起にしてあげて、チューするんだって……」

【魔術師】「…………うん、僕はとっても重要な用事ができたから、少し出掛けてくるね? ああ、朝一にはんは先に食べてていいからね(やがて)

森林と調和の国・草原軍野営地

- 【幼ミミ】「魔術師さん、わたしに魔術を教えてくれますか？」
- 【魔術師】「理由を聞いていいかな？」
- 【幼ミミ】「強くなりたいの」
- 【魔術師】「魔術を覚えると強くなれるのか？」
- 【幼ミミ】「だつて、魔術師さんなら、魔術で熊にも負けないでしょ？」
- 【魔術師】「ああ、確かに、僕が魔術を使えば熊くらい一瞬で倒せるな」
- 【幼ミミ】「強くなつて、わたしも敵をやつつけるの」
- 【魔術師】「強くなつて敵をやつつけて、どうする？」
- 【幼ミミ】「お父さまとお母さまの力タキをとるの」
- 【魔術師】「カタキつて意味は分かつてるのか？」
- 【幼ミミ】「お父さまとお母さまを殺した人を殺すつてことだよね？」
- 【魔術師】「まあ、間違えじゃないな……」
- 【幼ミミ】「魔術を教えてくれますか？」
- 【魔術師】「…………そういう理由なら、僕は教えられない」
- 【幼ミミ】「なんでつ！？」
- 【魔術師】「僕にとって、幼ミミみたいな子が、人を殺すのは、とても悲しいことなんだ」
- 【幼ミミ】「でも……わたしは……」
- 【魔術師】「幼ミミ、よく聞いて、君に人殺しをさせたくないのは、僕のワガママだ。だから、君に約束しよう。君の両親の仇は僕が取るよ」

【幼ミミ】「…………魔術師さんが？」

【魔術師】「うん、人を殺すのは、僕がやる。だから、幼ミミも約束してくれるかな？」

【幼ミミ】「約束…………？」

【魔術師】「人を憎んでもいい、僕のことを嫌つてもいい…………だけど、一度と人を殺すだなんて、言わないでくれないか？」

【幼ミミ】「…………わたしは魔術師さんのこと、嫌いになつたりしないよ？」

わたしを助けてくれたのは、お父さまとお母さまと魔術師さんだから……他のみんなが魔術師さんを嫌いになつても、わたしは魔術師さんが好きだよ？」

【魔術師】「…………ありがとう。少し驚いたけど、嬉しいよ」

【幼ミミ】「だから、魔術師さんに約束するね。一度と人を殺すつて言いません……だから、魔術師さん、悲しまないでください。お願いします」

【魔術師】「ああ、そういうお願いなら、大歓迎だよ」

森林と調和の国・草原軍野営地

【幼ミミ】「わあ…………」

【魔術師】「…………トランスレイト オン イレイス アワー エネジー…………『魔力沈静』」  
ロストアウト

【幼ミミ】「すごいキレイだった。今のも魔術?」

【魔術師】「一応魔術かな? 体内を循環する魔力に負荷を掛けたり消したりすることで、魔力の流れを強化したり、いざと言つ時の反応を上げ…………って説明が詳しすぎるな。」

簡単に言えば、訓練用の魔術って、言えば分かるかな?」

【幼ミミ】「えーと、なんとなく?」

【魔術師】「それで、僕に何か用かな?」

【幼ミミ】「用がなかつたら、来ちゃダメなの?」

【魔術師】「え、いや、駄目つていうわけじゃないけど…………」

【幼ミミ】「わたしがジャマ?」

【魔術師】「邪魔でもないけど、その、危ないしさ。できれば、僕の天幕で大人しくして欲しいんだ」

【幼ミミ】「魔術師さんの横にいる方が危なくないよ? わたしが危なくなつたら、また助けてくれるよね?」

【魔術師】「うー…………」

【幼ミミ】「それに、わたしは、ホイホイ何でも言つこと聞く“つご”ーのいい女”じゃないんだからね! 魔術師さんが、最近、天幕に居てくれるのが悪い、らしいんだよ?」

【魔術師】「…………師団長に、そう言えば良いよ、って言われたのかな?」

【幼ミミ】「うわあ、すごい。なんで分かつたの?」

【魔術師】（そりゃあ、慣れない言葉を無理やり使おうとしてるよ  
うに見えたから……だけどね）

【幼ミニ】「やっぱり、魔術師さんです」いんだね」

【魔術師】「そんなことないよ。僕なんて、まだまだ半人前だ」

【幼ミニ】「半人前？」

【魔術師】「えーと、つまり、大人じゃなくて子供に近いってこと  
かな？」

【幼ミニ】「魔術師さんは、そんなに大きいのに？」

【魔術師】「大きくなるだけなら、樹木にだってできる。重要なのは、大人になるためにたくさん経験をして、覚悟を決める」と、  
かな？」

【幼ミニ】「ふーん？」

【魔術師】「さて、せっかくだから、一緒にお茶でもしようか。ゆ  
っくりできる時にはゆっくりしないとね……」

【幼ミニ】「わーい」

【魔術師】（昨日の会議で話された情報が真実なら……そろそろ、  
本格的な交戦が始まるとか）

# 草原と平穏の国：男主人邸

【長】 「ん、んん……？」

【主人】 「長……、気が付いたか？」

【長】 「ご主人様……なぜ、私の部屋、に？」

【猫】 「長……さん！ 田を覚めて、良かつた———（ぎゅ

【男主人】「こら、猫!!!! いきなり抱きつくな。長!!!!の負担に  
なる。」

【趣////】 「ああア、『あんなセー……』」

【嘲笑】在帶云帶包帶？

## 【男主角】 覚えてないのか?』

【雪乃】「……え、途中から少し曖昧ですが、全部覚えてこの」と思つたやうだ。

卷之三

すか分からぬ。様子を見ていれば、上手くいったみたいだけど……しばらく様子を見る必要がある。毎日信頼できる医療魔術ヒーラー術

「も呼んでいる」

〔圖版〕 - しがく

【男主人】「ダメと言つたらダメだ。しばらく、仕事は猫ミミに任せろ。少しくらいなら僕も手伝えるし、そもそも僕だつて家事ができないわけじゃないからね」

【猫】「あたしが頑張るからー、僕らは休んでねー！」

【男主人】「とりあえず、猫ミミも休憩すること。長ミミが起きたら、休む約束だろ？」

【猫ミミ】「はーい。それじゃあ、おやすみなさいーーー！」

SE（扉の開閉音）・ガチャ、ギイ、バタン

【長ミミ】「ご主人様、確認したいのですが……私は毒を盛られたのでしょうか？」

【男主人】「ああ、その通りだよ。猫ミミには、詳しい話はない。夜会の疲れで、ちょっと体調を崩したと言っている。右手は倒れた時にぶつけて怪我をした、ということにしてな……長ミミも、まだ少し休んだ方がいい。落ち着いてから話をしよう」

【長ミミ】「分かりました。もう一つだけ質問させてください」

【男主人】「ん、何だ？」

【長ミミ】「この記憶が正しいのか知りたくて……私が意識を失う直前、ご主人様とキスをしましたか？」

## 第82話『はつきりとした話を、誤魔化そうとしていた』

草原と平穏の国・男主人邸

【男主人】「…………」

【長ミミ】「…………」

【男主人】「あ……昨晩のことは、覚えてるんだよね？」

【長ミミ】「ええ、うつすらとですが……ただ、気を失う直前、ご主人様が私の右掌を切りつけたあたりから、記憶が曖昧です」

【男主人】「……使われた毒は、“火蠍の毒”<sup>アンタレス</sup>といつて、服毒した物の体内に流れ魔力を狂わせるんだ。もともとは、火蠍と同じ岩山に棲む靈鳥に対し適合した毒と言われてる」

【長ミミ】「なるほど、つまり、私の保有魔力の循環が阻害され、高熱を出していたということですね？ 例えるなら、換気をしないサウナのような」

【男主人】「うん、大体そんな感じかな。魔術による治療つていうのは、基本的に治療を受ける人の保有魔力に干渉するんだけど、この辺りは知っている？」

【長ミミ】「ええ、“治療系”<sup>ヒーリング</sup>と呼ばれる魔術系統の基本ですね」

【男主人】「今回の毒の場合、治療対象者の保有魔力の循環が狂っているため、魔術による治療はしにくいんだ。それこそ難易度の高い治療魔術の『完全蘇生』<sup>リインカーネイション</sup>か『神威祝福』<sup>ゴッドブレス</sup>くらいの魔術じゃないと効果がない」

【長ミミ】「ご主人様だったら、使えるのでは？」

【男主人】「いや、治療院や神殿の秘奥技とされる魔術までは使えないよ」

【長ミミ】「そうですか……では、私はどうして助かったのですか？ 血抜きした程度で治る毒ではないようですが」

【男主人】「あー、やつぱり気になるかな?」

【長ミミ】「……それなりには」

【男主人】「簡単に言えば、僕の魔力の循環と長ミミの魔力の循環を無理やり一つに繋げたんだ」

【長ミミ】「? ? ?」

【男主人】「水の濁つた小川に、大きな川との水路をつないで、無理やり綺麗な水の流れにした……みたいな?」

【長ミミ】「なるほど……」

【男主人】「で、保有魔力の循環は基本的に人間の体液、つまり血液なんかの流れに沿っているから……」

【長ミミ】「私どご主人様の水路を作るために掌を切りつけ……排水路を作るために、口腔粘膜による接触を行なつた、というわけですね?」

【男主人】「うん、まあ、そういうこと、かな? 理解が早くて助かるよ」

【長ミミ】「ご主人様、それは、俗に言つてイープキスという行為ですね」

## 第83話『冷や汗を流しながら、面会していた』

鉱山と武勇の国・黒騎士邸

【部下男】「…………」

【黒騎士】「部下男殿、さあ、お茶でも飲んで気持ちを和らげて頂きたい」

【部下男】「生憎オレは、アナタの様な武人の前でリラックスできるほど、豪胆じやないんですよ」

【黒騎士】「別に毒などは入れていないが?」

【部下男】「そりやそうだ、毒なんか入れなくとも、一瞬でオレの首を切り飛ばすくらいは可能でしょう」

【黒騎士】「別に、貴方の首を切るような命令は受けていない」  
【部下男】（ヤバイ、変な汗が止まらない……本気で怒った男主人様を初めて見た時を同じくらいいだ）

【黒騎士】「さて、さつそくだが、本題に入るが、よろしいか?」

【部下男】「こっちに選択権はないと思しますけど?」

【黒騎士】「ご理解頂けているようで、話が早い」

【部下男】「…………」

【黒騎士】「貴方が“不死の魔人”殿の関係者であることは分かつている」

【部下男】「ふむ、オレには“不死の魔人”なんて恥ずかしい名前の知り合いはいませんが?」

【黒騎士】「先ほどは、自分は豪胆じやないと言つていたわりには、なかなかどうして……。訂正しよう、森林軍第十一師団所属の部下男殿」

【部下男】（こっちの素性はモロバレってことか……しかし、まだ生きている、生かされているということは、まだ絶望的な状況では

ないのか？）

【黒騎士】「話を続けよう。俺の主が、そちらの男主人殿との会談を望んでいる」

【部下男】「はあつ？ どんな無理難題を言われるかと思いましたが、そんなことが可能だと？」

【黒騎士】「無論、直接あつて話すのは無理だらうが、『ビジョントーク投影通話』と言つよつた魔術を使えば可能だと聞いている」

【部下男】「確かに、お互に田印となる媒介を持つていれば、不可能じゃないが……そもそも、そっちの主は、確か……」

【黒騎士】「俺の主は、この國の第一皇女である鉄皇女様だ」

【部下男】「はい、分かりました。……と、オレが素直に返事する

とでも？ 何が目的ですか？」

【黒騎士】「さあ、俺にも詳しい話は聞かされていなくてな。これは俺の予想に過ぎないが、会談の内容は、今回の戦争についてになるだろう、と述べておこつ」

【部下男】（……嘘だな。ただ少なくとも、戦争について話し合いたいと言つのは本当か？）

【黒騎士】「他に何か質問が？」

【部下男】「返答は今すぐには無理ですね。いつまで待てます？」

【黒騎士】「事態は常に動いているからな、回答は早めに頂きたい」

## 第84話『なんだか、いい感じになつていた』

### 鉱山と武勇の国・宿屋

【黒服女】「お帰りなさいませ、部下男様」

【部下男】「ん、だだいま、お祖母様は？」

【黒服女】「ええと、いつもの酒場に行くと仰つてました」

【部下男】「そう。それじゃあ、オレは休むから、黒服女さんも休んでいいですよ」

【黒服女】「あ、あの？ それだけですか？」

【部下男】「それだけって？」

【黒服女】「わたしに言いたいことは、ありませんか？ わたしの素性はもうバレてるんですね？」

【部下男】「そうか、なんか変だと思つたんだけど……その口調が素なの？」

【黒服女】「どつちが素と言つ訳じゃありません、昔から気になる人の前だとテンションが上がつてしまつだけ……つて、そうじやありません！ もしかして、わたしの勇み足…？ 言わなくともいいこと言つちゃつた！？ 恥ずかしい！ もうお嫁に貰つてもらうしかないと思いませんか！」

【部下男】「おお、いつもの黒服女さんだ」

【黒服女】「部下男様の視線が、わたしの扱いには慣れて飽きてきたぜ」「イツつて物語つてますね！ そんな冷たい部下男様も大好きですっ！ 離れたくありません…！」

【部下男】「なるほど、もしかして、それは上がり症の一種なのですか？」

【黒服女】「ぐつ、やめてつ、そんな冷静にをわたしに分析ないでつ…！ これが、羞恥責めつてやつつですかー！？ 今なら、恥ず

かさで九死できる！ ああ、わたしの一生はどーに！ できれば、

部下男様の横にそつと寄り添つて歩む人生を希望つ！

【部下男】「黒服さんは黒騎士殿の部下ですよ。オレを見張る

任務はまだ継続中なのですか？」

【黒服女】「やつぱり、バレてるー！？」

【部下男】「うん、まあ、最初からある程度は疑つていたけど……」

【黒服女】「はうつ……あ、でも、最初に空腹で倒れていた所を助けてもらつたのは偶然で、任務はその後からいきなり言われただけですから！！ わたしと部下男様の出会いは、運命の必然つてやつです！！！ もう、これは……もじつ」

【部下男】「はいはい。夜も遅いから、大声はナシでね（手で口を押さえながら）

【黒服女】「もごももごもも、もー、もーもーもーもー……」

【部下男】「落ち着くなら、手を離すから」

【黒服女】「もごもー！ ふはあ……最初から疑つていたなら、どうして、わたしと一緒にいたんですか？」

【部下男】「あー……なんだ、その……」

【黒服女】「？？」

【部下男】「女人から、好意をもたれるのが久しぶりだったんで、オレも少しだけ舞い上がってたみたいですよ（照れ）」

【黒服女】「つ！？（真っ赤）

【部下男】「だから、まあ、もつしばらくは、このままの関係も悪くないかなって……少なくとも、この宿に逗留している間は、敵側とか味方側とか考えないつてことにしませんか？」

## 第85話『ちょっとだけ、飲みたい気分になつて』

鉱山と武勇の国・酒場

【部下男】「オレも」一緒によろしくですか?」

【白髪女】「おや? ずいぶんと早いねえ」

【部下男】「お祖母様が、何を想像されているかは分かりませんが

……」

【白髪女】「せつかく、アタシが気を利かせたつていうのにねえ」

【部下男】「変な気の回し方をしないでください」

【白髪女】「ふんつ、どうせ、微笑みながら『しばらくは、このままの関係でいたいな』とか言って誑かしたんだろお? ねえ?」

【部下男】「……盗聴の魔術でも使ってましたか?」

【白髪女】「図星かい。アンタは父親じゃなくて、アタシの亡くなつた旦那に似てるみたいだねえ」

【部下男】「お祖父様に?」

【白髪女】「そうそう、アタシも若い頃は色々と泣かされたもんだけよ」

【部下男】（お祖母様が泣く所なんて想像もつかない……）

【白髪女】「もちろん、その3倍は泣かせてやつたけどねえ」

【部下男】「あ……」

【白髪女】「なんだい、その『納得しました』って声は?」

【部下男】「はつ、いえ、別に、なんでもありません」

【白髪女】「それで、結局どうなんだい?」

【部下男】「あー、えー、その、見た目は結構好みですし、あの举动不審とも緊張した時に出るクセみたいなものだと思えば、全然可愛いと……」

【白髪女】「…………いや、そつおじやなくて、昼の話を聞いてる

んだけどねえ」

【部下男】「うう……」

【白髪女】「満更でもないってわけかい。こりゃ、曾孫の顔は思つたより早く見れそうだねえ」

【部下男】「あーあー（クイツ）。げほっげほっ、こっちのお酒はキツイですね」

【白髪女】「アタシは結構好みだけどねえ。もちろん好みといつても酒の話だけださ」

【部下男】「ぐつ……えつと、向こうが言つことは、この国的第一皇女が、男主人様と魔術による会談を望んでこられた話です」

【白髪女】「ふ~む……」

【部下男】「どう思いますか?」

【白髪女】「メリットとメリットでいえば、若干メリットに分があるねえ。そもそも、この国的第一皇女が男主人を騙す理由がないねえ。兄の敵討ち? 兄妹の仲が悪いと言つ噂しか聞かないしねえ、それもないだろ? いつそ素直に話に乗つてみるのも手だらうねえ」

え

## 第86話『白髪女は、気付いていた』

鉱山と武勇の国・宿屋

【白髪女】「やれやれ、あの程度で酔い潰れるようじや、アタシの孫とは思えないねえ。そういうや、あの酔い潰れ方は、旦那に似てるかも……。」

ところで、アンタは酒は強い方かい？ そんな所で“聞き耳”を立ててないで、中に入つといでよ。

もうちょっと寝酒を楽しもつかと思つてゐるんでねえ」

SE（扉の開閉音）：カチャ、キイ、パタン

【黒服女】「…………気付かれていたのですか？」

【白髪女】「盗聴系魔術は確かに魔力の隠密性は低いけど、魔術である以上、魔力の揺らぎは絶無じやないからねえ。分かる人は分かるもんや」

【黒服女】「白髪女様は、最初からわたしのことには気付いていたんですか？」

【白髪女】「うん、まあ、気付いていたと言つた、感じていたつていうのが正しいかねえ」

【黒服女】「わたしも未熟ですね……」

【白髪女】「いや、アタシも全部が分かつていただけじゃないんだよ。ただ、まとう空氣つてヤツかねえ。こればっかりは経験による勘としか言えないけど」

【黒服女】「そうですか……」

【白髪女】「別に、これから部下男の寝込みを襲いにいくてもいいんだよ？ 今なら前後不覚に酔つてゐし、朝起きて、アンタが隣で

寝てれば既成事実の出来上がりだ。アタシは見て見ぬ振りをしてあげるからさ」

【黒服女】「なつー？」

【白髪女】「おやまあ、ずいぶんと初心だねえ<sup>うぶ</sup>」

【黒服女】「か、からかっているのですか！ 部下男様といい、白髪女様といい、わたしは敵対国の諜報部員なんですよーー！ なんで、そんなに親しげなんですかーー！」

【白髪女】「そう受け取られてしまつたら、すまないねえ。そもそも、なんでアタシとアンタが敵対しないといけないんだい？」

【黒服女】「それはもちろん、わたしがこの国の軍人で、白髪女様たちは「草原と平穏な国」の軍人だからですーー！」

【白髪女】「はつ、つまらない理由だねえ。それじゃあ何かい？ アタシは、敵国の人間らしく、ここで四方八方に魔術で爆発を起させとでも？」

【黒服女】「そんなことは言つていません！」

【白髪女】「アンタの言つ、敵対国つてのは、そういうもんだよ？ 相手の国に住む人間と自分達は違う、だから、何をやってもいいんだ……。そうとでも思わなければ、戦争なんて起こせないもんさ」

【黒服女】「それは……」

【白髪女】「そして、そんなバカが1人か2人いれば、戦争つてのが起こつてしまうのが、国と戦争の怖さつてヤツだねえ。だから、アタシは、己の敵と認めたヤツと弟子以外には優しくしているのさ」

【黒服女】「…………」

【白髪女】「アンタはアンタの考えを持つんだねえ。アタシたちは、確かに敵対国の軍人かもしれないけど、アンタの敵になつたつもりはまだないんだよ」

第87話『東公爵から、協力を得ていた』

草原と平穏の国・東公爵別邸

【男主人】「…………」

SE（扉の開閉音）・ガチャ、ギイ、バタン

【東公爵】「よお、待たせたか？」

【男主人】「突然の訪問で申し訳ありません」

【東公爵】「男主人殿なら、真夜中に訪ねてきても構わんぞ？ ちょうど良い、夕食も食べていけ」

【男主人】「お誘いは嬉しいのですが、ひとまず、用件を……ステージオン フェイク サウンド……『スモールワールド虚像世界』」

【東公爵】「防諜にしちゃ、ずいぶんと物々しい結界だな」

【男主人】「先日の夜会ですが……僕のパートナーに“火蠍の毒”アンタレスが盛られました」

【東公爵】「！？ そんじやあ、長ミミ殿は……？」

【男主人】「僕の魔術による応急処置で何とか。今は少し衰弱していますが、命に別状はありません」

【東公爵】「そうか、そいつは良かつた……しかし、嫌がらせにしては、少々度が過ぎているな」

【男主人】「警告のつもりかもしません。まあ、弟大公を失脚させようと動いていることが、どこからか伝わったのでしょうか」

【東公爵】「相手の危機感を煽つてボロを出させるつもりだったのか？」

【男主人】「王子様から、どこまで聞いていますか？」

【東公爵】「大雑把な目的だけだ。弟大公派の一気に叩き潰すらし

いな。俺は大いに賛成だぜ、そっちの方が俺も色々とやりやすくなるからな」

【男主人】「現状は、状況がやや膠着じゅうせきしている感じです。お互い、攻め切るだけの手札が揃っていない感じですね」

【東公爵】「ふうむ……」

【男主人】「こっちとしても、後一步の所までは来ているのですが、最後の一歩が詰めれません……正直、今回の嫌がらせにしても、毒の入手経路を調べるだけ無駄でしょう」

【東公爵】「離反工作は？」

【男主人】「敵の勢力の切り崩しはもちろん行なっています。日和見ならまだいい方で……向こうで吸う蜜は甘いのでしょうか」

【東公爵】「裏切る旨味がなければ、裏切らないよな。沈みゆく船ならまだしも、まだ、豪華客船に見える船から下りたがるものは……」

【男主人】「ええ、今以上の要求を突きつけられても、それでは、第一の弟大公勢力を産むだけですし……こちらにとつて、条件が良すぎる場合、最悪の事態での裏切られる可能性も警戒しないといけません」

【東公爵】「苦労してんなあ」

【男主人】「ははは、東公爵様にそう言つてもらえれば、苦労も少し報われます。後一手……特に相手の勢力の詳細な情報が欲しい」

【東公爵】「いざと言う時は力を貸すが、そつだな……南の方には、俺の方から働きかけてみよつ」

【男主人】「助かります」

## 第88話『東公爵は、本氣で言つていた』

草原と平穏の国・東公爵別邸

【東公爵】「とにかくで、うちの娘のドコが不満なんだ？」

【男主人】「はつ？ いえ、すぐく有能で不満なんか、ありませんが……」

【東公爵】「いや、仕事の話じゃない。男と女が同じ部屋で同じ時を過ごしていて、指一本手を出さないなんて、お前、少しおかしくないか？ 母親似だから、ああ見えて、脱ぐと良い身体をしていると思うぞ」

【男主人】「おかしくありません！ そもそもが、一緒にいるのは仕事中じゃないですか！」

【東公爵】「何を言う、オレが若い頃は昼の仕事も夜の仕事も区別はしなかつたぞ。それとも、あれが、人間族相手じゃ、モノが役立たないのか？」

【男主人】「東公爵殿……王子様から変な話を吹き込まれていませんか！？」

【東公爵】「おう、エルフ族が2人に獸族が1人、合わせて3人の愛人に囲まれてウハウハしてるという話だろ。ずいぶんとマニアックだったんだな、お前」

【男主人】「愛人でもマニアックでもありませんっ！！」

【東公爵】「現にパートナーとして連れてきたのは、長ミミ殿だつたじやないか。お前はまだ未婚だし、夜会のパートナーに選んだけど、まったくの無関係です、とでも言い張るつもりか？」

【男主人】「うつ……」

【東公爵】「まあ、そこでだ。いい年をして、未婚でフラフラしているお前に耳寄りな計画だ。

副官女を正妻にすれば、今なら俺の領地を結納代わりにくれてやるべ。長ニミ殿には申し訳ないが、第一夫人で我慢してもらつてだな」

【男主人】「何の話をしていますか！？」

【東公爵】「いや、お前が俺の義理の息子になる計画だが？ 男なら自分の城に憧れるだろ？」

【男主人】「東公爵殿、冗談も程々に……」

【東公爵】「いや、娘のことをダシにしてまでからかうつもりはないぞ。いたつて真面目な提案だ。」

俺は無骨者だからよ。娘が小さい頃からどう扱つていいか分からず、不自由しないように、欲しい物は与えてやつたし、ワマガマはできるだけ叶えてやつた。バカな娘に育てちまつたかな、と思つたぞ。

ところが、ある口を境に急に良い女になりだしてな。話を聞けば、お前の事ばかり、最後に聞いたワガママが、軍の所属になつてお前の部下になりたいだ。こりやあ、気持ちは本物だと思うだろ」

【男主人】「…………」

【東公爵】「幸いにして、俺もお前が嫌いじやない。次期王候補の王子様の覚えも良い。他所の家に取られるくらいなら、お前を自分の家に取り込みたいつていうのは、不思議な話か？ なあ？」

【男主人】「…………僕を少し過大評価していませんか？」

【東公爵】「お前は、自分のことを過小評価しそぎだ。俺は、お前にやるならば、娘も領地も財産も惜しくないと黙つてるんだ。それがお前の価値だ」

第89話『猫////ちりちゃんが、溜息を吐いていた』

草原と平穏の国・孤児院

【猫////】「はあ……」

【赤髭男】「猫////ちりちゃん、何か悩み事でもあるのか?」

【猫////】「えつー? あたしは悩んでないよー!」

【赤髭男】「嘘をついてもすぐ分かるぞ。ワタシは猫////ちりちゃんの

2倍生きてるからな」

【猫////】「うー……」

【赤髭男】「話してみる。無理には聞き出すつもりはないが、人に話すことで解決する悩みだつてある」

【猫////】「ん~、別に悩みつて言つか……赤髭男さんは、“あんたれす”って知ってる?」

【赤髭男】「あんたれす……“火蠍の毒”かつ! 猫////ちりちゃんは、

その名前をド「で?」

【猫////】「あのね。長////さんは、その毒を飲まれたんだつて

……」

【赤髭男】「そうか……親しい人が亡くなつたのだな」

【猫////】「え? 長////さんは死んでないよ?」

【赤髭男】「……“火蠍の毒”アンタレスを飲ませて助かつたのか? それは、運が良い。それじゃあ、何を悩んでいるんだ?」

【猫////】「うー……あのね、この毒を飲ませたのつて、あたしに内緒だつたんだ」

【赤髭男】「内緒なら、なんで知ってる?」

【猫////】「えつと、その、こつそり耳を澄ませて聞いちゃつた。」

「主人さまも長////さんも、あたしの事を思つて話をしてくれなかつたんだと思つんだけど……モヤモヤしてて」

【赤髭男】「子ども扱いされたのが辛い？ それとも仲間はずれされたのが悲しい？」

【猫ミミ】「うーん、なんだろう…… 悲しいわけでも辛いわけでもなくて……」

【赤髭男】「ふむ……」

【猫ミミ】「なんか、こひ、自分のことがイヤになる…… みたいな……」

【赤髭男】「猫ミミちゃんは、その長ミミさんは、その長ミミさんも主人様も好きなんだよな？」

【猫ミミ】「うん！ 大好き！」

【赤髭男】「…… 2人の力になれなくて悔しい、とか？」

【猫ミミ】「あつ…… それ、かも…… そつか、あたしは悔しかったんだ」

【赤髭男】「ところで、その長ミミさんはどうして助かつたんだ？ 猫ミミちゃんは知らないかもしねないが、『火蠍の毒<sup>アンタレス</sup>』はかなりの猛毒なんだが」

【猫ミミ】「えっとね。」主人さまの魔術で治したんだって！」

【赤髭男】「ほう、それはすごい。猫ミミちゃんの『主人様は高名な魔術師なのかい？ それほどの腕なら、お年を召した御老人かな』

【猫ミミ】「ううん、若くてカッコイイよ！ 男主人さまって言うの！」

【赤髭男】「…… 男主人？ 猫ミミちゃんの『主人様は、第十一師団の男主人なのか？』」

【猫ミミ】「うーん……、副官女さんが確かそんな事を言ってたような気がする」

## 第90話『運命について、語っていた』

草原と平穏の国・男主人邸

SE（扉を叩く音）・「ノンノン」

【男主人】『僕だけだ?』

【長ミミ】「どうぞ、お入り下さい」

SE（扉の開閉音）・ガチャ、ギイ、バタン

【男主人】「ただいま、調子はどうだい?」

【長ミミ】「お帰りなさいませ。調子は完全に元通りです。そろそろ部屋の外に出て、仕事に復帰させてたいのですが、読書も飽きてきましたし」

【男主人】「そうか、それじゃあ明日から徐々に復帰してもうおつかな。だけど、しばらくの間は無理をしないように」

【長ミミ】「かしこまりました。ところでご主人様……」

【男主人】「どうした? やつぱり、どこか具合悪いのか?」

【長ミミ】「いえ、唐突な質問なのですが、ご主人様は“運命”的存在について、どう考えていますか?」

【男主人】「ほんと唐突だね……“運命”か、“人が起こすべきことはあらかじめ決まっている”と言う意味の“運命”かな?」

【長ミミ】「ええ、やはり、“運命”と言うのはあるのでしょうか?」

【男主人】「魔術師としては、存在すると言わざるをえないかな。魔術師の始祖が、魔術と言うのは“運命に介入する技である”として、定義したと言われているし」

【長三三】「ご主人様本人としてのご意見は？」

【男主人】「預言者の理屈と一緒にかな？ 預言者が、ある船が沈没する予言する。もちろん、お客はそんな船には乗らないだろ？」

「船は出港しなくなつて、結果として沈没もしなかつた」

【長三三】「つまり、預言者の予言は外れたわけですね？」

【男主人】「そこで預言者はこういつのうのさ。『私の予言のおかげで船は沈没せずに済んだ』つてね」

【長三三】「……結局ご主人様は、『運命』の存在を信じていませんですか？」

【男主人】「『運命』は存在すると思うね。だつて、全ての結果は“運命”的通りなんでしょ？ だとしたら、『運命』ほど、便利な言葉はないよ。」

「だけど、『運命』といつ言葉を逃げ道にするべきじゃないし、逃げ道にはならないとも思つてこるね」

【長三三】「逃げ道？」

【男主人】「そう、『運命』といつ言葉を使うこと 자체、無意味な事なんだ。その事を考えずに、『運命』のせいにして、自分のすべきことを放棄するのは違つと思つてる。……こんな答えで役に立つのかな？」

【長三三】「はい。十分です。ありがとうございました」

【男主人】「ん、それなら良かつた」

森林と調和の国・氏族長宅

- 【幼ミミ】 「…………あれ？」
- 【？？？】 「目が覚めましたか」
- 【幼ミミ】 「つ！ 魔術師さんと師団長さんはつーつ。」
- 【？？？】 「幼ミミちゃんが泣き疲れて、眠つているだけに帰られましたよ」
- 【幼ミミ】 「じゃあ、わたしも帰らなきや」
- 【？？？】 「どこへ？」
- 【幼ミミ】 「もちろん、魔術師さんたちのところだよ」
- 【？？？】 「それはダメです。今日からこの家が幼ミミちゃんの帰る場所に、幼ミミちゃんと私たちは家族になります。だから、幼ミミちゃんを危険な場所へ行かせるわけには行きません」
- 【幼ミミ】 「なんで？ 魔術師さんと一緒にいれば安全だよ？」
- 【？？？】 「その魔術師殿が私の両親に、幼ミミちゃんを引き取つてもううつように頼まれたのです」
- 【幼ミミ】 「ウソだつ！ 魔術師さんは、一緒にいてくれるつて言った！」
- 【？？？】 「幼ミミちゃんも聞いていたはずですよ。それで盛大に泣いて、魔術師殿を困らせて、疲れ果てて眠つてしまつたのです……」
- 【幼ミミ】 「ウソだウソだウソだつ！ 一緒に、ずっと、一緒だつて……」
- 【？？？】 「ずっと一緒にいる」と、幼ミミちゃんを大切に思うことは同じではありません」
- 【幼ミミ】 「え……？」

【？？？】「幼///ちやんは、魔術師殿が怪我をしてもこことこづ  
のですか？」

【幼///】「それはイヤだよー。」

【？？？】「なら、魔術師殿も同じ気持ちです。幼///ちやんに怪  
我をして欲しくない、危ない思いをして欲しくないからこそ、幼///  
ちやんがどんなに泣いても、危険な場所に連れて行きたくない  
のです。」

【幼///】「でも……でも……」

【？？？】「けれど、寂しい気持ちを感じるのは仕方のないことだ  
す。だから、いつか戦争が終わって、平和になつたら、魔術師さん  
たちに会いに行きましょう。私も一緒に付いて行きますから」

【幼///】「あなたは……？」

【？？？】「まずは自己紹介をしましちゃうか、私だけ幼///ちやん  
の名前を知つてこるのは不公平ですから。」

初めまして、私の名前は長///とここです。

今日から、幼///ちやんのお姉さんです。」

【幼///】「お姉さん……？」

【長///】「はい、私の方が年上ですか、お姉さんです。」

森林と調和の国・氏族長モ

- 【幼】「……」
- 【長】「……」
- 【幼】「……あの」
- 【長】「なんでしょう。」
- 【幼】「わたしと、長ちゃんは、その、家族になるの？」
- 【長】「はー。けど、元々私と幼ちゃんは血が繋がっているのですよ。」
- 【幼】「え？」
- 【長】「私の母と幼ちゃんの母は、実の姉妹ですから、私と幼ちゃんは本当は従姉妹ということになりますね」
- 【幼】「いとこ……」
- 【長】「それから、私と幼ちゃんが一度会っているのですけどね」
- 【幼】「い、いつ…？」
- 【長】「乳飲み子の時なので、幼ちゃんは覚えてないと思いますが……その頃は、とても小さくて可愛かったんですよ。もちろん、今も十分に可愛いのですが」
- 【幼】「ふ～ん」
- 【長】「後で面白いものを見せてあげましょう」
- 【幼】「面白いもの？」
- 【長】「ええ、私たちの母親たちが若い頃の肖像画です」
- 【幼】「見たいな……」
- 【長】「見たらきっとビックリすると思いますよ」
- 【幼】「ビックリ？ なんで？」

【長//】「それは見てのお楽しみです、」

【幼//】「じゃあ、今から見に行く……」

【長//】「その前に顔を洗って、先に食事をしましょ。気づいていないかもしだせませんが、長に間寝ていたのでお腹も空ってきてるはずです、」

【幼//】「分かった。えっと、長//ちゃん、井口はどうか。」

【長//】「一緒に付いてこきます。それから、長//ちゃんじやなく、お姉さんと呼んでくれませんか？ そう呼ばれたると、妹ができる嬉しいのです、」

【幼//】「え、あ……お姉さん？」

【長//】「ふむ、まあその通り慣れるでしょう。では、行きましょっか」

～幕間～『従姉妹3』

森林と調和の国・氏族長宅

- 【幼//】 「 いただきます……」
- 【長//】 「 はい、召し上がれ」
- 【幼//】 「 (ぱくり) あ……」
- 【長//】 「 ん? どうかしましたか?」
- 【幼//】 「 お母さまのシチューと同じ味がする……」
- 【長//】 「 それは、きっと私たちの母が、母の母から、つまり、私たちの祖母から教わった味だからでしょう。私も母から、このシチューの作り方を教えてもらいました」
- 【幼//】 「 ……」
- 【長//】 「 今度、幼//おやんこも、このシチューの作り方を教えてあげますね」
- 【幼//】 「 うん……」
- 【長//】 「 気になる男の人がいたら、このシチューを作つてあげるところですよ」
- 【幼//】 「 男の人?」
- 【長//】 「 ええ、家庭的な料理ができる女性は、それだけで“オーラーに棍棒”と言います」
- 【幼//】 「 えつと、お願ひします」
- 【長//】 「 任せっきりでください。こんなに幼//おやんに思われて、魔術師殿は幸せ者ですね」
- 【幼//】 「 え、ええつ!?」
- 【長//】 「 違うんですか?」
- 【幼//】 「 なんで魔術師さんの」とを考へてるのが分かつたの
- ……?」

【長】「幼ちゃんも、立派なレディですからね。すぐに分かりましたよ」

【幼】「そ、そ、うなんだ……あれ、なんか、ムズムズする」

【長】「照れちゃって可愛い」

【幼】「て、照れてないよ？ ムズムズするだけだよ？」

【長】「はいはい、それじゃあ、この飯も食べちゃいましょう」

【幼】「うー……（もぐもぐ）」

【長】「ちなみに、幼ちゃんであつても、好き嫌いはダメですよ。私の料理を残すのは許しませんから」

【幼】「は、はー。」

【長】「よろしく」

## 第91話『猫ミミがりやさんに、お願ひをされていた』

草原と平穏の国・男主人邸

- 【猫ミミ】「ねえ、ご主人さま……」
- 【男主人】「ん？ 猫ミミ、どうした？」
- 【猫ミミ】「ご主人さま、明日はお休みだよね？」
- 【男主人】「そうだけど、どこかに遊びに行くとかはちょっと無理かな」
- 【猫ミミ】「えっと、遊びじゃなくてね。その……あたしと一緒に行つて欲しい所があるの」
- 【男主人】「行つて欲しい所？」
- 【猫ミミ】「うん、ご主人さまに会いたいって言う人がいるんだ」
- 【男主人】「僕に？ どこまで連れて行くつもりなのかな？」
- 【猫ミミ】「えっと……下町の孤児院なんだけど……」
- 【男主人】「ああ、猫ミミがお世話になつている孤児院ね」
- 【猫ミミ】「えつ？ ご主人さま知つてたのー？」
- 【男主人】「あ、えーと、長ミミにちょっと聞いててね。僕もいざれ挨拶に行こうと思つてたんだけど……明日じゃないとダメなのがな？」
- 【猫ミミ】「うー……できれば、早く会いたいって言つてた」
- 【男主人】「僕に会いたい人つてその孤児院の院長とか？」
- 【猫ミミ】「ううん、赤髭男さんつて言う人なんだけど……」
- 【男主人】「赤髭男……赤髭男ねえ？ 僕の知り合いにはいないから、向こうが一方的に僕のことを知つてているんだろうけど。猫ミミは何か聞いてる？」
- 【猫ミミ】「ううん、知らない。あたしには教えられないことなんだつて……」

【男主人】「一体どういう理由があつて、僕に会いたいんだらう。その人つて、孤児院の人？」

【猫ミミ】「下町の路地裏で倒れていた所を、孤児院のみんなで助けたの。それから、孤児院のお手伝いとかをしてくれてて、とつても頼りにされてるんだよ」

【男主人】「倒れていた？」

【猫ミミ】「うん、最初会つた時はね」

【男主人】「そんな危ない。もし、その時倒れていたのが悪い人だつたらどうなると思う？」

【猫ミミ】「でも……悪い人そうじゃなかつたんだよ。えつと、雰囲気がご主人様とちょっと似てるかな？」

【男主人】「僕に？」

【猫ミミ】「うん、長／＼さんとお喋りして静かになつた時の『主人様にそつくりなんだよ！』

【男主人】「……」

## 第92話『人と人は、どこかで繋がっていた』

草原と平穏の国・孤児院

【男主人】「初めまして、老院長殿。うちの猫////がお世話になつてゐるようだ」

【老院長】「いやいや、なんの、うちの方こそこそ猫////がお世話になりっぱなしじゃ」

【男主人】「ここは活氣があつて、良い孤児院ですね」

【老院長】「まあ、しかし、孤児院に活氣なんぞないほうが世の中は平和なのじやがの」

【男主人】「それは確かに仰るとおりです。とにかく、赤髭男さんと語るのは?」

【老院長】「奥にある個室で待つておる。ああ、それと、男主人殿と余人を交えず、2人だけで話したいそうじゃが、よろしいか?」

【男主人】「ええ、その赤髭男さんが、どのような方かは分かりませんが、僕の方に問題ありません」

【老院長】「この廊下の突き当りの部屋、じや」

【男主人】「では、失礼します……」

SE(扉の開閉音)・ガチャ、ギイ、バタン

【男主人】「……」

【赤髭男】「お久しぶりですね、男主人殿。……安心して下さい、今のワタシにアナタたちへの害意はありません」

【男主人】「その言葉を信じじると?」

【赤髭男】「できれば、信じて欲しいです。……その上で、ワタシ

と取引して頂きたい」

【男主人】「取引？」

【赤髭男】「男主人殿が知りたいことを、ワタシが知っている範囲で全てお話しします」

【男主人】「……求める見返りは？」

【赤髭男】「ワタシが、“赤髭男”であることの証明が欲しい」

【男主人】「つまりは……アナタの過去を全て無かつたことにして欲しい、という意味かな？」

【赤髭男】「そのような解釈で間違いありません」

【男主人】「では、僕は貴方のことを信じましょう」

【赤髭男】「！？」

【男主人】「本当にですか？」

【男主人】「嘘かもしませんよ？」しかし、ここでお互いを疑い続けていても、何の進展にはなりません。仮に貴方の情報が罫だとしても、その事実を情報として事態を推し進めるだけです。

それに……ずいぶんと顔つきが変わりましたね。今の貴方なら話をしてもいい、そんな気分になつただけです。悪領主殿」

## 第93話『変わったことを、認めていた』

草原と平穏の国・孤児院

【赤髭男】「変わりました……か？」

【男主人】「ええ、少なくとも僕が見る限り、今の貴方ならば信用に足ると思わせるだけの雰囲気があります。こういづのは、僕より年配の貴方はご不快かもしけませんが」

【赤髭男】「いえ、むしろ、何か嬉しいですね」

【男主人】「それでは、本題に入る前に……その口調は、素じゃないんですね？　喋り易いようにしてください、僕もその方がやりやすいので」

【赤髭男】「そういうことなら、ん、普通に喋らしてもいいわ」

【男主人】「構いません。ちなみに僕の方は半分くらい、これが素なので気にしないでください」

【赤髭男】「さて、何でも話すと言つたが、何から話せばいい？」

【男主人】「……まず、弟大公を失脚させるほどの情報は？」

【赤髭男】「そこまでを期待されているなら、悪いが直接的には無理だ。まずは証拠がない。ワタシの証言だけでは、自作自演という疑惑が残り、大勢に何も影響を与えない可能性も高いだろう？」

【男主人】「そうでしょうね。いくら恩赦を出すとしても、一度罪人とされた貴方の証言だけで、弟大公を追い詰めるのは無理でしょう」

【赤髭男】「ワタシがやつっていたのは、先代からの徴税違反及び違法な収賄、その贈賄先の一つが弟大公だった」

【男主人】「弱いな……例えば、弟大公に不満を持っている相手は？」

【赤髭男】「それなら、いくつかは心当たりはあるな」

【男主人】「離反に応じそうな相手、ただ離反させた後に裏切られそうな相手は困るね」

【赤髭男】「難しいことを言う。すぐに裏切ってくれて、自分たちを裏切らない相手が欲しい、と言っているぞ」

【男主人】「理想的な条件つてのは、いつでも厳しいね（苦笑）」

【赤髭男】「ああ、逆に王子様側から、弟大公側に情報を流していれる相手は何人か分かる」

【男主人】「それは助かりますね。ああ、そうだ……悪領、ちがつた、赤髭男殿。西との連絡を取っていたというが、相手は？」

【赤髭男】「弟皇子派の幹部の一人だ。今回の戦争に対して、王国の情報を流して欲しいというモノだな。情報の重要度によっては、数百万イエンの報酬をもらっていた」

【男主人】「報酬、ね……」

【赤髭男】「他には？」

【男主人】「うん、悪いけど、思考がまとまらない。今日の所は、まず弟大公側の勢力について、洗いざらい話してもらおうか」

【赤髭男】「構わない。問題は無限に思えて、時間は有限だからな」

## 第94話『やれりじゅを、楽しんでいた』

草原と平穏の国・男主人邸

【猫//】「長//わん、大丈夫？」

【長//】「あいがとう、猫//ちゃん、お掃除とか上達しましたね。おかげで、今日はとても仕事が楽でした」

【猫//】「えへへ、長//わんが倒れていた分、頑張ったんだよー！」

【黒//】「長//の方//、病み上がりなんだ、あまり無茶はするなよ」

【長//】「ええ、倒れてしまつたら、また2人の負担になつてしまこまづからね」

【黒//】「負担とか、そつこつ問題じやない。むつ少し自愛じろ、アタシはオマエのことを心配してるんだ」

【長//】「ありがと、わこまづ。けど、黒//わん、私はこいつやつて家事を行なえるのが嬉しいのです。ですから、私のためを思つなり、できるだけ、私が家事ができるよつて手伝つてください」

【黒//】「そんなに楽しいものかねえ。アタシは庭の草むしりを魔術でガーッとやるだけは、楽しいけどな」

【長//】「乐しー、と、嬉しいは、少し違います。もちろん、乐しみながら出来るなり、それに越したことはないですが……」

【猫//】「あたしは乐しーよー、だつて、昔は、その日一日を過ごすのに精一杯だったけど……今は、色々なことをやらせてもらつてるし、教えてもらつてる。料理をしたり、掃除をしたり、洗濯をするのも楽しいよー？」

【黒//】「うーん、あたしはピンとこないな」

【長//】「猫//ちやんは、メイドになるべくして生まれたよう

な逸材ですね」

【獣//】「おおー、なんかあたしつて、か！」こいつまたー。」

【長三】「猫ちゃんならば、もしかしたら、100年に1人

現れるか現れないかの、マスター・オブ・メイドになれるかもしね  
ません」

【猫】「ますたー・おぶ・めいビー・? なんかす!」こっぽさんが  
100倍へりいになつたね!」

【姫川姫】「マスター・オブ・メイドは、メイド式十八般に通じており、全てのメイド式を極めたものだけが名乗ることができる称号です」

【默ノノ】「……」

【長】「残念ながら、私の才能では、マスター・オブ・メイドを名乗るにはできませんでした。猫ちゃん、私の意志を継げるのには猫ちゃんしかいません」

【猫】「さん、あたしに任せてーー！」必ずマスター・オブ・メイドになるからーー！」

【黒川】「……………楽しいか？」

【四三四】「ええ、割と楽しいかもしねません」

# 【猫】 - なんどりても！」

## 第95話『男主人は、偶然信じていた』

草原と平穏の国・王宮（王子執務室）

【王子様】「戦争の状態は一進一退を繰り返しているらしい。物量で推す鉱山軍を防衛拠点と地の利で防ぐ森林軍と草原軍の連合とう流れだ」

【男主人】「7年前と同じような感じですね」

【王子様】「規模はだいぶ違うだろうがな。とにかく、長ミミ殿の体調はどうだ？」

【男主人】「後遺症もなく、昨日から屋敷の仕事に復帰しています」

【王子様】「そうか、それは良かつた。で、何か進展があつたのか？」

【男主人】「ええ、悪領主を発見しました……そして、僕たちへの協力を取り付けました。今は、その情報の裏づけを取つていてる所です」

【王子様】「……話が美味過ぎるな。罷じやないのか？」

【男主人】「いえ、それはないでしょ？」

【王子様】「言い切つたな」

【男主人】「あまりに偶然が重なりすぎていて、逆に馬鹿馬鹿しくなるくらいです。この話が罷だとして、それを弟大公派の誰かが描いたというなら、いつそ、演劇の台本でも書いてる方が似合つていますよ」

【王子様】「そんなにか？」

【男主人】「詳しい事は、いずれ茶飲み話にでも語ります」

【王子様】「ああ、早くゆっくり茶を飲みたいな。どうせなら、オマエの家でご自慢のメイドさんに注いでもらえるといいな。ボクは、まだ新しい2人は紹介してもらつてないんだよな」

【男主人】「そもそも、長ミミも紹介したわけじゃありませんけどね」

【王子様】「あれ？ そつだっけ？」

【男主人】「その都合の悪いことをすぐに忘れた振りするの通じませんから」

【王子様】「ふむ、心外だな。こう見えて、この演技で何十人もやり過ごしているんだぞ」

【男主人】「そ・れ・は！ 貴方の権力が有無を言わせていないだけです……」

【王子様】「おおっ、そういう見方もあるな。なるほど、やはり他人の意見というは重要だな」

【男主人】「そのさも今初めて新しいことを知ったような振りも通じませんから」

【王子様】「なんだつて、それじゃあ、後は……」

【男主人】「色仕掛けも通じませんよ？」

【王子様】「……つまらん男だな」

【男主人】「つまらなくて結構です。というか、幼馴染に何を求めてるんですか？」

【王子様】「せめて、オマエが女だったら、もうちょっとと楽しめたんだろうなあ」

【男主人】「今ほど男に生まれて良かったと思えた時はありませんね」

第96話『人知れず、旅立とつとじていた』

草原と平穏の国・孤児院

【赤髭男】「！」

【老院長】「おや？ こんな朝早くどうなさいたかな？」

【赤髭男】「いえ、少し散歩に……」

【老院長】「ふむ、散歩とこりには、装いがまるで旅人のように見えるがの」

【赤髭男】「老院長殿こそ、なぜこんな時間に？」

【老院長】「年寄りの朝は早いものじやよ。それに少々胸騒ぎがしての、まあ、原因は悪くもなく良くもなく、といったところじや」

【赤髭男】「……」

【老院長】「少し待つておれ……」

【赤髭男】「？」

【老院長】「……ん、待たせたの（手に持っていた包みを渡す）

【赤髭男】「（包みを解く）これは……」

SE（抜剣する音）・チャキ……

【赤髭男】「……剣？ 使われている素材がこれだけの質ならば、決して安物ではない？」

【老院長】「儂が以前使っていたもんじや。錢別にやるから、持つてくがよい」

【赤髭男】「こんな高価なものを、もうつ理由がない」

【老院長】「それなら、何時か返しに来なさい。それまで預けるだ

け、ところどもどうじや？」

【赤髭男】「老院長殿……ワタシがどこに行くのか、存知なのですか？」

【老院長】「ここや、知らん」

【赤髭男】「なら、なぜ、これをワタシに……」

【老院長】「お主は剣士じやうつ。手を見れば分かる。剣を持たぬ剣士ほど見苦しきものはない、と思つただけじや。以前のお主に剣は必要なかつた、しかし、今のお主は剣を必要としている。儂の見当違いかの？」

【赤髭男】「いえ……」

【老院長】「ああ、そうだ。何か猫ねこやんにひきだぬことはあるかの？」

【赤髭男】「……それなら、ワタシはまだ生きていて良かつたようだ、と」

【老院長】「ふむ、伝えておく。では、達者での」

【赤髭男】「……では（ペース）」

## 第97話『猫ミミちゃんは、変わらつとしていた』

草原と平穏の国・男主人邸

【男主人】「（ずずつ）……そつにえは、2人は？」  
【長ミミ】「最近、黒ミミちゃんは猫ミミちゃんに稽古を付けている  
そうです」

【男主人】「稽古？」

【長ミミ】「ええ、黒ミミちゃんも教え甲斐があるといつていました」

【男主人】「そうなのか……」

【長ミミ】「なかなか筋がいいようですよ。元々獣人族は身体能力  
に優れていますからね」

【男主人】「というか、黒ミミの専門つて、アレだよな」

【長ミミ】「猫ミミちゃんの種族として、適性があるみたいですが」

【男主人】「うーん」

【長ミミ】「どうかされましたか？」

【男主人】「いや、ちょっと複雑な気分でさ」

【長ミミ】「何事もできないよりも、できる」と多いほうが良い  
でしょう」

【男主人】「でも」

【長ミミ】「暗殺師の技であっても、毒を知らずに解毒はできません。  
それに、毒も薬のうちと言つではありませんか？ 結局は使う  
人の心次第……ご主人様がよくご存知のはずです。  
それから、ご主人様は少々過保護すぎます」

【男主人】「そうかな？」

【長ミミ】「ええ、猫ミミちゃんを真綿で包むようにして、一生の  
面倒見るつもりですか？ 多分、ご主人様が望めば猫ミミちゃんは  
否とは言わないかもしだせませんが……」

【男主人】「うつ……でも、それとこれとは、話が……」

【長ミミ】「少し違うかもしだれませんが、究極的にはそういうことです。もちろん、猫ミミちゃんが誤った道に進もうとしているならば、正してやるのは身内としての権利でしょ。しかし、猫ミミちゃんが成長しようとしているのを阻むのはどうでしょ？」

【男主人】「それもそうか…………といひでさ」

【長ミミ】「何でしちゃうか？」

【男主人】「もしも、僕が長ミミのことを真綿で包むように一生大事にしたい、って言つたらどうする？」

【長ミミ】「それは少々困つてしまいますね」

【男主人】「ほうほう？（してやつたり）」

【長ミミ】「私の方も、ご主人様を真綿で包むように大事にしたいと思つていてますので（さらり）」

【男主人】「…………お茶、お代わりくれる？」

【長ミミ】「はい、かしこまりました」

第98話『会談の条件を、提示していた』

鉱山と武勇の国・黒騎士邸

【部下男】「忙しい所失礼します。男主人様と連絡が取れましたので、その報告に参りました」

【黒騎士】「いや、最初にお願いしたのはこっちだからな。先日の返事を頂けると思ってもいいのか?」

【部下男】「ええ、その件です」

【黒騎士】「で?」

【部下男】「魔術による会談をお受けする、というのがコチラの答えです」

【黒騎士】「それは良かつた」

【部下男】「つきまして、いくつかの条件を出させていただきたい」

【黒騎士】「それで、その条件とは?」

【部下男】「一つ目、会談に対して、両方から2名まで立会人を出す。コチラは、オレともう一人」

【黒騎士】「次は?」

【部下男】「二つ目、通話に必要な魔術の行使は、コチラが執り行う」

【黒騎士】「ふむ」

【部下男】「三つ目、会談の内容については参加者のみの機密とする。ただし、その会談の結果次第では、その制限を緩めることも考慮する」

【黒騎士】「それで終わりかな?」

【部下男】「いえ、最後4つ目、先の3つの条件のいずれかが破られる場合、会談は失敗したものとし、会談はなかったものとして扱う……以上です」

【黒騎士】「今度は、俺が即答するわけにはいかないようだ。時間をもらいたい。ただし、明日には返答しよつ」

【部下男】「もちろんです」

【黒騎士】「ところで、もう1人の立会人は“靈の賢者”殿だらうか？」

【部下男】「……まあ、隠す必要は、ないでしようね。ええ、オレの祖母が立ち会つます。通話に必要な魔術の行使も祖母が行ないます。何か問題がありますか？」

【黒騎士】「いや、むしろ、賢者殿が立ち会つてもうつた方が、問題が少なくなるだろつ」

【部下男】「では、そういうことで……何か、今のうちに話しておくれことはありますか？」

【黒騎士】「今すぐに話せる」とは、特にないな

【部下男】「それつじやあ、また明日に」

【黒騎士】「また明日……」

## 第99話『妖艶女に、仕事を頼んでいた』

### 森林と調和の国・有名娼館

【妖艶女】「あらやだ、本当に男主人様じゃないかい」

【男主人】「客に向かつて開口一番それか?」

【妖艶女】「最近、色々と忙しいみたいじゃないか。こんな所で油を売つて大丈夫なのかい?」

【男主人】「油を売りに着たんじゃなくて、買いに来たんだけどね」

【妖艶女】「やれやれ……それで?」

【男主人】「今すぐに“闇に入れる”娘は何人いる?」

【妖艶女】「そうだね。ベテランだけなら2人、若手を入れて5人で所かね」

【男主人】「ん……少し足りないか。既に“闇に入っている”ベテランも呼び戻せないかな?」

【妖艶女】「……それなら、ベテランを後3人くらいは融通できなくはないけど。そんなに人手が必要なのかい? アンタの所には王子様づきの子だつているだろうに」

【男主人】「いざ、という時のために万全を期したいんだ」

【妖艶女】「そこまでの仕事と?」

【男主人】「ん、ボクの長年の苦労が実るかどうかの瀬戸際つてやツかな」

【妖艶女】「それじゃあ、しそうがないね。うち一番のお得意様のお願いだ」

【男主人】「助かる」

【妖艶女】「なあに、きちんとお金をいただくからね」

【男主人】「前金で250万イェン、後は必要経費と結果に応じて払うよ」

【妖艶女】「ずいぶん慣れたもんだねえ。相場が分かってるじゃないか……それで問題はないよ」

【男主人】「お陰様で、色々と鍛えさせてもらつたからね」

【妖艶女】「一番厄介そうな所は、アタイ自身が入つてやるよ」

【男主人】「え？」

【妖艶女】「何驚いてるんだ。アタイだつてまだまだ腕は落ちちゃいないよ？」

【男主人】「いや、それなら、さつきの金額じゃ……」

【妖艶女】「問題はないさ。ベテラン5人と若手3人だろ？ どうしてもつていうなら、成功報酬に色を付けてもらおうかね」

【男主人】「……了解、成功報酬は期待してね」

【妖艶女】「それじゃあ、詳しい話を聞かせてもらおうか」

## 第100話『妖艶女から、求められていた』

森林と調和の国・有名娼館

- 【男主人】「……とまあ、依頼の打ち合わせは、こんな所かな」
- 【妖艶女】「それじゃ、後はアタイに任せてもううよ。何か動きがあり次第知らせればいいんだろ?」
- 【男主人】「うん、任せたよ」
- 【妖艶女】「ところで、さつきの事後報酬の話で一つ頼みたいことがあるんだけど、いいかい?」
- 【男主人】「ん? 何か要望があるの? あまり無茶は頼みじやなければ引受けけるけどね」
- 【妖艶女】「そんなに無茶なことじやないさ」
- 【男主人】「ふうん」
- 【妖艶女】「あのね、この仕事が終わったら、男主人様の子が欲しいんだけどさ」
- 【男主人】「……僕に子供はいないけど?」
- 【妖艶女】「そうだね、知ってるよ。ああ、アタイにもバレてない隠し子がいれば別だけどさ」
- 【男主人】「子供って、どこの誰が産むんだよ!?!」
- 【妖艶女】「ん? 男主人様は子供を産めるのかい?」
- 【男主人】「産めないけどねつ!?!」
- 【妖艶女】「だよな……いや、魔術で産めたりするのかと思つたよ」
- 【男主人】「妖艶女は、魔術を一体なんだと……」
- 【妖艶女】「それじゃあ、しうがないね。アタイが産むしかないだろ?」
- 【男主人】「…………ちょっと待とう。話を整理したい」
- 【妖艶女】「整理するまでもなく、単純な話だと思うけどね」

【男主人】「まず、仕事の事後報酬の話だつたよね?」

【妖艶女】「そうだね。さすがに仕事前に仕込むのはちょっと心配だしね」

【男主人】「で、妖艶女は僕の子が欲しいけど、僕に子がないから、妖艶女が産む、と」

【妖艶女】「大雑把な筋は間違えてないな」

【男主人】「途中をざつくり無視したからね。え? そういうことなのか?」

【妖艶女】「いや、そんな質問されても分からぬよ。どういうことなのかい?」

【男主人】「あー、だから、妖艶女は、何で僕の子が欲しいんだ?」

【妖艶女】「ああ、大丈夫大丈夫、財産を分けるとかは言わないからさ……なんていうか、人恋しくなるのさ。この年で一人身だとね」

【男主人】「それなら、何も……何でわざわざ僕を指名しなくてもいいだろ。そもそも冗談か? 笑う所だつたか?」

【妖艶女】「不粋な質問をしてくるね。男主人様に冗談で言える話だと思うかい?」

【男主人】「……」

【妖艶女】「確かに、子供が欲しいだけなら……そこらの孤児院からつれてきてもいいし、適当に客の若い男を捕まえて仕込んでいいだろうさ。けどね、アタイは男主人様の子……が欲しいんだよ」

## 第101話『妖艶女から、説明されていた』

森林と調和の国・有名娼館

【妖艶女】「あ、先に言つておくれど。アタイは別に男主人と結婚したり、財産が欲しいと言つていいわけじゃないだよ」

【男主人】「けど、僕の子供が欲しいと言うのは……」

【妖艶女】「だから、それは、言葉どおりの意味さ。男主人様はくれるもんくれたら、後はアタイが一人で上手くやるからさ。念のため、何回か手伝つてくれる嬉しいけどね」

【男主人】「どう言つつもりだ？」

【妖艶女】「んー、よく分からないつて顔だね」

【男主人】「そりや そうだろ？ 「ください」と言わられて「どうぞ」つて渡せるもんじやないよ」

【妖艶女】「渡せないもんかい？」

【男主人】「少なくとも僕は無理だね」

【妖艶女】「お仕事のお礼にさ、ちょちょいっとさ。減つてもすぐ  
に増えるじやないか」

【男主人】「な・に・が・だ・！」

【妖艶女】「いやん、アタイに何を言わせたいんだい？」

【男主人】「…………」

【妖艶女】「おや？ そんな困つたような顔をさせたいわけじゃないんだけどねえ（微笑）

【男主人】「困つたようなじやくて、困つてるんだよ。話が唐突過ぎてついていけない（苦笑）」

【妖艶女】「だから、今すぐにじやなくて、今回の依頼の事後報酬について言つてるんじゃないか」

【男主人】「その報酬の要求自体が唐突だつて言つてるんだ」

【妖艶女】「うへん、もつと説明しないと分からぬもんかねえ?」

【男主人】「ああ、さつぱりだ」

【妖艶女】「女心が分からぬ男はもてないよ?」

【男主人】「今限りで、僕の一部だけが変なもて方をして困つてゐるけどな」

【妖艶女】「ははは、そんなヤケつぱちな皮肉を言つほど追い詰められてるんだねえ」

【男主人】「追い詰めてる本人が……」

【妖艶女】「んー、実はさ。アタイも結構唐突な思いつきだからさ。上手く説明できぬんだよねえ」

【男主人】「はあ……?」

【妖艶女】「一言で言えば、衝動的つてヤツかな? ほら、市場で美味しそうな揚げ菓子を見つけて、思わず買い食いしたくなるような。そして、今を逃すと後で絶対に後悔する、そんな気持ちなのさ」

## 第102話『妖艶女が、可愛く見えていた』

森林と調和の国・有名娼館

- 【男主人】「揚げ菓子……オヤツ感覺つてのが、ちょっと凹むな」
- 【妖艶女】「うつ……わ、悪気はないんだよ？」
- 【男主人】「まあ、悪気はないとしてもね。もうひとつとマシな例えがなかつたのか……？」
- 【妖艶女】「上手く説明できないんだから、しあうがないだろ」
- 【男主人】「ん？ もしかして……緊張してる？」
- 【妖艶女】「誰も照れ隠しなんかしてないぞ！」
- 【男主人】「…………えつ？」
- 【妖艶女】「あつ…………」
- 【男主人】「…………」
- 【妖艶女】「…………」
- 【男主人】「えーと……照れ隠しなんだ？」
- 【妖艶女】「バカつ！ 改めて言うなつ！」
- 【男主人】「あ、『ごめん……つて、謝る』ことなのか？」
- 【妖艶女】「知るかつ！」
- 【男主人】（うーん、意外な一面が……あれ？ サツキまでと違つ感じにドキドキしてきたぞ）
- 【妖艶女】「とりあえずは、まあ、そういうことだ」
- 【男主人】「そういうこと、か」
- 【妖艶女】「さつきも言つたように、男主人様との子供が欲しいだけなんだ」
- 【男主人】「……それは、僕の力のことを知つて言つてるんだな？」
- 【妖艶女】「はつ、強い子供が生まれるなら、私も守つてもらおうかね」

【男主人】「その子が化け物と呼ばれてもか?」

【妖艶女】「そうしたら、人里離れた山奥で母子2人仲良く暮らす  
さ」

【男主人】「本氣か?」

【妖艶女】「本氣さ……おつと、今日の所はもう帰ってくれないか  
?」

【男主人】「しかし……」

【妖艶女】「依頼が終わつて、報酬をもらつ時に、一緒に返事を聞  
かせて欲しいんだ。今、返事を聞いちまつと、どっちであれ、依頼  
の仕事に影響しそうだからな」

【男主人】「……分かつた。それじゃあ、後は頼んだ」

【妖艶女】「ああ、任せときなよ」

【男主人】「一応言つておくが、くれぐれも無茶はするなよ」

【妖艶女】「もちろん、分かつているさ」

第103話『好みはすべて、掌握されていた』

森林と調和の国・男主人邸

【男主人】（そういえば……。）

目玉焼きは固焼き半熟。

サラダのドレッシングは塩と油を控えめ。

肉は鳥の胸肉か牛の赤身。

スープの出汁は干し魚。

ワインは白よりも赤。

コーヒーは砂糖なしでクリームを少し。

オヤツは酸味の強い柑橘類、もしくは甘さを控えたゼリーか焼き菓子……）

【長三】「ご主人様、何か？」

【男主人】「あ、いや、『めん……』」

【長三】「言い訳もなしに謝るといつ」とは、私に対しても、きっと口に出して言えない様なことを……」

【男主人】「言い訳はあるよ……すごく言い訳がしたいな！」

【長三】「……」主人様、言い訳をするとは男らしくないです？」

【男主人】「どうすりや良いんだよ……」

【長三】「あえて言うのでしたら、一つ面白くなる方向で」

【男主人】「ねえ、長三は僕に何を求めてるのかな？ その所を一度聞かせて欲しいかな！？」

【長三】「申し訳ありません、その希望に沿うわけには参りません。……主人様が泣き出すとけませんので」

【男主人】「……泣くことが前提！？」

【長三】「勝算は五分五分です」

【男主人】「いやいや、今までの会話でビート勝算が必要な勝負があつたんだよ！？」

【長ミミ】「主人様、メイドを前にする時は『常在戦場』の心得が必要です」

【男主人】「そんな血臭漂うメイドはイヤヤーだーっ！」

【長ミミ】「……で、私を見ながら、何を考えてらしたのですか？」

【男主人】「はあ……、ちょっと最近の食事のメニューをね」

【長ミミ】「なにか不備があつたのでしょうか？」

【男主人】「いや逆々、すっかり好みが把握されちゃつたな、って思つただけだよ」

第104話『戦いに行く覚悟を、決めていた』

草原と平穏の国・王宮（王子執務室）

- 【王子様】「ふう、何とか、ここまで来たな」
- 【男主人】「明日の王宮議会で、弟大公の辞任に追い込めますね」
- 【王子様】「それだけで、表立った力の何割かは削れるだろう」
- 【男主人】「油断は禁物ですけどね」
- 【王子様】「おいおい裏の権勢も削っていくさ……それより、先に考えるべきことがある。気持ちは変わらないのか？」
- 【男主人】「第十一師団……いえ、僕が戦場に向かいます。命を奪う必要があるならば、力を振ります」
- 【王子様】「東公爵からは、第九師団をお前と一緒にといつ提案が出てる」
- 【男主人】「あの人は……」
- 【王子様】「婿殿は大変だな」
- 【男主人】「婿殿言うな！」
- 【王子様】「……今、本気でツツコんだな」
- 【男主人】「いや、なんかこう、イラつと……」
- 【王子様】「しかし、今のオマエってば、モテモテだよな。どうしたんだ？」
- 【男主人】「モテモテって……」
- 【王子様】「妖艶女に肉体関係を迫られたる？」
- 【男主人】「いつものことですよ。ええ、娼館に来て女を買わずに帰るのは、酒場に来て酒を飲まないと一緒だと……」
- 【王子様】「誤魔化そうとしてもムダだからな。子供が欲しつて言われたんだろ」
- 【男主人】「この忙しい時期に、また諜報員をつ？」

【王子様】「いや、これは本人から聞いた」

【男主人】「は？」

【王子様】「だから、妖艶女本人から聞いた。それで、オマエとの子供が生まれた場合、財産権がどうなるかとか、貴族法のアドバイスをちょっとな」

【男主人】「…………はあ（溜息）

【王子様】「おや？ まあ、変なことは言つていないと？ 基本的に私生児に遺産などが渡ることはないからな」

【男主人】「だからこそですよ。本気度合いが、ね」

【王子様】「ふむ……何かやつたか？」

【男主人】「身に覚えはないんですけど…………」

【王子様】「たとえば、チンピラから助けたとか、寒い日に一緒に買い物をするとか、「かわいいですね」なんて言つたりとか」

【男主人】「…………？ やつたら、マズかったですか？」

【王子様】「え、全部か？」

第105話『止めに、しつかりと念を押していた』

草原と平穏の国・弟大公邸

SE（家具を破壊する音）・ドガツ、メキツ……

【弟大公】「我が甥ながら憎たらしい。どこまで私の邪魔をつ…！  
それにあいつらも、私がどれだけ眼を掛けてやつたと思つてるん  
だつ…！」

SE（家具を破壊する音）・ガニツ、バキツ……

【弟大公】「はあはあ……………そうだ、こうなつたら……」

【男主人】「こうなつたら……どうするつもりですか？」

【弟大公】「…？？」

【男主人】「弟大公様、こんばんわ」

【弟大公】「ひ、ひいっ…！ わ、私を殺しに来たのか！？」

【男主人】「…」

【弟大公】「そ、そうだ。あいつの部下を辞めて、私に仕え直さな  
いかつ…？ 今なら、伯爵に取り立ててやる。すぐには無理だが、  
いすれば侯爵にしてやつてもいい…！」

【男主人】「爵位には興味ありませんね。どんな地位をもらつたと  
ころで、貴方の下である以上満足できそうにありませんから…」

【弟大公】「ぐつ…」

【男主人】「それに早合点をしないでいただきたい。僕は貴方の命  
にも別に興味はありません」

【弟大公】「そうなの、か？」

【男主人】「ええ、今の所は、という前提ですけどね。これは忠告

です」

【弟大公】「忠告……だと？」

【男主人】「いえ、少し言い方を換えます……これは警告です。今後一切、無駄な画策をしないでください」

【弟大公】「…………何を？」

【男主人】「僕の感情的にはすぐに殺してやつてもいいのですが、今貴方に死なれると色々と面倒になりますからね。命だけは助けてます。」

ただし、私や私の周りにいる人に害意を向けること、また、玉座に座ろうという意思をみせること……それらの素振りを少しでも見せたなら、貴方を殺します」

【弟大公】「ひいっ！？」

【男主人】「せいぜい、赤ワインを飲む時はサソリの毒に気をつけしてくださいね？」

【弟大公】「あ、あれは、部下が勝手に……」

【男主人】「何度も言わせないでください。興味はありません……」

……貴方は、私との約束を守つて、静かな余生を過ごしてください。返事は聞きましたけど」

# 森林と調和の国：草原軍野营地

「……………」  
【魔術師】「……………」  
【師団長】「この殺伐とした日常における潤いが……………はあ？」

【船団】いやいや、三井の半蔵は口うるさい。うん、こんな場所に一つまでも子供がいるのはよろしくない。まったくもって正しい判断だ

【魔術師】「おみたある言い方でされば、おれに何うたらどうぞ」といふ

# 【魔術師】「！！！」

【師匠】一 理由は簡単、キミはあの子をあの集落の親戚に“預けた”んじやなくて、キミ自身から“遠ざけた”からだ

【魔術師】「そんなことは……」  
【師団長】「絶対にない、とは言えないだろ？」「

【魔術師】「……ええ、そうですね。」  
【師匠】「あつと、説明してやるうつか? キミは、一度身内と決

めた人間には優しい………といふか、優し過ぎる。

問題は、その優しさが独善的になりがちな所だ。たしかに、幼ミニちゃんはあの人たちと一緒にいるのが客観的にもつともいい結論だ。しかし、客観的ということは、そこにキミと幼ミニちゃんの心

情を踏まえてないよな。

おつと、先に言つておくと、君の優しさを否定しているわけじゃない。むしろ、優しさとか親切心なんていうのは、元から独善的なモノだろうからね」「

【魔術師】「色々と買い物がぶりすぎですよ」

【師団長】「幼馴染の欲目つてヤツだ。もつとも、ボクはキミと幼ニヒヤンが喧嘩をしたら、断然幼ニヒヤンの応援をするけどさ」

【魔術師】「大丈夫ですよ。もつ喧嘩をする機会もないでしょう」

【師団長】「おいおい、下手な遺言みたいに聞こえるぞ」

【魔術師】「縁起でもない」と言わないでください…」

【師団長】「戦場で、未来を語ると死ぬんだぞ。気をつけろよ?」

【魔術師】「娯楽小説の読み過ぎですよ。実際に死ぬ時は、さつくり死ぬのが世の常でしょう」

【師団長】「何を言つ、ボクはこんな男くさい場所で死ぬのはダメだよ。老衰で美女に囮まれて死ぬつて決めてるんだ」

【魔術師】「思いつきり未来を語つてますよね?」

【師団長】「おっと、今のは心の中にしまつておいてくれ、ボクとキミとの秘密や」

【魔術師】「誰に語つつもりもありませんから、むしろ言ついたくないですから、そのバツチグーというアイコンタクト代わりにウインクとか止めてください」

第106話『戦争へ行く』と、告げていた

草原と平穏の国・男主人邸

【猫//ミ】「黒//ミさん連れてきたよー！」

【男主人】「ありがとう、猫ミミ。これでみんな揃つたね」

【黒//ミ】「アタシたちを、改めて集めてどうした？」

【男主人】「えっと、明後日からしばらく、僕はこの屋敷には帰れなくなる」

【黒//ミ】「……戦争のせいか？」

【男主人】「うん、僕も出兵することになったからね」

【猫//ミ】「え、ご主人さま……戦争に行くの？」

【男主人】「ああ」

【猫//ミ】「戦争って、危険で危ないのが一杯なんでしょう？ だ、大丈夫？」

【男主人】「絶対に安全とは言い切れないけど、こいつ見えて僕は結構強いからね。大丈夫だよ」

【猫//ミ】「本当の本当に大丈夫？」

【男主人】「まあ、多分、大丈夫じゃないかな？」

【猫//ミ】「う……」

【黒//ミ】「それで？ アタシたちはどうするつもりだい」

【男主人】「まずは黒//ミだけど、僕と一緒に来て見張りを続ける？ それとも、一旦戻る？」

【黒//ミ】「アタシの一存じや決められないんで、返答は保留させてもらつよ」

【男主人】「了解。それじゃあ、黒//ミと猫//ミだけど……」

【猫//ミ】「あたしは……この家でご主人さまを待つてたい。ダメ？」

【男主人】「いや、それでもいいよ。人が住まない家は朽ちるのが早いって言われるからね。僕がいない間は、屋敷のことは副官女に頼むつもりだから、いざという時は彼女を頼つて」

【猫ミミ】「ご主人さまがいないとツマラナイから、早く帰つてきてね？」

【男主人】「ん、そうだね。すぐに帰つてこれるよつ努力してみるよ」

【黒ミミ】「さつきから静かだな。長ミミ、どうかした？」

【長ミミ】「…………いえ、何でもありません」

【男主人】「長ミミは、どうする？」

【長ミミ】「私も保留で、少し時間をいただけますか？」

【男主人】「ん、別にいいけど……早いうちにどうするか決めてね」

【長ミミ】「はい、かしこまりました」

第107話『月が綺麗な晩に、想いが交わっていた』

草原と平穏の国・男主人邸（裏庭）

- 【男主人】「…………」こんな夜更けに何をやつてるの?」
- 【長//ミ】「月を……」
- 【男主人】「月?」
- 【長//ミ】「何だか寝つけなかつたので、月を眺めに出てきただけです」
- 【男主人】「そつか……」
- 【長//ミ】「…………」
- 【男主人】「…………」
- 【長//ミ】「…………」主人様、もし、私が……」
- 【男主人】「ダメだ」
- 【長//ミ】「…………まだ、何も言つていませんけど?」
- 【男主人】「うん……」長//ミも一緒に戦場に連れていくつて欲しい、と言つながら拒否するよ」
- 【長//ミ】「どうしてですか?」
- 【男主人】「…………戦場には魔術兵として付いていく、って言つんだらうつ?」
- 【長//ミ】「…………」
- 【男主人】「君との約束を1つ思い出したからね。君が誰かを殺すなら、僕が代わりに殺すつて、約束」
- 【長//ミ】「やつと、気付いてくれたのですか?」
- 【男主人】「まあ、その返事を聞くまで確信できてなかつたけどね。うん、だつて、見た目も名前も全然違つじゃない?」
- 【長//ミ】「ご主人様と分かれてから7年ですよ? 7年もあれば、乳飲み子が親の手伝いだつてできる年になります。」

私の氏族では15歳で社会的に成人として認められます。そして、成人として認められると、子供の頃の名前を捨て、新しい名前をもらうのです。

この名前は……短い間、本当に僅かな間だけ、私の姉だった人のモノをもらいました」

【男主人】「姉……だつた？」

【長ミミ】「生れた時から体が丈夫ではなかったそうです。20年

エルフの寿命を考えれば、ありえないほどに短い生涯でした」

【男主人】「そう……あの時の人のが……ただ、同名なだけかと思つていたよ」

【長ミミ】「……」

【男主人】「……」

【長ミミ】「ご主人様……いえ、魔術師さん」

【男主人】「なに？」

【長ミミ】「魔術師さんは、また……私を置いていくんですか？」

第108話『柔らかな思いを、受け止めていた』

草原と平穏の国・男主人邸（裏庭）

【長】「……」

【男主人】「……」

【長】「以前、魔術師さんは、私に『男としての僕は嫌いなのかな?』と質問しましたよね」

【男主人】「あー……そんなこと、言つたつけ?」

【長】「ええ、しっかりと覚えていてます。その答えを聞いてくれますか?」

【男主人】「じゃあ、聞こうかな」

【長】「では……正直な所、『どっちでもない』といつのが答えです」

【男主人】「……どいつ意味?」

【長】「私のことを助けてくれた魔術師さんを嫌いになるはずはありません。魔術師さんのことは大好きです。でも、これが恋愛感情かと言われると自信がありません……」

7年も放つておかれで、少しは嫌いになりそうでしたけど……再会した時に、自分の正体をすぐに明かせなかつたのは、明かしたら、また魔術師さんが何処かへ行つてしまつような気がしたからです。

まあ、途中からぜんぜん気づかない魔術師さんに対して、意地を張つていたのは認めます

【男主人】「分かつたような分からぬような」

【長】「私の気持ちは、『依存』が一番近いと思います。きっと、あの地下室で助けられた時に、私は生まれ変わつたんです。そして、鳥のヒナが最初に見た動物を親だと思い込むように……」

私は魔術師さんのことを好きになりました

【男主人】「依存……か。僕とは逆なのかもしねえ。僕は自分自身を“拒絶”したかった。

それがゆえに副官女の好意、妖艶女の希望も、すぐには受け入れることはできなかつた

【長ミミ】「……魔術師さんは、私のことを抱けますか？」

【男主人】「ぶつ！？ いきなり何を！」

【長ミミ】「答えて下さい。お願いします」

【男主人】「昨日までだつたら、大丈夫だつたかもしねえ。けど、今はもう無理だ」

【長ミミ】「どうして……ですか？」

【男主人】「長ミミが僕に好意を抱いているから、いや……好意を抱いてくれているだろうと感じたから、かな？」

【長ミミ】「ありがとうございます。その答えが、とても嬉しいです」

第109話『あの夜のやり直しを、求められていた』

草原と平穏の国・男主人邸（裏庭）

- 【男主人】「ありがとうございます、って言われるのも変な感じだね」
- 【長三三】「そうですか？」
- 【男主人】「ただの自信過剰なセリフだよね。好かれているって、自分で言ってるよ？」
- 【長三三】「問題はありません。事実ですから」
- 【男主人】「あつ……」
- 【長三三】「ご主人様…………あまりヘタレ過ぎると、こちらから襲いますよ？」
- 【男主人】「えーと、冗談……」
- 【長三三】「だとお思いですか？」
- 【男主人】「…………いやないの？」
- 【長三三】「どうして、冗談だと思えるのですか？ ご主人様は性格的に相手からの本気の押しに弱いでしょう。相手の弱点を突くのは、戦略の基本です」
- 【男主人】「さつき、恋愛感情がどうかも分からなって！」
- 【長三三】「ええ、ですの……いつそもそも深い仲になれば、この気持ちが恋愛感情かどうか、分かるのではないか、と？」
- 【男主人】「あは、ははは……」
- 【長三三】「うふ、ふふふ……」
- 【男主人】「本気？」
- 【長三三】「ほとんど冗談です」
- 【男主人】「良かった！ あれ、なんで、こんなにホッとしてるんだろ、不思議だな！ ！」
- 【長三三】「その代わりと言つてなんですが、お願ひがあります」

【男主人】「何、かな？」

【長ミミ】「キスのやり直しを求める

【男主人】「魚喜？」

【長ミミ】「無理やり聞き間違えた振りをしないでください……だ  
つて、ズルイじゃないですか」

【男主人】「何がズルイの！？」

【長ミミ】「キスしたの……私はボンヤリと記憶が曖昧なのに、ご  
主人様はしつかり覚えているんですね？」

【男主人】「あ、あれは、その……」

【長ミミ】「……ズルイです」

【男主人】「うつ……」

【長ミミ】「……やり直しを求める

第110話『一人の影が、一つになつていた』

草原と平穏の国・男主人邸（裏庭）

- 【男主人】「……」
- 【長ミミ】「……」
- 【男主人】「…… そういえば、長ミミつて、僕より年下なんだね」
- 【長ミミ】「はい、今年で16歳になりましたけど?」
- 【男主人】「いや……ずっと年上だと思っていたから、幼ミミちやがんだつた頃に比べて……」
- 【長ミミ】「比べて?」
- 【男主人】「あー、あの頃は可愛いって感じだつたけど、大人っぽく綺麗になつたね」
- 【長ミミ】「ありがとうございます。」主人様は、少しがつこ良くなりましたよ?」
- 【男主人】「それは、気のせいじゃない? 僕は全然変わつてないよ」
- 【長ミミ】「そうですか?」
- 【男主人】「さてと、それじゃあ……」
- 【長ミミ】「キス、しましようか?」
- 【男主人】「……なんか、おかしいよね!?」
- 【長ミミ】「何がおかしいのでしょうか?」
- 【男主人】「どうして今の流れで、僕が長ミミにキスをするのが確定になつてゐるのかな?」
- 【長ミミ】「それは、ご主人様がヘタレだからです」
- 【男主人】「ぐふつ……」
- 【長ミミ】「ちなみに、頬や額で誤魔化すのもナシでお願いします」
- 【男主人】「ううつ……」

【長／＼＼】 「月の輝きが美しい晩です。キスをするには、十分な口

マンティックさだと思いませんか?」

【男主角】「そういうのがロマンティックなのは、認めるけど……」

【長三三】「ご主人様、男は度胸です」

【男主人】「なんか色々な物を失いそうだけど……」

【長三三】「失つて大切さに気づくモノもあるはずです、きっと

【長三】「あの、ご主人様？」

【男主角】「長三郎、追詰めたのは君だからね？」

卷之三

【男生人】「お願いは、キスのやり直しだったよな？」

〔略〕

【野田】

卷之三

卷之三

גָּמְנִי אֶלְעָזָר

卷之三

卷之三

卷之三

卷之三

## 【男主角】 力丸君

【脚注】世に謡あらわせん少こゑのいわゆるあや

【男主角】「軽い酔欠かな ギズの間に鼻で軽く呼吸をするんだよ」

【長三】 -  
... 】主人様上

# 【異主人】 - なに? -

〔四三〕 今のは……やう……」

【男主人】「まだ長ミミには、大人のキスは早かつたみたいだね？」

【長ミミ】「うううう……そういうご主人様は、大人気ないです」

【男主人】「まだ物足りない？」

【長ミミ】「いえ、今晚の所は、これで我慢いたします」

【男主人】「そう？ それじゃあ、中に戻るうか？」

【長ミミ】「もう少しの間、ここにいますので、ご主人様は先に戻つてください」

【男主人】「ん、それじゃあ、おやすみ」

【長ミミ】「おやすみなさいませ」

## 第111話『秘密の会談が、始まっていた』

草原と平穏の国・男主人邸（地下室）

- 【鉄皇女】『やつとお会いできましたわ。“救森の魔術師”殿』
- 【男主人】「お初にお目にかかります、鉄皇女様。その通り名は私は過ぎた名です。男主人とお呼びください」
- 【鉄皇女】『では、男主人殿、と』
- 【男主人】「失礼ながら、もう一つ宜しいでしょうか？」
- 【鉄皇女】『何かしら?』
- 【男主人】「この魔術が偽装ではないことの確認に、そちらにいる部下男に一つ質問をさせていただきたい」
- 【鉄皇女】『ふふふ、どうぞ？ 部下男さん、いらっしゃい』
- 【部下男】『男主人様、なんでしょう?』
- 【男主人】「確認のためだ、質問に答えてくれ……お前の初恋の相手は誰だった？」
- 【部下男】『ぶはつ、こんな時になんて質問をしてくれるんですか……』
- 【男主人】「いいから答える、答えられないなら、この通信は偽装だと見なすぞ」
- 【部下男】『貴方と言う人は……！ 近所に住んでいたお下げ髪が可愛い農夫娘ちゃんです！』
- 【男主人】「ああ、やつぱりか」
- 【部下男】『！』
- 【男主人】「うん、もう分かつたから鉄皇女様と代わってくれ」
- 【部下男】『くつ……』
- 【鉄皇女】『くすくす、面白い主従ね』
- 【男主人】「楽しんでいただけたようでしたら、何よりです」

【鉄皇女】『部下男殿には、何人くらい初恋の方がいるの？』“安全、注意、危険”として、3人くらいいれば十分かしら？』

【男主人】「……いや、これは失礼を」

【鉄皇女】『いいえ、むしろ、男主人殿が慎重なようで嬉しいわ。あ、そろそろワタクシは別にアナタからの忠誠を誓われている訳でもないし、そんなに畏まらなくて結構よ』

【男主人】「ではお言葉に甘えて……しかし、よく分かりましたね」

【鉄皇女】『だつて、ワタクシも同じような手段を使っていますも。似たもの同士のかしら？』

【男主人】「似たもの同士、ですか？ 僕としては正反対だと思いますが」

【鉄皇女】『性別も立ち位置も考え方も逆かもしれないわね。でも、ワタクシは、何かアナタと通じるものを感じただけよ。もちろん、さつきの合言葉とかね？』

【男主人】「では、次回からはもっとバレににくい合言葉を用意しておきます」

【鉄皇女】『ええ、そうした方が良いわね、きっと』

## 第1-1-2話『鉄皇女が、同盟を提案していた』

草原と平穏の国・男主人邸（地下室）

- 【鉄皇女】『では、挨拶はこのくらいにして、本題に入りましょう』
- 【男主人】「そうですね」
- 【鉄皇女】『まず、ワタクシの目的は男主人殿との同盟を組むこと』
- 【男主人】「同盟？」
- 【鉄皇女】『仲良くしましょう、と言つことよ』
- 【男主人】「今、私たちは国同士が戦争をしているのはご存知ですか？」
- 【鉄皇女】『もちろんよ。でも、それは別にワタクシと男主人殿が仲良くしてはいけない理由にはならないわ』
- 【男主人】「さて、私はその言葉どおりに受け取つていいものやら」
- 【鉄皇女】『ワタクシも男主人殿も今回の戦争を、早く終わらせたい……という意味では同志となりえると考えているの。いかがかしら？』
- 【男主人】「……もう少し詳しくお話を聞きましょう」
- 【鉄皇女】『今回の戦争も、7年前の戦争も、どちらもある人物の意思によって引き起こされている、と言つたら信じられる？』
- 【男主人】「その質問は無意味でしょう。少なくともこの状況では、私がその話を信じられなくとも、貴女が信じていることを私も信じざるをえないですからね。そして、この話の流れからすれば、その黒幕は……」
- 【鉄皇女】『賢い方は好きよ。ええ、その考えは多分間違えていいでしょ。現皇帝……ワタクシの父親が、すべての黒幕よ』
- 【男主人】「……」
- 【鉄皇女】『ふふふ……話の途中で気づいたって顔ね』

【男主人】「……貴重な情報、でしううね。それを私に伝えて、貴女は何を得ようとしている?」

【鉄皇女】『この国よ。……お父様でも、兄たちでもなく、この国をワタクシの物にするのよ。そのための力と準備は蓄え終わっているわ』

【男主人】「クーデターでも起こす気ですか?」

【鉄皇女】『その表現はあまり好きじゃないのよね。クーデターだと、少し野粗な感じがしない? ワタクシが行なうのは、新しい世代による古い世代の淘汰よ』

【男主人】「……」

【鉄皇女】『ここで、男主人殿と同盟を組む利が生まれるわ。ワタクシが事を起こした場合、出征した鉱山軍の一部に強い混乱が生じるはず、そこを上手く対処して欲しいの』

【男主人】「話が少し一方的過ぎませんか?」

【鉄皇女】『では、そちらの話も聞かせてもらおうかしら? 考える時間は必要?』

【男主人】「いえ……時間は必要ありません、いくつかだけ、質問を……」

第1-1-3話『男主人は、問い合わせていた』

草原と平穏の国・男主人邸（地下室）

【男主人】「国を手にすると言つたが、貴女は国を得てどうするのでしょうか？」

【鉄皇女】『さあ？ そんなことは国を得てから考えるわ』

【男主人】「…………」

【鉄皇女】『アナタは、食事をする時に、次の食事のことを考えながら、出された料理を口にするのかしら？ まず、目の前にある、温かなステーキを頬張るのが先でしよう？』

【男主人】「貴女にとつては、内戦も食事も一緒にですか？…………？」

【鉄皇女】『ワタクシにとつては、どちらも同じものよ。ワタクシが生きていくために必要な儀式……ワタクシにも確かにお父様の血が流れているという証左かしらね』

【男主人】「それが、貴女が争いを起こす理由ですか？」

【鉄皇女】『いいえ、争いはなくなることはないわ。ワタクシは、争いを起こすのではなく、争いの渦中に身を投じるだけよ』

【男主人】「そんなことはないでしょ？ 貴女が原因で起こった争いだってあるはずだ」

【鉄皇女】『否定はしないわ。けどね、この国は……常に争いを欲しているの。その象徴がお父様の現皇帝ね。もつとも、人が2人いれば争いは起こるのよ。ワタクシが理由で起こった争いがあるというならば、男主人殿が原因で起こった争いだってあるはず』

【男主人】「…………」

【鉄皇女】『ああ、言つておくけれど、別にワタクシの意見に従わせるつもりはないわ。ワタクシは男主人殿はと、あくまで対等の関係でいたいの。同盟は、お互いの意思を尊重し、お互いが最も納得

できる形で長く続ける。本来は、そういうものでしょ？』

【男主人】『対等……それは、望むべき理想ですね』

【鉄皇女】『理想は、語るだけではなく、動かなくては実現しないものだけだね』

【男主人】『あともう一つ』

【鉄皇女】『何かしら？』

【男主人】『一国の皇女が、ともすれば、次期皇帝の貴女が、なぜ同盟の相手に私を選んだんです？』

【鉄皇女】『貴女は、自分の力では、役者不足だとでも思つてているのかしら？』

【男主人】『ありていに言えば、疑わしいを通り越して、不思議ですね。普通ならば、王族は無理でも、將軍や公爵といった人を狙うのでは？』

【鉄皇女】『少ない消費で、最大限の効果を……あらゆる交渉』との基本ね。今、男主人殿と手を組むことが、後々に活きてくる、とワタクシの勘が告げているのよ』

【男主人】『勘ですか……』

【鉄皇女】『ええ、ワタクシは、自分の勘信じて3度、命の危機を免れたわ』

第114話『そして、同盟は締結していた』

草原と平穏の国・男主人邸（地下室）

【男主人】「貴女の理想とする国に、平穏はありますか？」

【鉄皇女】『…………』

【男主人】「幼い少女が、悲しみに涙を流すことがない国となりますか？」

【鉄皇女】『…………』

【男主人】「10人いれば、10人が求める幸せがあるでしょう。10人全員が幸せを得ることは難しいかもしません。けれど、人に不幸を与えることは簡単です。」

もう一度訊きます。貴女が行く道に、平穏はありますか？」

【鉄皇女】『あるわ』

【男主人】『…………』

【鉄皇女】『ワタクシが目指す理想の末に、平穏はあるわ』

【男主人】「それは、貴女一人の平穏ではなく？」

【鉄皇女】『男主人殿に聞くけど……「草原と平穏の国」は、その名の通り平穏なのかしら？』

【男主人】「……いいえ、平穏であれと願いを込められた私たちの国も、本当の意味で平穏だった時代はないでしょう」

【鉄皇女】『それは、どうしてかしら？』

【男主人】「人には欲があるから……幸せを求めてしまうから」

【鉄皇女】『さつきも言つたけれど、人から争いは無くすることはできぬわ。ただし、その争いを抑えることはできるはずよ。』

些細な争いを起こして、大きな争いを避ける。私は、恒久的な平和に興味はなく、争いの中にこそ平穏があると考える』

【男主人】「……それが、貴女の考え方であり、貴女が進む道、なの

ですね?』

【鉄皇女】『ええ、その通りよ』

【男主人】『…………』

【鉄皇女】『今のが最後の質問で良かったのかしら?』

【男主人】『はい』

【鉄皇女】『そう、答えを聞かせていただける?』

【男主人】『同盟を組みましょう』

【鉄皇女】『その答えを待っていたわ。それじゃあ、同盟の詳細について少し話をしましょつか』

第115話『僕の手で守りたいと、願っていた』

草原と平穏の国・王宮（執務室）

【男主人】「それじゃあ、留守を頼んだよ」

【副官女】「…………はい、任せて下さい」

【男主人】「あー、言つておくけど、一緒に連れて行かないのは副官女が決して弱いと思っているわけじゃなくてね？」

【副官女】「王都について、ここから物資や情報の支援も重要な役割、なんですね？ それだけ、私のことを信頼してもらつていて、分かつてはいるんです」

【男主人】「ん~と？」

【副官女】「男主人様は、私が弱くないと言つてくれましたけど……すみません、私はそこまで強くなかつたみたいですね」

【男主人】「…………」

【副官女】「第十一師団の派兵、……いえ、男主人様が戦争に向かうと言われて、初めて気付いたんです」

【男主人】「…………何に？」

【副官女】「戦争で人が、いえ男主人様が死ぬかもしれないって言う事実、でしようか？ 今まで、戦争の話を聞いても、本や劇の物語のように感じました……」

けど、男主人様が戦争に行くときいて、いった先の戦場で死ぬかもしれない……そのことに気付いたら、急に怖くなつてきて……」

【男主人】「うちのメイドさんといい、副官女といい……僕は、そう簡単には死なないよ」

【副官女】「けど、万が一といつことだつてあります！」

【男主人】「万が一といつなら、事故や病氣で突然死んでしまう可能性だつてあるじゃない」

【副官女】「それは！……そつ、ですけど……」

【男主人】「僕だって、好きで戦争に行くわけじゃない……敵と言つても、同じ人間だよ。倒さないで、殺さずにすむなら、そつちの方がずっといい。」

けど、僕の手は、そんなに長くは無いんだ。僕の目だって、前を見るだけで精一杯。家族や友達とか僕が知っている人、守りたい人たちがいるから、僕は戦いに行ける。

もちろん、副官女や東公爵も、守りたい人のうちだからね」

【副官女】「男主人様……その、嬉しいです」

【男主人】「ごほんごほん……もし、何かあつたら、王子様か東公爵を頼るんだよ？ いいね？」

【副官女】「はい」

【男主人】「それじゃあ、いつてきます」

【副官女】「いってらっしゃいませ。どうぞ御武運を」

## 第116話『特務隊に、配属されていた』

草原と平穏の国・王宮（会議室）

【堅騎士】「まずは、此方から挨拶しよう。某が、第九師団の師団長を務めている堅騎士だ」

【男主人】「僕が第十一師団の師団長の男主人です。と、言つても、今回は僕一人だけの参戦ですので、中心となる指揮系統は堅騎士殿を中心で、と考えてましたがどうですか？」

【堅騎士】「ふむ、ならば丁度良い。此方から提案しようと思つていたことがある。提案の前に某の後ろにいる2人を紹介しよう。うちの団の騎士娘と射手男だ」

【騎士娘】「騎士娘です」

【射手男】「射手男です。噂の男主人殿にお会いできて嬉しいです」

【男主人】（噂の……？）

【堅騎士】「この2人には、護衛を兼ねて、男主人殿の補佐を担当させる。それで指揮系統としての提案だが、男主人殿を隊長とした特務隊を結成させようと思うがいかがか？」

【男主人】「特務隊ですか？ 部隊編成規則に、そんな隊はありましたか？」

【堅騎士】「いや、部隊編成規則に示し合わせるならば、遊撃隊に近い扱いになる。遊撃隊が持つ独自裁量の権限を無制限にしたものだと考えてもらえば結構。」

男主人殿を隊長とし、この2人を含めた3人を中心とした部隊となる。男主人殿の話を聞くに、そうした方が有効であるということになつた

【男主人】「なるほど……ご配慮ありがとうございます」

【堅騎士】「いやいや、某に礼を言われるのは違う。この件について

ては、東公爵様の案だ」

【男主人】「そう……でしたか。東公爵様にはお世話になりっぱなしです」

【堅騎士】「特務隊について、細かい部分は2人が知っていますから、追々確認しておいて欲しい。何かあれば、進軍しながら話を煮詰めればいいと思う」

【男主人】「了解しました。堅騎士殿も、お2人もよろしくお願ひします」

【騎士娘】「はつ（ペコリ）」

【射手男】「頼りしてください（ペコリ）」

【堅騎士】「では、半刻後に出立です。行きましょう……」

## 第116話『特務隊に、配属されていた』（後書き）

新しいキャラの紹介です。

### 堅騎士

【種族】：人間族 【年齢】：34歳 【性別】：男性

【一人称】：某

【設定】：

- ・第九師団の師団長。
- ・東公爵の有能な部下の1人であり、堅実な戦術を好む。

### 騎士娘

【種族】：人間族 【年齢】：22歳 【性別】：女性

【一人称】：私

【設定】：

- ・今回の戦争における男主人の部下兼護衛その1。
- ・女性ながら、第九師団では上位の腕利き剣士。

### 射手男

【種族】：人間族 【年齢】：21歳 【性別】：男性

【一人称】：おれ

【設定】：

- ・今回の戦争における男主人の部下兼護衛その2。
- ・明るく人懐っこい青年。初対面の時から、何故か男主人を尊敬している。

第117話『噂話のせいで、憧れられていた』

草原と平穏の国・馬車の中

- 【射手男】「失礼するつす。おれも同席させてもらひつす（ペシッ）」  
【男主人】「えつと、射手男だつたよね？」  
【射手男】「はいっ！ その通りつす！」  
【男主人】「別にそんな緊張らなくともいいよ。もちろん、戦場で  
氣を抜くのは危険だし、公の場では適度に硬くなつた方がいいと思  
うけどね」
- 【射手男】「いえ、おれらにとつて男主人様は、尊敬の対象つす！」  
【男主人】「尊敬……？」
- 【射手男】「今回は」一緒に緒できて光栄つす。ぜひ道中に色々とご教  
授お願ひしたいっす！」
- 【男主人】「そりいえば、さつきも噂のとか言つてたけど……何の  
話かな？」
- 【射手男】「それはもう男主人様は、男兵士の憧れつすから！」  
【男主人】「憧れ……？」
- 【射手男】「もちろん、妬むヤツも少なくないつすけど、おれみた  
いに純粋に憧れてるやつも結構いるつす」
- 【男主人】「ちよつとごめん、さつきから聞きなれない単語がいつ  
ぱいあつて……噂つて何のこと？」
- 【射手男】「うちのお嬢様をはじめとし、数多くの美女と浮き名を  
流している男主人様は、男兵士の憧れで、希望の星つす！」
- 【男主人】「…………はい？ えつと、まず、うちのお嬢様つての  
は、何処の誰？」
- 【射手男】「そりやあもちろん、東公爵様の御息女である副官女様  
のことつす！ 副官女様の初めての夜会で惚れさせ、今では副官女

様は男主人様に公私共に仕えているという話つすよね」

【男主人】「続きを聞くのが怖くなってきたような……他は？」

【射手男】「今では王都の色町に、この店ありと呼ばれる名店の有名娼館が経営難で苦しんでいる時に、連日連夜貸し切り、その窮地をそつと助けた。

それに対して、見返りは求めるどころか娼婦達に一切手すら触れない。感激した娼婦達全員が、男主人様に口付けを懇願したという

……男主人様は、もう生ける伝説つす！ 漢の中の漢つすよ！」

【男主人】（うおおお！？ あの時の話がそんな曲解を！？）

【射手男】「それに今回の参戦もエルフ族の姫様が流した涙を見て奮い立つたという噂つす！」

【男主人】「あ、あのは。それは所詮噂で……」

【射手男】「もちろん、こんなのは“鉱山の小石”ってことつすよね！ 分かつてるつす！」

【男主人】「分かつてないから！－ うわ、もうどこからツッコんだらいいんだ！？」

第1-18話『呼び出したら、絶妙に誤解されていた』

草原と平穏の国・草原軍野营地

【騎士娘】「失礼します。お待たせいたしました、騎士娘です」

【男主人】「おや、早かつたね」

【騎士娘】「伝令を聞き、すぐさま身支度を整えて馳せ参りました」

【男主人】「むう、それはゴメン。もう少しかかるかと思ってたんで、報告書の作成が終わってないんで……少し休んでてくれるかな？」

【騎士娘】「畏まりました。では、先に準備をしておきます」

【男主人】「お茶か何かがあればいいんだけど、必要物資を優先してるから、嗜好品は届いてないんだよねえ。手持ちで持つてくれれば良かつたからなあ……ん？ 準備？」

SE（衣擦れの音）・シユルリ……

【男主人】「つて、なんで腰帯を解いてるの……かな？」

【騎士娘】「え？ あ、申し訳ありません！ 着衣した状態で待つていた方が良かつたのでしょうか？」

【男主人】「うん、服は着たままでいてくれると嬉しいけど」

【騎士娘】「やはり、母上に言われた通り、最初から全て殿方に任せ置けば良いのですね？」

【男主人】「何か意思の疎通が上手くできていない気がするなつ！」

【騎士娘】「む、むむう……何分、経験が皆無に近く不慣れなため、ご容赦下さい」

【男主人】「いやいや、だからね……」

【騎士娘】「えつと……では、どうすれば宜しいのでしょうか？」

【男主人】「まずは、状況を見直してみよう。僕は君に用があつて、テントまで来てもらつた」

【騎士娘】「はい、伝令でそう言わされましたので」

【男主人】「僕の用というのは、特務隊についての方針を相談したかつたんだけどね？」

【騎士娘】「……つ！？！？ えー、あー……理解致しました（汗」

【男主人】「ふう、分かつてもらえたようで良かつ……」

【射手男】「男主人様、お待たせしま……失礼しましたっす！」

【男主人】「……待て——！ 戻つて来い————！」

## 第119話『名誉について、問い合わせていた』

草原と平穏の国・草原軍野营地

【騎士娘】「……と、以上が特務隊の概要となります」

【男主人】「つまり、今回の戦争に對して、僕の思う通りに部隊を動かして良くて、いざと言う時は中隊規模の人数を動員でき、各種手続きは事後承諾で構わない、ってことかな?」

【射手男】「大雑把にはその通りです。さすが男主人様、要点ばつちりつですね!」

【男主人】「ずいぶんと思い切った権限を与えてくれたなあ……」

【騎士娘】「それだけ期待されているという事です。名誉なことではありませんか?」

【射手男】「そうですよ。おれも男主人様の補佐に抜擢されただけで、とても名誉なことです!」

【男主人】「名誉ねえ……」

【騎士娘】「何か思う所が?」

【男主人】「ん、いや……2人に訊くけど、『名誉ある敗北』と『名誉なき勝利』なら、どっちを選ぶ?」

【騎士娘】「もちろん、『名誉ある敗北』を選びます」

【射手男】「あー、おれは、勝つ方が嬉しいので、『名誉なき勝利』つす。『勝てば正軍、負ければ賊軍』つす」

【騎士娘】「なつ! 騎士たる者、いかなる時も名誉を損つてはいけません!」

【射手男】「そつは言つても、勝負に勝たなければ、結局は『負け犬の遠吠え』つすよ?」

【騎士娘】「くつ、騎士の名誉と犬のケンカと一緒ににするとはつ!」

【射手男】「そこまでは言つてないっす！ それに、おれはどこからも叙勲は受けてないから、騎士でもないっす！！」

【騎士娘】「むむむ……男主人様！ どちらが正しい回答なのですか！？」

【射手男】「おれの意見の方が正解つすよね！？」

【男主人】「……まあ、2人とも落ち着いて……これは別に、どっちが正解というわけじゃないから。あえて言つなら、どっちも正解で不正解つてところかな」

【射手男】「正解で不正解つすか？」

【男主人】「うん、2人とも意見は正しいよ。例えば騎士娘は、名誉と誇りだつたら、どっちを優先する？」

【騎士娘】「……どちらか一方だけとも言えません」

【男主人】「射手男は、命と勝利なら、どっちを優先する？」

【射手男】「死ぬけど勝つのか、負けて生き延びるのなら、むむむう？ 難しいっす……」

【男主人】「まあ、そういうこと、かな？」

## 第120話『射手男が、信念を語っていた』

草原と平穏の国・馬車の中

【射手男】「ちょっとといいつすか？」

【男主人】「ん？ 何かな？」

【射手男】「昨日のことっすけど……男主人様は、騎士娘もすでに  
籠絡済みっすか？」

【男主人】「ぶつ……それはない！！ そもそも、僕は噂されてる  
みたいな凄腕のナンパ師じゃ、決してないからな……」

【射手男】「けど、昨日おれが天幕に入つた時の雰囲気はかなり桃  
色だつたっす！」

【男主人】「ドライアードだ」

【射手男】「…………？」

【男主人】「…………（汗）

【射手男】「（ぼむつ）……『気のせい』と『木の精（靈）』を掛けたんすね！ スゴイっす！」

【男主人】「そうやつて説明されると、そこはかとなく惨めな気持  
ちになるな……その本気で尊敬しているような目が僕の心を抉る……」

…

【射手男】「褒められて凹むなんて、変な男主人様っす」

【男主人】「なんて言うか、君に言われたくはないけどね！」

【射手男】「それはともかく……騎士娘も籠絡するっすか？」

【男主人】「しないっ！！ 人の話をよく聞け！ 僕は別に女性を見れば挨拶のように口説く女好きでも、権力を盾に関係を迫るよ  
うな好色魔でもないからな！」

【射手男】「それが本当なら、噂と全然違うっす」

【男主人】「なんでそんなに噂通りの僕に夢を見る……」この間聞

いた限りだと、なんかもう人間としてダメな部分も多かつたぞ……」

【射手男】「人には出来ないことをやつてしまふ人を英雄と呼ぶつす。そこに憧れるつす」

【男主人】「……ところで、なんで、そんなに騎士娘のことを気にする? (ニヤニヤ)

【射手男】「なんていうか、騎士娘とは、おれが入隊してからだから、結構付き合いが長いつす。昔から、剣術バカの訓練バカでバカ代表で、傍<sup>はた</sup>から見てて危なつかしいつす」

【男主人】「バカ代表つて……射手男、興味から聞くんだが、それは愛情なのか?」

【射手男】「違うつす。なんていうか、路地裏で近所の子供の面倒を見る、みたいな気持ちつす」

【男主人】「ふうん」

【射手男】「それに、おれには結婚を約束した恋人がいるつす」

【男主人】「はつ?」

【射手男】「色々考えたけど、おれは名譽より勝敗より生きて帰る方が大事つす」

森林と調和の国・氏族長宅

【幼】「あれ？ お母さまが2人？」

【長】「くすくす……私が初めてこの絵を見た時と同じ感想ですね」

【幼】「長ちゃん、お母さまは双子だったんですか？」

【長】「お姉さん」

【幼】「あつ、お姉さん……（照）」

【長】「可愛いつ……（ぎゅー）」

【幼】「うぐうぐ……！？！？（じたばた）」

【長】「あつと、じめんなさい。思わず力いつぱい抱き締めたくなつて」

【幼】「ふはっ！ 苦しかった……」

【長】「幼ちゃんが可愛いのが悪いんですよ」

【幼】「むう……」

【長】「それで、えーと……あ、ううう。幼ちゃんは、私の小さご頃よりもずっと賢いですよ。ただ、母たちは双子じゃなくて、すく外見の似た姉妹だったそうです。私も幼ちゃんもお母さん似だから、あつと私たちも良く似た従姉妹になりますね」

【幼】「え……わたしも長ちゃんがつた、お姉さんみたいになります？」

【長】「ええ、よく食べて、よく運動して、しっかり寝ねばすぐですよ」

【幼】「私がお姉さんみたいになつたら、魔術師さんも帰つてきてくれるかな？」

【長//】 「 わあ、 難しいかもしれないですね」

【幼//】 「…………」

【長//】 「 こつや、 幼//ちゃんが、 大きくなつたら魔術師殿の所に押し掛けてしまえばいいんですね」

【幼//】 「 押し掛ける?」

【長//】 「 も、 最初は「 飯を食べさせてあげるの、 できれば洗濯や掃除もできるところですね」

【幼//】 「 料理、 洗濯、 掃除?」

【長//】 「 もうわ、 男性は、 きちんと家事ができる女性が一緒だと喜ぶんですよ」

【幼//】 「 ジャあ、 料理と洗濯と掃除を覚えたら、 魔術師さんは喜んでくれる?」

【長//】 「 喜びますよ、 もうと」

【幼//】 「 ジャあ、 わたしに料理と洗濯と掃除を教えてくれますか?」

【長//】 「 ええ、 任せなセ。 王妃様付きの女官にだつてなれるくじこ、 何処に出しても恥ずかしくないようにしてあげるから!」

森林と調和の国・氏族長宅

【長//】「バターは溶けた？ それじゃあ、次は小麦粉を入れて……粉つぼさが無くなるまで混ぜる」

【幼//】「こんな感じ？」

【長//】「ん~、もうちょっと木べらで捏ねるように混ぜて」

【幼//】「こり、かな？」

【長//】「そつそう、そんな感じ……じゃあ、ミルクを入れて、氣をつけてね？」

【幼//】「はーっ！」

【長//】「そうしたら、小麦粉が固まらないように手早く混ぜる！」

【幼//】「んっしょ、んっしょ……」

【長//】「混ざった？ そうしたら、少しずつ煮詰めてトロリとしたらホワイトソースが完成よ」

【幼//】「あ、トロリって、なってきたよ」

【長//】「もうちょっととかな？ はい、それくらいでオッケー」

【幼//】「シチューフボイ匂いがする」

【長//】「そうね。家伝のシチューは、このホワイトソースとハーブの隠し味が重要だからね」

【幼//】「ふむふむ」

【長//】「じゃあ、さつきから肉と野菜を煮込んでる鍋に、そのホワイトソースを全部入れちゃて」

【幼//】「はーい」

【長//】「鍋は熱くなってるから、氣をつけてね」

【幼//】「大丈夫……」



# 森林と調和の国：氏族長宅



森林と調和の国・氏族長宅

- 【幼//】 「……」
- 【長//】 「……」
- 【幼//】 「……」
- 【長//】 「んんん……」
- 【幼//】 「んんん……」
- 【長//】 「…… 幼、 // ちゃん、 ちゃん？」（ぼんやり）
- 【幼//】 「お姉さん……？」（びぐびぐ）
- 【長//】 「…… あ、 そつか、 私、 また倒れちゃったのか」
- 【幼//】 「び、 びっくりしたんだよ！」
- 【長//】 「『めん、 怖がらせちゃつた、 ね？』
- 【幼//】 「ううん、 お姉さん、 その…… 大丈夫？」
- 【長//】 「大丈夫だよー、 ほら、 元気元気」
- 【幼//】 「……」
- 【長//】 「幼//ちやん」そ、 ちやんと『じ』飯食べた？ 私は幼//ちやんのふつぐらほつべが好きなんだから」
- 【幼//】 「ちや、 ちやんとたくさん食べたよー！」
- 【長//】 「……」（めんね）
- 【幼//】 「なに……が？」
- 【長//】 「ずっと一緒に居てあげれなくつて……」
- 【幼//】 「…… イヤ、 イヤだよー、 なんで、 ビ『う』してつ……」
- 【長//】 「私だつて…… イヤだよ。」
- 私は幼//ちやんのお姉ちやんになれてすごく嬉しかった。ずっと……幼//ちやんのお姉ちやんでいたかったよ
- 【幼//】 「ならー！」

【黙//】 「幼//ちやん、私が//なくなつて……泣きたいなら泣けばいい、笑えないなら笑わなくてもいい……だけど、誰かを思い続けることは忘れないで？」

人を思うことができる人は、とっても幸せなことだと思つから……私はお姉ちゃんとして、幼//ちやんが幸せになつて欲しいんだよ？」

【幼//】 「だつたら、だつたら……（えぐつ）

【長//】 「「めん、「めんね……」

【幼//】 「あやまらないで……わたし、忘れないから、お姉さん」のことを、ずっと思つて続けるから……」

【黙//】 「幼//ちやん……あつがとい、思つて残すことないつぱいあるけど……幼//ちやんやお父さんやお母さん、黒//ちやんが、私を覚えてくれるなら、もう、いいかな……これ以上、わがまま言つたら末練が残つちやつもんね。

たくさん喋つたから、ちよつと疲れちゃつたな。少し眠るね。おやすみ、幼//ちやん……」

第1-2-1話『昔の悲しみを、思に出していた』

草原と平穏の国・男主人邸

【猫//】 「…… わん…… //……」  
【長//】 「……」  
【猫//】 「…… 長//わん?」  
【長//】 「あれ? どうしたんですか、 猫//わん?」  
【猫//】 「『どうしたんですか』は、 あたしの質問だよつー。 長//わん、 呼び掛けても気づかないし…… 何だかすじく辛やうな顔してたよ?」  
【長//】 「それは『めんなさい』。 少し昔の…… 悲しこじとを思こ出した」  
【猫//】 「悲しいこと?」  
【長//】 「大事な人と別れる」となつた時の『じ』でや  
【猫//】 「…… あのね、 長//わん。 黒//わんと話しあつて決めたんだ」  
【長//】 「黒//わんと?」  
【猫//】 「うん…… 長//わん、 あたし、 頼りになつてゐる?」  
【長//】 「もちろん、 とっても頼りにしていますよ。 今なら、 きっと向處のお屋敷だって働くことができる」  
【猫//】 「じゃあ、 あたしがこのお屋敷を守つてゐるから…… 長//わん、 行つときじよ」  
【長//】 「…… どう?」  
【猫//】 「もちろん、 『主人さまのと』じやー。」  
【長//】 「私が行つても、 主人様の邪魔になるだけです……」  
【猫//】 「そんなこと関係ないよー。 だって、 長//わん、 ご主人さまの『じ』、 心配なんでしょう? 一緒にいたいんでしょ? 夜中

にキスしてたでしょ？」

【長】「み、見てたんですか？」

【猫】「うん、あたし、目がいいんだよー。(ヒョウ)」

【長】「……でも、

【猫】「あたしは『おかえりなさい』を叫ぶため、このお腹敷で2人を待つてゐから」

【長】「それなら、私も……」

【猫】「長ミミさん、あたしは頼りにしてくれて、って言つたよね？ ここで待つてるのは、あたしだけで大丈夫だよ？」

長ミミさん、お願ひ……あたしの分も代わりに、(ジ)主人をまと一緒にいてあげて！」

【長】「猫ミミちゃん……」

【猫】「あたしだって、いつまでも守られるだけの子供じゃないんだから」

第1-22話『お茶会の約束を、誓っていた』

草原と平穏の国・男主人邸

【黒//】「話は終わつたよつだな」

【長//】「え？ 黒//さん……？」

【黒//】「キヨトンとしてないでわざわざと出るわ。向こうには一万人の兵士を率いての行軍だ。今から馬で追いかければ、十分に追いつける。もしくは、先回りをして待ち構えてもいいな」

【長//】「えつと、一体何の話を……？」

【黒//】「何の話をついて、今の猫//ちゃんの話をちやんと聞いてたのかい？」

【猫//】「聞いてたのかい？」

【長//】「え、だつて、その……」

【黒//】「男主人を追いかけるんだろう？ アタシもちよつと氏族から召還の指令を受けてね。まあ、向かう先は一緒つてわけだ」

【長//】「……」

【黒//】「ほら、これが長//の分だよ」

【長//】「この贅いバックは？」

【黒//】「旅行中に必要そうな衣類や道具の一式と数日分の保存食を詰めとつた」

【猫//】「黒//わーん、これはどうするの？」

【黒//】「それでもつて、猫//ちゃんが持つてくれたのが、防寒と防熱に特化させた外套だ」

道中で野宿をする時に身を守るのに便利だからな

【長//】「ありがとうございます（ペコ）」

【黒//】「アタシは、礼を言われるほどいじじやないよ」

【長//】「猫//ちゃんもありがとう（一ノ口）」

【猫】「礼を貰われる所ぞの」とじやないからね！」  
【黒】「…………では、黒さへ、ご主人様の所へ参りまし  
よ！」

【黒】「ん、行けりか」  
【猫】「いってらしゃーー、帰つてきたひ、また歸れお茶会  
をしおりねー！」

【黒】「ええ、副官女様や妖艶女様、白髪女さんもお呼びしま  
しよりね」

【猫】「ゼッタイだよー！」

【黒】「絶対です」

## 第123話『騎士娘は、許しを求めていた』

草原と平穏の国・草原軍野营地

【騎士娘】「騎士娘です。男主人様はいらっしゃるでしょうか？」

【男主人】「いるよー。何か用があるなら入つておいで」

【騎士娘】「突然失礼します。……ん？」

【男主人】「ああ、これ？ 今日の補給でワインが入つたんで、寝る前にちょっとね。それで何かあつたの？」

【騎士娘】「あつ、その、申し訳ありません。軍務ではなく、私用なんですが……」

【男主人】「私用？ まあ、構わないけど……その辺りに腰掛けて」

【騎士娘】「ええと……先日のことを謝罪させて頂きたく、……誠にご無礼致しました！（深々）」

【男主人】「んーと？ 何のことについて、僕は謝罪されているんだ？」

【騎士娘】「それはその勝手に服を脱ごうとした件について……です」

【男主人】「あ……いや、困つたといえ、困つたけど、別に害がなか……射手男に弁解するのが面倒だったけど……それくらいだし」

【騎士娘】「いえ！ 私は噂の話を理由に、男主人様の名誉を傷つける行為をしたのです。男主人様が寛容だとしても、自己満足かもしれないが、私は自分が許せないです」

【男主人】「と、言われても……そもそも、僕が本当に噂通りに好きな男だつたら、どうするつもりだつたの？」

【騎士娘】「勿論、身を委ねた上で、しかる後にそれなりの対応をして頂ければ、と考えていました」

【男主人】「……」

【騎士娘】「何分幼い頃から剣術一筋で……色恋沙汰には見向きもせず、気づいたら、この歳になつていきました」

【男主人】「親から縁談の話とかは来なかつたの？」

【騎士娘】「私の家では、幼い頃から『何事も自分で決断すること』が家訓とされているのです。その中には、自身で結婚相手を探すことも含まれています。勿論、親に相談すれば、それなりの人を紹介されたでしよう。

自分で言うのもなんですが、私には剣士としての才能が合つたようで、王都での剣武会でもそれなりの成績を残しています」

【男主人】「と、言われても……なんで僕だったのさ？」

【騎士娘】「こう言つては何ですが、男主人様は強く、かつ家柄も私の家と比べれば格が上であり、申し分ありません」

難を言えば、好色という噂でしたが……しかし、女性を大事にするという噂どおりなら、一応、私も女ですから……

私は別に愛を求めているわけでもなく、夫には何か尊敬できる所がいくつかあれば、それ以上を望みませんし……」

【男主人】「なんとなく分かつた気がするけど……ううん……ああ、せつかくだから、騎士娘も飲むのに付き合つてよ。それで謝罪を受け入れるよ。一人で飲んでるのも、少し寂しくてね」

第124話『騎士娘から、悩みを聞いていた』

草原と平穏の国・草原軍野营地

【騎士娘】「いいれふかあ？ 隊は男せーばかりでえ、女せーがわらひは1人なんれふよお？」

【男主人】「失敗した……1杯だけでこうなるのか」

【騎士娘】「聞いてまふかー！？」

【男主人】「はい、聞いてます！ 隊は男性ばかりで、女性は騎士娘だけなんだよね」

【騎士娘】「別にわらひはあ、男にきよーみはないけれどあ、ふつうモテモテれふよねえ？」

【男主人】「まあ、そういう状況なら普通はモテたりする、かな？」

【騎士娘】「モテないんれふ！ られもわらひを……モテないんれふ！」

【男主人】「ええつと……」

【騎士娘】「わらひはあ、女せーとしてのみによくがないんれふ！ ！ らからあ、モテないんれふ！」

【男主人】「いやいや、騎士娘はなかなか魅力ある美人さんだと思うよ？」

【騎士娘】「男『りゅりんらまあ、わらひはキレイれふかあ？』」

【男主人】「うん、綺麗綺麗…………隊の男性は、きっと騎士娘が綺麗だから近寄りづらいんだよ、きっと」

【騎士娘】「えへへへ……男『りゅりんらまにほめられらー』」

【男主人】（そういうえば、僕の周りに酒乱はいないな……酒豪は多いけど）

【騎士娘】「…………男『りゅりんらまあ、わらひにちゅーしたいれふか？』」

【男主人】「ぶつ、えーと？」

【騎士娘】「ちゅーする？（ずい）」

【男主人】「しないです（引き）」

【騎士娘】「ちゅーするの？（ずずい）」

【男主人】「だから、しないって！（引き）」

【騎士娘】「ちゅー……（ずずすい）」……（ぱたつ）

【男主人】「おおつと（抱き止め）」

【騎士娘】「……ぐうすう……」

【男主人】「酔い潰れたか……しかし、この体勢はちょっと良くな

いな」

【射手男】「男主人様、騎士娘を見かけなかつ……失礼しまし  
たつす！…」

【男主人】「…………僕、何か悪いことしたか？（がっくり）」

第125話『妖艶女は、屋敷に潜入していた』

草原と平穏の国・弟大公邸

【弟大公】『そうか……ああ、打てる手はできる限り……』

【妖艶女】（誰かと話している？ けど、2人以上の人気配はない……通信系魔術、か？）

【弟大公】『ふむ……人質には手を出すなよ。殺して意味がある者と、殺すと面倒になる者がいる……』

【妖艶女】（！？）

【弟大公】『ふはは、言つまでもなかつたか……ああ、すまん、少しばかり気を張つてゐようつだ……』

【妖艶女】（人質か……。誰に対しても、誰を押さえているのかは分からぬが……面倒なことだね）

【給仕娘】「貴女、そこで何なさつてゐるの？」

【妖艶女】「え、あ、はい……寝室のシーツを集めて来いと言わされました……」こちらの区画は、どこに寝室があるのか迷つておりました

【給仕娘】「そう……その場合の寝室は、客間か従業員室のものよ」

【妖艶女】「そ、そうなのですか？」

【給仕娘】「貴女見かけない顔ね。新人？ 」この屋敷における規則の説明をきちんと聞いていなかつたのかしら？」

【妖艶女】「いくつかは覚えているのですが……ええと……」

【給仕娘】「こつちの区画は、専用の者しか入れないの……そういう規則になつてゐるのよ？」

【妖艶女】「ほ、本当ですか？ き、規則を破つたら、やつぱりお

給金とか減らされちゃうんでしょ？

【給仕娘】「…………」

【妖艶女】「あ、あの…………？」

【給仕娘】「基本的に、この屋敷で働けるのは、誰かの紹介が必要なのよ？ 貴女は、何処のお家の縁者なのかしら？」

【妖艶女】「そ、それは、ですね…………」

【給仕娘】「何？ そんなに言えない事なのかしら？」

【妖艶女】「…………その、他言しないで頂けますか？」

【給仕娘】「約束はできないわね。いいから、とつとつ話しなさい」

【妖艶女】「実は…………この侍従長さんの元情婦でした……」

【給仕娘】「じょっ！？ なんてこと……公私混同もあつたものじやないわね」

【妖艶女】「精一杯働きますから、できれば、その…………」

【給仕娘】「…………後でまた色々と確認させてもらつわ。今は仕事に戻りなさい」

【妖艶女】「はい、失礼します！」

第125話『妖艶女は、屋敷に潜入していた』（後書き）

一応、新キャラなので紹介。

給仕娘

【種族】：人間族 【（外見）年齢】：20歳 【性別】：女性

【一人称】：ワタシ

【設定】：

・弟大公の屋敷に勤めている女性。

第126話『妖艶女の行動は、怪しまれていた』

草原と平穏の国・弟大公邸

SE（扉を叩く音）：コンコンッ

【給仕娘】『給仕娘です。お時間はよろしいでしょうか？』

【弟大公】「ん、給仕娘か？ 入つて来い」

SE（扉の開閉音）：ガチャ、ギイ、バタン

【給仕娘】「失礼いたします」

【弟大公】「まだ夜というには時間が早いな。……どうかしたのか？」

【給仕娘】「ええ、ご主人様に確認をしておいた方がよろしいかと思いまして……」

【弟大公】「話してみる」

【給仕娘】「先ほど、新入りのメイドが、廊下に佇んでおりました」

【弟大公】「そのメイドに何か問題があるのか？」

【給仕娘】「いえ、問題があるかどうかは明確には分かりません。本人が言うには、誤つてこの区画に入り込んだ……と申してましたが、違和感が少し」

【弟大公】「そのメイドの身元は？ 誰の縁者だ？」

【給仕娘】「それが……侍従長の元情婦らしく、それとなく侍従長本人に確認を入れましたが、新入りの説明に嘘はないようです」

【弟大公】「ほう、あいつもお盛んだな。私なぞ、お前一人で精一杯だというのに（抱き寄せ

【給仕娘】「ふふふ、お戯れ言を……今」はワタシ一人を持って余

しているだけでしょ「う？」

【弟大公】「それで、私はどうすればいい？」

【給仕娘】「何もしない方がよろしいかと」

【弟大公】「そうなのか？ どうせ小娘一人、お前ならば殺すのは造作もないだろ？」

【給仕娘】「空を突いて遠くにいる龍を呼び寄せるほうが問題です。何も焦る必要はありません。毒で死ぬ龍とはいえ、生き物である以上、死の腕<sup>かいな</sup>からは逃がれませんから」

【弟大公】「そうかそうか、お前に任せておけば安心だ」

【給仕娘】「ご理解頂けまして、嬉しく思います」

【弟大公】「話はそれだけか？ ならば、そのメイドの件は頼んだぞ」

【給仕娘】「はい、かしこまりました」

第127話『副面女は、素直さに憧れていた』

草原と平穏の国・男主人邸

【猫//】「いらっしゃー！」

【副面女】「……2人はもう出発したのね？」

【猫//】「うん、お昼前に出発したよ」

【副面女】「そっか」

【猫//】「今、お茶を淹れるから、座つてー！」

【副面女】「あつ、私はすぐこ……って、ショウがないな（微笑み）」

【猫//】「お待たせしました。このクッキー、あたしが焼いたんだー！」

【副面女】「ありがと。それじゃあ頂きます。フー……（「ククク、サクッ、」）」

【猫//】「…………（じきじき）」

【副面女】「んー、少し茶葉の開きが足りないかな。この葉なら、カップに注ぐ前にもう少し待つたほうが良かつたかも？」

【猫//】「あうう～（しょんぼり）」

【副面女】「でも、クッキーの方は合格ね。人によつては甘さが足りないって言うかもしけないけど、私は甘さが控えめの方が好きだし、お茶菓子としてのクッキーなら上出来よ」

【猫//】「やつたあ！　たくさん焼いたから、良かつたらお土産にするねー！」

【副面女】「それじゃあ、もうつて帰ろつかな？」

【猫//】「うんー！」

【副官女】「とにかくで、猫//ひめちゃん……」

【猫//ミ】「なあにって？」

【副官女】「良かったら、みんなが帰つてぐるまで、私の屋敷で寝泊つしてもいいんだけど？」

【猫//ミ】「ううう、気持ちほ嬉しいけど……みんなが帰つてきた時に、あたしが一番にお出迎えするの」

【副官女】「そつか……いいなあ」

【猫//ミ】「何がいいの？」

【副官女】「ん、猫//ひめちゃんがね、ちょっとだけ羨ましいなって」

【猫//ミ】「副官女さんもメイドさんになりたいの？」

【副官女】「ち、違つて！ 羨ましいのは、猫//ひめちゃんの真つ直ぐな気持ちね」

【猫//ミ】「？？？」

【副官女】「猫//ひめちゃんは偉になつて、褒めたのよ。あーあ、私も頑張らなきゃ」

【猫//ミ】「えつひと？ 副官女さん、頑張れー！ ふあいとー！」

おーーー

第1-28話『上司と部下の父親が、歓談をしていた』

草原と平穏の国・東公爵邸

【東公爵】「わざわざや、お出で頂かなくとも、俺を呼び出せば良かつたでしょ？」

【王子様】「いやな……今回の訪問はあくまで私的なものだからな」

【東公爵】「ほお？」

【王子様】「部下の実家へ食事に誘われる」となんて、よくある話だろ？」

【東公爵】「まあ、普通の上司と部下だつたら無くはない話ですね」

【王子様】「ボクと副官女は、普通の上司と部下だと思つてゐるけどね」

【東公爵】「王子様を普通の上司と並んで此こが抵抗がありますが」

【王子様】「些細なことだ」

【東公爵】「そういうことにしておきましょ。それで？」

【王子様】「それで、とは？」

【東公爵】「部下の家に食事に誘われた上司が、たまたまその部下の父親と話が合つ、ということもよくある話なのでしょう？」

【王子様】「ああ、それもよくある話だね」

【東公爵】「お話を聞く前に一つ、うちの娘に可能性はありますかね？」

【王子様】「可能性ならあるんじゃない？ ただ……悪いけど、ボクは長マサニ派でね」

【東公爵】「以前の俺の誘惑は功を奏してるとも言ひ難いし、娘には厳しい戦いになりそうだ」

【王子様】「さて、その前に片付けないといけない問題があつてね。

ちょっと相談に乗つて欲しいんだ」

【東公爵】「お聞きしましょう」

【王子様】「今回の戦争について、どの辺りが落としへりになると思ひ？」

【東公爵】「ふむ、今回の戦争は絶対に負けないと仰るのですか？」

【王子様】「地の利と人の利は、こっち側にあるからね。それに男主人なら上手くやってくれるさ。」

こっちの優勢であれば、ボクなりの戦いが必要になるだろ。前もつて準備をしておくに越したことはないよ」

【東公爵】「それは、もつともな話ですね」

【王子様】「東公爵はどう考える？」

【東公爵】「王子様は、大陸を統一するおつもりはありますか？」

【王子様】「いいや、ボクの両手は『草原と平穏の国』だけで塞がつてゐからね」

【東公爵】「そういうことでしたら……」

第129話『黒服女が、勇気を振り絞っていた』

鉱山と武勇の国・宿屋

【黒服女】「……いけ、女は度胸だ……涙が最終兵器だ……（ぶつぶつ）

【白髪女】「……？」

【黒服女】「……まあは、じつして……ああきたら、じつやつて……（ぶつぶつぶつ）

【白髪女】「もしもし？」

【黒服女】「ひやつ！？」

【白髪女】「こんな扉の前の廊下で、何してるんだい？」

【黒服女】「いえ、決して部下男様を誘惑して、あんなことや、そんなこと、きやー、わたしの口からは言えないわー！ なんてことをしようなんて、全然計画してませんよー！」

【白髪女】「ふむふむ」

【黒服女】「嘘泣きで落としてダメなら、お酒で前後不覚にして既成事実を作つてやれなんて、もつ頭の片隅にでも考えていませんからー！」

【白髪女】「アタシの協力が必要そつかねえ？」

【黒服女】「是非にーー！」

【白髪女】「おおっ、うちの馬鹿弟子に見習わせたい積極さだねえ」

【黒服女】「はつ！ すみません……少し暴走しました」

【白髪女】「問題はないさ。それで？」

【黒服女】「？？」

【白髪女】「アタシたちは、明日の睡前に、この宿を発つ。つまり、制限時間はあと半日だ」

【黒服女】「はー」

【虹髪女】「つまり、まだまだ諦めぬには早かつていいや。やるいじやるのには半刻あれば十分」

【黒服女】「はいっ！」

【丘處女】「わたくしの書画だが、耳を貸しなさい」

三

【黒服女】「…………ええつ…………そ、それで…………は、はい…………」

黑皮文

【白髮女】

【黒服女】「が、頑張ります！」

## 第130話『意外な事実が、判明していた』

森林と調和の国・草原軍野営地

【男主人】「失礼いたします。今、少しよろしいでしょうか？」  
【堅騎士】「おお、男主人殿か。何かあつたか？」  
【男主人】「明日以降の特務隊の行軍について、少し相談が」  
【堅騎士】「ふむ？」  
【男主人】「派遣軍本体と合流する前に寄りたい場所があるのです」  
【堅騎士】「寄りたい場所……。それは今回の戦争に対する策  
というわけか？」  
【男主人】「いえ、寄りたいのは“森の南外れ”です」  
【堅騎士】「そこは……今回の戦争における最初の戦場だな。そこ  
で何か得れるものがあるとは思えないが……」  
【男主人】「この目で確かめたいだけです。それと、確かめさせた  
いだけです」  
【堅騎士】「……まあ、問題はないだろ。別行動を許可する」  
【男主人】「ありがとうございます」  
【堅騎士】「時に……特務隊に配属させた2人は役に立つているか  
？」  
【男主人】「ええ、2人とも優秀で、僕は助かっています」  
【堅騎士】「そうか（ほつ）」  
【男主人】「何か心配ごとでもあつたのですか？」  
【堅騎士】「いや、大したことではない」  
【男主人】「……そうなのですか？」  
【堅騎士】「……誤魔化されてはくれんか」  
【男主人】「ええ、まあ……もちろん、無理やり聞きだすつもりは  
ありませんが」

【堅騎士】「何、単純な話だ。

某と騎士娘は、異母兄妹でな……  
それがし

某が5歳の誕生日を迎えた頃に母がなくなり、数年後に父が後妻として家に迎えたのが、騎士娘の実母だ。“堅騎士”と“騎士娘”

で名前が似て いるだろ?」

【男主人】「…………外見は、あまり似てませんね」

【堅騎士】「まあ、某は父と前妻に似て、妹は後妻に似ているからな。

まあ、異母兄妹とはいえ、兄妹の仲は悪くはないぞ。某が兄として妹の様子を気にする程度にはな」

【男主人】「なるほど……」

【堅騎士】「もちろん、騎士娘を特別に他の兵士より**ひいき**頗るして いた

りはしないがな」

第131話『そこには、非日常の光景が広がっていた』

森林と調和の国・戦場跡

【男主人】「話に聞いていた以上だな……」

【騎士娘】「…………」

【射手男】「男主人様、ここは何なんつすか？ わざわざ軍から離れて、特務隊だけで……」

【男主人】「ここは、今回の戦争で、今の所最も激しく両軍がぶつかり合つた場所だ」

【騎士娘】「…………」

【射手男】「野晒しにされた屍のせいで、景観も匂いもヒドイ場所つす……」

【男主人】「できることなら、埋葬してやりたいが……僕らだけじゃ、手が足りないか。」

……騎士娘、大丈夫か？」

【騎士娘】「だ、だい……うつ……失！ 礼しま、す！」

SE（走り去る音）・タタタタツ……

【男主人】「ま、耐えた方だな……」

【射手男】「あの様子じゃ、胃の中が空っぽになるのは確実つすね」

【男主人】「射手男は？」

【射手男】「おれも結構きてるつす。とはいえ、おれの場合は人の死体は初めてじゃないから……野盗退治の任務に付いていたこともあるつす」

【男主人】「そつか……」

【射手男】「男主人様、荒療治つすか？」

【男主人】「…………」

【射手男】「おれはともかく、騎士娘は初めての戦争つす。いきなり戦場に出ると、恐慌して役に立たないか、場の熱気に流されて異常な興奮状態になるか、どちらかになる可能性が高いつす。

冷静な精神状態の時に、この場所に連れて来られたら、極度の恐慌や興奮を起こさないつす。もしかすると、それがこの狙いだつたりするつすか？」

【男主人】「それが半分、残り半分は僕の覚悟のため…………」

【射手男】「覚悟？」

【男主人】「ああ、約束のためだけじゃなくて、今度は、僕自身のために人を殺す覚悟を…………」

【射手男】「…………」

【男主人】「…………騎士娘の様子を見てくる」

【射手男】「はい。じゃあ、おれは少し辺りの様子を見てくるつす

## 第132話『田舎のを、見失っていた』

### 森林と調和の国・戦場跡

【男主人】「……ほら、水と手ぬぐい」  
【騎士娘】「……ありがとうございます」  
【男主人】「……」  
【騎士娘】「……お見苦しい所をお見せしました」  
【男主人】「無理はするな」  
【騎士娘】「無理はしていません。自分の不甲斐なさに呆れています……」  
【男主人】「あの光景を見て、どう思つた?」  
【騎士娘】「匂いもキツかったのですが……焦点の合つていない死体の目と目があつた時、胃が締め付けられるような嫌悪感と忌避感を……受けました。  
戦場に来る、ということがどういうことなのかは分かつていたのに、覚悟が足りてなかつたんですね」  
【男主人】「その気持ちは覚悟とかは関係なく、当たり前のことだよ。生物なら、本能的に死を避けようとし、嫌悪するし忌避もする。夜が怖いのだって、自分の命を脅かすモノがあるかも知れないからだ」  
【騎士娘】「しかし、私は騎士です」  
【男主人】「騎士であるつが、初めてなんでしょ。生きてないままのヒトを見るのは」  
【騎士娘】「それはッ!」  
【男主人】「国へ帰る?」  
【騎士娘】「帰りません!」  
【男主人】「堅騎士殿から話は聞いた。騎士娘は、この戦場に来る

必要はなかつたんでしょ？」

【騎士娘】「我が家では……戦に出て、武勲を挙げることが、騎士の誉れだと教えているのです。私は女ですから、兄ほど厳しく育てられませんでした。いえ、むしろ、甘やかすように育てられたと思います」

【男主人】「まあ、貴族の家の娘は、有力な家との結びつきに使われるのがほとんどだからね。むしろ、娘が軍に入ることを許す家というのが珍しい」

【騎士娘】「私もそう思います。大人しく嬌げな令嬢として育つた方が親孝行だつたかもしません。けれど、女だから兄とは違う扱いをされるのが嫌で……気づいたら、騎士を目指していました」

【男主人】「参戦したのは名誉のために？」

【騎士娘】「はい……けど、今は良く分からなくなつてきました」

【男主人】「何が？」

【騎士娘】「自分が戦う意味が……敵を……いえ、ヒトを殺して、それが誇れるのかを」

【男主人】「けど、帰らない？　いや、帰りたくない？」

【騎士娘】「……はい」

【男主人】「……」

【騎士娘】「……」

第133話『スープを飲んで、温まっていた』

森林と調和の国・特務隊野営地

【射手男】「とりあえず、辺りに人が残っている気配はなかつたつす。近くに小さな集落があつたけど、そこも無になつていたつす。多分、戦禍を逃れるために避難したんだと思うつす」

【男主人】「ご苦労様……ん、そろそろいいかな？ ほら」

【射手男】「いただきまつす！」

SE：（焚き火の音）：パチパチ……

【射手男】「ふーふー……（ぱくぱく、ずずつ）……ふう、男主人様、これ、見た目は悪いけど、味は美味いっす！ 魚のスープっすか？」

【男主人】「干し魚と根野菜のごつた煮かな？ とりあえず、褒めるならちゃんと褒める……（もぐもぐ」

【射手男】「美味いっす。ところで、騎士娘は、大丈夫っすか？」

【男主人】「難しいとこかな……身体の方は大丈夫だけど、口口口」というか、気持ちがバツサリ折れちゃつたかな」

【射手男】「それで、どうするつもりっすか？」

【男主人】「どうするつもりつて？」

【射手男】「ココロが弱つて、女性を優しくするのはジゴロの基

本つす！ おれは、しばらく離れてた方がいいっすか？」

【男主人】「こら待て、あれだけ説明したのは何を聞いてたのかな

？」

【射手男】「建前はいらないっす！」

【男主人】「正真正銘の本音だ――！」

【射手男】「……え？ 「冗談じゃなくてマジっすか？ 男主人様の  
数々の武勇伝は……」

【男主人】「そんな事実はない！（きつぱり）」

【射手男】「ひどいっ！ おれら男兵士推定3万人の夢とロマンを  
返せっす！」

【男主人】「知るかつ……！」

【射手男】「屋敷に押しかけ美女メイドや獣つ娘メイドをはぐらせ、  
職場ではお嬢様との宫廷ラブ、下町での年上のお姉さんからの誘惑  
の全てが、嘘の……嘘の情報だったんすか……！」

【男主人】「……」

【射手男】「……」

【男主人】「そ、 そうだよ？」

【射手男】「……男主人様、 なんであからさまに目を逸らしてる  
すか？」

第134話『騎士娘は、強さを求めていた』

森林と調和の国・特務隊野営地

【男主人】「起きてるか？」

【騎士娘】「……はい。申し訳ありません、今日は失態を晒してしまって……」

【男主人】「とりあえず、」飯。まだ暖かいからさ」

【騎士娘】「わざわざすみません……けど、今は食欲が……」

【男主人】「無くても食べら。」これ、隊長命令ね」

【騎士娘】「そんなことでつ……？」

【男主人】「重要なことだよ。全部吐き出してからは、水を少し含んだくらいでしょ？」

【騎士娘】「え、ええ……」

【男主人】「汁物だし、味付けは薄くしたから、食べられるだけでも食べること」

【騎士娘】「（はむはむ、ずずつ）……これは、射手男が作ったのですか？」

【男主人】「いや、僕が作つたんだけど、味とか変だつた？」

【騎士娘】「いえ、懐かしい味がします。干した魚で出汁をとつていますね？」

【男主人】「分かつたか。東の領地の郷土料理を元にしてるからね」  
【騎士娘】「もつとも我が家で作る時は、もつと安い魚で出汁を取つていましたけど」

【男主人】「ふう……」

【騎士娘】「……男主人様は……」

【男主人】「何かな？」

【騎士娘】「どうして、そんなに強いんですか？」

【男主人】「それは、どういう意図での質問?」

【騎士娘】「男主人様は、あの戦場跡を見て、まったく動搖していませんでした……知っていたんですね。あそこが、ああいう状況になっていることを。

それを当たり前のように……受け止めた強さが知りたいです」

【男主人】「それは強さなんかじゃないよ。ただの経験と諦めかな」

【騎士娘】「経験と諦め?」

【男主人】「そう……僕は人が死んで動かなくなるを何度も見てきただけ」

【騎士娘】「何度も……」

【男主人】「そうするとね、感情の一部が麻痺していくんだ。だから、死体を見て何も思わないっていうのは、強さなんかじゃない」

【騎士娘】「でも……」

【男主人】「それに、僕が強くなる方法を口で説明したとしても、多分、本当の意味で騎士娘は強くはなれないと思う。他人の考え方を聞くのはいいけど、それに倣うだけじゃダメだよ、きっと。」

本体に戻つて合流するまで、……少し時間をかけて考えて、自分なりの答えを出して欲しい」

## 鉱山と武勇の国・郊外の丘

SE (群衆の叫び) : ワアアアアア

【部下男】「此処までヒトの声が聞こえてくるなんて……」

【都内】「一の森」が成功への道ですね。

【白髪女】「成功するだらう。お姫様も言つて」

「この国における最大の戦力を味方にした上で」

二

【白髪女】「もちろん、黒騎士殿が軍部の方にも色々細工をしてい  
るだらうけどねえ。それに兵士なんて言つても、そのほとんじが民  
衆と変わりないさ」

【語】 男 国で一番力があるのは 団結した田舎者たちか】

「… ていただろうからねえ。」

【部下男】一 確かに、オレらが情報を集め回っていた時も、国への  
鬱憤は高まつていましたが……しかし、これはクーデターとは言え  
ないのでは?」「

【白髪女】「ああ、これはクーデターではなく、  
お姫様も上手く焚き付けたもんだ……」  
“革命”だねえ。

【部下男】「お祖母様、かくめい、とは?」

【白髪女】 一 ああ、ケー・テーが短期決戦で国の元首に取つて代わるための政変ならば、革命は国の形態そのものへの政変といつところかねえ」

【部下男】「それはつまり……」

【白髪女】「今回の件が終われば、民衆は自分達に力があることこの気づくだろうや。そうなれば、貴族ではない一般民からの政治への介入が始まるだろ？」

【部下男】「それじゃあ、鉄皇女様の計画は失敗じゃ……」

【白髪女】「いや、そこまでを考慮しての選択だろ？ あの姫様は、國を手に入れると言いながら、自分自身の権力に対しても、それほど興味を示していなかつた……そういう意味では、馬鹿弟子と似ているかもしねないね？」

【部下男】「男主人様と？」

【白髪女】「ああ、自分自身の地位や影響力について気にしない辺りかねえ。もつとも、お姫様の場合は、自分自身の影響力を知つた上で気にしてないつてところは、馬鹿弟子とは違つけどね。さて、無事に街を抜け出したんだ。アタシたちは、やるべき」とがある場所へ向かうとしようかね？」

【部下男】「……はい」

【白髪女】「なに、黒服娘なら心配は要らないだろ？ ああ見えて腕は悪くなさそうだからね？」

【部下男】「べ、別に黒服娘のことを心配してたわけじゃ……」

【白髪女】「この一件が終わつたら、ゆっくりと考えればいいや」

【部下男】「……」

【白髪女】「オマエがどんな道を選ぼうが、アタシは応援してあげるからや。せいぜい頑張りなよ」

## 第136話『己の無力に、涙を流していた』

森林と調和の国・特務隊野営地

【射手男】「こんな所で何をしてるっすか？」  
【騎士娘】「つ！！ 射手男、か？」  
【射手男】「……なるほど、1人で泣いてたっすね」  
【騎士娘】「…………ふんつ」  
【射手男】「結局、答えは見つかつたっすか？」  
【騎士娘】「なんでそれをつ！？」  
【射手男】「はつはつは、おれの聴覚をなめないで欲しいっす！ 天幕一枚程度簡単に……いきつ！？」  
【騎士娘】「盗み聞きとはいی趣味ですね。殴りますよ」  
【射手男】「…………そういうのは殴る前に言つて欲しいっす（自分で頭をなでなで）」  
【騎士娘】「ゲンコツ一回で許しますから、ありがたく思つてください」  
【射手男】「へーい……」  
【騎士娘】「…………」  
【射手男】「…………」  
【騎士娘】「で？」  
【射手男】「ん？ 何か用つすか？」  
【騎士娘】「それは私の質問です！ 何か私に用があつて探してたんじやないんですか？」  
【射手男】「そこはそれ、同じ隊のメンバーとして心配してるっす」  
【騎士娘】「ありがとううござむ」  
【射手男】「ただでさえ3人しかいない部隊なのに2人になつたら、仕事が増えたら面倒っす」

【騎士娘】「貴方は！ 私をバカにしているんですか！！」

【射手男】「軽くしてゐるつす」

【騎士娘】「！！！」

【射手男】「……何を怒つてゐるつすか？ 街で人を殺せば人殺しつす。けど、戦争で敵をたくさん殺せば英雄つす。……殺す覚悟も、殺される覚悟もなしに戦場に来てただなんて、問題外つすよ？」

【騎士娘】「……」

【射手男】「例外は戦争に巻き込まれた一般民だけつす。おれからすれば、今の騎士娘は、ただの足手まといつす。軍に寄つて集まつてくる娼婦の方が、士気の高揚に役立つだけマシつす」

【騎士娘】「貴様……（ギリッ」

【射手男】「甘えないで欲しいつすね。男主人様が優し過ぎるから、おれが代わりに言つてあげただけつすよ？ つと、また殴られる前に退散させてもらつす！」

【騎士娘】「くつー！…………くう、なんで、なんでつ……」

第137話『“棘”の集落で、本軍と合流していた』

森林と調和の国：“棘”の集落（草原軍本部）

【堅騎士】「おお、男主人殿、戻られたか」

【男主人】「はい……ただ、少し問題が……」

【堅騎士】「問題？」

【男主人】「僕らは、南の戦場跡に向かったのですが、……そこで騎士娘が、戦士としての壁に……」

【堅騎士】「軟弱な……」

【男主人】「申し訳ない」

【堅騎士】「いや、男主人殿は何も悪くなかろう。むしろ、妹が、このまま実戦に出ていたらと思えば……兄としては感謝の念が堪えん（深々）

【男主人】「頭を上げて下さい。僕には僕の理由があつて、偶々なのですから」

【堅騎士】「しかし、それでは、特務隊の任務に支障が出るか……誰かを割り当てるから、しばらく時間を頂けるか？」

【男主人】「いえ……僕が目指す所が定まりました。目処が立つまでは、このまま……」

【堅騎士】「ふむ。それがもし、騎士娘のことを庇つてのことならば……」

【男主人】「それは……全くないとは言い切れませんが、僕の気持ちによる問題です」

【堅騎士】「真に忝い（深々）

【男主人】「ですから、頭を上げてください」

【堅騎士】「しかし、如何なる心算で？」

【男主人】「近く……鉱山と武勇の国」に政変が起ります

【堅騎士】「！？！？」

【男主人】「その一報が敵軍に届いた時……」

【堅騎士】「敵軍は、様々な思惑によって、分裂するでしょうね」

【男主人】「ええ、幾つかの有力氏族の私兵、一般民の徴兵、傭兵などの混合軍における弱みですね」

【堅騎士】「となると、その情報がいつ敵軍に届くかですが……」

【男主人】「その情報については、僕の方で抑えてあります。タイミングを見計らい、積極的に噂を流しましょう」

【堅騎士】「某たちは……勝てるでしょつか？」

【男主人】「勝ちましょつ」

【堅騎士】「そうですな。勝ちましょつぞ」

## 第138話『射手男が、手紙を読んでいた』

森林と調和の国・“棘”の集落（特務隊天幕）

【射手男】「…………」

SE（紙を強く握る音）・クシャ……

【男主人】「ただいま。いるのは、射手男だけか？……ん？ それは手紙か？」

【射手男】「つ！ 男主人様、おかえりなさいっす。団長とのお話は終わつたつすか？」

【男主人】「ああ、とりあえずね。2人にも話しておこいつと思つたんだけど」

【射手男】「騎士娘は、お茶をもらいに行つただけなので、すぐに戻つてくると思うつす」

【男主人】「そうか、じゃあ少し待とつか」

【射手男】「ちなみに、これは恋人からのラブラブ便りっす！ 男主人様がどうしてもつていうなら、幸せのおすそ分けをしてあげるつすよ？」

【男主人】「いらんっ！…！」

【射手男】「ほらほら、とつても可愛い文字つすよ？ けど、本人はこの文字の百倍は可愛いっす！」

【男主人】「あー、何だろ？……」<sup>フレイムハンマー</sup>「う、唐突に『劫炎撃槌』を唱えたい気分」

【射手男】「何言つてるつすか！… しれつと、攻城戦用魔術を使しないで欲しいっす！」

【男主人】「大丈夫大丈夫、ぜんぜん疲れないから朝飯前ダヨ？」

【射手男】「男主人様の疲労の心配はしてないっす！」

【男主人】「じゃあ、この、軽くイラッとした気持ちをどう扱<sup>ふっしゃく</sup>い  
る? ？」

【射手男】「申し訳ありませんでしたっす！ 心から謝るので、そ  
の似合わない爽やかな笑顔をやめて欲しいっす！！」

【男主人】「まてい！！ 謝る場所が違うだろ！ しかも、サラッ  
と僕に笑顔が似合わないとか言つな！！」

【射手男】「誤解っす！！ 笑顔が怖いって言いたかつただけっす  
！！」

【男主人】「…………ふむ？ まあ、そういうことにしておくか」

【射手男】「い、命の危険を感じたっす」

【男主人】「はっははは、面白いことを言つなあ。僕が必要に人  
殺しをするわけないでしょ？」

【射手男】「も、勿論っす」

【男主人】「それに死んじゃつたら、苦痛も感じないしね」

【射手男】「…………」

【男主人】「…………今の笑う所だよ？」

【射手男】「あは、あははは…………っす」

第139話『すでに、答えは出ていた』

森林と調和の国：“棘”の集落（特務隊天幕）

【男主人】「や、お帰り」  
【騎士娘】「あれ、男主人様ですか？ 射手男は？」  
【男主人】「ん、少し騎士娘と話をしたくて、席をはずしてもいいった」  
【騎士娘】「！？」

【男主人】「えっと、話というのは……」

【騎士娘】「そのつー、お茶を……話の前に淹れますね」

【男主人】「ああ」

SE（お茶の準備をする音）：カチャカチャ……トポトボ……

【騎士娘】「どうぞ……」

【男主人】「ありがとうございます。（ずすつ）ん、悪くないね……」

【騎士娘】「それとこれ、砂糖菓子ですが、補給係の人にもらいました」

した

【男主人】「もらつていいの？」

【騎士娘】「ええ、もらつたのは良いんですが、実はあんまり好みではないので」

【男主人】「（カリッ、ずすつ）……」

【騎士娘】「…………（ずすつ）」

【男主人】「で、話だけどね。答えは、出たかな？」

【騎士娘】「…………」

【男主人】「…………」

【騎士娘】「答えは、出ませんでした」

【男主人】「敵を殺せない？」

【騎士娘】「いえ、相手が敵というならば……殺します。いや、殺せる、とは思います」

【男主人】「何を悩んでいるの？」

【騎士娘】「……敵でなければ、殺さなくても良いのだと、気づいてしまったからです。」

あの戦場跡で死んでいたのは、敵だけじゃありませんでした。味方も大勢死んでいた！ 敵だつて、戦争で、戦場で出会わなければ、笑って語り合えた人だつたかもしれない！

馬鹿だつたんです……戦争に出れば、騎士としての誉れを得れる……私はその過程に気づいてなかつた……。

敵は殺せても、人は殺せません……殺したくありません

【男主人】「きっとそれが、君の答えなんだよ」

【騎士娘】「そうなのでしょうか？ だとしたら、もうダメですね……」

【男主人】「ダメじゃないぞ。じゃあ、できるだけ人を殺さない戦争を始めようか（にこり）」

【騎士娘】「……はい？」

## 第140話『停戦、といつ名の理想を語っていた』

森林と調和の国：“棘”の集落（特務隊天幕）

【射手男】「それで、どうするつもりですか？」

【男主人】「これは堅騎士殿にも話したことなんだが、「鉱山と武勇の国」で政変が起ころる」

【騎士娘】「政変っ！？ それは正確な情報ですか…？」

【男主人】「ああ、近いうち新しい皇帝が生まれ……いや、もしかすると、皇帝じゃないかも知れないけど、「鉱山と武勇の国」のトップが入れ替わる。」

そうなれば、鉱山軍も、このままここで戦争を続けるわけには行かなくなる」

【射手男】「その混乱を付いて攻めれば、こっちの勝利っすね！！」

【男主人】「……いや、攻めない。停戦、もしくは投降を呼び掛ける」

【射手男】「なつ！？ それは甘くないっすか！」

【男主人】「客観的に見れば、甘いかもしれないけど……けど、で起きただけ人を殺さず、この戦争を終わらせるんだ。それが一番面倒で、一番カツコイイだろ？」

【騎士娘】「……」

【射手男】「そんなの理想どころか、妄想に近いっす！！ そもそも、おれらは援軍であつて、実際に戦つているの森林軍っすよ？ この戦争は一方だけを收めても終わりにはならないっす！」

【男主人】「勿論、分かっているさ。この作戦を取るためには、まづ森林軍の総大将である“棘”的氏族長に会つて、理解を得る必要がある」

【射手男】「その通りっす！ こんな状況で協力してもらつことな

んてきつと不可能つす！」

【男主人】「僕は、戦場跡で覚悟は決めたつて言つただろ？ もし何かを望むなら、自分から動かなければ、その望む何かを動かせる可能性はないままなんだ」

【騎士娘】「……」

【射手男】「……」

【男主人】「とまあ、偉そうなことを言つた所で、2人の同意も得られないような作戦は、失敗するかもね」

【騎士娘】「……私は、その……男主人様が言つたとおり、無駄に人が死なずに戦争が終わるならば、その作戦を信じてみたい。ろくに剣も力も振るうことのできない私だけ……」

【男主人】「騎士娘、人を守るために必要なことは、剣でも力でもない、まずは気持ちだよ」

【騎士娘】「男主人様……」

【射手男】「……分かり合つた顔で見詰め合つて、結局、籠絡されてるつすね」

【騎士娘】「なつ、何を言つ！ 私は男主人様の考えに感銘を受けただけであつてな……」

【射手男】「おれは、どつちでもいいつすよ？ 反対はしたつすけど、やれるものならやつてみろ、つていう気分つす。……それに、男主人様だったら、氏族長や敵軍兵士も簡単に口説き落としそうです」

【男主人】「2人とも、ありがとう……」

【射手男】「お礼を言つるのはまだ早いつす。全てが終わつてから、言つて欲しいつすよ」

～幕間～『兵士達』

森林と調和の国・鉱山軍野营地

SE(茂みの音)・ガサガサツ

【見張兵】「ひやつ！？」

【巡回兵】「落ち着け、オレだ」

【見張兵】「な、なんだよ……脅かすなよ」

【巡回兵】「大丈夫か？」の間、夜中にうなされてただろ？」

【見張兵】「……怖いんだ。いつ敵が襲つてくるのか、もしかしたら、あの木の陰から矢が飛んでくるんじゃないかなって……お前は怖くないのかよ？」

【巡回兵】「オレだつて怖いさ。けど、ここは軍の側面だ。まだ安全な方じやないか」

【見張兵】「そつは言つたつてな！ いつ、全面衝突になるのか分からんんだろ！？」

【巡回兵】「そりや、そつだが……」

【見張兵】「俺はよ……農家の三男でさ、村に徵兵令が出たときに、自分から志願したんだ。軍に来れば、それだけ食い扶持が減るだろう？ だからや……」

【巡回兵】「オレだつて似たよつなもんぞ」

【見張兵】「死ぬのはやつぱイヤだ……けど、このまんまじや、いつか死ぬ……だつたら、いつそ、軍から脱つぞ」

【巡回兵】「言つな！ それ以上言つない、オレはお前を止めなくちやならない」

【見張兵】「つ！？ いいじやないか、ビウせだつたら、一緒に……」

【巡回兵】「言つなつて言つてんだろ！……やるなら、オレに関わらないよつこやつてくれよ。失敗した時にどまつちつを食らうのは勘弁だからな」

【見張兵】「…………」

【巡回兵】「バレたら、その時点で死ぬぞ。バカなことを考へずにはのまま生き残ることを神に祈つた方が懸命だぜ？」

【見張兵】「だけじょ……こんな恐ろしい夜を、あと何日過ぐせばいいんだ……」

【巡回兵】「そんなこと、オレに分かるかよ…………」

【見張兵】「……ヤギの乳で作ったチーズをさ」

【巡回兵】「ん？」

【見張兵】「火で少し焦げるくらいに炙つて、酢漬けのキャベツと一緒にパンで挟んで食つんだ」

【巡回兵】「…………美味そつだな」

【見張兵】「ああ、俺の大好物だ」

【巡回兵】「オレは、あれだな。塩をたくさん振つた鶏肉に、小麦粉の衣をつけて、油で揚げたヤツが好きだな。アツアツを頬張つたところに、なみなみとジョッキに注いだエールに口をつけるんだ」

【見張兵】「それは、俺も一度、食つてみたいな」

【巡回兵】「食えるや。そう信じていれば、きっとな」

## 第141話『偉い人たちを、説得しようとしていた』

森林と調和の国・森林軍本部

【男主人】「皆様、私の急な申し出にも関わらず、お集まり感謝いたします」

【偉//ミ】「英雄である男主人殿の頼みだ、無下にはできません。それで、我々森林軍の幹部を集めての話とはなんだろうか?」

【男主人】「この度、一つの案を持って参りました。それについて、皆様の同意を頂きたく思います」

【老//ミ】「7年前と同じく火計を用いるつもりか?」

【男主人】「……あの時の策により、エルフ族の宝たる森に傷を負わせてしまい、もつと良い策があったのではないかと、忸怩たる思いです」

【老//ミ】「昔のことについては、すでに決着がついてある。ワシらとしてもさう蒸し返すつもりはない。しかし、それを再びとなると……」

【男主人】「安心をしてください。今回の案も戦争を終わらせるための策ではありますが、火計ではありません」

【偉//ミ】「その策を用いれば、此度の戦争も勝てる?」

【男主人】「いえ、私が提案したいのは、戦争に勝つための策ではありません」

【偉//ミ】「……しかし、戦争を終わらせると……」

【男主人】「はい、戦争は終わらせます。皆さん、今回の戦争を“無条件で停戦”することを認めては頂けないでしょうか?」

SE (ざわめく音) …ザワザワツ……

SE (台を叩く音) : バンッ!!

【偉ミミ】「“無条件で停戦”だとっ!? それがどうこう意味なんか分からぬのか!?」

【男主人】「分かつてあります」

【偉ミミ】「いいや、分かつていたらそんな言葉が口から出でてくるものか! 仕掛けられた戦争に、こちらから停戦を申し込むなぞ、それは敗北を宣言したのも同じではないか!!」

【男主人】「いいえ、同じではありません……此方から、向こうが“停戦することを許してやる”のです」

【偉ミミ】「『停戦してやるから戦うのをやめよう』とこつて聞く相手が攻めてきたりすると思つてか!? 敵をどうやって説得させる!?!?」

【男主人】「私が説得させます」

【偉ミミ】「もし、仮に説得ができたとしよう。我々の、踏み躡られた兵士や田畠はつ! 今回の戦争に置ける損害の賠償はどうなるつ!!」

【男主人】「……分かりました。賠償については、向こうとの交渉の場を設けさせましょう」

【偉ミミ】「そういう問題ではないっ!! そもそもが戦争を仕掛けられたのは我らが国であつて、男主人殿は部外者であるから、そのような提案ができるのだ!!」

【男主人】「確かに、私が属している国は「平穏と草原の国」でありましよう! しかし、「森林と調和の国」とは盟友たる国であり、私も戦争を憂う者として……」

【偉ミミ】「戦争をしているのは、我らが国と「鉱山と武勇の国」だ!!

それとも男主人殿は我が国に一兵として仕えてみるか? その気概が少しでもあるならば、話の続きを聞いてやる。もつとも、今回のように我々氏族長に意見できるようになるまで、何年かかるかは

分からぬがな

【男主人】「つ  
.....」

第142話『長ミミが、秘密の作戦を持っていた』

森林と調和の国・森林軍本部

【長ミミ】「お義父様に申し上げます。それならば、次期氏族長としての発言ならば、如何でしょう？ 範例としては、緊急時に置いて、氏族長と次期氏族長には、ほぼ同等の権限が与えられるはずです」

シテ（ざわめく音）・ザワツ

【長ミミ】「（小声）お待たせいたしました。ご主人様」

【男主人】「（小声）待つてないよ！？ というか、何でここにいるのかな？ それにお父様つて！？」

【長ミミ】「（小声）もちろん、メイドですから……ご主人様、私は話をあわせてくださいませ」

【男主人】「（小声）え？ お、おい……」

【偉ミミ】「長ミミっ！ いくら氏族長直系の1人娘とはいって、範例に従えば女性は氏族長にはなれん！」

【長ミミ】「そのことにつきまして、諸氏の方々には失礼なれど、この場を借りて発表したいことがあります。

男主人様、先日……“私の耳に触れたい”と仰られましたよね？」

【男主人】「ああ、確かに言つたが……」

【長ミミ】「その話、此の場を持つてお受けしたいと思います」

【男主人】「……？」

【偉ミミ】「つ！？」

【老ミミ】「ほお……」

【長///】「範例に従えば、氏族長の第一子が女性だつた場合、その伴侶を次期氏族長に据えるとあります。お義父様……」

【偉///】「何を言う！－人間族が次期氏族長だなどと認められるか！－そもそも、いくら男主人殿とはいえ、お前と人間族との婚姻を認めん！－！」

【長///】「範例には、人間族が氏族長になつてはいけないとは、一言も伝わつておりませんが？」

それに、男主人様はエルフ族の古き慣習に従つて“耳問みみとい”をして下さり、私がそれを受けたのです。過去にもエルフ族と人間族と結ばれた前例はあり、範例にも問題はないはずです」

【偉///】「だがつ！－！」

【老///】「まあまあ、偉///殿……そう興奮おきふん召されるな。まあ、どういう経緯はあれど、男主人殿がこの場において発言を続ける権利を得た。そういうことで、良いかの、お嬢さん」

【長///】「老///様の寛大なご配慮に感謝いたします」

【男主人】「（小声）……長///、後で話がある」

【長///】「（小声）かしこまりました。ひとまずは、私が支援で

きるのは、ここまでです。頑張つてくださいませ、ご主人様」

## 第143話『戦争の悲しみを、説いていた』

森林と調和の国・森林軍本部

【老ミミ】「さて……男主人殿、話の続きを聞かせてもらおうか」

【男主人】「それでは、失礼して……皆様方に質問があります。この戦争はどうすれば終わるのでしょうか？」

【偉ミミ】「それは、もちろん、敵軍を打倒し、我らが勝利すれば終わる」

【男主人】「確かに7年前は、私たちの勝利で終わりました。しかし、また彼らは攻めてきたのです」

【偉ミミ】「ならば、今度こそ完膚なきまでに叩きのめしてやればいい！」

【男主人】「もし、逆に私たちの軍が完膚なきまでに叩きのめされたらどうしますか？」

【偉ミミ】「そうなつたら、一矢を報いるために、雌伏の時を過ごす！」

【男主人】「……相手もそうであると、何故考えないのですか？それとも、気づいていて、知らぬ振りをされてるのですか？」

【偉ミミ】「なん、だと？」

【男主人】「偉ミミ様は、子供に向かつて、剣を振れ、敵を殺せと教えるのですか？」

【偉ミミ】「さつきから、ぬらりくらりと本意を避けるよつた発言ばかりして！ 男主人殿は、何が言いたいのだ！」

【男主人】「戦争を続けるということは、人に憎しみや恨みを教える、ということです。そして、恨みの連鎖は、止めるべくして止めなければ、何処までも何処までも繋がっていきます。今ならば、それを止めることができるのです。

偉ミミ様……皆様も考えてください、敵軍にいる彼ら全員が憎いのですか？彼らのうち、どれだけが本当の意味で、私たちを憎んでいるのでしょうか？」

SE (静寂) ……

【男主人】「私は確かに、今回の戦争も直接的な関係者ではないかもしない。けど、私は子供やこれから生まれてくる幼子おさなこに、自分たちの恨みを継がせたいとは考えません。

この気持ちは、私と皆様で同じではないのでしょうか？」

【老ミミ】「……男主人殿、ワシから一つ聞きたい。男主人殿は、ワシらと同じように、敵軍の将を全員説得させるつもりか？」

【男主人】「いいえ」

【老ミミ】「説得をせず、どうやって、敵軍を停戦へと導く？」

【男主人】「私が『いいえ』と言つたのは、説得する相手が“敵軍の将を”と訊かれたからです。私が説得しようとしている相手は“敵軍の全兵士”です」

## 第144話『2人の視線が、色々と語っていた』

森林と調和の国：“棘”の集落（特務隊天幕）

【長//】「おかえりなさいませ、『主人様。』ついで、こちらにお座りください」

【男主人】「あ、ああ……」

【騎士娘】「…………（じい）」

【射手男】「…………（じい）」

【長//】「ただいま、お茶を淹れますね。お方もお代わりはいかがでしょう？」

【騎士娘】「いや、私はまだ残っているので、大丈夫です」

【射手男】「じゃあ、おれは頂いていいですか？」

【長//】「おや、お湯の方が切れているようですね。『主人様、申し訳ありません、少々お待ちください。……（ぱたぱた）』

【騎士娘】「（ずずつ）うん、お茶が美味しい。……」

【射手男】「……えーと、おれが代表して質問ますけど、いいですか？」

【男主人】「いや、待て、先に僕のほうから話をさせろ、というかするぞ」

【射手男】「横暴つす！」

【男主人】「そつちの質問は大体分かるからー。こっちの話を先にさせろ！」

とりあえず、会談の方は大分上手くいった。しばらくの間、猶予がもらえた感じだ。後で計画の詳細について話すが、この会談で計画の半分は上手くいったと考えていい

【射手男】「それはすごいっす！ 男主人様なら、きっと残り半分も上手くいくに決まってるっすね」

【騎士娘】「私も協力できる」としたら、なんでも言つてください！」

【男主人】「もちろん、2人も色々と協力してもうつ予定だからね」

【射手男】「で、あのエルフの美女とはどういう関係ですか!? メイド服を着せて、ご主人様と呼ばせるなんて、最近ちょっとどうかなあ、と思つていた男主人様のこと見直したつす！」

【男主人】「……地味にダメ出しちゃうた!? というか、『ま／＼ま／＼』は2人に自己紹介とかしてないの？」

【射手男】「あ、名前は聞いたつす！ 男主人様とは『ただならぬ関係ですが、詳しく述べ』ご主人様から聞いて欲しいです。私の口から……『ま／＼』って言つてたつす！ ……最後の『ま／＼』て何なんつすか！？」

【男主人】「口に出して、わざわざ『ま／＼』って言つてる辺りで色々と間違つてていることに気づいてつ！ …」

【騎士娘】「その……私には『男の甲斐性は大目に見ますので、悪いようにはいたしません』と言われたのですが、なんで“男の甲斐性”的話を、女性の私に言うんでしょうか？」

【男主人】「うん、君はそのまま騎士娘でいて欲しいな（疲」

【騎士娘】「えつ……ど、どうこうことですつ！ ? わ、私は頑張りますから！ 見捨てないで下さい！ …（ひしつ」

【男主人】「い、いや、見捨てるとか、そういう話じゃなくてつ！ ?」

【長／＼】「ただいま戻りまし……戻つてくるのが少し早すぎたでしょ？ うか？」

【男主人】「変な空気の読み方をするな――――」

第145話『計画のために、根回しをしていた』

草原と平穏の国・王宮（王子執務室）

【副官女】「失礼します」

【王子様】「お？ どうした？」

【副官女】「いま少しよろしいでしょうか？ 男主人様からの手紙が届きました」

【王子様】「そっちの方が重要だな。見せてくれ」

【副官女】「こちらです」

【王子様】「（ピッ）………… むう（惱」

【副官女】「…………いかがされましたか？」

【王子様】「副官女、今、担当している中で急ぎの仕事はあるかな？」

【副官女】「3人分の日常業務とたまに2人への後方支援を行なっていますが、とくに急ぎの仕事は……」

【王子様】「よし、1つ仕事を任せた！ お父上の東公爵と相談して、この仕事に当たつてもらいたい」

【副官女】「えっと、この仕事と言われましても……」

【王子様】「この手紙を読んでみろ」

【副官女】「拝見させていただきます………… これは、本当の情報でしようか？（惱」

【王子様】「男主人がボクたちに嘘をつく理由がない、それにその手紙には、ちゃんとボクと男主人の間にしか分からない符丁が書かれているから、偽造とも考えにくい」

【副官女】「しかし、「鉱山と武勇の国」の政変が起こるから、それに合わせて戦争を停戦に導くなんて……」

【王子様】「可能、だろうね」

【副官女】「…………」

【王子様】「どういう手段がとるかは分からぬけど、鉱山軍総勢約8万人のほぼ全てを投降させるつもりだ」

【副官女】「投降させた場合、食料などにその帰国に要する必需品の準備と支給支援、ですか？」

【王子様】「うん、すつごく面倒そうな仕事だよね」

【副官女】「…………概算でも相当な予算が必要になりますが」

【王子様】「まあね、仮に兵士一人あたり帰国に2万イエン掛かるとして、約16億イエンか」

【副官女】「準備にも諸経費が掛かりますから、……まず、その予算をどこから捻り出すか」

【王子様】「第十一師団に秘密の隠し予算とかあつたりしない？」

【副官女】「ないとは言いませんが、『飢えたクマに一粒の小麦』という感じになります」

【王子様】「あ、そつか……あるところから出をせねばいいんだ」

【副官女】「心当たりがあるのですか？」

【王子様】「ん、叔父上はこの国でも有数の資産家だからね。この際、快く協力してもらおう」

## 第146話『再会した日が、昔のよつに感じていた』

森林と調和の国…“棘”の集落（特務隊天幕）

【男主人】「さてと……」

【長ミミ】「お疲れ様です。ワインなどをお持ちしましょうか？」

【男主人】「いや、いらぬ……」といふか、色々と話が聞きたいんだけど。まあ、なんでここにいるんだ?」

【長ミミ】「馬に乗つて来たからでしょうか?」

【男主人】「いや、そうじやなくて! 屋敷で、僕の帰りを待つていろつていう話じやなかつたっけ?」

【長ミミ】「その件については明確な返答をしておりませんが?まあ、こいつらがしゃいませ」とお見送りをしましたので、その事が誤解を招いた可能性については、主觀の違いかと思われます」

【男主人】「ええい、予算会議の文官長の真似か!!--」

【長ミミ】「いえ、商工ギルドの副ギルド長の真似でしたが」

【男主人】「そんな違いが分かるか?!--」

【長ミミ】「ポイントは、“可能性”という単語を多用する所です

【男主人】「無駄な知識過ぎる! まあ、ここにこるのはいいとしよ。昼の件は一体どうしたことかな?」

【長ミミ】「主人様が苦境に立たされていましたので、思わず援護を……と」

【男主人】「……確かに、あの時は討論のアドバンテージをとられて困っていたし、概ねこっちの思惑通りに話は決着したけど……その部分については感謝している」

【長ミミ】「……」

【男主人】「で、“耳<sup>みみ</sup>問い合わせ”って、何のこと? すべなくとも、僕は初めて聞く単語だつたんだけど」

【長///】「以前、「エルフ族の女性は、異性が耳に触ると子供ができる」という話をしたのを覚えていらっしゃいますか？」

【男主人】「昼にも言われたけど、僕が長///に“耳を触つていいか”と聞いた時の話だよね？ なんだか、懐かしい感じだけど、長///が僕の屋敷で働き始めた頃の話だから、そんなに昔の話でもないか」

【長///】「その俗説になつた元となるエルフ族の古い慣習が“耳問い合わせ”なのです。例えば、エルフ族では一生涯の友人を“同じ耳をしている”など、耳を重要視する風習があります。

耳に触らせる行為は、同性同士なら不破の友情や忠誠を意味し、異性同志の場合……その、子を生す様な関係になることを意味します」

【男主人】「……つまり、“耳問い合わせ”ってのは、求婚みたいなもの？」

【長///】「みたいなではなく、まさしく求婚、そのモノです」

【男主人】「あ……」

【長///】「……知りずっと言つてこなるのは気付いていました、あの時は、本当に内心すこぐドキドキしていたんですよ？」

【男主人】「うう……その割には、「性的興奮は催しません」とか平氣な顔をしてたような」

【長///】「何を言つていいのか分からずに、口走つていただけです。それに、あの時だつて、イヤだとは、一言も、その、言つませんでしたし……」

【男主人】「……」

【長///】「魔術師さん……私を、お嫁さんこ、もひつてくれます、か？」

## 第147話『エルフ族の儀礼服で、着飾つていた』

森林と調和の国：“棘”の集落（特務隊天幕）

【男主人】「では、今回の作戦の説明をしたいと思つ」

【射手男】「えーーと、男主人様？ その、作戦の説明はいいんですけど、後ろに立つてゐる長ミミさんは、いいんすか？」

【長ミミ】「射手男様、私はメイドですので、調度品のよつに扱つてくださいませ」

【男主人】「いや、それは理由になつてないし。一応、長ミミも今回の作戦について、協力してもらつから問題はない。そもそも“棘”の氏族長の娘らしいから、関係者といえば関係者なんだ」

【射手男】「……なんで、そんな人にメイドにしてるつすか？ 勇者過ぎるつす！」

【男主人】「語るに語れない事情があるんだ、とりあえず、察しろ……」

【射手男】「お、おおつ！？ なんか、分からぬけど、分かつたつす！」 で、それと逆に騎士娘はどうしたつすか？」

【男主人】「ああ、騎士娘には、重要な役目があるからな。事前に確認のため、用意してもらつてるんだ……そろそろかな？」 長ミミ、連れてきてもらつていいか？」

【長ミミ】「かしこまりました」

【騎士娘】「（部屋の外から）お、押すな。す、少し心構えというものが欲しいつ！」

【長ミミ】「（部屋の外から）「んな」とで心構えなど必要ありません。やあ、入つてください」

【騎士娘】「うあつー？」

卷之三

【男主人】「ん、いい感じじゃないか？」少し時間が掛かっていた  
みたいだけど

「…………」

【長三】 こんな格好と言われましては  
士がまとう儀礼服ですが? 「  
“袴”の田舎の女卑

黒姫が力なりと言ふ。かの日、一見して、此の力が見えた。

**【射手男】**「別に肌が見えているわけじゃないのに、なんで、そんな二心デバハバついてるつすが、

「...」

【男主角】「うん、似合っているんだし、問題はないみたいだね」

【男主人】「何でもやります」

戦の主役は、騎士娘なんだから、頑張つてもらひよ

第148話『鉱山軍に、不安が広がっていた』

森林と調和の国・鉱山軍野営地

SE(馬が駆ける音)・パカパツ、パカパツ、パカパツ……

【早駆兵】「緊急っ！ 緊急っ！！」

【小隊長】「おい、どうしたつー？」

【早駆兵】「司令部の天幕はどちらですか！？ 皇都にて、クーデター及び一般市民の反乱が発生、至急、指令部への取次ぎをお願いします！…」

SE(ざわめく音)・ザワザワ……

【巡回兵】「クーデター？」

【見張兵】「反乱……？ お、皇都に何があつたんだ？」

SE(ざわめく音)・ザワザワ……

【小隊長】「司令部は、こ、こっちだー！」

【早駆兵】「ありがとうございます！」

【弟皇子】「バカなつ！？ 鉄皇女がクーデターを起こしただと！？」

【早駆兵】「はつ、私が皇都を発つた時には、すでに現皇帝様と兄王子様の身柄は拘束されたとの情報が飛び交つておりました」

【洞将軍】「何かの間違えではないのか？」

【早駆兵】「私が最も早く到着したようですが、後に続報が届くかと思われます。真偽はそこで分かるかと……」

【岩将軍】「……皇都が落ちたとなれば、補給もままならん。下手すれば我らは、このまま立ち往生しかねんぞ」

【弟皇子】「ならば、どうするのだ……！」

【洞将軍】「今は、正しい情報が届くのを待つべきかと」

【岩将軍】「そんな悠長な暇があるか！ 今すぐ撤退の準備をするべきかと存じます！」

【洞将軍】「何を浮ついているやら、戦場の情勢は常に変わっているのだ。正しい情報を持たずに動けば、手痛い損害を受ける」

【岩将軍】「傷に気づかねば、致命傷にだつてなるのだぞ！ 早いうちに対処すべき問題だ！」

【弟皇子】「くそつ……くそつ……」

【小隊長】「申し上げます……野営軍上空に、光の怪物が出現しました……！」

## 第149話『彼らは、覚悟を決めていた』

森林と調和の国・鉱山軍野营地

SE (ざわめく音) …ザワザワ……

【見張兵】「……」

【巡回兵】「……」

【見張兵】「……ど、どうすればいい?」

【巡回兵】「どうすればいい、ってオレに聞かれてもなあ」

【見張兵】「わたくは、本当の話かな?」

【巡回兵】「皇都でのクーデターか……」

【見張兵】「俺の村は、皇都から結構近いんだ」

【巡回兵】「今、司令部のほうでお偉いさんが会議をしてるだろ? オレ、さすが端の考へることじやないさ……」

【見張兵】「あんたは不安じやないのかよ! もしかしたら、このまま……」

【巡回兵】「しつ、今は誰が聞いているか分かんないんだぞ」

【見張兵】「俺、夜が明けに紛れて、脱走しようかと思つ」

【巡回兵】「……」

【見張兵】「あんたも、一緒に逃げないか? その、あんたには感謝してるんだ」

【巡回兵】「……」

【見張兵】「俺はさ、剣術なんて好きじやないんだよ。訓練だつて死にそうな思いでやつてたんだ。訓練の時だけじゃなくて、野营地でもさ、色々と助けてもらつた恩は忘れてない」

【巡回兵】「……止せよ。オレは、別に恩を売つたつもつはな

い

【見張兵】「あんたから見れば、些細なことだつたかもしれないけど、俺には十分、恩だと思える」とだつたんだよ。だからよ、一緒に逃げてくれないか?」

【巡回兵】「……」

【見張兵】「……」

【巡回兵】「……少し休むぞ、逃げるためには体力を温存しなきやな」

【見張兵】「つー?」

【巡回兵】「一つ言つておくがな、オレも剣術は好きじやないんだ(一ヤシ)」

【見張兵】「あは、あはははは……」

【巡回兵】「ふ、ふふふふ……ん?」

【見張兵】「どうした?……!?!?なん、だ?あの、巨大な光る蛇みたいなのは……」

## 第150話『女騎士は、人の思いと力を信じていた』

森林と調和の国・鉱山軍野営地

【男主人】『拝聴せよ……』

【見張兵】『声が……聞こえる?』

【男主人】『私は、『救森の魔術師』と呼ばれる者なり、鉱山軍及び森林軍全ての兵士に告ぐ。』

【巡回兵】『救森の……不死の魔人』の声かつ!?』

【見張兵】『それは、7年前の戦争の……(ゾクリ)

【男主人】『拝聴せよ! 我が主より、この場にいる全ての兵士向  
けた言葉を!』

【騎士娘】『初めまして皆さん……』

【見張兵】『今度は女性の声と姿が……見える』

【巡回兵】『オレもだ……』

【騎士娘】『私は、草原と平穏の国の騎士娘と聞こます。皆さんに  
お願ひがあります。武器を捨ててください。』

この戦争は、私と“救森の魔術師”的名の下に預かりさせてください』

【見張兵】『預かる……?』

【騎士娘】『……人は群れなければ、弱い存在です。群れには“決  
まり”があり、“決まり”がなければ、群れることはできません。  
しかし、皆さんは、自分が群れの一員であると同時に1人の人間

であること自覚していますか？

この戦争は片手に足るほどの人数の意思で、起されたものでしょう。

しかし、その戦争を続いているのは、皆さん1人1人の意思であるはずです。

1人が武器を捨てただけでは戦争は終わらないかもしません、10人でも無理です。100人でも足りないかもしません。1,000人が武器を捨てたならば、少しだけ争いが減るかもしません。10,000人が武器を捨ててくれたら、戦争が終わるかもしれません。

1人と10,000人の違いはどこでしじょうか？私はそこに大きな違いはないと私は思います。

10,000人が武器を捨てると言つことは、武器を捨てる勇気を持った1人が10,000人いたと言つことです。

だからこそ、私は、皆さんにお願いをするのです。武器を捨ててください、と

## 第151話『作戦が一段落し、ドタバタしていた』

森林と調和の国・草原軍野营地

【騎士娘】「……武器を捨ててください」と

【男主人】「……」

【騎士娘】「……」

【男主人】「……よし、もう良くな」

【騎士娘】「はあ～～……き、緊張しました。だだ、大丈夫でしたか？」（ぶるぶる）

【男主人】「うん、大丈夫大丈夫、上出来だよ」

【騎士娘】「け、剣武会の準決勝よりも緊張しました。少し怖かったですしおら、まだ手が震えています」

【男主人】「でも、その騎士娘の頑張りは無駄にはならないよ」

【騎士娘】「私は頑張りと言える程のことはやつていません、全部、男主人様に言われたとおりにやつただけです」

【男主人】「それは違うよ。僕は、戦争をやめるように訴えかけて欲しいと、騎士娘に頼んだだけだ。さつきの言葉は、騎士娘が自分で考えて紡いだ言葉だろう？」

「そうじゃなければ、怖いと思うほど緊張することなんてないさ。そして、本音で語った言葉はきっと届く……僕ではなく、騎士娘がこの戦争を終わらせるんだ。ま、失敗したら、僕のフオローが悪かつたつてことで、また次の作戦を考えればいいさ（微笑）」

【騎士娘】「あう……」

【男主人】「ん？　どうしたの？」

【騎士娘】「い、いえつ、なんでもつ、ありません！」

【男主人】「そう？　疲れたなら、ここで休憩してて。僕は堅騎士殿の所へ、様子を伺いに行くから」

【騎士娘】「疲れていません。疲れていたとしても休んでなどいられません。私も向かいります」

【男主人】「じゃあ、一緒に行こう」

【騎士娘】「えつと……すみません、その前に、いつもの服に着替えたのですが」

【男主人】「せつかくだし、そのままでいたら？」

【騎士娘】「こんな軽装では心許ないじぶんをもとです」

【男主人】「んー。でもそれ、エルフ族の技術で織られた特殊な布を使われているから、下手な鎧より丈夫だよ？」

【騎士娘】「ええっ！？」

【男主人】「衝撃や斬撃にもある程度耐えれて、一般的な魔術師の攻撃魔術なら威力を半減以下にするし」

【騎士娘】「う、うそですよね？」

【男主人】「一揃いで800万イエンくらいじゃない？」

【騎士娘】「脱ぎますつ、今すぐ脱いでお返します————！」

【男主人】「うわあ、人の目の前で脱ぐなあ————！」

【長ミミ】「…………（うんうん

【男主人】「長ミミつ、静かに入つて、頷うなづいただけで、出て行かないで————！」

## 第152話『妖艶女は、忍び込んでいた』

草原と平穏の国・郊外の屋敷

【妖艶女】（つたぐ、こんな盗賊紛いの」と、本当はアタイの役割じゃないんだけどね、つと）

【妖艶女】（近くに人の気配はない……例の人質がいるのは、確かに2階の廊下の突き当たりの部屋……階段はどうちだ？）

【妖艶女】（…………？）

【妖艶女】（…………どうこうことだ、これは？ 人の気配がなぞ過ぎる）

【妖艶女】「もひ、移動した後なのか……」

【給仕娘】「いいえ、彼女はまだここにいますよ」

【妖艶女】「！？？」

【給仕娘】「ワタシの指示で、見張りは全員この屋敷から出て行ってもらつたけど、彼女は2階の廊下の突き当たりの部屋で、静かにしているわ」

【妖艶女】「ア、アンタは……なんで、ここに居、ぐつ」

【給仕娘】「くすくす、男を誑（たら）し一込むのが自分だけの専売だと思わないで欲しいわね。もっとも、ワタシは聞き出すためじ

やなくて、聞かせるのが目的だつたけど

【妖艶女】（ヤバイ、これは……罠に嵌められた……）

【給仕娘】「思つていた以上に素敵ね、アナタ。“戦い方を知らない”割には、よく、ワタシの殺気に耐えているわ」

【妖艶女】（殺氣だつて……？ 殺氣だけで、こんなに重圧が……手足が動かない……）

【給仕娘】「そんなに人を化け物のように見ないで欲しいわね。アナタは、ワタシと同じ化け物の手駒なんでしょう？」

【妖艶女】（化け……物？）

【給仕娘】「分かつてないの？ それとも知らない振りかしら？ アナタの飼い主は、男主人なんでしょう？ ワタシが化け物なら、カレだつて十分化け物よ。ううん、カレはワタシ以上の化け物よ……（くすくす）

【妖艶女】「……」

【給仕娘】「怒つちゃつた？ でもね、アナタよりワタシの方が力のことをよく分かつてているのよ。だつて、ワタシはカレと同じ化け物なんだから……」

【妖艶女】「……それ以上口を開くな！ アンタの話はこれ以上聞きたくない……」

【給仕娘】「ふふふ、ワタシの殺氣を打ち破るほど、精神が高揚しちゃつたのね」

【妖艶女】「アンタの目的は何なんだ……」

【給仕娘】「目的なんかないわ、生きているのだって、ただの暇つぶしですもの……さあ、悪い化け物の呪縛から抜け出した王子様は、囚われの姫の元へ向かう権利があります。どうぞお通り下さい（優雅に一礼）

【妖艶女】「くつ……」

## 第153話『囚われの姫を、救出していた』

草原と平穏の国・郊外の屋敷

【給仕娘】「おやへ、どうしたのかしら……？囚われのお姫様がいる部屋は向こうよ？」

【妖艶女】「……急に、どうぞお通り下すこと言われて、どうもどうも、と進めるわけがないだろ」

【給仕娘】「ん～、望み通りサックリ殺してあげてもいいのだけど……」

【妖艶女】「！？」

【給仕娘】「アナタを殺そうと思えば、いつでも殺すことができたの。そんなことも分からぬのかしら？おバカさんは、ちょっとワタシ好みではないわね」

【妖艶女】「一つ聞かせてもらおうか、なんでアタイを見逃す？」

【給仕娘】「ああ、そつか、そんなことを気にしてたの！アナタが男主人の手駒だと分かったからよ。同じ化け物として、カレには敬意を払っているの。

別にアナタだけなら、さっさと殺してもいいんだけどね。カレが関わっているから、サービスしてあげてごるのよ？運が良かつたわね……これ以上ワタシをイライラさせるつもりなら、話の続きを聞く？」

【妖艶女】「……いいえ、あなたの気まぐれかも知れないけど、一応感謝するわ」

【給仕娘】「ふふふ、どういたしまして」

【妖艶女】（運が良かつた……癪しゃくだけど、今は人質とやらを確認す

るのが先だ)

SE（扉を開く音）：カチヤ、キイ……

【人質娘】「誰……ですか？」

【妖艶女】「夜分に失礼します。安心してください、アタイは貴女の味方だ。起きていてくださつてちょうど良かつた。ここから逃げるぞ」

【人質娘】「ダメ、わたしが逃げたら、あの人に迷惑が掛かつちゃう」

【妖艶女】「逃げたら、迷惑が掛かる？」

【人質娘】「ええ、わたし逃げたら、あの人にヒドイことをすると……」

【妖艶女】「…………なるほど、それには逆もあるな。きっと、その貴女がいうあの人も、貴女のことを盾にして、何か脅されているんだ」

【人質娘】「そんな……じゃあ、わたしが大人しくしていったことは無駄、だつたんですか？」

【妖艶女】「いや、それはそれで良かった。もし貴女が暴れたり、反抗しようと思つたら、貴女がひどい目に合わされていたな。とにかく、アタイを信じて一緒に逃げてくれるか？」

【人質娘】「…………はい、分かりました」

【妖艶女】「ところで、貴女のあの人とやらは、いったい何処のどいつなんだ？」

【人質娘】「ええ、あの人との名前は……」

## 第154話『戦争は、停戦に向かっていた』

森林と調和の国・草原軍野营地

【男主人】「堅騎士殿、状況はどうなっている?」

【堅騎士】「おお、男主人殿。見事な扇動だったな……状況は概ね予想以上の効果が及ぼしている。すでに5千人以上の投降者が出了たと思われる。ああ、騎士娘もよく頑張った」

【騎士娘】「はっ、ありがとうございます。師団長」

【部下男】「失礼します。こちらに男主人様がいらっしゃると」

【男主人】「おっ、ここだー!」。『ご苦労だつたな。堅騎士殿、騎士娘……紹介します。第十一師団のナンバー3の部下男で、今回の作戦におけるもう1人の立役者です。それで、首尾は?』

【部下男】「任せてくれ。鉱山軍の司令部の天幕に催眠香を焚いてきましたから、敵の首脳陣は、全員しばらく意識が戻らないでしょう。眠りから覚めた時には、もう遅いと思います」

【堅騎士】「ほう、敵の中心部まで忍び込んだと言うのか?」

【部下男】「まあ……種を明かせば、敵の正式な武装一式をまとめて、堂々と乗り込んだだけです」

【堅騎士】「そうだとしても、それ自体は並大抵の度胸ではできないうことだ。素晴らしい」

【射手男】「失礼するつす。堅騎士様、敵の投降者がそろそろ8千人に超えたしそうつす。あ、男主人様たちもここにいたつすか」

【堅騎士】「敵の1割が投降したか、この調子なら、完全に鉱山軍は瓦解しそうだな」

【射手男】「男主人様の作戦が大成功つすね」

【男主人】「みんなの協力のおかげだよ」

【騎士娘】「そんなことはありません！ 確かに私たちも力を貸しましたかもしませんが、男主人様がいなければ、今回の作戦は、そもそも提案されることすら無かつたと思います！」

【射手男】「その通りつす……だから、残念つす。男主人様は、この戦争では手柄を立てないで……欲しかつたつす」

SE（短剣が肉に刺さる音）…ドスッ…

【射手男】「男主人様には、毒が一切効かないと聞いてるつす。この短剣は、毒ではなく……“呪い”によつて、相手を殺すものらしいつす。

……おれらのために、死んでくれつす」

【男主人】「つ！？」

【射手男】「男主人様が手柄を立てた時、立ててしまつた時に戦場にいる間に刺すよつに言われたつす。

きつとおれもすぐに後を追うから先に逝つて欲しいつす。

……おれは、自分が生きて帰るのが大事つすけど、人質娘の命の  
方が何倍も大事つすから

SE（人が倒れる音）…ドサッ…

# 草原と平穏の国：男主人邸

【半ミミ】「…………えいっ（ボスツ」  
【男主人】「うわあつ！？」  
【半ミミ】「わわわつ！？」（コロン）  
【男主人】「…………半ミミ？」いま、寝ている僕の上に飛び乗つてこ  
なかつた？」「

【半三】「…………おはようございます！ とおさま！」  
【男主角】「…………半三、いい子だから、教えて欲しいんだけど、僕に飛び乗つた？」

【男主角】「なんで？」  
【半三】「ねただからー。」

【男主角】「僕は寝てる人に飛び乗っちゃダメって言つたよね？」  
【半ミミ】「でも、かあさまが、なかなか起きなかつたら、やつち  
やてもいいつて……！」

【当社】「ハセガ

「かあれ様ですー。(あらほり)

【男主角】一ぐふ……あれ、目から汗が……」

【半IIII】「あー、ともれも、またねたーー。」

! . !

【男主人】「僕はもうだめだー。半々が、ほつぺにキスしてくれないと起きれないー」

「川井君、あれなーいー」

【男主人】「おおつ、元気になつてきたぞ」

【半//】 「あよ'ひは、とくべつですよー」

【男主人】 「はー、ありがとうございます。かあさまたひは、食堂かな?」

【半//】 「猫のおねえちゃんと、いつしょに朝ごはんを作つてしま  
したー。だから、わたしが、とおおまを起こしにきましたー。」

【男主人】 「それじゃあ、一緒に行こつか。今日の『』飯はなんだろ  
うね」

【半//】 「わたしがイチゴのジャムがいいですー。」

【男主人】 「そうだね。まだ残つてたはずだから、出してもらおう  
か」

【半//】 「わーー」

SE (扉の開閉音) : ガチャ、ギイ、バタン

【男主人】 「おはよ'ひ」

【猫//】 「おはよ'ひ」でこーます、旦那様」

【半//】 「かあさまー。とおおまをつれできましたー。」

【娘//】 「お疲れ様、半//ひちゃん。それと、おはよ'ひ」でこーま  
す、あなた」

第156話『緩やかな時が、流れていた』

草原と平穏の国・男主人邸

【男主人】「…………あれ？」

【長ミミ】「どうかしましたか、あなた？」

SE（お茶の準備をする音）・カチャカチャ……トボトボ……

【男主人】「今さ、僕のことを呼んだ？」

【長ミミ】「いいえ……空耳じゃないですか？　はい、どうぞ？」

【男主人】「ありがとうございます。……空耳、かなあ？」

【長ミミ】「ええ、半ミミちゃんは、猫ミミさんと一緒に部下男さんの家へ行っています」

【男主人】「（ずずつ）あー、そういえば、久しぶりに2人きりだなあ」

【長ミミ】「なんだかんだで誰かがいますからね。半ミミちゃんも、まだまだ手が掛かる子ですし。

くすり、半ミミちゃんと言えばプロポーズされたみたいですよ。それも2人から

【男主人】「ふ、ふろぼーずつ！？　あ、相手は誰だ！？」

【長ミミ】「もちろん、王子君と黒下君ですよ」

【男主人】「くつ、たとえ王子君といえど、簡単につちの娘はやらんぞつ！　今度の座学の際にとつちめてやる」

【長ミミ】「大人げない。あなた、子供同士の可愛らしきじつに遊びみたいなものですよ？」

【男主人】「うー、そう言つたつてなあ？」

【長ミミ】「そんなことばつかり言つてこるど、半ミミちゃんに『遊

じょ やま、ジャマー』とか言われますよ?」

【男主人】「ぐはつ…………それは死ねる。主に心理的に……」

【長三】「まつたく…………2人きりの時くらい、私のことを見てくださいませんか?」

【男主人】「あー、うん、その、だな?」

【? ? ?】「…………せ…………ま…………」

【男主人】「…………あつ」

【長三】「いきなり辺りを見回されて、びつしたのです?」

【男主人】「…………」

【長三】「あなた…………?」

【男主人】「ああ、そつか、うん、そつこつ」と…………か

第157話『幸せな呪いから、目を覚ましていた』

森林と調和の国：“棘”の集落（氏族長宅）

【男主人】「ん、んん……」

【長ミミ】「！？ ご主人様！ 気が付きかれましたか？！」

【男主人】「ああ、戻つてこれた……か」

【長ミミ】「戻つて？」

【男主人】「それより、僕が倒れてから、どのくらい経つてる？」

【長ミミ】「今はもう日が落ちるくらいです。……無理に起き上がりで下さい！」

【男主人】「大丈夫、思ったよりは悪い気分じゃない。状況は？」

【長ミミ】「……堅騎士様が中心となつて、投降兵の収容と鉱山軍との調停の準備をしています。最も事態を收拾させる途中で、一般兵による上官への殺傷行為などがあり、まだ少し混乱が残つているようです。

それでも、今回の戦争は停戦に向かつ流れです。『ご主人様が仰つていた「鉱山と武勇の国』の政変が決め手だったようです。

この後は三ヶ国同士の上層部による話し合いによつて決着をつける形になると思われます」

【男主人】「そつか……僕の出番は、もう終わり、かな？」

【長ミミ】「はい、ですから、ゆつくりと休まれてください。怪我は私が魔術で治せたのですが、今まで正体不明の“呪い”的で、ご主人様の意識が戻らなかつたのですから……」

【男主人】「いや……多分、もう大丈夫だよ。“呪い”はもう解けていると思う」

【長ミミ】「ご主人様が解呪されたのですか？」

【男主人】「なんとかね」

【長//ミ】「流石さすがです」

【男主人】「（小声）……多分、僕1人の力じゃなかつたけど」

【長//ミ】「何か仰いましたか？」

【男主人】「いいや……喉が渴いたな。お茶もらえる？」

【長//ミ】「あ、はい、ただいまつ！！」

SE（駆けて行く音）：パタパタパタ……

【男主人】「“欲望を以つて心を閑ざす呪い”といった所か……それで、あんな空想に囚われた」

【男主人】「いや、まったく……自分の過去の失態を見せ付けられたみたいで、少しばかり恥ずかしいな」

【男主人】「……戦争は終わった、か」

## 第158話『草原と平穏な国へ、帰つてきていった』

草原と平穏の国・王宮（王子執務室）

【男主人】「失礼します。ただいま帰りました」

【王子様】「ん、」苦労様。よく帰つてきたな……」

【男主人】「ええ、お陰様で無事に帰つてきました。後方支援、ありがとうございました。僕が向こうを出る頃には、ずいぶんと落ち着いていました」

【王子様】「お礼なら、今まで予算を取つておいてくれた、叔父上に言つてくれ」

【男主人】「……まさか」

【王子様】「話をしたら、快く協力してくれたぞ。今回のような時のために残しておいた予算の全て出してくれた」

【男主人】「ははっ、それはずいぶんと胴回りがスッキリしたことでしょうね」

【王子様】「お礼なら妖艶女にも言つてやれ、今回はずいぶんと無茶なことをしたようだぞ」

【男主人】「そうですか……」

【王子様】「ところで、一つ聞きたいことがあるんだが」

【男主人】「何ですか？」

【王子様】「……」の「鉱山の武勇の国」からの書状、読んでみる

【男主人】「……」

【王子様】「今回の戦争における双方の不幸な行き違いウンヌンと、簡単に言えば『うちは新しい国になつたから、良いお付き合いをしたいの。そのための大天使として、男主人さんじやなきや、イヤよ（はあと』といつところか？』」

【男主人】「……」

【王子様】「先手を打たれた感が拭<sup>ぬぐ</sup>えないな。まあ、それよりもだ……どうやって鉄皇女と知り合いになった？ なんで、お前が口説かれる！？」

【男主人】「口説かれてませんよ！……『殿方は少しくらい』不器用な方のほうが良いですね』って、扱いやすそうだからって、暗に書かれてるじゃないですか、ここに！」

【王子様】「ばつか、口説き文句にしか見えないぞ！ なんて羨ましい！」

【男主人】「邪推のしすぎです！ つていうか、美女妹に言いつけますよ！」

【王子様】「お前つ、それは卑怯だろ！……それに今は大事な時期なんだから、変に興奮させるなよ！ 流産したらどうする！？」

【男主人】「はつ！？ 流産！？！？」

【王子様】「おつと、驚かせよつと思つてたのに……半年後には伯父さんだな、お義兄さん」

【男主人】「十分驚きましたよ……やる」とはやつてたんですね

【王子様】「もちろん、愛すべき奥さんだからな」

第159話『女2人で、ヤケ酒を呷っていた』

草原と平穏の国・男主人邸

【妖艶女】「おっと、グラスが空になつたな、ほら……（トポトボ  
【副官女】「ああ、ありがとうございます。では、1杯（トボト  
ボ」

【妖艶女】「で、えーと、なんの話をしてたっけ？」

【副官女】「長（ミミ）さんが庭に出て行つたけど、追わなくていいん  
ですか？」つていう話です」

【妖艶女】「そうだつた。アタイよりもアンタはどうなのさ？」

【副官女】「……霧岡気が、違うんですよ。こう、帰つてきてから、  
明らかに男主人様の彼女を見る眼差しが！ いくら疎い私だってピ  
ンと来ます！」

【妖艶女】「そうだね。アタイも半分は賛成さ。けど、まだ男と女  
の関係にはなつてないね。そこに付け入る隙はあると見たよ」

【副官女】「なつ、なんて、はしたないなことを！」

【妖艶女】「ふんつ、アンタも何を言つてるんだい。愛して欲しい  
つて事は、そういうことだらう？ 貴族ならなおさら、早いうちに  
跡取りが必要だつたりするんじやないかい？」

【副官女】「そういう話をしていいわけじゃありません！ 婚前に  
そういうことをすること自体が……」

【妖艶女】「アンタの男主人様への愛は、そんなもんなんのかい？」

【副官女】「そんなことはありません！」

【妖艶女】「よーし、よく言つた！ なあに2人がかりで押さえ込  
めば、コッチのもんだろ」

【副官女】「ふ、2人がかり？」

【妖艶女】「そうだよ、アタイが下半身を押さえるから、アンタが

上半身を押さえて……」

【副官女】「それじゃあ、私が不利じゃありませんか！？」

【妖艶女】「ほー、どこがどう不利なのか、教えてもららうか？」

【副官女】「そ、それは、上方にはなくて、下の方にあって……」

【妖艶女】「しちうがない、それじゃあ、下の方は先にアンタへ譲つて……」

【副官女】「そもそもですね！ そういう話をしていいんじゃなくて！ まあ……（ゴクゴク）

【妖艶女】「いい飲みっぷりだね！ アタイも負けられない（ゴクゴク）

【副官女】「ふはっ、いいですか？ まあ……」

【妖艶女】「おつと、グラスが空になつたな、ほら……（トポトポ）

【副官女】「ああ、ありがとうございます。では、（）返杯（トボトボ）

【妖艶女】「で、えーと、なんの話をしてたつけ？」

第160話『月明かりの下で、想いを受け止めていた』

草原と平穏の国・男主人邸（裏庭）

- 【長//ミ】「『』主人様、『』こんな所にいらしたんですか」
- 【男主人】「長//ミが……みんなはどうした？」
- 【長//ミ】「猫//ミちゃんは、はしゃぎ疲れて眠ってしまいました。  
副官女さんと妖艶女さんは、まだ飲んでいましたが……」
- 【男主人】「2人とも大丈夫かなあ……」
- 【長//ミ】「いい大人ですし、一日酔いなどになつても自業自得で  
しょ」
- 【男主人】「まあ、それもそうだけど。なんか、やつと帰つてきた  
という気がするな」
- 【長//ミ】「そうですね。私も……そう思います」
- 【男主人】「月が綺麗だな……」
- 【長//ミ】「ええ……そう思います」
- 【男主人】「この間の話、だけど……」
- 【長//ミ】「いつの話でしようか？」
- 【男主人】「あの「森林と調和の国」の集落で再会した時の夜の話  
？」
- 【長//ミ】「ええ……」
- 【男主人】「……」
- 【長//ミ】「……」
- 【男主人】「先に、少し自分の話を、していいかな？」
- 【長//ミ】「どうぞ……」
- 【男主人】「もつと以前にさ、僕は自分の子供が生まれるのが怖い  
つて話をしたじゃないか？」
- 【長//ミ】「ええ……」

【男主人】「だから、誰とも結婚もしないし、付き合つ気もない、みたいなさ……」

【長//ミ】「覚えて……います」

【男主人】「まあ、裏を返せば、怖がつてているのは、それだけ求めていたから……なんだよね」

【長//ミ】「求めて？」

【男主人】むとんちやく「ヒトはも、必要が無いと思つていてるものや興味がないものには無頼着になるんだよ。

憎んでいる、怖がつていて、嫌つていて……どれも悪いイメージがあるけど、その気持ちが強ければ強いほど、対象に対する想いは深くなつていて。

憎んでいるのは愛せなかつたから、怖がつていてるのは手に入れれないことへの嘆き、嫌つてているのは好きになつてもらいたい証……とこう面もあるはずなんだ」

【長//ミ】「そうなのですか……？」

【男主人】「なあ、長//ミ……」

【長//ミ】「はい？」

【男主人】「月が綺麗だな……」

【長//ミ】「その言葉は先ほども聞きました……」

【男主人】「……」

【長//ミ】「……」

【男主人】「なあ、長//ミ……」

【長//ミ】「はい？」

【男主人】「“耳に触つてもいいかな？”」

【長//ミ】「それは、どういう意味で、ですか？」

【男主人】「うつ……」

【長//ミ】「（じこ）」

【男主人】「……」

【長//ミ】「……」

【男主人】「……長//ミ、僕と結婚してくれないか？」

【長//ミ】 「そ」、疑問系なんですか……？」

【男主人】 「長//ミ、結婚しよう」

【長//ミ】 「その前に聞きたい言葉があるのですけど？」

【男主人】 「…………僕の子供を生んでくれ?」

【長//ミ】 「違います。“あ”で始まる言葉です……」

【男主人】 「…………」

【長//ミ】 「…………」

【男主人】 「…………長//ミ」

【長//ミ】 「はい?」

【男主人】 「…………愛してます」

【男主人】 「僕と一緒に生きて欲しい」

【長//ミ】 「私もです」

【男主人】 「結婚しよう」

【長//ミ】 「ええ、喜んで」

## 最終話『手紙が届いていた』

草原と平穏の国……？？？

白髪女おばーちゃんへ

「の前は、おみやげをありがとうございました。」

おばーちゃんへは、初めて手紙を書きます。

「主人さまと姫様が、けっこんして、半姫様が生まれて、色々となやんでいた時に、おばーちゃんに相談できて良かったです。」

今だから言えますが、きっと私の初恋は、『主人さまでした。』

こわくて、さびしくて、つらくて、そんな私を助けてくれたのが、『主人さまでした。』

その時の『主人さまは、ひとつもかつてつ良かつたです。』

……今の『主人さまは、半姫様に手紙で、少しかつこう悪いけど。』

でも、ようえん女さんみたいに、いやぐだつあい（？）とかは思つてしません。

「主人さまの、およめさんは、やつぱつ~~長~~!!! やるだと思つから  
です。

「主人さまに、やつてもらひて、長さんには色々教えてもらつて、とつても楽しい毎日でした。

あ、紙がのこり少なくなつてきました。

えっと、新しい仕事場を、教えてくれてありがとうございました。  
「主人さまや半<sup>ハーフ</sup>のやんは、さびしがつていましたが、がんば  
ります。

それでは、またお手紙書もますね。

## 猫 三 三 よ う

【若主人】 「……」

【猫//ミ】「…………」

【若主人】「えっと……もう一度、言つてくれる?」

獣人族の

【猫//ミ】「では、いほん……お初にお目にかかります。」

草原と平穏の国の物語（本編）（完）

## あとがき

終わった……。この作品を書き終えた時の気分は、まあこの一言に集約されます。

おかげさまで一度の休みもなく毎晩連続で更新しました。  
なけなしの拙い執筆力を、搾り出し続けてきた苦労の全てが報わ  
れた気分です。

無事に本編の完結できたのは、見に来てくれた皆様の声援があ  
つてのことです。

この場を持つて、感謝の意を伝えたいと思います。  
本当にありがとうございました。

111で『エルフがメイドさん』の裏話を一つ。

【男主人】「耳に触らせてもらつていい?」

【長ミミ】「ご主人様、エルフ族は耳を弄られても安易に性的興奮  
は催しません」

【男主人】「そ、そういうの?」

11の3行のネタが、全ての始まりでした。

「ファンタジーなエロいネタで、エルフの女性が耳を弄られると、  
性的に興奮するつてあるじゃん? クールなエルフのメイドさんが  
『ご主人様。それは幻想です』とキッパリ切り捨てるのって面白く  
ない?」

とまあ、「あるあるネタ」をネタにしただけの3行が、まさかここまで長い話になるとは思つても見ませんでした。  
何があるか、本当に分かりませんね。

さて、話はつきましたが、ここからで今後の予定を。

すでにお気づきの方も多いと思いますが、『攻撃魔術が使えない魔術師』というシリーズを書き始めています。  
よければ、そちらの方も応援いただければと思います。

最後にあとがきを読んでくれた方に、オマケとして、次のページに1話分を載せています。  
読んで、ニヤリしていただければ幸いです。

では、改めて、ここまで読んでくれた皆さんありがとうございます！

ひとまず、これにて失礼いたします！

オマケ『君と一緒にいるの』と、約束していた

森林と調和の国・草原軍野原地

【幼ミリ】「あの……」

【魔術師】「ん? ジめんなさい、起こしてしまいましたか」

【幼ミリ】「ううと、眠ってなかつたから……」

【魔術師】「そうですか。僕ももう寝ますから、幼ミリも早く寝な

れい。そうじやないと明日が大変ですよ」

【幼ミリ】「その……」

【魔術師】「どうかしました?」

【幼ミリ】「いっしょに寝ていいですか?」

【魔術師】「……」

【幼ミリ】「ダメ……ですか?」

【魔術師】「ダメじやないです、まあ、じょうがあつませんね」

【幼ミリ】「……ありがと!」

【魔術師】「もう少しで、大きな集落に着きます。そこだったら、幼ミリのおじさんかおばさんがいるでしょう。だから、安心してください(あすか)」

【幼ミリ】「もし、わたしのおじさんもおばさんもいなかつたら?」  
【魔術師】「そうだね、そうしたら僕たちと一緒に来る? 僕が面倒を見てあげるよ」

【幼ミリ】「ほんと? ずっとわたしと一緒にいてくれる?」

【魔術師】「ええ。でも、大丈夫ですよ、きっと幼ミリのおじさんかおばさんは見つかるから……」

【幼ミリ】「(小声)……見つからなければいいのに」

【魔術師】「何か言いました?」

【幼ミリ】「ううん。一緒にいてくれるんだよね? 約束?」

【魔術師】「もしもの時は、ですよ?」

【幼ミリ】「うー……」

【魔術師】「ほひ、早く寝なさい」

【幼ミリ】「……まーい、おやすみなさい(めぐみ)

【魔術師】「おやすみなさい」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0347o/>

---

草原と平穏の国の物語

2011年9月24日16時49分発行